

平成21～23年度県営農業基盤整備事業地域(伊勢管内)  
**埋蔵文化財発掘調査報告**

寺田遺跡 (第1・2次)  
田丸道遺跡 (第2次)  
塚田古墳群  
世古里中遺跡  
西垣内遺跡 (第2次)  
烏墓遺跡 (第2次)  
箕村大塚遺跡 (第2次)  
西垣外遺跡  
茶臼塚遺跡

2013 (平成25) 年3月

三重県埋蔵文化財センター



# 例 言

- 1 本書は、平成21～23年度に実施された伊勢農林水産環境事務所管内における県営農業基盤整備事業に伴い、記録保存を実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書では、上記事業のうち、経営体育成基盤整備事業(有田地区)および県営かんがい排水事業(宮川4工区)の成果を収録した。
- 3 調査費用は、その一部については国庫補助金を受けて県教育委員会が、他の大部分を県農水商工部(平成24年度からは県農林水産部)がそれぞれ負担した。
- 4 調査にかかる体制は下記のとおりである。発掘調査は平成21年度から23年度に実施した。整理作業は平成22年度から順次実施し、報告書作成は平成24年度に行った。  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
平成21年度(現地調査) 調査研究I課  
寺田遺跡 主査 西村美幸 主査 岩脇成人  
平成22年度(現地調査・整理作業) 調査研究I課  
寺田遺跡 技師 高松雅文 主査 大川操 主査 山口田美  
塚田古墳群・田丸道遺跡(南部) 技師 相場さやか 主幹 田中久生  
田丸道遺跡(北部) 主査 山口田美 技師 相場さやか 主幹 伊藤裕偉 技師 高松雅文  
平成23年度(現地調査・整理作業)調査研究I課  
世古里中遺跡・鳥墓遺跡・西垣内遺跡 主幹 伊藤裕偉  
簗村大塚遺跡 技師 高松雅文  
西垣外遺跡 技師 相場さやか 主幹 伊藤裕偉  
茶臼塚遺跡 主幹 伊藤裕偉  
平成24年度(整理作業・報告書作成)調査研究1課  
報告書作成業務 主幹 伊藤裕偉 主査 星野浩行 技師 相場さやか 技師 高松雅文
- 5 現地調査および報告書作成にあたり、下記の方々に様々なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます(順不同、敬称略)  
榎村寛之 館野和己 中原計
- 6 田丸道遺跡出土木製品の樹種同定については、布谷知夫氏(三重県立博物館長)のご援助を頂き、その分析結果についても寄稿していただいた。
- 7 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 当報告書の作成業務は、各遺跡の調査担当者および調査研究1課が行った。

# 凡 例

## <地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、三重県共有デジタル地図(平成19年測図)、これらの地図は、全て世界測地系(測地成果2000)に対応している。
- 2 調査区のうち、座標を示しているものについては、測地成果2000に対応した新座標第Ⅵ系で示している。座標表示の無い調査区については、座標測量ができなかったものである。挿図の方位は、座標北ないしは真北で示している。

## <遺構類>

- 3 土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
- 4 土層図の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1967年初版、2003年第23版)を基準に、調査担当者が現地で見視した状況による。
- 5 当報告書での遺構は、全体で通番としている。
- 6 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。  
SA……柱列 SB……掘立柱建物 SD……溝 SF……焼土坑 SH……竪穴住居  
SK……土坑 SR……旧河道 SZ……その他遺構 pit……ピット・柱穴
- 7 遺構は、調査時に付加した遺構番号を踏襲している

## <遺物類>

- 8 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としたが、木製品など大形ものはそれ以外の縮尺もある。
- 9 実測図のうち、上下の外郭線(口縁部・底部など)に切り目を入れているものは、残存が少ない(1/12以下)が、既存事例に基づきおおよその大きさを推測して示したものである。
- 10 当報告書での用語は、「つき」は「坏」に統一し、「わん」は「碗」・「碗」を慣例的使用に応じて使い分けた。
- 11 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号……………挿図掲載番号である。

実測番号……………実測段階の登録番号である。

器種・質等……………「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。

小地区……………調査時のグリッドや小地区名を記した。

遺構・層位等……………遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量(cm)……………遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法の特徴……………主な特徴を外側(外;)・内側(内;)で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土……………小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調……………その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度……………指示部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項……………遺物の特徴となる事項を記した。

## <写真図版>

- 12 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
- 13 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

# 本 文 目 次

I	調査の契機・経過と行政的諸手続	伊藤	(1)
II	遺跡と周辺の諸環境	高松・伊藤	(4)
III	度会郡玉城町佐田 寺田遺跡(第1・2次)	高松・星野	(7)
IV	度会郡玉城町妙法寺 田丸道遺跡・塚田古墳群	相場・伊藤	(37)
V	度会郡玉城町世古 世古里中遺跡	伊藤	(105)
VI	度会郡玉城町世古 西垣内遺跡(第2次)	伊藤	(114)
VII	多気郡明和町玉城町箕村 鳥墓遺跡(第2次)	伊藤	(117)
VIII	多気郡明和町玉城町箕村 箕村大塚遺跡(第2次)	高松・伊藤	(120)
IX	伊勢市柏町 西垣外遺跡	相場・伊藤	(125)
X	伊勢市有滝町 茶臼塚遺跡	伊藤	(139)

## 挿 図 一 覧

II	遺跡と周辺の諸環境		
第II-1図	調査遺跡と周辺の遺跡		
III	寺田遺跡		
第III-1図	調査区周辺地形図		
第III-2図	工事立会調査区平面・土層断面図		
第III-3図	第1次調査区平面・土層断面図		
第III-4図	第2次(幹線)調査区平面図		
第III-5図	第2次(幹線)調査区土層断面図		
第III-6図	第2次(支線)調査区平面図		
第III-7図	第2次(支線)調査区土層断面図(1)		
第III-8図	第2次(支線)調査区土層断面図(2)		
第III-9図	寺田遺跡出土遺物実測図(1)		
第III-10図	寺田遺跡出土遺物実測図(2)		
第III-11図	寺田遺跡出土遺物実測図(3)		
第III-12図	寺田遺跡出土遺物実測図(4)		
第III-13図	寺田遺跡出土遺物実測図(5)		
第III-14図	寺田遺跡出土遺物実測図(6)		
第III-15図	寺田遺跡出土遺物実測図(7)		
第III-16図	寺田遺跡出土遺物実測図(8)		
IV	田丸道遺跡・塚田古墳群		
第IV-1図	調査区周辺地形図		
第IV-2図	調査区の概要		
第IV-3図	田丸道遺跡・塚田古墳群遺構平面図(1)		
第IV-4図	田丸道遺跡・塚田古墳群遺構平面図(2)		
第IV-5図	田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(1)		
第IV-6図	田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(2)		
第IV-7図	田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(3)		
第IV-8図	S D 1 実測図		
第IV-9図	S R 15 堰平面図		
第IV-10図	田丸道遺跡の堰構造模式図		
第IV-11図	堰1平面・立面図		
第IV-12図	堰東壁土層断面図		
第IV-13図	堰2平面・立面図		
第IV-14図	竪穴住居S H 40実測図		
第IV-15図	調査区北部個別遺構実測図		
第IV-16図	S B 46平面・断面図		
第IV-17図	N 176-p i t 8平面・断面図		
第IV-18図	田丸道遺跡出土遺物実測図(1)		
第IV-19図	田丸道遺跡出土遺物実測図(2)		
第IV-20図	田丸道遺跡出土遺物実測図(3)		
第IV-21図	田丸道遺跡出土遺物実測図(4)		
第IV-22図	田丸道遺跡出土遺物実測図(5)		
第IV-23図	田丸道遺跡出土遺物実測図(6)		
第IV-24図	田丸道遺跡出土遺物実測図(7)		
第IV-25図	田丸道遺跡出土遺物実測図(8)木製品		
第IV-26図	田丸道遺跡出土遺物実測図(9)木製品		
第IV-27図	田丸道遺跡出土遺物実測図(10)木製品		
第IV-28図	田丸道遺跡出土遺物実測図(11)木製品		
第IV-29図	田丸道遺跡出土遺物実測図(12)木製品		
第IV-30図	田丸道遺跡出土遺物実測図(13)木製品		
第IV-31図	田丸道遺跡出土遺物実測図(14)木製品		
第IV-32図	田丸道遺跡出土遺物実測図(15)木製品		
第IV-33図	田丸道遺跡出土遺物実測図(16)木製品		
第IV-34図	田丸道遺跡出土遺物実測図(17)木製品		
第IV-35図	田丸道遺跡出土遺物実測図(18)木製品		
第IV-36図	田丸道遺跡S R 15の層序および堆積物試料採取位置		
第IV-37図	花粉化石群集		
第IV-38図	植物珪酸体群集		
第IV-39図	杭の種類および同定結果		
V	世古里中遺跡		
第V-1図	世古里中遺跡ほか調査区位置図		
第V-2図	世古里中遺跡調査区平面図		
第V-3図	世古里中遺跡調査区北壁土層(1)		
第V-4図	世古里中遺跡調査区北壁土層(2)		
第V-5図	世古里中遺跡出土遺物実測図(1)		
第V-6図	世古里中遺跡出土遺物実測図(2)		
VI	西垣内遺跡		
第VI-1図	西垣内遺跡調査区平面図および土層断面図		
第VI-2図	西垣内遺跡出土遺物実測図		
VII	鳥墓遺跡		
第VII-1図	鳥墓遺跡調査区平面図および土層断面図		
第VII-2図	鳥墓遺跡出土遺物実測図		
VIII	箕村大塚遺跡		
第VIII-1図	箕村大塚遺跡調査区平面図および土層断面図		
第VIII-2図	箕村大塚遺跡出土遺物実測図		
IX	西垣外遺跡		
第IX-1図	西垣外遺跡周辺地形図		
第IX-2図	西垣外遺跡調査区位置図		
第IX-3図	西垣外遺跡調査区平面図		
第IX-4図	西垣外遺跡調査区土層断面図		
第IX-5図	西垣外遺跡S D 12平面・断面図		

- 第IX-6図 西垣外遺跡出土遺物実測図(1)
- 第IX-7図 西垣外遺跡出土遺物実測図(2)
- 第IX-8図 西垣外遺跡出土遺物実測図(3)
- 第IX-9図 西垣外遺跡出土遺物実測図(4)

- X 茶臼塚遺跡
- 第X-1図 茶臼塚遺跡位置図
- 第X-2図 茶臼塚遺跡調査区平面図および土層断面図

## 挿入写真一覧

### III 寺田遺跡

写真III-1 川田地蔵

### IV 田丸道遺跡・塚田古墳群

写真IV-1 木札赤外線写真

写真IV-2 花粉化石

写真IV-3 植物珪酸体

写真IV-4 種実遺体(1)

写真IV-5 種実遺体(2)・昆虫遺体

写真IV-6 粗朶

## 表 一 覧

### I

第I-1表 調査遺跡(範囲確認を含む)一覧

### III 寺田遺跡

第III-1表 寺田遺跡遺構一覧表

第III-2表 寺田遺跡出土遺物観察表(1)

第III-3表 寺田遺跡出土遺物観察表(2)

第III-4表 寺田遺跡出土遺物観察表(3)

第III-5表 寺田遺跡出土遺物観察表(4)

第III-6表 寺田遺跡出土遺物観察表(5)

第III-7表 寺田遺跡出土遺物観察表(6)

第III-8表 寺田遺跡出土遺物観察表(7)

第III-9表 寺田遺跡出土遺物観察表(8)

### IV 田丸道遺跡・塚田古墳群

第IV-1表 田丸道遺跡遺構一覧表

第IV-2表 田丸道遺跡出土遺物観察表(1)(土器類等)

第IV-3表 田丸道遺跡出土遺物観察表(2)(土器類等)

第IV-4表 田丸道遺跡出土遺物観察表(3)(土器類等)

第IV-5表 田丸道遺跡出土遺物観察表(4)(土器類等)

第IV-6表 田丸道遺跡出土遺物観察表(5)(土器類等)

第IV-7表 田丸道遺跡出土遺物観察表(6)(土器類等)

第IV-8表 田丸道遺跡出土遺物観察表(7)(木製品)

第IV-9表 田丸道遺跡出土遺物観察表(8)(木製品)

第IV-10表 田丸道遺跡出土遺物観察表(9)(木製品)

第IV-11表 田丸道遺跡出土遺物観察表(10)(木製品)

第IV-12表 田丸道遺跡 S R 15堆積物試料一覧

第IV-13表 花粉分析結果

第IV-14表 植物珪酸体含量

第IV-15表 種実同定結果(1)

第IV-16表 種実同定結果(2)

第IV-17表 昆虫同定結果

第IV-18表 筵の樹種同定結果

第IV-19表 杭の樹種同定結果

第IV-20表 S R 15堰一覧

### V 世古里中遺跡

第V-1表 世古里中遺跡出土遺物観察表(1)

第V-2表 世古里中遺跡出土遺物観察表(2)

### VI 西垣内遺跡

第VI-1表 西垣内遺跡出土遺物観察表

### VII 鳥墓遺跡

第VII-1表 鳥墓遺跡出土遺物観察表

### VIII 箕村大塚遺跡

第VIII-1表 箕村大塚遺跡出土遺物観察表

### IX 西垣外遺跡

第IX-1表 西垣外遺跡遺構一覧表

第IX-2表 西垣外遺跡出土遺物観察表(1)

第IX-3表 西垣外遺跡出土遺物観察表(2)

第IX-4表 西垣外遺跡出土遺物観察表(3)

## 写真図版一覧

- 写真図版III-1 寺田遺跡 遺構(1)
- 写真図版III-2 寺田遺跡 遺構(2)
- 写真図版III-3 寺田遺跡 遺構(3)
- 写真図版III-4 寺田遺跡 遺構(4)
- 写真図版III-5 寺田遺跡 遺物(1)
- 写真図版III-6 寺田遺跡 遺物(2)
- 写真図版IV-1 塚田古墳群 遺構(1)
- 写真図版IV-2 塚田古墳群(2)・田丸道遺跡(1) 遺構
- 写真図版IV-3 田丸道遺跡 遺構(2)
- 写真図版IV-4 田丸道遺跡 遺構(3)
- 写真図版IV-5 田丸道遺跡 遺構(4)
- 写真図版IV-6 田丸道遺跡 遺構(5)
- 写真図版IV-7 田丸道遺跡 遺物(1)
- 写真図版IV-8 田丸道遺跡 遺物(2)
- 写真図版IV-9 田丸道遺跡 遺物(3)

- 写真図版IV-10 田丸道遺跡 遺物(4)
- 写真図版IV-11 田丸道遺跡 遺物(5)
- 写真図版IV-12 田丸道遺跡 遺物(6)
- 写真図版IV-13 田丸道遺跡 遺物(7)
- 写真図版IV-14 田丸道遺跡 遺物(8)
- 写真図版IV-15 田丸道遺跡 遺物(9)
- 写真図版IV-16 田丸道遺跡 遺物(10)
- 写真図版IV-17 田丸道遺跡 遺物(11)
- 写真図版V-1 世古里中遺跡 遺構
- 写真図版V-2 世古里中遺跡 遺物
- 写真図版VI-1 西垣内遺跡 遺構・遺物
- 写真図版VII-1 鳥墓遺跡 遺構・遺物
- 写真図版VIII-1 箕村大塚遺跡 遺構・遺物
- 写真図版IX-1 西垣外遺跡 遺構
- 写真図版IX-2 西垣外遺跡 遺物
- 写真図版X-1 茶臼塚遺跡

# I 調査の契機・経過と行政的諸手続

## 1 事業内容と調査遺跡

### a 総説

ここで報告する遺跡は、平成21～23年度の3ヶ年にわたって実施された、経営体育成基盤整備事業(有田地区)および県営かんがい排水事業(宮川4工区)に伴い、記録保存を実施したものである。工事の事業主体は三重県農水商工部(農業基盤室、当時)、実施機関は伊勢農林水産商工環境事務所(農村基盤室宮川用水課)である。工事に伴い、本発掘調査および工事立会調査を三重県埋蔵文化財センター(以下、当センター)が実施した。

当該事業は、以下にも記すように掘削幅が広いところ(幹線部分)でせいぜい2m内外、狭いところ(支線部分)では1m足らずである。そのため、通常の発掘調査スタイルを採ることが難しく、工事立会という形式を採用したことが多い。

### b 経営体育成基盤整備事業(有田地区)

この事業は、国営宮川用水からの幹線・支線を配置するものである。幹線の掘削深度は約200cm、支

線は150cm内外である。この事業に伴い、寺田遺跡・田丸道遺跡・塚田古墳群・世古里中遺跡・西垣内遺跡・鳥墓遺跡・養村大塚遺跡の調査(立会を含む)を実施した。また、遺構・遺物は確認されなかったが、範囲確認調査を実施した遺跡として迫間垣内遺跡・カリコ遺跡(以上、玉城町世古)、村ノ内遺跡(明和町養村)があり、同じく立会を実施した遺跡として下里遺跡(玉城町玉川)がある。

### c 県営かんがい排水事業(宮川4工区)

この事業は、上記と同じく宮川用水に関連する事業であるが、これは旧管の付け替えに相当するものである。この事業に伴い、西垣外遺跡・茶臼塚遺跡の調査(立会)を実施した。また、範囲確認調査を実施したが、遺構・遺物の確認が無かった遺跡として、御菌尾遺跡・宮ノ前遺跡(以上、伊勢市有滝町)、大藪遺跡(伊勢市磯町)がある。

### d 遺跡の調査にかかる法的措置

文化財保護法等に係る遺跡調査の法的措置は、第I-1表に示した通りである。

	遺跡名	所在地	94条通知	99条通知	対応	遺物発見通知	遺物量(kg)	
1	寺田遺跡(第1次)	度会郡玉城町佐田	H22.3.10 勢農環第3521号	H22.1.4 教埋第373号	範囲確認→発掘調査	H23.2.19 教埋第422号	10.8	
	寺田遺跡(第2次)			H22.10.4 教埋第177号		H23.3.1 教埋第324号	14.6	
2	塚田古墳群	度会郡玉城町妙法寺	H23.7.27 勢農環第3196号	H22.10.4 教埋第177号	範囲確認→発掘調査	H23.3.7 教埋第345号	47.3	
3	田丸道遺跡	度会郡玉城町妙法寺			範囲確認→発掘調査			
4	世古里中遺跡	度会郡玉城町世古	H23.9.29 勢農環第3300号	—	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第293号	28.5	
5	西垣内遺跡	度会郡玉城町世古		—	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第292号	16.0	
6	迫間垣内遺跡	度会郡玉城町世古		—	範囲確認	—	—	
7	カリコ遺跡	度会郡玉城町世古		—	範囲確認	—	—	
8	下里遺跡	度会郡玉城町玉川		—	工事立会	—	—	
9	鳥墓遺跡	多気郡明和町養村		—	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第291号	4.4	
10	養村大塚遺跡	多気郡明和町養村		—	範囲確認→工事立会	H23.12.28 教埋第296号	10.4	
11	村ノ内遺跡	多気郡明和町養村		—	範囲確認	—	—	
12	西新村西浦遺跡	伊勢市小俣町新村		H23.9.29 勢農環第3300号	—	範囲確認	—	—
13	西垣外遺跡	伊勢市柏町		H23.10.20 勢農環第3460号	—	工事立会	H24.3.27 教埋第446号	11.7
14	茶臼塚遺跡	伊勢市有滝町	—		範囲確認→工事立会	H24.3.26 教埋第454号	2.3	
15	宮ノ前遺跡	伊勢市有滝町	—		範囲確認	—	—	
16	御菌尾遺跡	伊勢市有滝町	—		範囲確認	—	—	

第I-1表 調査遺跡(範囲確認調査を含む)一覧

## 2 各遺跡の協議・調査経過

### a 寺田遺跡(玉城町佐田、平成21・22年度)

**平成21年度** 平成21年9月10日に事業地内(幹線)の範囲確認調査を実施し、遺構・遺物の存在が確認された。この結果に基づき、2度の調査を実施した。

1回目は工事立会形式で実施した。平成21年11月24日から27日にかけて行い、溝や落ち込みなどの遺構と、古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。調査面積は250㎡である。

2回目は本調査として実施した(寺田遺跡第1次調査)。平成22年1月6日から同年1月15日にかけて行い、中世を中心とした遺構・遺物が確認された。調査面積は130㎡である。

**平成22年度** 調査は、水田の給排水が止まる秋以降の調査となった。当該年度は、寺田遺跡(2次調査)として実施した。調査地は、東西方向の幹線部分(掘削幅約3m)と、南北方向の支線部分(掘削幅約1m)とがある。調査は工事と併行して進める方法とし、土工部門の管理は、支線を(株)浜口土木が、幹線を(有)竜川組が行った。また、測量基準点については、橋本技術株式会社に委託して実施した。全体調査面積は、675㎡であった。

**【支線】** 9月28日に現地協議を行い、総長240mの調査区を3つに区分し、平成22年10月4日から南側3分の1について重機による表土除去、人力による包含層及び遺構掘削を開始した。掘削完了後、10月26日に写真撮影を行った。同様の工程で、中央を11月4日から、北側を11月12日から重機による表土掘削、人力による包含層及び遺構掘削を開始した。その後、11月18・19日に写真撮影を行い、24～27日に実測を行い、調査を終了した。

**【幹線】** 平成22年11月29日から重機による表土除去、人力による包含層及び遺構掘削を開始した。12月10日に写真撮影を行い、12月13日から15日に実測を行い、調査を終了した。2次調査は雨天に悩まされた調査であった。

### b 塚田古墳群・田丸道遺跡(玉城町妙法寺、平成22年度)

平成22年4月5日および同年11月17日に事業地内(幹線部分)の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、調査を実施した。

塚田古墳群と田丸道遺跡は、同一空間に重複する遺跡である。南北方向の幹線部分(掘削幅約3m)を中心に、東西方向の支線(掘削幅約1m)がある。調査は平成22年11月29日に開始し、平成23年2月10日に終了した。最終調査面積は661㎡であった。

調査は工事と併行して進める方法とし、(株)近藤建設が土工部門の管理を行った。また、測量基準点については、寺田遺跡と併せて橋本技術株式会社に委託した。

### c 世古里中遺跡(玉城町世古、平成23年度)

平成23年9月12日から同月14日にかけて、事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会形式とし、同年11月22日から12月20日にかけて、146㎡を対象として実施した。

### d 西垣内遺跡(玉城町世古、平成23年度)

平成23年9月12日に事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会とし、同年11月8日から9日にかけて、53㎡を対象として実施した。

### e 迫間垣内遺跡(玉城町世古、平成23年度)

平成23年9月12日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

### f カリコ遺跡(玉城町世古、平成23年度)

平成23年9月16日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

### g 下里遺跡(玉城町玉川、平成22年度)

平成23年2月28日から同年3月8日にかけて、事業地内約140㎡の工事立会を行った。遺構・遺物は確認されなかった。

### h 鳥墓遺跡(明和町簀村、平成23年度)

平成23年9月16日に事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会とし、同年12月5日から7日にかけて、30㎡を対象として実施した。

### i 簀村大塚遺跡(明和町簀村、平成23年度)

平成23年9月21日に事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を調査対象とした。

調査は工事立会とし、同年12月19日から21日にかけて、52㎡を対象として実施した。

#### **j 村ノ内遺跡(明和町簔村、平成23年度)**

平成23年9月14日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

#### **k 西新村西浦遺跡(伊勢市小俣町、平成23年度)**

平成23年10月6日に事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

#### **l 西垣外遺跡(伊勢市柏町、平成23年度)**

平成23年12月5日から同月9日にかけて、事業地内約78㎡の工事立会を実施した。

#### **m 茶臼塚遺跡(伊勢市有滝町、平成23年度)**

平成23年12月9日に、事業地内の範囲確認調査を実施した。この結果に基づき、遺構・遺物の確認された範囲を工事立会で調査した。

調査は同年12月23日から翌年1月18日にかけて行った。調査面積は28㎡である。

#### **n 宮之前遺跡(伊勢市有滝町、平成23年度)**

平成23年12月9日に、事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

#### **o 御菌尾遺跡(伊勢市有滝町、平成23年度)**

平成23年12月9日に、事業地内の範囲確認調査を実施した。遺構・遺物は確認されなかった。

### **3 調査成果の普及・公開**

前述のように、多くの調査遺跡が工事立会であったために現地説明会の開催は困難であった。それでも、塚田古墳群・田丸道遺跡では、調査成果が多大

であったため、時間が無いなか現地説明会を開催した。

平成22年12月23日(木・祝)には、塚田古墳群の現地説明会と寺田遺跡出土遺物解説を実施した。54名の参加があった。平成23年1月23日(日)には、田丸道遺跡の流路・木組部分を対象とした現地説明会を開催し、出土遺物の展示解説も同時に行った。150名の参加があった。

また、平成23年4月16日に開催した「おもろいもん出ましたんやわ@三重2010」では、寺田遺跡・田丸道遺跡の遺物展示および田丸道遺跡の報告を行った。37名の参加があった。平成24年3月24日に開催した「おもろいもん出ましたんやわ@三重2011」では、西垣外遺跡・世古里中遺跡・鳥墓遺跡・西垣内遺跡などの遺物展示を行い、世古里中遺跡ほかの報告を行った。55名の参加があった。

### **4 出土遺物の保存処理**

脆弱だが重要な出土遺物については、保存処理を実施することで、出土文化財として今後の保存と活用に備える必要がある。

今回の発掘調査では、田丸道遺跡から古墳時代後期を中心とした重要な木製品・金属製品が出土した。そのため、これらの保存処理を実施した。

これらの保存処理は、委託事業として一般競争入札を実施した。いずれも(株)吉田生物研究所が受注し、処理を行った。

(伊藤)

## II 遺跡と周辺の諸環境

### 1 位置と地形

県営経営体育成基盤整備事業(有田地区)および県営かんがい排水事業(宮川4工区)の施工地域は、県農林水産部伊勢農林水産商工環境事務所が管轄する範囲である。調査地は、現在の行政単位で見れば、伊勢市・度会郡玉城町・多気郡明和町に及ぶが、江戸時代以前には概ね度会郡と把握されていた地域に相当する。大きく見れば宮川下流域の北西岸部にあたり、肥沃な水田地帯である。

有田地区は、現在では玉城町立有田小学校にその名を留めているが、明治22年から昭和30年までは「有田村」という一個の行政範囲であった。明治期の旧市町村が、江戸時代以前の地域的枠組みを残していることはよく指摘されるところである。つまり、今回の調査エリアとなった有田地区は、一定程度の空間的なまとまりが存在するところといえる。

地形的に見ると、有田地区は北方を大仏山丘陵、西方を玉城丘陵で囲まれ、南に外城田川、東に宮川が流れている。北・西部を丘陵、南・東部を河川でそれぞれ囲まれた当地は、標高15m前後の平坦で広い平地となっている。当地にこのような平地を形成するような河川は現在見られないが、外城田川は江戸時代に流路の付け替えが実施されたとされており、元々は有田地区を縦断していたという。有田地区の広大な平地は、外城田川の流れてきたに伴って基礎が形成されたと考えられる。

これに対し、宮川河口部に近い地域は宮川が形成した低段丘や浜堤帯(砂堆)で構成されている。西垣外遺跡のある伊勢市柏町付近までは低段丘が広がり、海岸に近い伊勢市有滝町付近では浜堤帯の形成が見られる。

### 2 歴史的環境

当地の歴史的環境を、有田地区の状況を中心に概観する。

#### a 旧石器時代・縄文時代

大仏山丘陵の近隣では、旧石器時代の遺跡が集中

している。とくにカリコ遺跡では、数百点ものナイフ形石器が出土している。縄文時代の早い時期では、神子柴型石斧や早期の土器が出土した上村池A遺跡などが確認されている。縄文時代前期から中期にかけての遺跡数は少ないが、後期になると金剛坂遺跡を筆頭に、再び遺跡が多くなっている。

#### b 弥生時代

弥生時代前期では、有田地区にもほど近い櫛田川下流域が、いわゆる「亜流遠賀川式」土器が数多く分布する地域として特筆できる。前期後半から後期に至る遺跡として、金剛坂遺跡や斎宮跡(古里遺跡)などがある。櫛田川沿いの低段丘上に継続的な集落が営まれていたと考えられる。

有田地区周辺での弥生時代遺跡は判然としていないが、今回の田丸道遺跡の調査で弥生時代中期前葉の良好な土器が出土していることから、近隣に集落遺跡が展開している可能性が高い。また、やや南方の中楽山遺跡では後期の集落跡が確認されている。

#### c 古墳時代

玉城丘陵を中心に、500基を超える古墳が造営されている。そのほとんどは後期古墳だが、中期に遡るものもいくつか含まれている。中期古墳には高塚1号墳、神前山1号墳、大塚古墳などがあるが、いずれも玉城丘陵西部にあたり、有田地区からはやや離れている。

後期になると、有田地区近隣にも活発な古墳の造営が見られる。今回その一部を調査した塚田古墳群や、近隣の茶臼塚古墳群などもこの時期のものである。また、塚田古墳群の南方に位置する佐田山3号墳からは7世紀代と考えられる銅鏡が出土している。銅鏡の出土は珍しく、当時の有田地区にかなりの有力者が存在していたものと考えられる。

大仏山丘陵山麓では、後期古墳群のほか、須恵器窯も確認されている。八端古窯跡群は6世紀後半から7世紀前半の須恵器窯で、少なくとも3基が存在している。なお、外城田川中流には原窯跡群があり、こちらは8世紀代まで続く。この地域が様々な土器生産地であったことを物語っている。

#### d 古代

古代の有田地区は、『和名類聚抄』では度会郡城田郷ないしは湯田郷に相当すると考えられる。また、多気郡有弐郷は有田地区の北部にまで及んでいたと考えられる。

『皇大神宮儀式帳』には垂仁天皇から孝徳天皇の頃まで、「有爾の鳥墓村」に神宮の事務を執行する「神侍」が置かれていたとされる。今回調査を行った鳥墓遺跡の北には鳥墓神社があり、鳥墓神侍跡として明和町指定史跡となっている。事の実否は定かではないが、有田地区近隣に神宮と直接関係する施設が古代(古墳時代?)に存在していた可能性を示すものとして注意しておきたい。また、斎宮跡も有田地区にほど近い位置にある。

奈良・平安時代の特徴として、有田地区の近隣では土器焼成遺構が多数確認されていることが挙げられる。国史跡である水池土器製作遺跡のほか、北野遺跡などがある。土器生産に関しては、中世・近世においても有田地区で盛んであった。

#### e 中世

古代以降、有田地区は多気郡と度会郡の境界付近にあたる。郡境は今ひとつ明確ではないが、いずれにしても神宮の影響が強く及ぶ「神三郡」の範囲である。この影響は、中世でも強く及んでいる。

外城田川中流域は内宮の正禰宜である荒木田氏の本拠地であり、それに関連する田宮寺などが隆盛を誇った。また、在地に拠点を持つ神宮の権禰宜層を中心に開発が進展し、神宮領の御園・御厨として展開した。外城田川中流では野篠里中遺跡や楠ノ木遺跡などで発掘調査がされており、それらの集落は中世前期の地域開発を示す遺跡である。

中世後期には伊勢国司を自称する北畠氏が、玉丸山に城郭を築いて宮川流域支配の拠点とした。後に田丸城が築城され、近世支配の拠点となる基礎は、北畠氏時代に形成されたといえる。

中世においてもこの地域の土器生産は極めて盛んである。平成4年度に実施した世古遺跡(現在の西垣内遺跡)からは、近隣の集落遺跡からは出土して

いない特殊器形が数多く見られた。同様なことは、砂谷遺跡でも確認できる。これらの遺跡は、中世有爾郷における土器生産の実態を解き明かす鍵を握っている。

#### f 近世以降

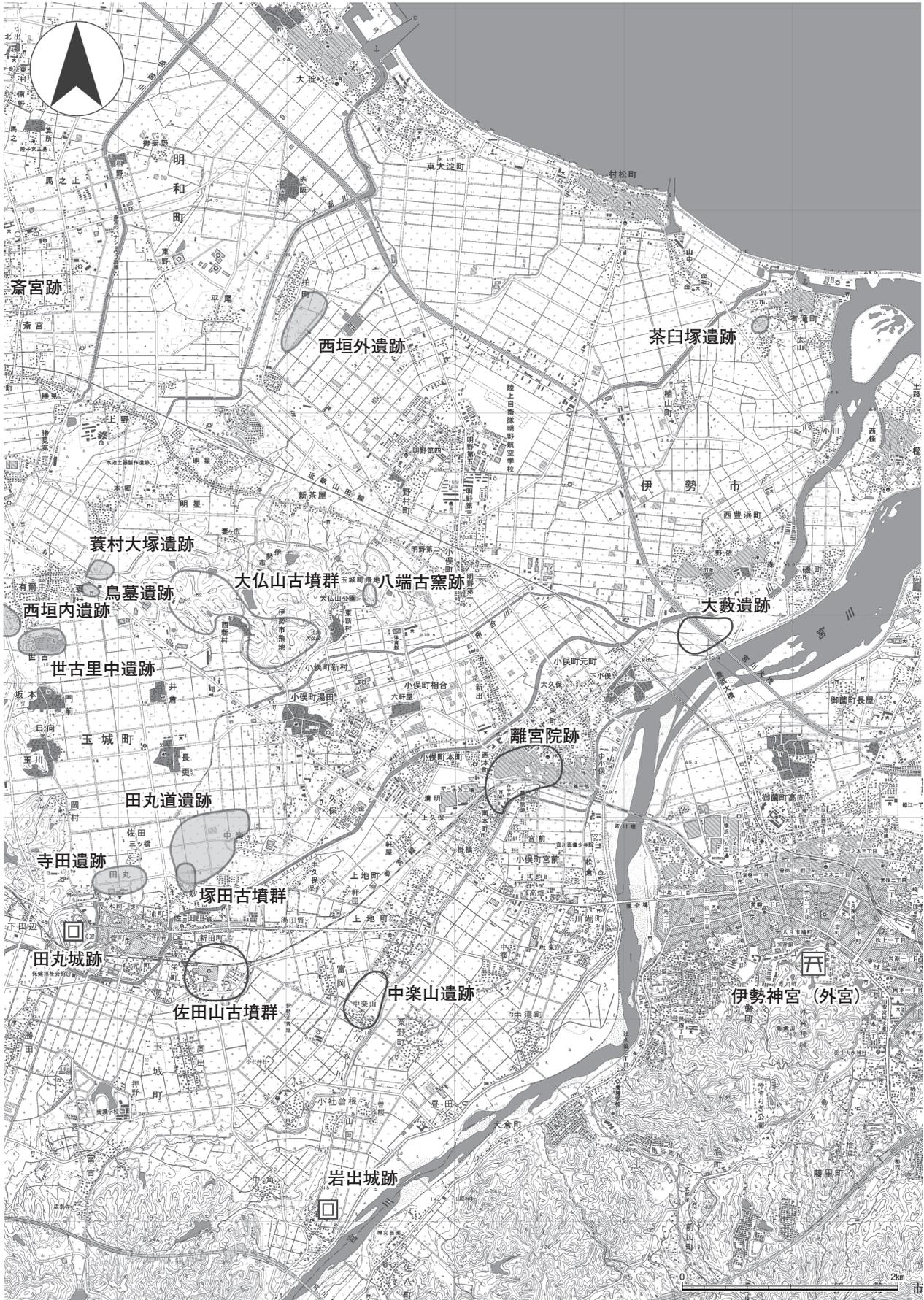
江戸時代には、紀州藩田丸領の中心として田丸城が位置づけられ、城代が置かれた。田丸はまた、伊勢参宮街道と熊野街道との分岐点であり、交通の要衝として機能していた。伊勢参宮を終えて熊野詣へと旅立つ人々は、田丸にて身支度を調えたという。明治期以降も田丸の盛行は続き、明治22年に町村制が施行されると、外宮膝下の山田町とともに、田丸はいち早く「田丸町」として町制を施している。

近世においても有田地区の土器生産は盛んであった。これは、今回調査した世古里中遺跡や西垣内遺跡の状況が物語っている。

以上、有田地区を中心に、当地の状況を概観してきた。当地には通史的に良質な遺跡が展開しているが、それは神宮膝下の要地としての歴史と、交通の要衝としての歴史へと引き継がれていることが認識できよう。(高松・伊藤)

#### 〔参考文献〕

- ・玉城町編『玉城町史』上巻(1995年)
- ・明和町史編さん委員会編『明和町史』史料編、第1巻、自然・考古(2004年)
- ・『三重県の地名』(日本歴史地名大系24、平凡社、1983年)
- ・小俣町教育委員会『八端古窯跡群範囲確認調査概報』(1993年)
- ・三重県埋蔵文化財センター『小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告』(2010年)
- ・相場さやか「玉城町中楽の考古資料 - 古墳群出土資料を中心に -」(『研究紀要』第21号、三重県埋蔵文化財センター 2012年)



第Ⅱ-1図 調査遺跡と周辺の遺跡(国土地理院『伊勢』『明野』)

### Ⅲ 玉城町佐田 寺田遺跡(第1・2次)

#### 1 調査経緯と調査区の状況

##### a 調査経緯

寺田遺跡の調査は、平成21・22年度経営体育成基盤整備事業(有田地区)による。いわゆる「宮川用水」を有田地区へと導水するための事業である。寺田遺跡の範囲では、幹線用水路と支線用水路とが計画されていた。幹線用水路は掘削幅2～3m、支線用水路の掘削幅は1m内外である。

調査面積は、平成21年度の立会調査250㎡、本調査(第1次調査)130㎡、平成22年度第2次調査では、幹線・支線併せて675㎡であった。

##### b 調査区の状況

第I章で触れたとおり、寺田遺跡の発掘調査は平成21・22年度の2ヶ年にわたって実施した。その調

査地点は第Ⅲ-1図に示した通りである。

【平成21年度】 工事立会調査区は、道路北端に沿うように東西190m、幅2mで行った。第1次調査区は工事立会箇所より西方において道路北端に沿うように東西長50m、幅3mの範囲を発掘した。

【平成22年度】 第2次調査では道路北端に沿った東西長100m、幅3mの範囲に加えて、道路西端に沿った南北長240m、幅約1mの範囲についても発掘している。これは東西方向の送水管(幹線)から南北方向の送水管(支線)が分流していることによる。しがたって前者を第2次(幹線)調査区、後者を第2次(支線)調査区と呼称して区別しておく。

#### 2 工事立会調査区の層位と遺構

工事立会では溝6条のほか、旧河道の可能性をも



第Ⅲ-1図 調査区周辺地形図

つ落込み2箇所、柱穴等を検出した(第Ⅲ-2図)。

#### a 基本層位

アスファルト・道路造成に伴う碎石等の下には旧耕作土(第22層)が一部残るもののわずかで、その下に灰黄褐色や褐灰色、黒褐色の堆積層が確認できる。さらに下層において、基盤にあたる第5・8・18～21・25・28・29・41・42・56・57層をとらえた。なお、SD3は基盤を深く削り込んでいるため、最下層において明緑灰色粘土の第21層が確認できた。この層は、第Ⅳ章において報告する田丸道遺跡SR15の地山(第77層)に対応する。SD3の埋土は、粘土からシルト質を主体とし、下層に向かうにつれて褐色系から灰色系の色調を帯びる傾向をもつ。SZ4は褐灰色粘土を埋土とする。

SD6の埋土は褐灰から灰褐色の粘土あるいは粘質土で構成されており、下層に向かうにつれて明度が増す傾向にある。このうち第34・36層において遺物を確認したものの、最下層の第37層ではほとんど認められなかった。SZ8では上部において埋土が安定しないものの、下部において灰色系の粘土を主体とした堆積層が確認できた。

#### b 遺構

**SD1～3** SD1は調査範囲の東端で検出した南北方向の溝で、幅40cm、深さ5cmである。SD2は幅50cm、深さ40cm、SD3は幅1.7m、深さ1.3mで、ともに南北方向を軸とする。SD1・2では出土遺物がみられなかった。SD3では古代から中世の遺物が出土している。

**SZ4** 旧河道の可能性をもつ落込みである。その東端はとらえることができなかったが、幅約18mと推定される。SZ4では古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。

**SD5** 南北方向を軸とする幅1.5m程度の溝である。古墳時代の遺物が多く出土しており、当該期の遺構として評価できる。

**SD6** 幅7.4m以上の広い溝である。旧河道の可能性も考慮すべき遺構である。SD6からは平安時代末を中心とした遺物が出土した。

**SD7** 小規模な溝で土坑とすべきかもしれない。ごく細片ながら、古代から中世の遺物が確認された。

**SZ8** 調査範囲の西端で検出した幅15.5m以上の

落込みである。形状から旧河道の可能性も考えられる。出土品は中世の遺物を中心とするが、近・現代の遺物を一部含むことから、圃場整備前まで存続していたと考えられる。

### 3 第1次調査区の層位と遺構

第1次調査では溝1条、掘立柱建物とみなせる柱列2条を検出した。この他、調査区西端において溝状の落ち込みを検出した。

#### a 基本層位

田畑に伴う耕作土・床土(第58層)の下には黒褐色粘質土の第63層が確認でき、その下層において基盤に相当する褐色粘土の第66層が確認できた。

SD11は、第63層を切り込む形で形成されている。後述するSA12・13は第66層を遺構面としており、第63層を遺構面とするSD11はそれより新しい時期に形成されたことがわかる。

この他、調査区西端の溝状落ち込みは、第63層を切り込むことから、SD11とともに新しい時期の遺構と考えられる。

#### b 遺構

##### (1) 柱列

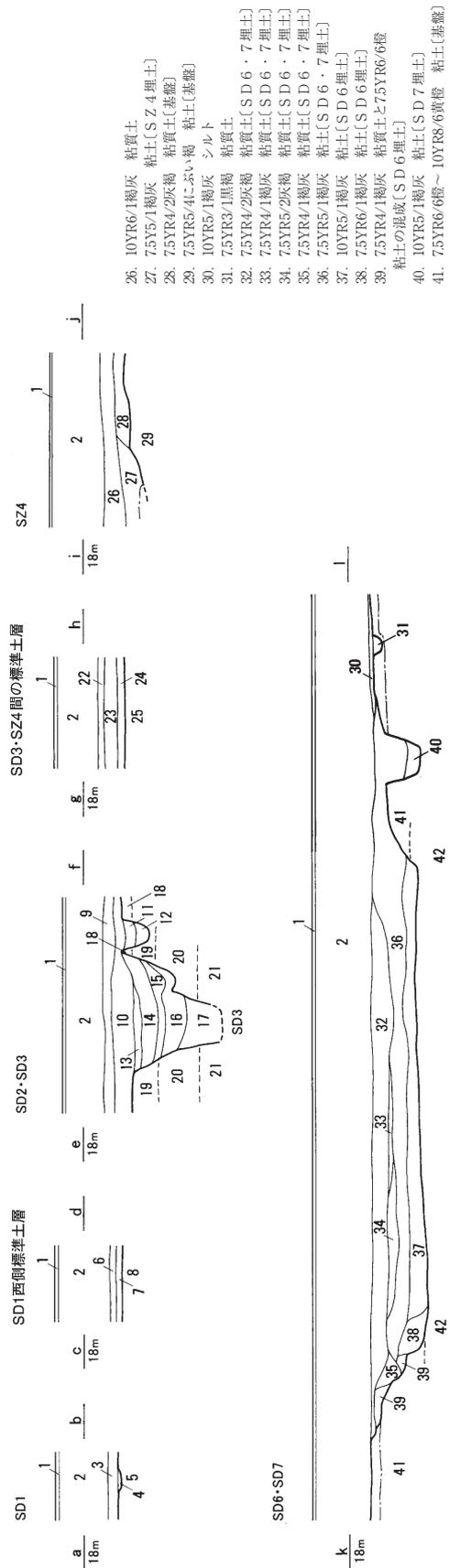
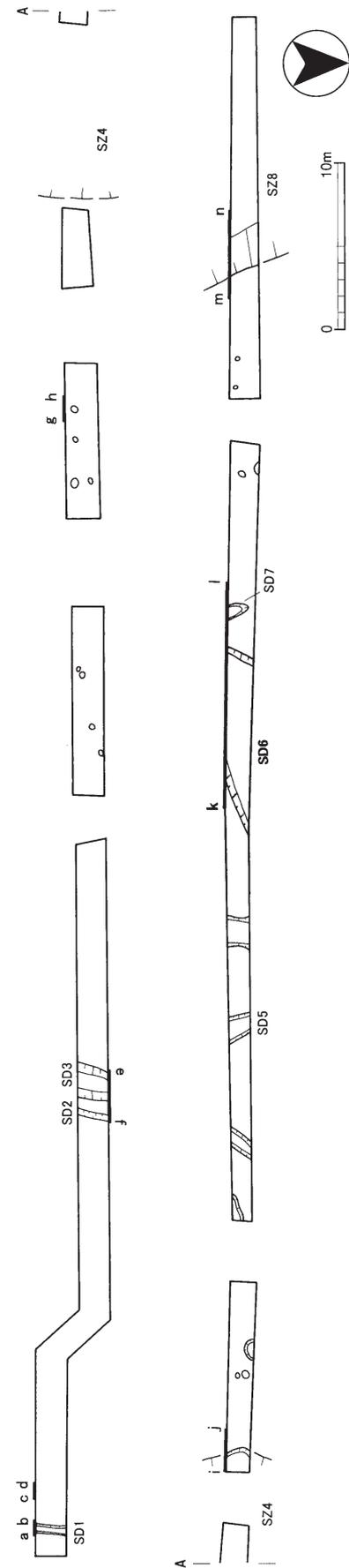
調査区が狭いため、確認された遺構はいずれも柱列として認識したにとどまる。しかし、根石を伴うことから、本来は掘立柱建物と考えられるものである。

**SA12** 調査区中央付近で検出した東西方向を軸とする柱列で、掘立柱建物の一部と考えられる。3間(6.5m)以上の規模をもつ。柱穴に根石を伴うこと、古代の土師器小片が出土したことから、建物の時期として平安時代後期以降の可能性が考えられる。

**SA13** SA12の東側で検出した。東西を主軸とする柱列で、掘立柱建物の一部と考えられる。1間約2.2mで、調査区内で3間確認できた。柱穴に根石を伴うこと、平安時代末の遺物を伴うことから、建物の時期を平安時代末に求めることができる。

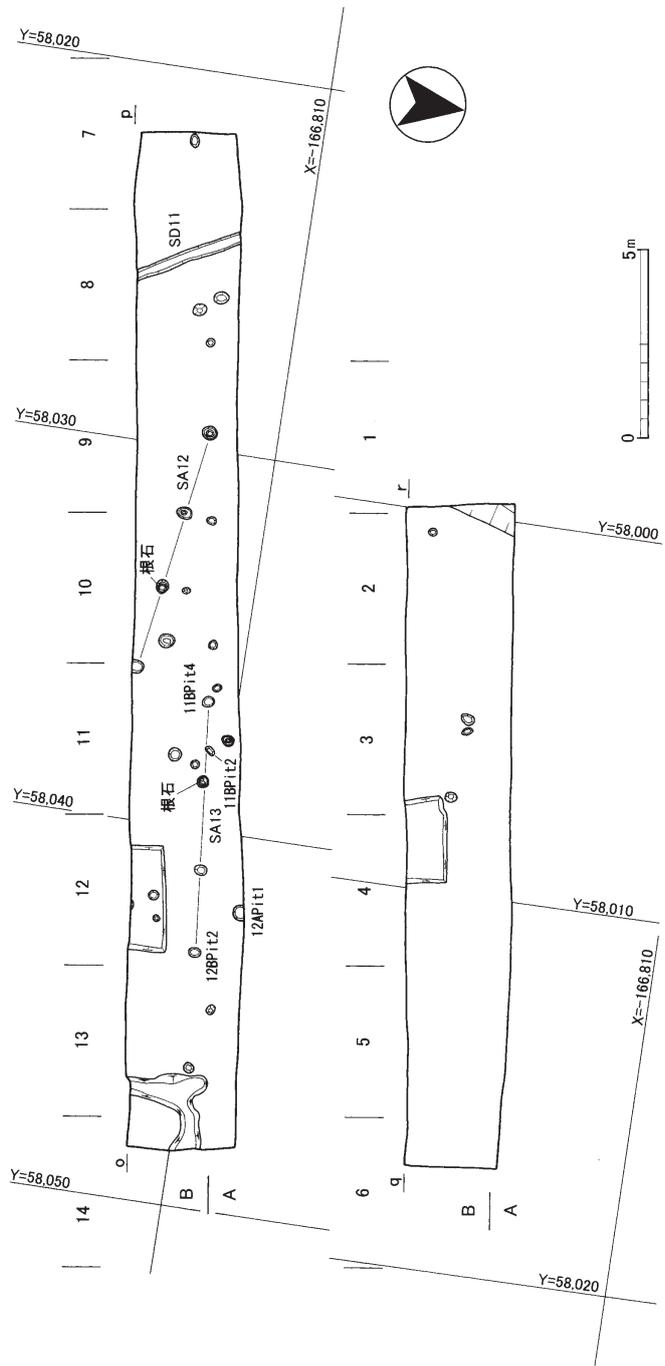
##### (2) 溝

**SD11** SA12の西側で検出した幅30cm程の溝である。第63層を切り込むことから層位的にSA12・13よりも形成時期が新しいといえる。なお、SD11において時期を絞り込める遺物は出土しなかった。

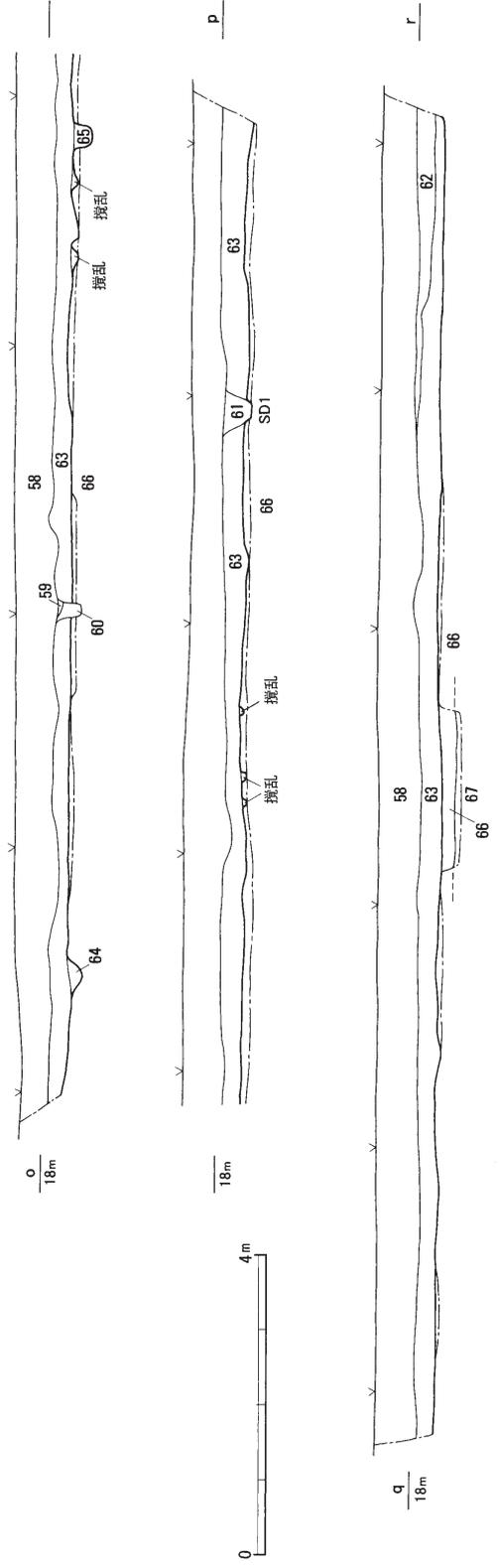


- 工事立会土層**
- 1. アスファルト
  - 2. 砕石
  - 3. 10YR5/2灰黄褐 シルト
  - 4. 75YR3/2黒褐 土(SD1埋土)
  - 5. 75YR5/6明褐 土(基礎)
  - 6. 10YR5/2灰黄褐 シルト
  - 7. 75YR3/2黒褐 土
  - 8. 75YR5/1褐灰 シルト
  - 9. 75YR5/1褐灰 シルト
  - 10. 75YR5/3にぶい褐 シルト
  - 11. 75YR4/2灰褐 粘土(SD2埋土)
  - 12. 75YR3/3暗褐 シルト(SD2埋土)
  - 13. 75YR5/3にぶい褐 粘土(SD3埋土)
  - 14. 75YR4/2灰褐 シルト(SD3埋土)
  - 15. 75YR4/2灰褐 シルト(SD3埋土)
  - 16. 25Y5/1黄灰 粘土(SD3埋土)
  - 17. N5/灰 粘土(SD3埋土)
  - 18. 75YR4/3褐 シルト(基礎)
  - 19. 75YR6/4にぶい橙 シルト(基礎)
  - 20. 10YR6/8明黄褐~25Y8/4淡黄 粘土(基礎)
  - 21. 10YR8/1明緑灰 粘土(基礎)
  - 22. 10YR5/1褐灰 シルト(田耕作土)
  - 23. 10YR6/2灰黄褐 粘質土
  - 24. 75YR3/1黒褐 粘質土
  - 25. 75YR4/2灰褐 粘土(基礎)
  - 26. 10YR6/1褐灰 粘質土
  - 27. 75Y5/1褐灰 粘土(SZ4埋土)
  - 28. 75YR4/2灰褐 粘質土(基礎)
  - 29. 75YR5/4にぶい褐 粘土(基礎)
  - 30. 10YR5/1褐灰 シルト
  - 31. 75YR3/1黒褐 粘質土
  - 32. 75YR4/2灰褐 粘質土(SD6・7埋土)
  - 33. 75YR4/1褐灰 粘質土(SD6・7埋土)
  - 34. 75YR5/2灰褐 粘質土(SD6・7埋土)
  - 35. 75YR4/1褐灰 粘質土(SD6・7埋土)
  - 36. 75YR5/1褐灰 粘土(SD6・7埋土)
  - 37. 10YR5/1褐灰 粘土(SD6埋土)
  - 38. 75YR6/1褐灰 粘土(SD6埋土)
  - 39. 75YR4/1褐灰 粘質土と75YR6/6橙 粘土の混成(SD6埋土)
  - 40. 10YR5/1褐灰 粘土(SD7埋土)
  - 41. 75YR6/6橙~10YR8/6黄橙 粘土(基礎)
  - 42. N5/灰 粘土(基礎)
  - 43. 75YR6/1褐灰 シルト
  - 44. 75YR6/3にぶい褐 粘質土
  - 45. 10YR7/4にぶい黄褐 粘質土
  - 46. 10YR8/4黄橙 粘質土
  - 47. 75YR4/2灰褐 粘質土
  - 48. 10YR6/3にぶい黄橙 粘質土
  - 49. 75YR4/3褐 粘質土
  - 50. 10YR6/1褐灰 シルト
  - 51. N5/灰 粘土(SZ8埋土)
  - 52. 5Y6/1灰 粘土(SZ8埋土)
  - 53. 75YR3/1黒褐 粘質土
  - 54. 75YR5/1褐灰 粘質土(SZ8埋土)
  - 55. 10YR5/1褐灰 粘質土(基礎)
  - 56. 75YR5/3にぶい褐 粘土(基礎)
  - 57. 5Y6/1灰 粘土(基礎)

第三-2図 工事立会調査区平面・土層断面図



- 1次土層
- 58. 10YR4/2灰黄褐 土(耕作土)
  - 59. 10YR2/2~3/2黒褐 粘質土と10YR4/4褐 粘土からなり、前者を多く含む(ビット埋土)
  - 60. 10YR2/2~3/2黒褐 粘質土と10YR4/4褐 粘土の混成(ビット埋土)
  - 61. 10YR5/1褐灰 粘質土(SD11埋土)
  - 62. 10YR6/1褐灰 シルト
  - 63. 10YR2/2~3/2黒褐 粘質土
  - 64. 10YR6/6明黄褐 土(風倒木埋土)
  - 65. 10YR2/2~3/2黒褐 粘質土と10YR4/4褐 粘土の混成(ビット埋土)
  - 66. 10YR4/4褐 粘土(基盤)
  - 67. 2.5Y/4淡黄 粘土(基盤)



第三-3図 第1次調査区平面・土層断面図

## 4 第2次(幹線)調査区の層位と遺構

第2次調査(幹線)では、近・現代の池およびそれに関連する遺構(S D59～60)、旧河道の可能性が高いS D53・S D71、主軸の方向から一連の遺構とみなせる溝(S D55～58)、柱穴等が確認された。調査区西半では柱穴が多く検出されており、根石を伴うものも認められることから、平安時代後期から中世の集落が形成されていたと考えられる。なお、調査グリッドは調査区幅の都合から東西方向のみ設定した。

### a 基本層位

耕作土・近現代の置土・造成土(第68～73層)の下層では、遺構とそれに伴う埋土が検出された。主な遺構として東側ではS D60、中央付近ではS D51～54、西側ではS D55～58・71があげられる。これらの多くは基盤層(第103～108層)およびその可能性を持つ層(第101・102層)に形成されている。

東側のS D60の埋土(第76層)には現代遺物が含まれていることから、これらの遺構は圃場整備に先立って埋められたと推測される。

中央付近にみられる遺構のうちS D63は第95層上面から掘り込まれており、S D51・52より新しい時期に形成されたことが分かる。S D53の埋土は黒褐色系の色調を呈し、第92・94層は中粒砂で構成される。第91～93層からは多くの土器が出土した。

調査区西側のS D55～58では埋土が類似しており、褐灰色シルトを主体とする。埋土の類似性と溝の主軸方向から、これらに関連する遺構と判断しておく。なお、S D54もこれらの遺構に関連する可能性がある。

基盤は東側において褐灰色系の色調を帯びるが、西側では黄褐色系の色調を強める。西側の基盤(第105層)は洪積台地を思わせる土層であり、平野部においては比較的安定した基盤といえる。

### b 遺構

#### (1)旧河道・流路・溝

**S D59・60** S D59・60は一連の遺構であり、このうちS D60は幅6.8m、深さ約20cmで平底の人工的な池と考えられる。埋土の第76層からは現代遺物が検出された。このS D60からS D59が北東に向かって流れ出る。S D60は調査区の南側に広がるよ

うで、道路を隔てた南側には川田地蔵(首切り地蔵)がたたずむ。地元の証言を勘案すれば、S D60は川田地蔵の前にあった通称「血洗池」と考えられる。

**S D51・52** 調査区の中央付近で検出した。底面は比較的なだらかであるが、安定した平坦面をなさない。地元の証言によると調査区付近は大水の度に田畑が流され、その度に盛り土を行っていたという。この点からS D51・52は低湿地のような場所だったと推察される。S D51・52から土師器・山茶碗が出土した。

**S D53・63** 調査区の中央で検出した。S D53は幅4.5mで、西側が1段深くなっている。地元の証言もふまれば、深い部分は中世に埋没したものの、浅い部分は近世・近代まで機能していた可能性も考えられる。S D53からは古代から中世の遺物が多く出土した。S D63は幅40cmの溝でS D53の浅い部分に合流する。合流部では長径30cm程の石材が据えられており、水量・水位を調節するために用いられた可能性がある。

**S D54** S D53に沿うようにして検出された逆台形の断面を呈する幅1.3mの直線的な溝である。S D54は調査区の北側でS D53に合流するとみられる。なお、S D54は後述のS D56・58と方向を揃えることから一連の可能性をもつ。

**S D55～58** S D54に平行する方向とそれに直行するように展開する直線状の溝である。断面はいずれも逆台形を呈する。溝の方向や形状から一連の遺構と考えられる。このうちS D57では山茶碗や土師器がまとまって出土している。

S D55～58の主軸方向は北東方向へ流れるS D53をふまえた結果と考えられる。S D54も同様だろう。これらの溝は付近の条里と異なる方向を示している点が注視される。

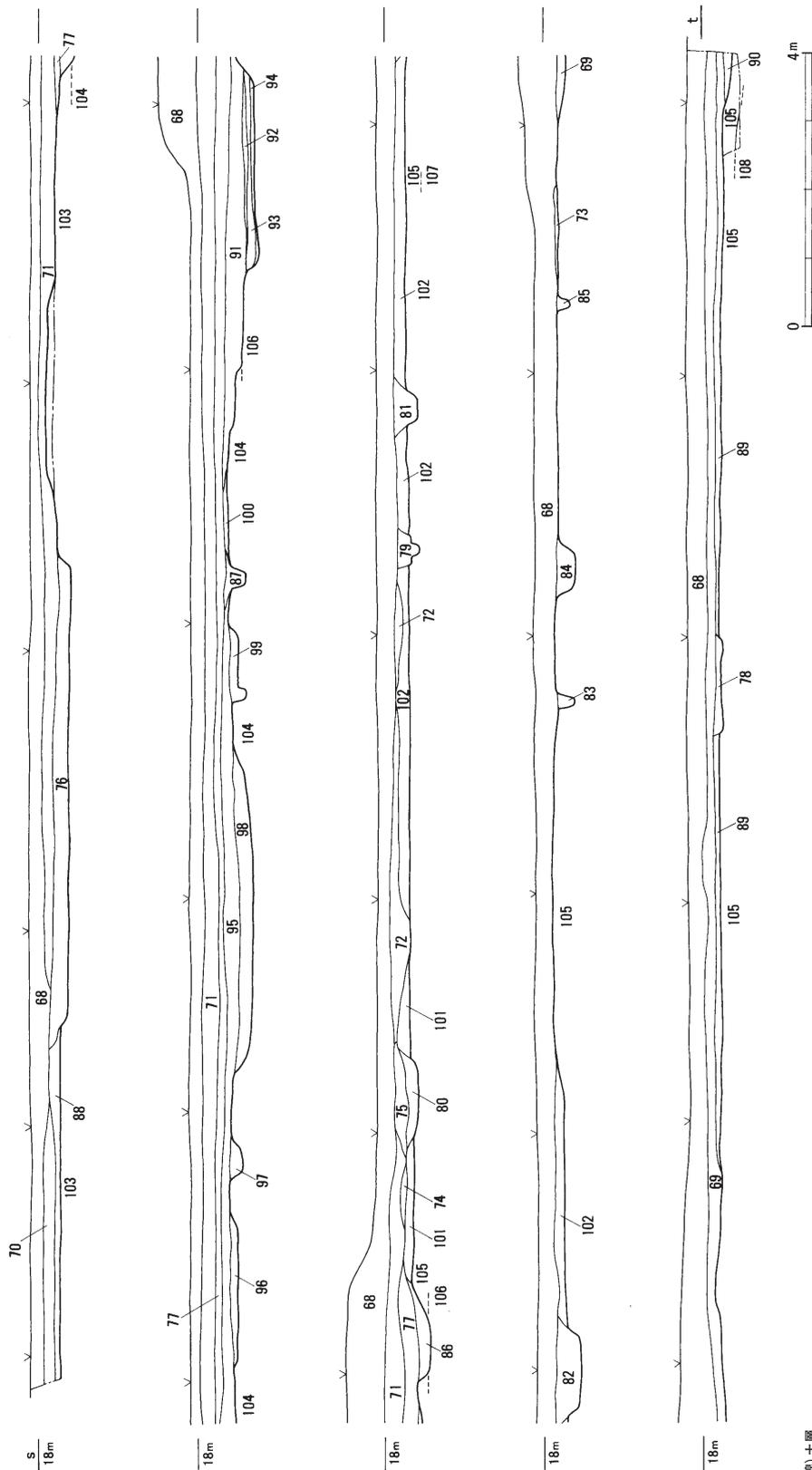
**S D71** 調査区の西端で検出された。幅3.2mで北東方向へ流れる。埋土の第90層からは土師器が出土している。

#### (2)土坑・柱穴等

**柱穴** 調査区西側で多くの柱穴を検出した。このうちW68Pit 1では山茶碗が出土した。またW72グリッドでは根石を伴う柱穴が確認できた。これらの点から、平安時代後期から中世の掘立柱建物で構成される集落が営まれていたと考えられる。



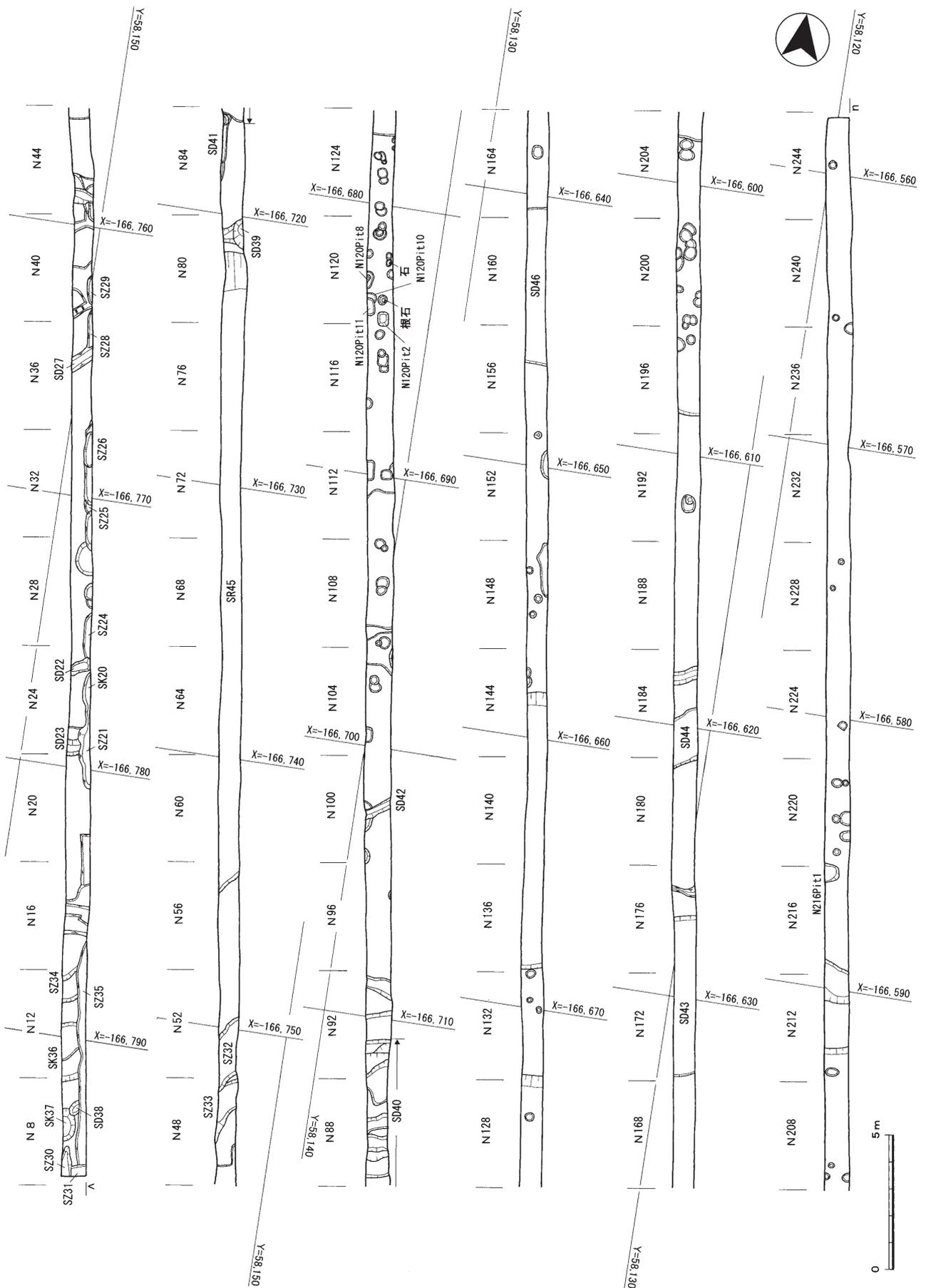
第三-4図 第2次(幹線)調査区平面図



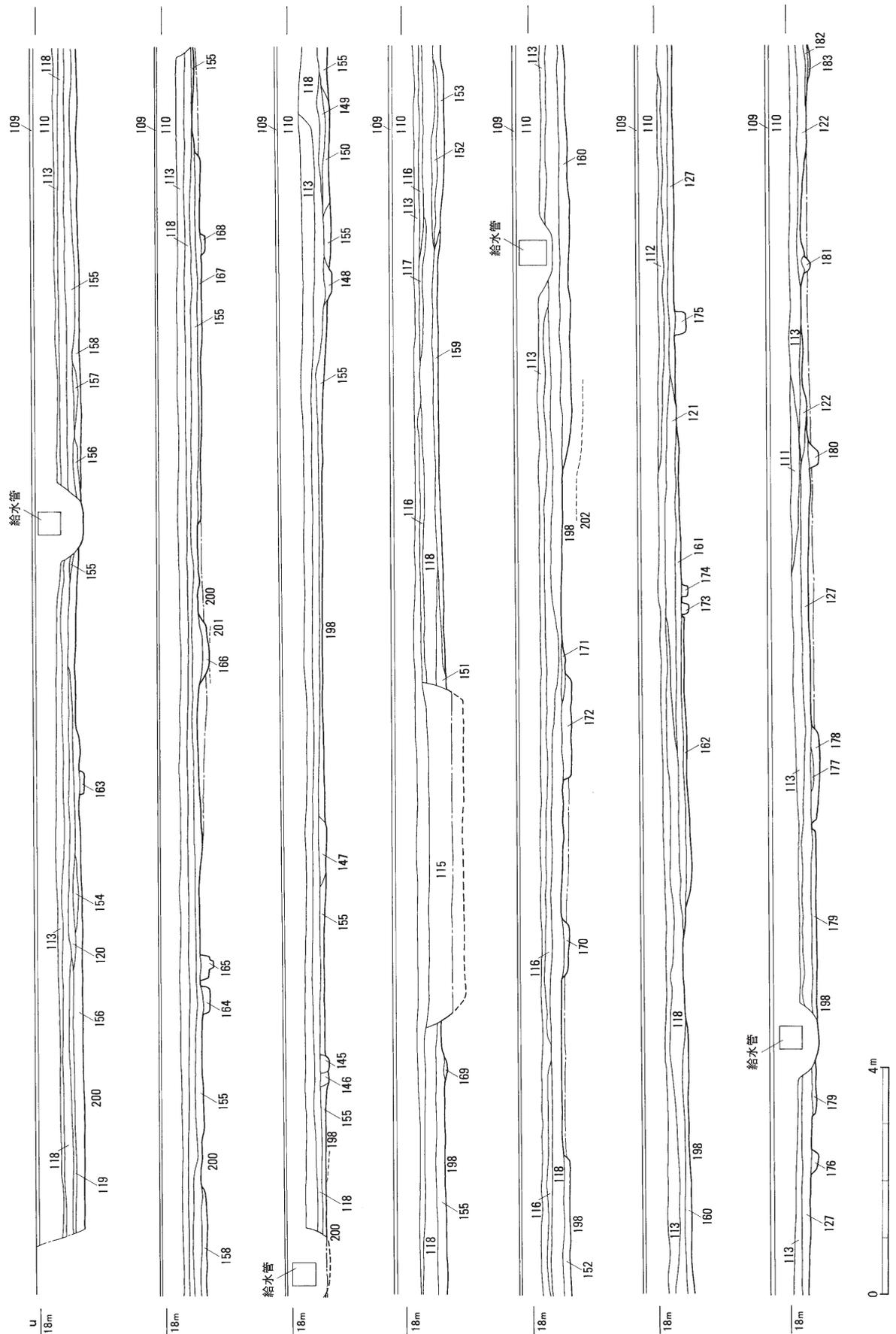
第三-5図 第2次(幹線)調査区土層断面図

2次(幹線)土層

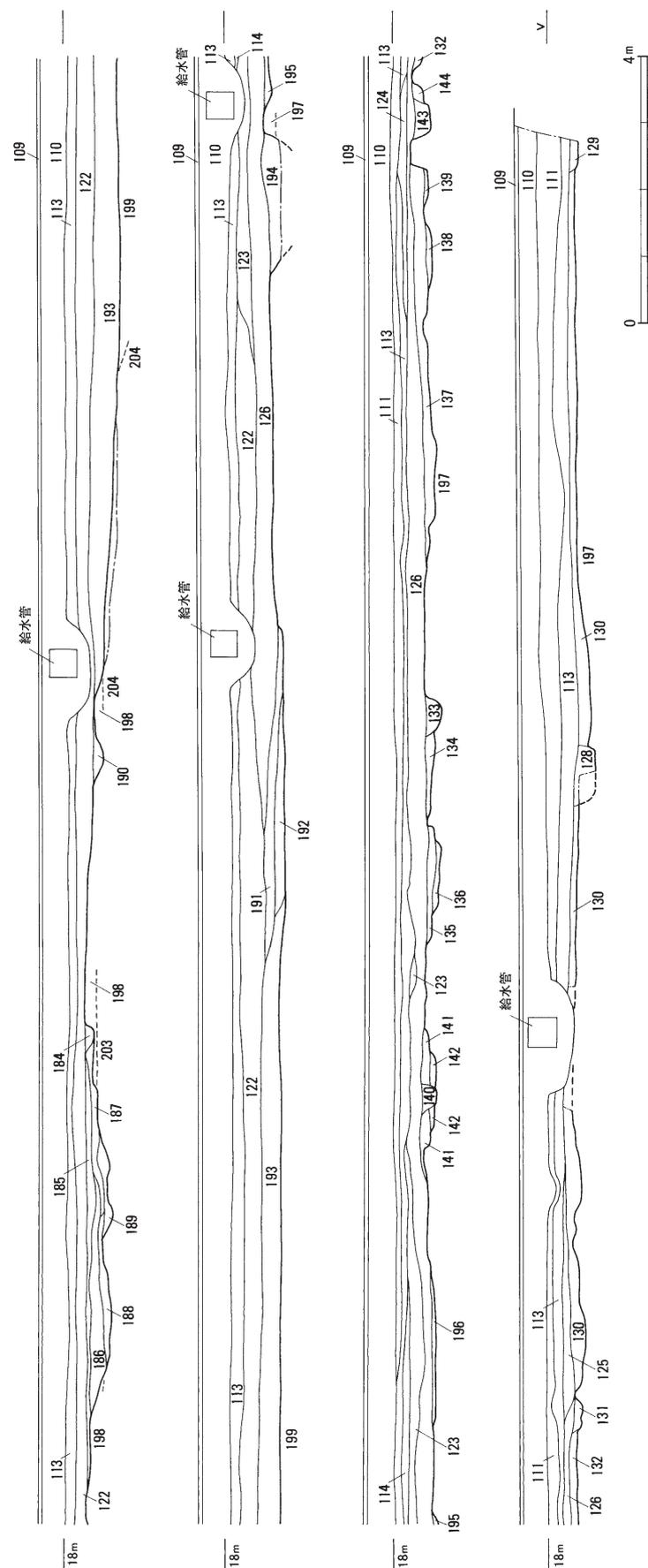
- |                |                             |               |                   |                          |
|----------------|-----------------------------|---------------|-------------------|--------------------------|
| 68. 10YR4/2灰黄褐 | シルト～細粒砂(耕作土)                | シルト           | 100. 10YR3/3暗褐    | シルト                      |
| 69. 10YR7/6明黄褐 | シルト～細粒砂(整地土)                | シルト           | 101. 10YR3/3暗褐    | シルト                      |
| 70. 75YR3/1黒褐  | 粘土～シルト(床土)                  | 粘土～細粒砂(Pt埋土)  | 102. 10YR3/3暗褐    | シルト～細粒砂                  |
| 71. 10YR3/2黒褐  | 粘土～シルト(床土)                  | 粘土～細粒砂(一部中粒砂) | 103. 75YR5/1褐灰    | シルト～細粒砂                  |
| 72. 10YR3/1黒褐  | シルト～極細粒砂(床土)                | シルト           | 104. 75YR4/2灰褐    | シルト～極細粒砂                 |
| 73. 10YR5/2灰黄褐 | シルト(床土)                     | シルト           | 105. 10YR4/3にぶい黄褐 | 細粒砂                      |
| 74. 10YR5/1褐灰  | シルト(床土)                     | シルト           | 106. 10YR5/4にぶい黄褐 | (一部還元されて10GY5/1緑灰の色調となる) |
| 75. 10YR4/1褐灰  | シルト(床土)                     | シルト           | 107. 75YR4/4褐色    | 中粒砂(長径2～4cm程度の砂礫を多く含む)   |
| 76. 75YR5/1褐灰  | 極細粒砂～中粒砂(長径2cm以下の礫を20%程度含む) | シルト           | 108. 10YR6/4にぶい黄褐 | シルト～極細粒砂(一部中粒砂を含む)       |
| 77. 10YR4/1褐灰  | 現代遺物を含む(SD60(血洗池)埋土)        | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 78. 10YR3/4暗褐  | 粘土～シルト                      | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 79. 10YR3/2暗褐  | シルト～極細粒砂                    | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 80. 10YR4/1褐灰  | シルト～細粒砂(整地土を含む)             | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 81. 75YR4/1褐灰  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 82. 75YR4/1褐灰  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 83. 10YR3/1黒褐  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 84. 75YR4/1褐灰  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 85. 10YR3/1黒褐  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 86. 10YR4/1褐灰  | 粘土～シルト                      | 粘土～細粒砂(一部中粒砂) |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 87. 75YR2/1黒   | 粘土～細粒砂(一部中粒砂)               | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 88. 10YR5/1褐灰  | シルト～細粒砂                     | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 89. 10YR3/3暗褐  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 90. 10YR4/1褐灰  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 91. 75YR3/1黒褐  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 92. 10YR3/2暗褐  | 中粒砂(遺物を多く含む)                | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 93. 10YR3/1黒褐  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 94. 10YR2/3暗褐  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 95. 75YR4/1褐灰  | 中粒砂(遺物をあまり含まない)             | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 96. 75YR3/1黒褐  | シルト                         | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 97. 10YR4/1褐灰  | 粘土～細粒砂(SZ67埋土)              | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 98. 5YR4/1褐灰   | 粘土～極細粒砂(一部細粒砂を含む)           | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |
| 99. 75YR3/1黒褐  | シルト～細粒砂(SZ65埋土)             | シルト           |                   | しまりやあり(基盤)               |



第三-6図 第2次(支線)調査区平面図



第三-7図 第2次(支線)調査区土層断面図(1)



第三 - 8 図 第2次(支線)調査区土層断面図(2)

- 2次(支線)土層**
- 109. アスファルト
  - 110. 5BG6/1青灰 礫および2.5Y6/1黄灰 粗粒砂
  - 111. 10YR6/6明黄褐 極細粒砂～細粒砂(整地土)
  - 112. 10YR4/1褐灰70%は7.5YR6/4褐灰30%を 礫状に含む。シルト～極細粒砂
  - 113. 7.5YR3/1黒褐 シルト(旧耕作土)
  - 114. 2.5Y3/2黒褐 シルト～細粒砂
  - 115. 10YR4/1褐灰 シルト～細粒砂 (S D43埋土)
  - 116. 10YR4/1褐灰 シルト
  - 117. 10YR4/1褐灰 シルト～極細粒砂
  - 118. 10YR4/1褐灰 粘土～シルト
  - 119. 10YR4/1褐灰 シルト～極細粒砂
  - 120. 7.5YR3/2黒褐 シルト～細粒砂
  - 121. 7.5YR4/1褐灰 粘土～シルト しまりややあり
  - 122. 10YR4/1褐灰 粘土～シルト
  - 123. 2.5Y5/1黄灰 シルト
  - 124. 7.5YR4/1褐灰 シルト～細粒砂
  - 125. 10YR5/2灰黄褐 シルト
  - 126. 7.5YR4/1褐灰 シルト～細粒砂(一部中粒砂)
  - 127. 7.5YR2/2黒褐 粘土～シルト しまりややあり
  - 128. 10YR3/1黒褐 シルト～細粒砂 (圃場整備に伴う埋土)
  - 129. 5BG4/1暗緑灰を10%、10YR3/1黒褐を90%、 礫状に含む。シルト～細粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 130. 5BG4/1暗緑灰を10%、10YR3/1黒褐を90%、 礫状に含む。シルト～細粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 131. 7.5YR4/2灰褐 シルト～細粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 132. 7.5YR4/2灰褐 シルト～中粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 133. 10YR4/1褐灰 シルト～極細粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 134. 7.5YR3/2黒褐 極細粒砂～中粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 135. 10YR4/1褐灰 シルト～中粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 136. 10YR5/1褐灰 シルト～中粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 137. 7.5YR3/2黒褐 極細粒砂～中粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 138. 10YR4/4褐 極細粒砂～中粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 139. 10YR4/6褐 極細粒砂～中粒砂(圃場整備に伴う埋土)
  - 140. 7.5YR5/1褐灰 シルト～中粒砂
  - 141. 7.5YR5/1褐灰 シルト～中粒砂
  - 142. 7.5YR5/1褐灰 シルト～中粒砂
  - 143. 10YR3/4暗褐 極細粒砂～細粒砂
  - 144. 7.5YR4/2灰褐 シルト～細粒砂
  - 145. 7.5YR3/1黒褐 シルト～極細粒砂
  - 146. 7.5YR3/1黒褐 シルト～極細粒砂
  - 147. 7.5YR3/1黒褐 シルト
  - 148. 7.5YR4/1褐灰 シルト～細粒砂(S D44埋土)
  - 149. 7.5YR4/1褐灰 シルト～細粒砂(S D44埋土)
  - 150. 7.5YR3/2黒褐 シルト～細粒砂(S D44埋土)
  - 151. 7.5YR3/1黒褐 シルト
  - 152. 7.5YR3/1黒褐 シルト
  - 153. 7.5YR3/2黒褐 粘土～シルト(S D46埋土)
  - 154. 10YR3/1黒褐 シルト～極細粒砂
  - 155. 7.5YR3/2黒褐 シルト
  - 156. 7.5YR3/2黒褐 シルト～細粒砂
  - 157. 7.5YR3/2黒褐 シルト～細粒砂
  - 158. 10YR4/3にふい黄褐 粘土～シルト しまりややあり
  - 159. 7.5YR3/2黒褐 シルト
  - 160. 7.5YR3/2黒褐 極細粒砂
  - 161. 7.5YR2/2黒褐 粘土～シルト
  - 162. 7.5YR4/1褐灰 シルト
  - 163. 10YR3/2黒褐 シルト～細粒砂(ピット埋土)
  - 164. 10YR5/3灰黄褐 シルト～極細粒砂(ピット埋土)
  - 165. 10YR5/2灰黄褐 シルト～細粒砂(ピット埋土)
  - 166. 10YR5/3にふい黄褐 シルト(溝埋土)
  - 167. 10YR3/4暗褐 シルト(溝埋土)
  - 168. 10YR5/3にふい黄褐 シルト～細粒砂(ピット埋土)
  - 169. 7.5YR3/1黒褐 シルト～細粒砂(根掘乱)
  - 170. 7.5YR2/2黒褐 シルト(土坑埋土)
  - 171. 7.5YR4/1褐灰 シルト
  - 172. 7.5YR2/2黒褐 シルト(土坑埋土)
  - 173. 10YR3/1黒褐 シルト(ピット埋土)
  - 174. 7.5YR2/1黒褐 シルト(ピット埋土)
  - 175. 7.5YR3/3暗褐 シルト(ピット埋土)
  - 176. 7.5YR3/2黒褐 シルト(ピット埋土)
  - 177. 7.5YR3/1黒褐 シルト(土坑埋土)
  - 178. 7.5YR3/2黒褐 粘土～シルト(溝埋土)
  - 179. 7.5YR3/2黒褐 粘土～シルト(溝埋土)
  - 180. 7.5YR3/2 粘土～シルト(ピット埋土)
  - 181. 7.5YR3/2黒褐 極細粒砂(ピット埋土)
  - 182. 7.5YR3/2黒褐 シルト
  - 183. 7.5YR3/3暗褐 粘土～シルト(溝埋土)
  - 184. 7.5YR4/1褐灰 シルト～細粒砂(S D40埋土)
  - 185. 7.5YR4/1褐灰 シルト(S D40埋土)
  - 186. 10YR4/1褐灰 シルト(S D40埋土)

187. 10YR5/1褐灰 シルト～極細粒砂〔S D40埋土〕  
 188. 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂～中粒砂〔S D40埋土〕  
 189. 7.5YR5/1褐灰 シルト〔S D40埋土〕  
 190. 10YR4/1褐灰 シルト～細粒砂〔S D39埋土〕  
 191. 10YR3/1黒褐 シルト〔S R45埋土〕  
 192. 7.5YR5/1褐灰 シルト〔S R45埋土〕  
 193. 7.5YR3/1黒褐 粘土～シルト〔S R45埋土〕  
 194. 2.5Y4/1黄灰 粘土～シルト(一部極細粒砂)〔S Z32埋土〕  
 195. 7.5YR4/1褐灰 シルト～細粒砂〔S Z33埋土〕  
 196. 7.5YR4/2灰褐 シルト～中粒砂〔落込埋土〕  
 197. 7.5YR2/2黒褐 粘土(一部中粒砂) しまりあり〔基盤〕  
 198. 7.5YR2/3極暗褐 粘土 しまりあり〔基盤〕

199. 10YR5/1褐灰 粘土〔基盤〕  
 200. 10YR4/2灰黄褐 粘土 しまりあり〔基盤〕  
 201. 10YR4/4褐 粘土〔基盤〕  
 202. 10YR6/1褐灰 粘土～シルト しまりあり〔基盤〕  
 203. 10YR5/4にぶい黄褐 粘土 しまりあり〔基盤〕  
 204. 10YR4/4褐 粘土〔基盤〕

※第163～196層は基盤に形成された遺構の埋土

## 5 第2次(支線)調査区の層位と遺構

第2次調査(支線)では、山茶碗などの遺物が出土した溝のS D40、旧河道のS R45の他、調査区中央付近の微高地において根石を伴う柱穴等を検出した。なお、調査グリッドは調査区幅の都合から南北方向のみ設定した。

### a 基本層位

調査区は道路を対象としており、アスファルト(第109層)の下に道路造成に伴う碎石・砂、整地土(第110・111層)が確認できた。道路造成にかかわるこれらの層を取り除くと、旧耕作土・床土にあたる第113・114層、さらに褐灰色シルトを主体とする第116～121層と褐灰色シルトを主体とする第122～127層が認められた。さらに、これらの下層において遺構と基盤層を検出した。基盤層(第197～204層)は、南側では黒褐色粘土、中央付近の微高地では極暗褐色粘土、北側では灰黄褐色粘土を主体とする。

遺構は、南側において圃場整備前の微地形を反映した落込み(第128～138層)、溝・柱穴(第139～144層)、S R45(第191～193層)等の埋土が確認された。中央付近は、微高地になっており、柱穴やS D40(第184～189層)等に伴う埋土をとらえることができた。

### b 遺構

#### (1)旧河道・流路・溝

**S K20・S Z21等** N4～N44グリッドにおいて調査区東側でとらえた南北に細長い落込み(S K20、S Z21・24～26・28・29・35)を指し、一連のものと考えられる。地元の証言によると、圃場整備以前は東側において田畑が一段低くなっていたという。したがって、これらは圃場整備以前の微地形を反映していると考えられるとともに、その埋没時期はごく最近といえる。なお、S D22・27、S Z30・31もこれらに関連すると考えられる。

**S R45** 幅24mの旧河道あるいは湿地と考えられる。地元の証言や第2次世界大戦の米軍による航空写真を参考にすれば、南西～北東方向に流れる旧河道の可能性があらう。

**S D40** N80～N92でとらえた幅7mの溝で東西方向に走る。山茶碗など比較的多くの遺物がまともに出土した。出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。なお、弥生土器や古墳時代の須恵器が混じることから、当該期の遺構が近在すると推測される。

**S D44** N180・N184でとらえた東西方向を軸とした溝である。第155層から掘り込まれていることから、基盤に形成された遺構よりも新しいと判断される。

**その他** N132～N144、N152～N164付近において低湿地をとらえた。東西を主軸とすると思われるが、流路という判断までは至らなかったため、低湿地として報告しておく。

#### (2)土坑・柱穴等

N80～N124付近は微高地に相当する。この微高地において多くの柱穴を検出した。N120では、根石を伴う直径30cmの柱穴や、根石と思われる石材をもつ直径20cmの柱穴が確認できた。前者はその特徴や周辺の柱穴からの出土品から平安時代後期から中世の建物遺構といえる。後者についても同様の性格を考えておきたい。

第2次(支線)調査区では、調査区幅の制約により建物の規模・方向を明らかにできなかったが、この地に平安時代後期から中世の集落が営まれていたことが判明した。(高松)

## 6 出土遺物

寺田遺跡の立会、第1次、第2次調査で出土した遺物総数は、コンテナバット29箱、総重量25.43kgである。以下では、立会・第1次・第2次(支線)・第2次(幹線)の順に遺構単位で記述するが、S D53は

遺物量が突出して多いため、2次(幹線)と区別して別項を設けた。さらに、S D40(第Ⅲ-8図参照)とS D53(第Ⅲ-5図参照)に関しては、層位による区別もしている。ここでは遺構別の傾向や遺物の特徴を記述するが、個々の詳細については遺物観察表(第Ⅲ-2~Ⅲ-9表)を参照されたい。

#### a 工事立会調査

**S D 5 出土遺物(1~39)** 古墳時代を中心とする遺物が出土しており、全体に摩滅が激しく調整が不明瞭なものが多い。1~24は土師器で、1~4は椀、5は小型鉢で外面全体にミガキが施されている。6~13は高坏。14は口縁部小片の出土で、S字状口縁台付甕である。15~19は甕、20~21は壺、22~24は甑である。25~29は須恵器で、25は高杯蓋である。26、27はいずれも田辺編年TK47型式に相当する。30~39はすべて土師質の土錘で、細長い形状の比較的小型のものである。

**S Z 4 出土遺物(40~42)** 古墳時代から中世までの遺物が混在して出土している。40は古墳時代の土師器高坏、41は平安時代の土師器皿、42は13世紀中葉の土師器鍋である。

**S D 6 出土遺物(43~50)** 43は頸部小片の出土であるが、S字状口縁台付甕であり、混入品と考えられる。44~46は土師器小皿および皿、47~50は土師器甕である。

**S Z 8 出土遺物(51~53)** 51は土師器甕である。52は藤澤編年(以下山茶椀は藤澤編年)渥美型第6型式、53は尾張型第6型式の山茶椀と思われる。

**S D 3 出土遺物(54~63)** 54、55は土師器皿、56は土師器甕で平安時代末期のものと思われる。57~59はいずれも南伊勢系土師器皿B形態である。61~63は南伊勢系土師器鍋であるが、61は伊藤編年(以下南伊勢系土師器鍋は伊藤編年)第2段階、62は第3段階、63は第4段階のものと考えられる。

**包含層出土遺物(64)** 64は陶器鉢で底部が出土。

#### b 第1次調査

**S A 13・Pit出土遺物(65~68)** 65~68は土師器小皿で、時期はいずれも平安時代末期と思われる。

#### c 第2次調査(支線)

**S D 40第189層出土遺物(69~79)** 最下層には弥生時代から平安時代までの遺物が出土している。69

は弥生土器壺の底部で弥生時代後期のもの。70は土師器丸底鉢で、全体に磨耗が激しい。71、72は須恵器坏蓋と坏身の小片である。73~76は土師器小皿および皿、77は土師器坏の口縁部の出土で、平安時代前期のものであろう。78、79はいずれも灰釉陶器椀の口縁部の出土である。

**S D 40第188層出土遺物(80~82)** 80は弥生土器甕の底部で弥生時代中期のもの。81は土師器皿である。82は灰釉陶器椀である。

**S D 40第186層出土遺物(83、84)** 83は土師器甕であるが全体に磨耗が激しい。84は灰釉陶器椀で内面底部に重ね焼き痕がはっきりと確認できる。

**S D 40出土遺物(85~91)** 85は土師器甑の底部の出土。86~88は土師器甕である。89~91はロクロ土師器の椀および皿である。

**S Z 28・S D 43・39出土遺物(92~95)** 92は古墳時代中期の土師器甕で全体に磨耗が激しい。93は山茶椀の底部である。94は山皿で、95は南伊勢系土師器鍋で第4段階のものと考えられる。

**Pit・包含層他出土遺物(96~124)** 96は土師器皿、97~100はいずれも土師器甕の口縁部が出土。101は口縁部小片の出土で、土師器蓋であろう。102~104はロクロ土師器の椀、皿、台付皿と思われる。

105は頸部小片の出土で、磨耗が激しいが、古式土師器と思われる。106は須恵器壺の底部の出土。107はロクロ土師器椀の底部である。108は山皿、109~119は山茶椀である。115は渥美型第6型式、118は渥美型第5型式であろう。120は小片ではあるが、土師器蓋とした。121は土師器羽釜、122、123は土師器鍋の口縁部の出土で、123は南伊勢系土師器鍋第4段階と思われる。

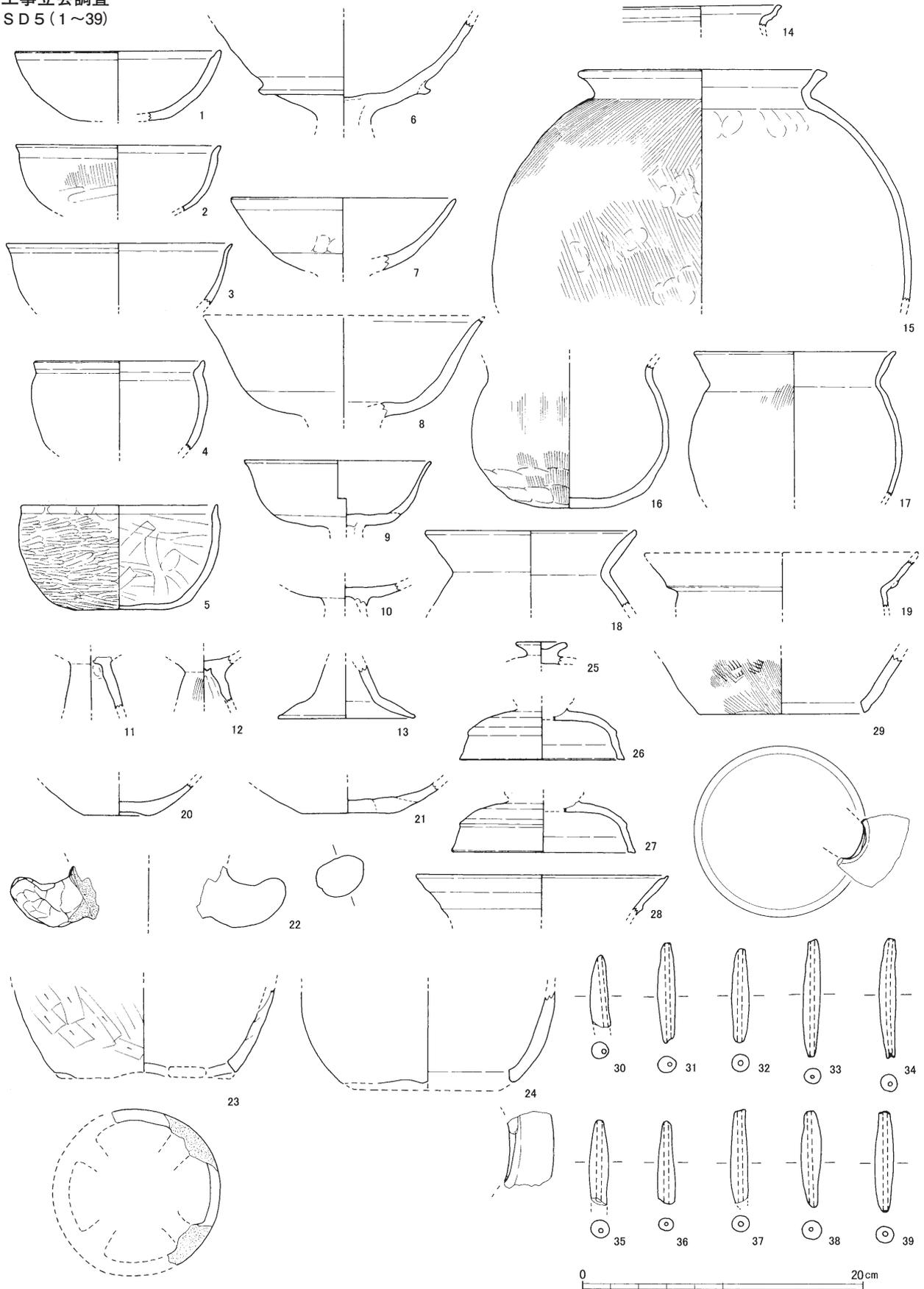
124は土師器羽釜である。

#### d S D 53出土遺物

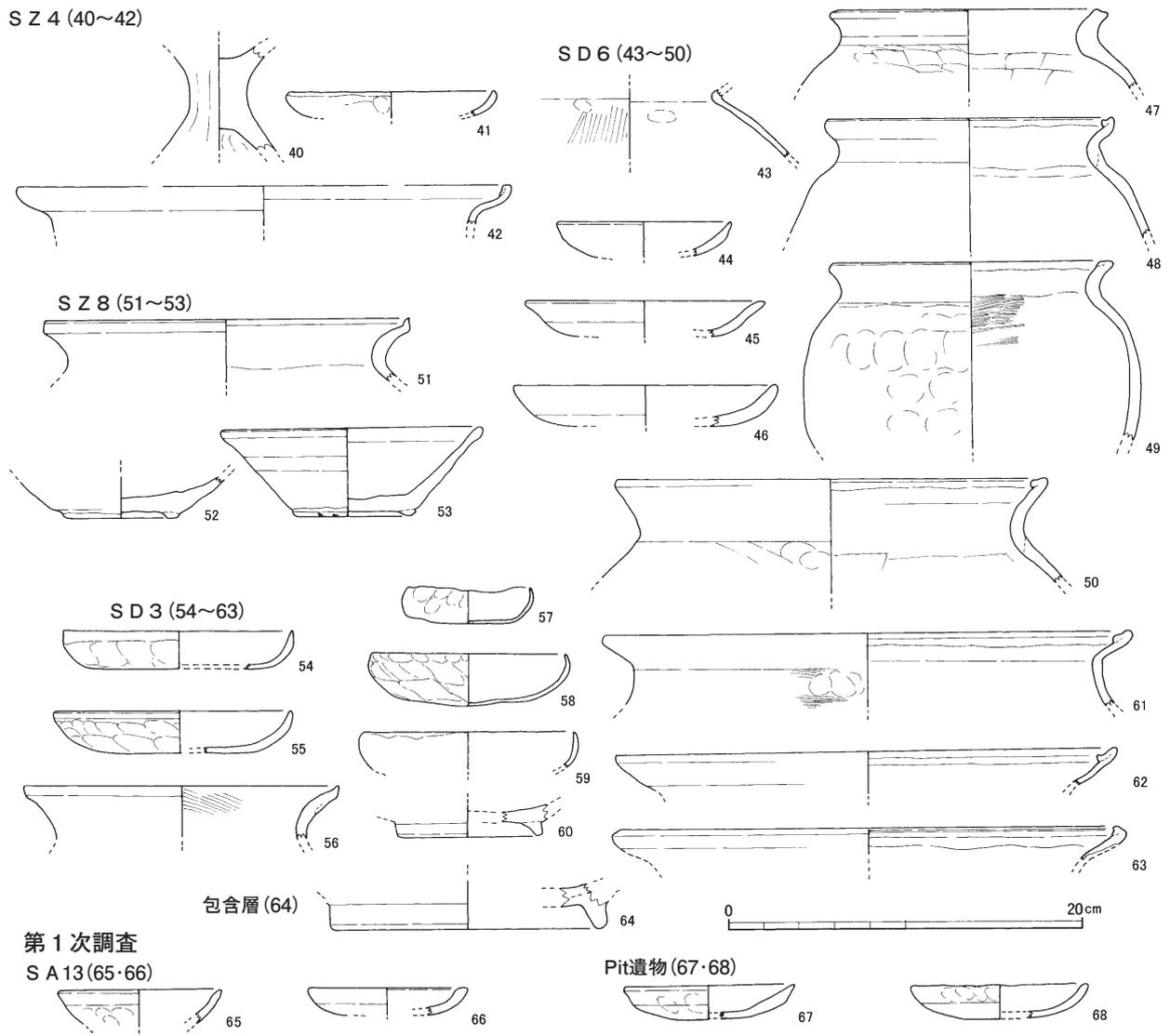
**S D 53第94層出土遺物(125~127)** 遺構最下層出土の遺物。125~127は土師器小皿および皿である。126の口縁部と底部外面には煤が付着している。127は完存の土師器皿で、底部外側に墨書が確認できるが、不明瞭なため判別はできない。記号ではなく、文字と思われ、「女」「必」「交」の可能性はある。

**S D 53第93層出土遺物(128~178)** 遺構下層出土の遺物。128~139は土師器小皿および皿である。

工事立会調査  
SD5(1~39)



第三-9図 寺田遺跡出土遺物実測図(1) (1:4)



第Ⅲ-10図 寺田遺跡出土遺物実測図(2) (1:4)

140～148は土師器坏、149は土師器碗である。150～152は土師器甕でいずれも口縁部の出土である。153は両黒、154は内黒の黒色土器碗で、154の内面にはわずかであるが暗文が確認できる。155～159は須恵器甕および大甕である。160～164は須恵器壺で、162の底部外面には「×」のようなヘラ記号が確認できる。165は須恵器鉢であると思われる。166～168は灰釉陶器小碗および碗である。166・169には煤が、168には墨跡が確認できる。169～174は灰釉陶器壺で、171と172は同一個体の可能性がある。173の体部片には明瞭な陰刻花文がみられる。175～177はいずれも山茶碗底部の出土である。178は陶器甕である。

**S D 53第92層出土遺物(179～236)** 遺構中層出土の遺物。179～199は土師器小皿および皿、200、201は土師器坏、202～204は土師器碗である。205～

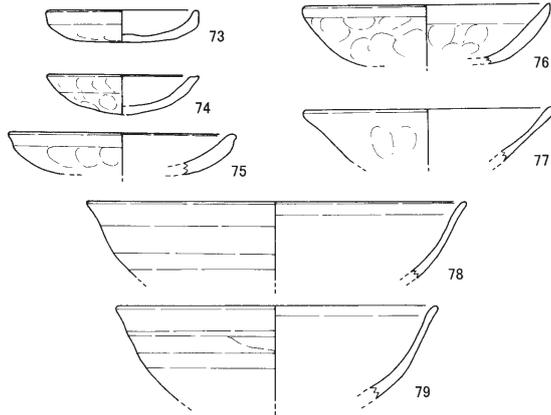
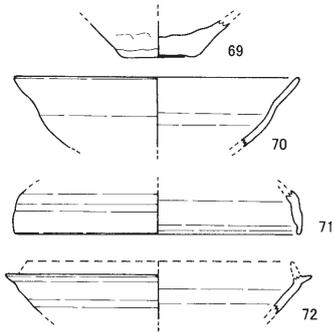
212は土師器甕、213は土師器壺である。214は口縁部片でなく、高台部片と判断し、台付鉢とした。215～218は須恵器甕である。219～221は灰釉陶器小碗および碗である。222～225は灰釉陶器壺で、223には内面に墨が付着する。226はロクロ土師器小皿、227～235はロクロ土師器碗である。236は渥美産陶器甕の底部である。

**S D 53第91層出土遺物(237～267)** 遺構上層出土の遺物。237～243は土師器小皿および皿で、238はほぼ完存状態で出土した。244は土師器坏、245～249は土師器甕であり、250は南伊勢系土師器鍋であろう。251は灰釉陶器碗、252～257は山茶碗で、252には輪花と自然釉が確認できる。258はロクロ土師器皿、259～267はロクロ土師器碗である。

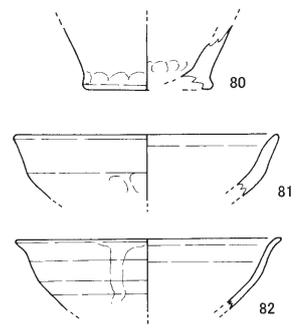
**S D 53他出土遺物(268～272)** 268～272は弥生時

第2次調査(支線)

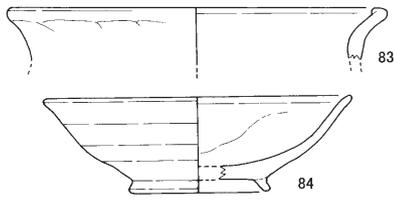
S D 40第189層 (69~79)



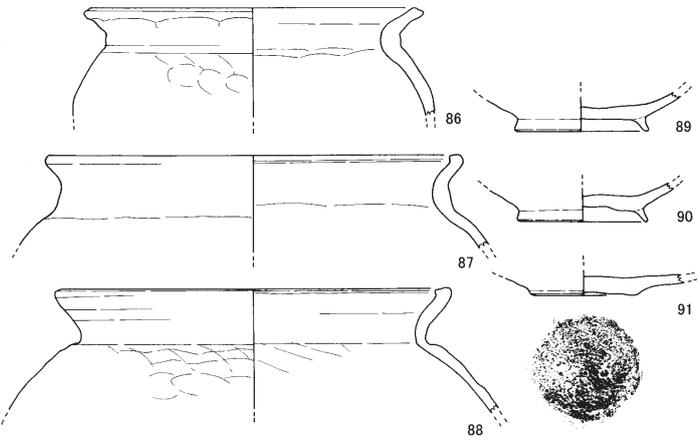
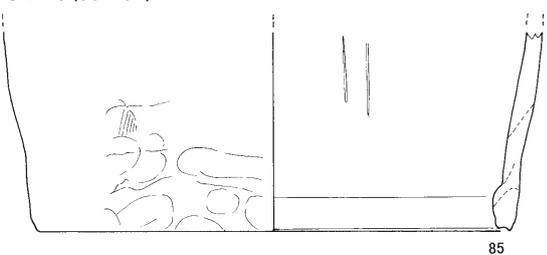
S D 40第188層 (80~82)



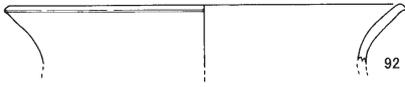
S D 40  
第186層  
(83・84)



S D 40 (85~91)



S Z 28 (92)



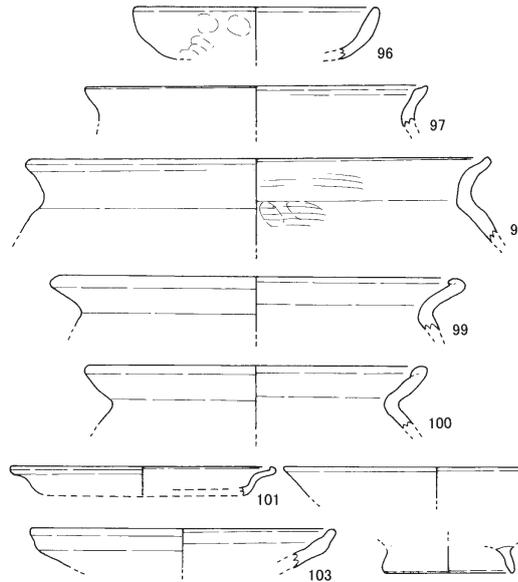
S D 43 (93)



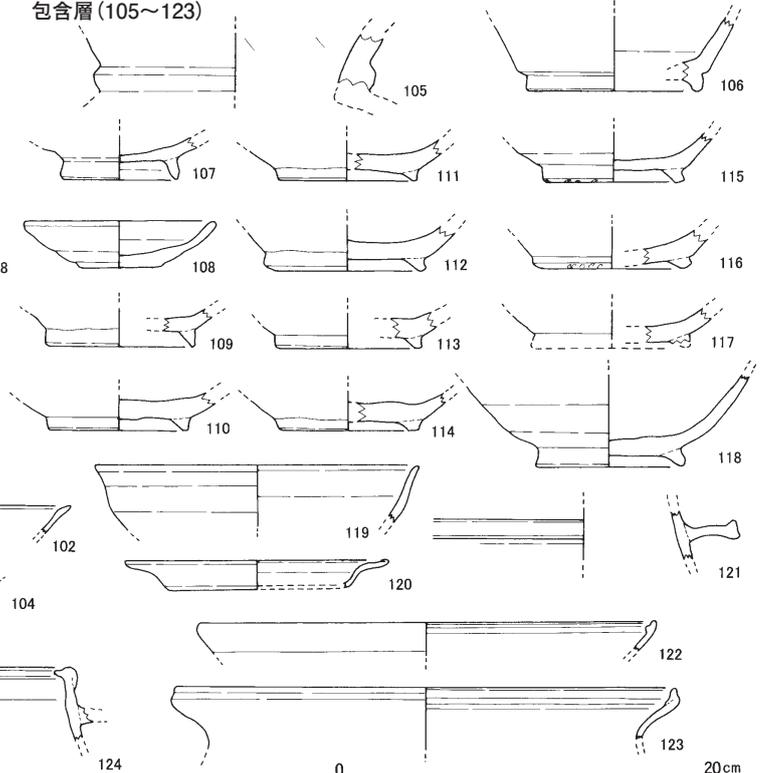
S D 39 (94・95)



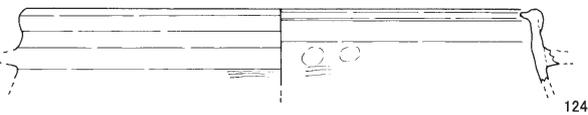
Pit遺物 (96~104)



包含層 (105~123)



排土 (124)

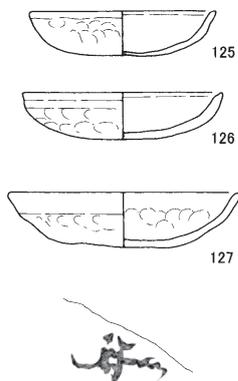


0 20cm

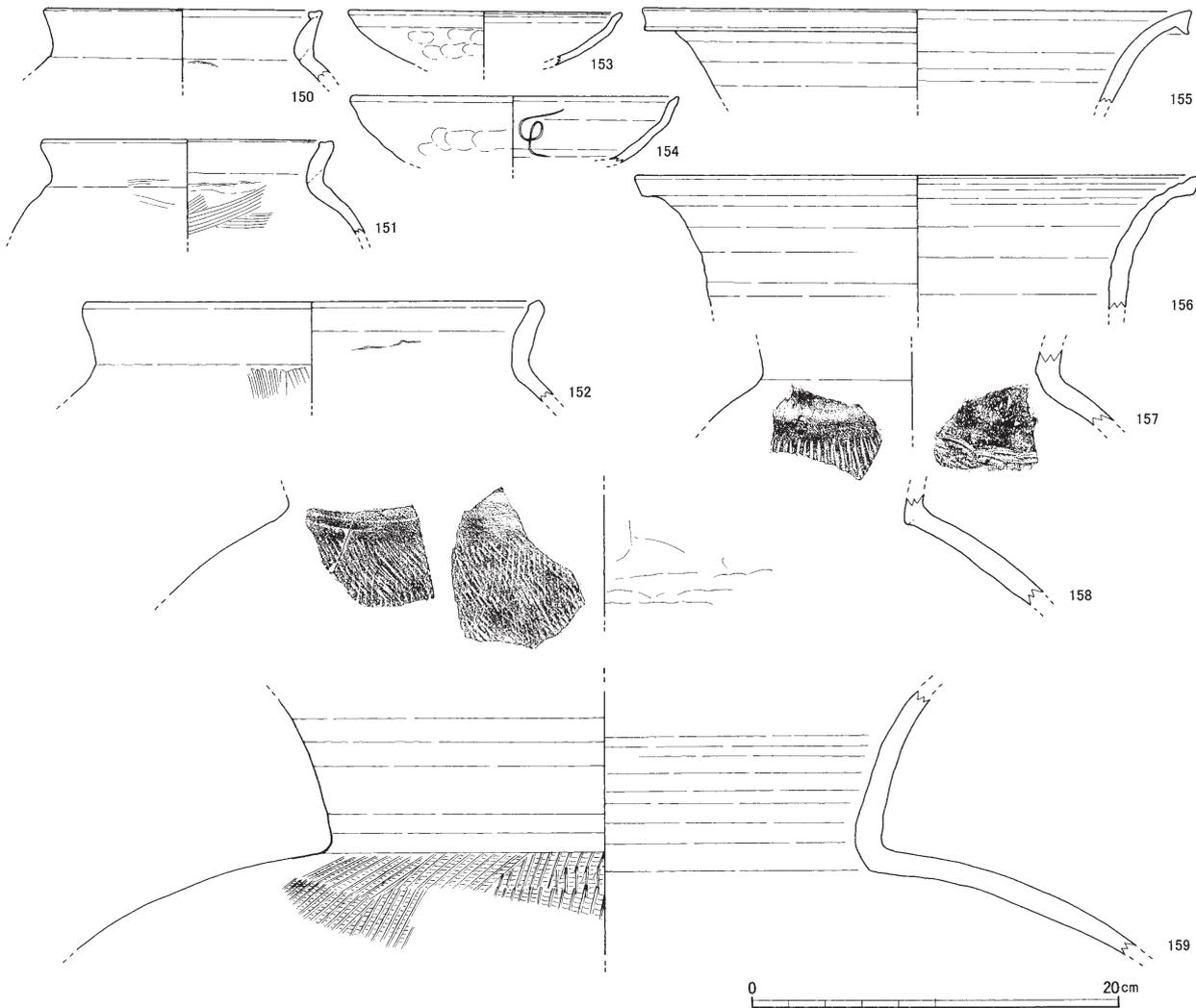
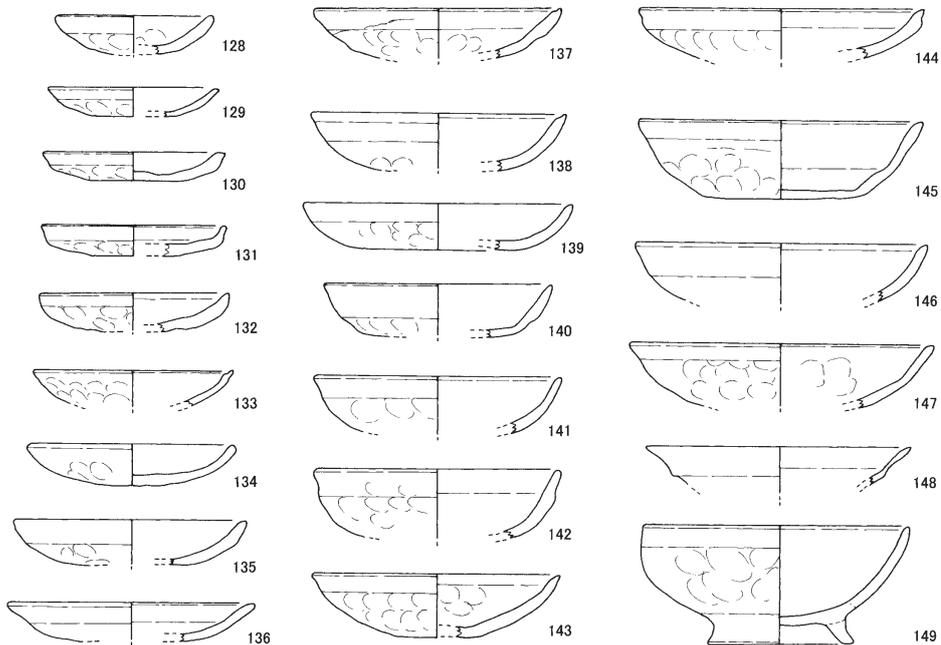
第Ⅲ-11図 寺田遺跡出土遺物実測図(3) (1:4)

S D 53

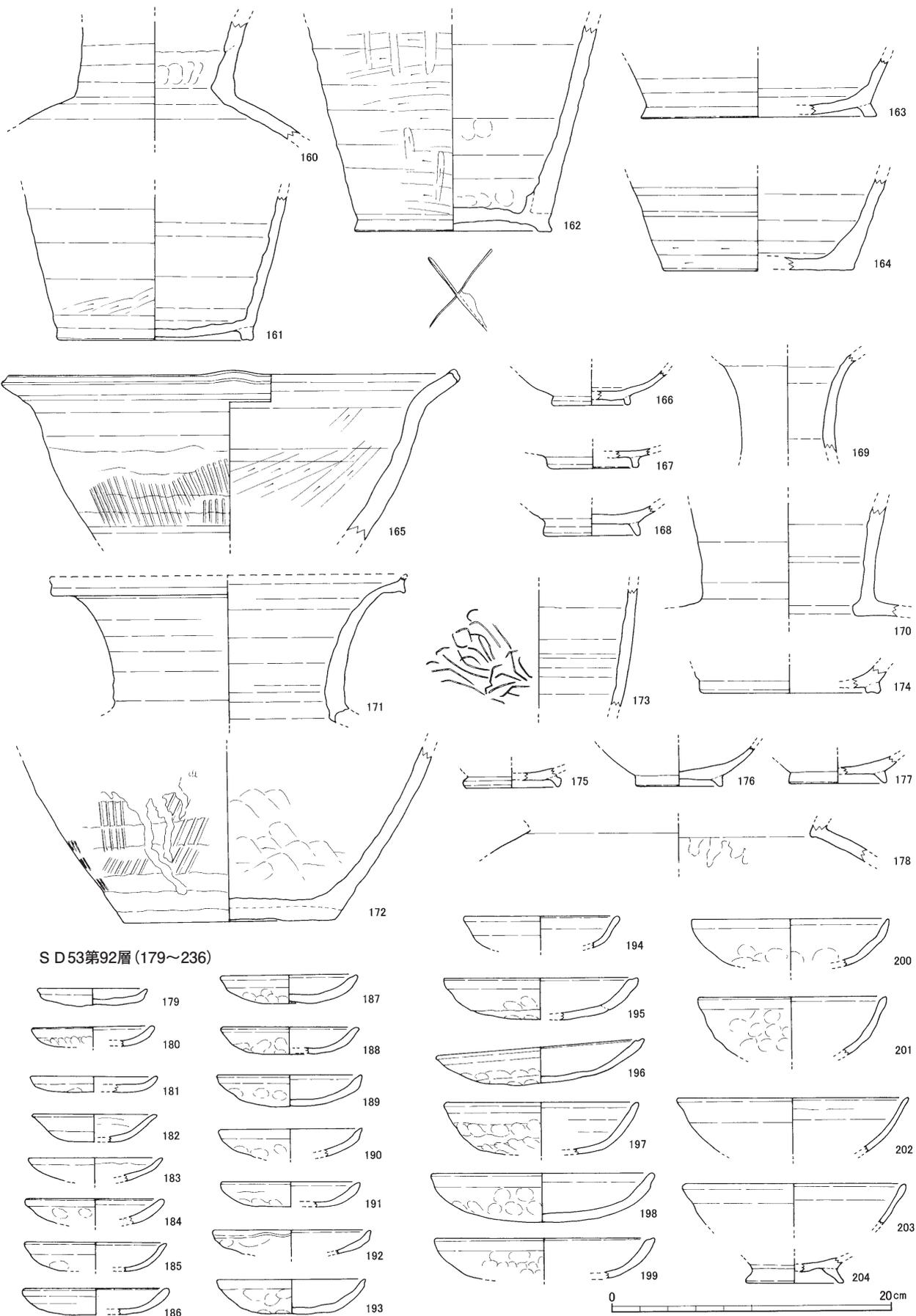
S D 53第94層 (125~127)



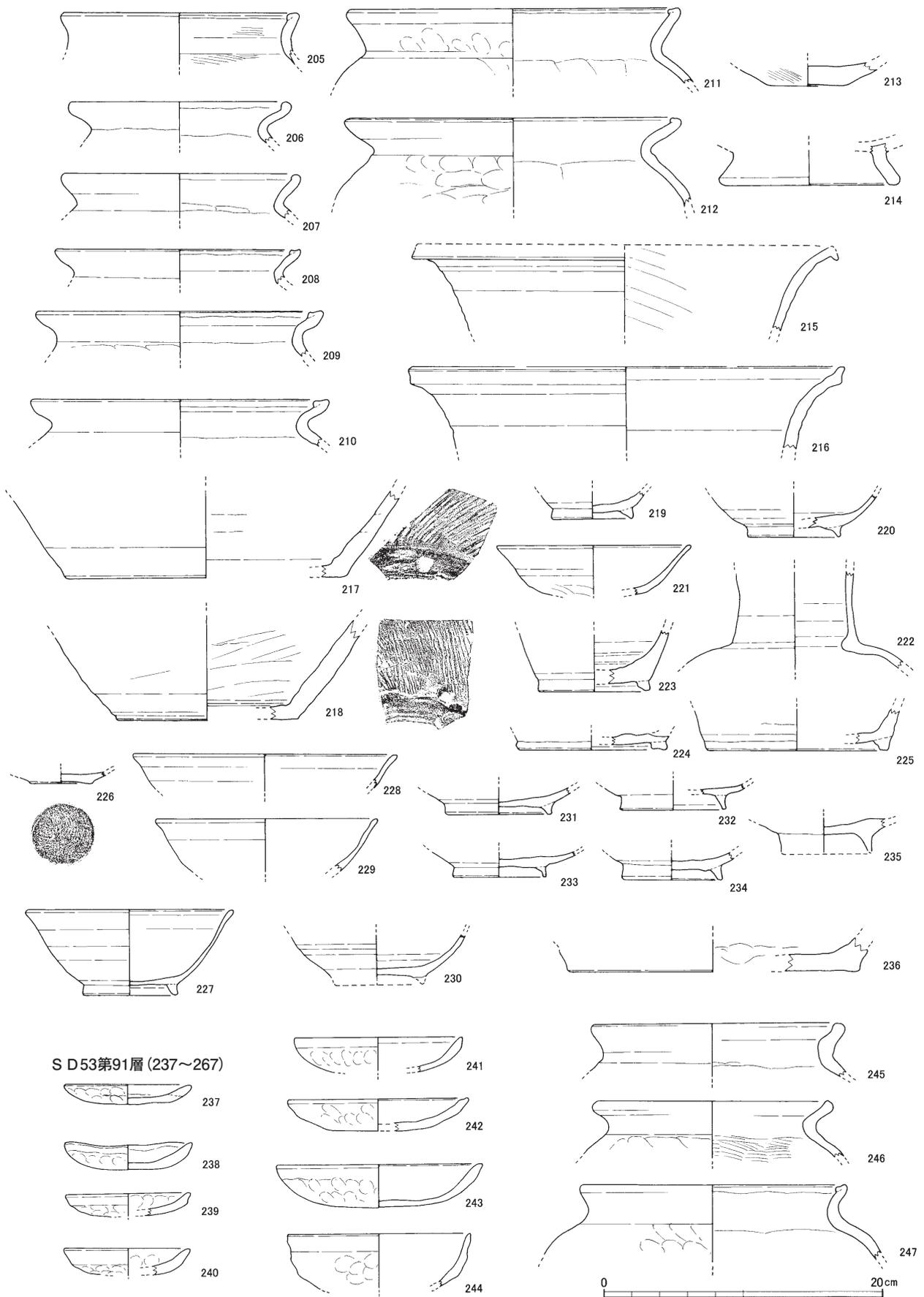
S D 53第93層 (128~178)



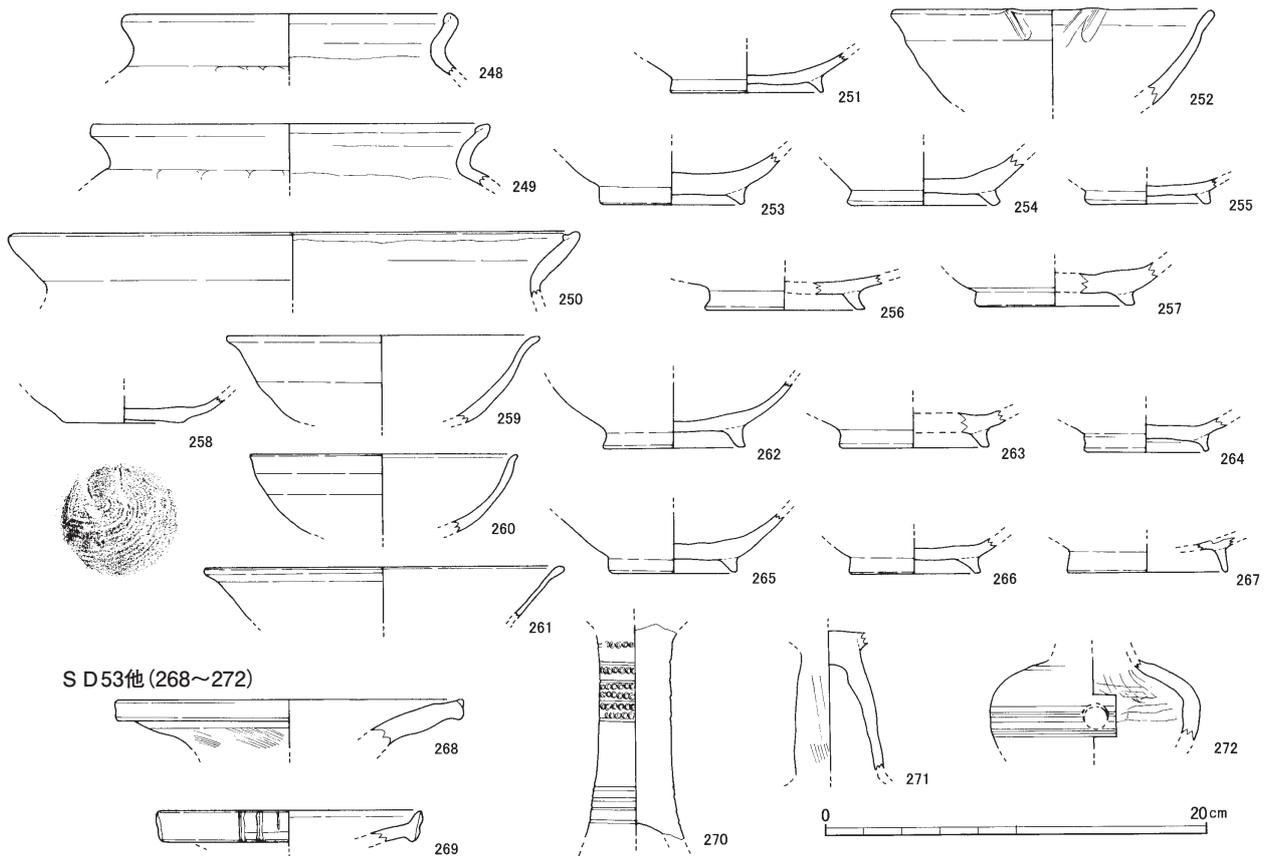
第Ⅲ-12図 寺田遺跡出土遺物実測図(4) (1 : 4)



第Ⅲ-13図 寺田遺跡出土遺物実測図(5) (1:4)



第Ⅲ-14図 寺田遺跡出土遺物実測図(6) (1:4)



第Ⅲ-15図 寺田遺跡出土遺物実測図(7) (1:4)

代後期から古墳時代前期初頭にかけての遺物で、第92・91層から出土しており、混入品と考えられる。268・269は壺である。270は高坏の脚部で、赤色顔料が残る。

e 2次調査(幹線)

**S D 51・52・54・56・58~60・63・68・71、S Z 62・64~66・69出土遺物(273 ~ 298)** 273は弥生土器壺の小片で、外面に赤色顔料が残る。274は口縁部小片のみの出土で、S字状口縁台付甕。275は壺の体部片、276は高坏で、いずれも弥生時代後期のものと思われる。277は土師器皿、278、279は台付甕の台部である。280、281は土師器甕の口縁部小片である。282は土師器小型甕。283は土師器皿、284は山茶碗である。285は土師器甕、286は土師器皿、287はロクロ土師器碗である。288は土師器皿、289は土師器甕である。290は山茶碗。291は土師器小皿。292はロクロ土師器碗。293の土師器皿はほぼ完存状態で出土。294は須恵器甕の口縁部。295は山茶碗で尾張型第5型式と思われる。296、297は土師器小皿、298は高台部のみの出土で、土師器碗か台付皿と思われる。

**S D 57出土遺物(299 ~ 309)** 299 ~ 302は土師器小

皿および皿である。302には内外面ともに煤が付着する。303 ~ 305は土師器甕、306は土師器鉢の口縁部が出土している。307、308はいずれも渥美型の山茶碗で、漬け掛けされた釉が確認できる。307が第4型式、308が第5型式であろう。309は白磁碗の底部で、ケズリコミは浅く、玉縁口縁碗の可能性もある。

**Pit・包含層他出土遺物(310 ~ 319)** 310は弥生土器壺の体部小片の出土である。311は渥美産の片口小碗で自然釉が確認できる。312は土師器小皿で、313は渥美型第5型式と思われる山茶碗である。

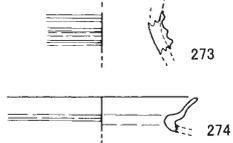
313 ~ 318は土師器小皿および皿である。319はほぼ完存の土錘である。(星野)

[註] 土器の編年・時期に関しては、以下の編年を参考にした。

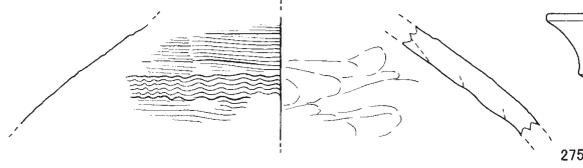
- ・田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981年)
- ・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号(三重県埋蔵文化財センター、1994年)
- ・伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』(三重歴史文化研究会、1990年)「南伊勢・志摩地域の中世土器」(『三重県史』資料編 考古2、2008年)

2次調査(幹線)

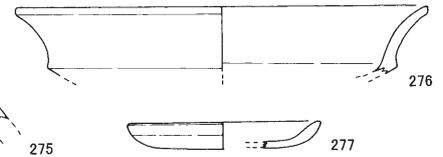
S D 56 (273・274)



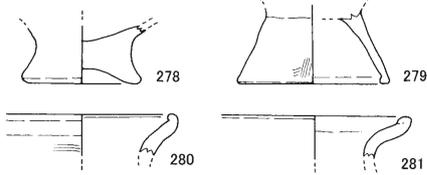
S D 68 (275)



S Z 66 (276・277)



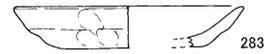
S Z 62 (278~281)



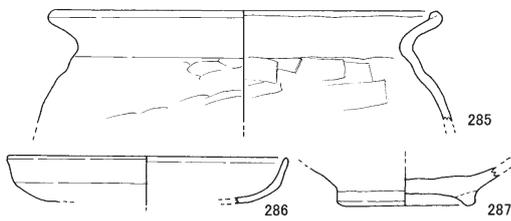
S Z 69 (282)



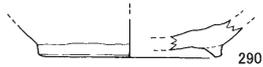
S D 51 (283・284)



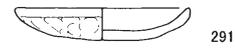
S D 52 (285~287)



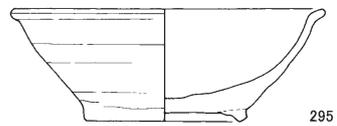
S D 59 (290)



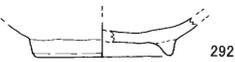
S D 60 (291)



S D 58 (295)



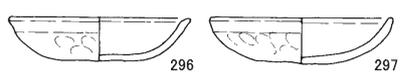
S D 63 (292)



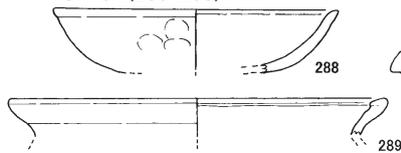
S Z 64 (293)



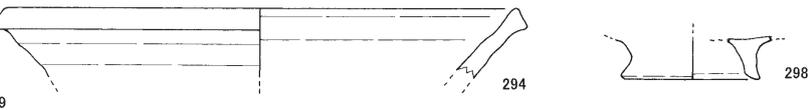
S D 71 (296~298)



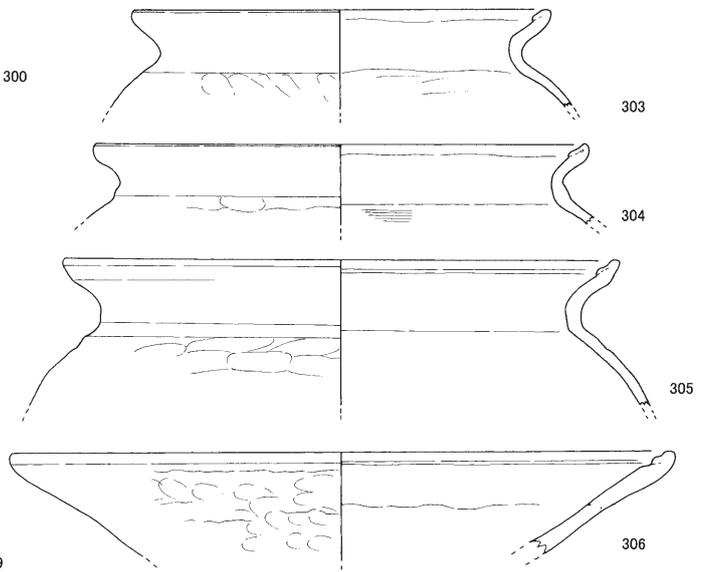
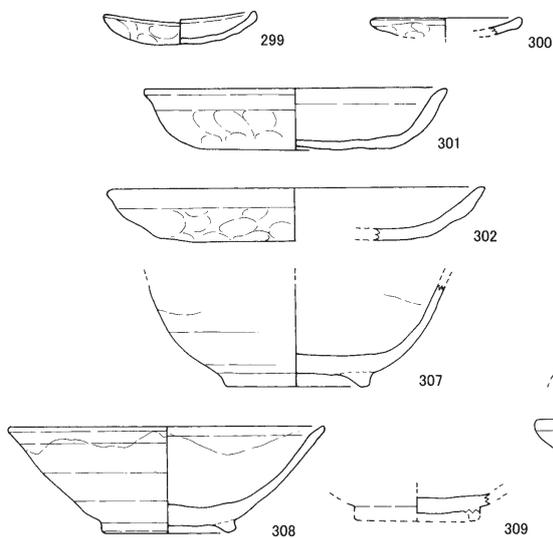
S D 54 (288・289)



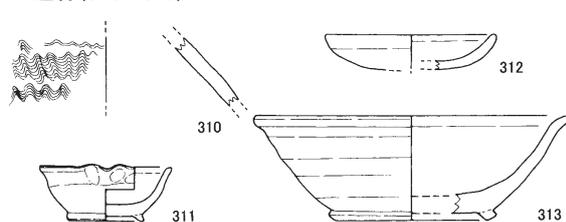
S Z 65 (294)



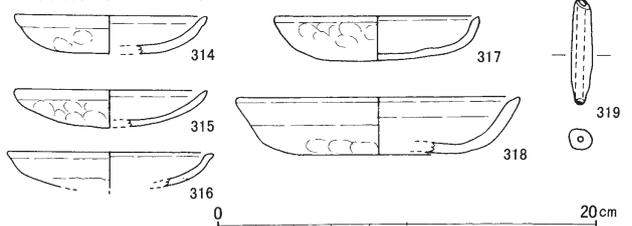
S D 57 (299~309)



Pit遺物 (310~313)



包含層他 (314~319)



第三-16図 寺田遺跡出土遺物実測図(8) (1:4)

## 7 調査のまとめと検討

### a 概要

寺田遺跡ではS A 12・13や根石を伴う柱穴が示すように平安時代後期から中世において集落が展開することが判明した。またS D 5において古墳時代の土器が一定量出土したことから、古墳時代にも集落の本格的な形成がなされたと考えられる。さらに、わずかながら弥生土器も確認できたことから、当遺跡の範囲、あるいは近在の地に弥生時代の集落を想定する必要があるだろう。

この他、S R 45・S D 53等が示すように旧外城田川・相合川につながる旧河道・旧流路をとらえた。これにより田丸城の改修に伴う河川の付け替えのあり方や土地利用の変化に関する手がかりが得られたといえる。このように、寺田遺跡そのものの内容だけでなく、その周辺と連動した変化に関する手がかりも得られたのである。

### b 評価

**遺跡の年代** 寺田遺跡については、これまでに紡錘車出土したと紹介されている<sup>(1)</sup>。この紡錘車は田丸小学校新校舎建設の際に出土しており、6世紀前半のものとされる。今回の一連の調査において弥生土器、古墳時代前期の土器が確認できたことから、遺跡の成立年代はさらに遡るといえる。以下では時代順に評価を加えておく。

**古墳時代** S D 5から古墳時代の土器が出土した。土師器・須恵器が一定数認められたことから集落の存在がうかがえる。また、土錘の出土から河川での漁撈も行っていたと推測される。

**平安時代後期～中世** 掘立柱建物に関連する遺構が検出され、その年代は平安時代後期から中世と考えられる。これらの遺構は第1次調査区・第2次調査区(幹線・支線)で確認できたことから、集落は広い範囲にわたって展開していたと想定できる。

なお、建物の密集度や旧外城田川・相合川の氾濫原にあたるという立地を勘案すれば、それほど大規模な集落ではなく、洪水の度に適地を求めて絶えず移動していた集落と判断される。そして寺田遺跡の集落は、現在の三ツ橋集落へとやがて収斂していくのだろう。まさに三ツ橋集落の前身をとらえたとい

える。

**条里の方向** S D 55～58は、伊藤裕偉氏によって整理された付近の条里型地割り<sup>(2)</sup>と異なる主軸方向であった。S D 53付近では洪水等の事情から河道や流路の方向を基軸としたのだろう。実状にあわせた土地利用の好例といえる。

**近世** 近世になると、田丸城の修築に伴って外城田川は現在の流れに付け替えられた<sup>(3)</sup>。これによって、かつての流れは田丸城外堀付近から相合川あるいは外城田川へと通じる小さな流路となったようである。この小さな流路は圃場整備以前まで



写真Ⅲ-1 川田地蔵

機能していたようで、地元の証言によれば、かつて田丸城から伊勢市小俣町方面へ小さな舟で往来できたという。第2次世界大戦後にアメリカ軍が撮影した航空写真でも南西-北東方向の流路が確認できる。S R 45、S D 53・71等がこれにあたる可能性がある。

**血洗池** S D 60については、川田地蔵の前にあった「血洗池」の可能性を指摘できた。この池は1970年の圃場整備以前にもみられたという地元の証言がある一方で、地蔵は圃場整備の際に100m東の地点から現在の地に移されたとも言われている<sup>(4)</sup>。この異同は「血洗池」の形成年代とともに、処刑場の正確な位置の特定にも関わる。刑場に伴う遺構の検出は困難を伴うと推察されるが、今後の発掘調査・関連資料の詳細な検討によって上記の問題が整理・解決される必要があろう。

### c まとめ

以上、寺田遺跡の概要とその評価についてまとめた。寺田遺跡周辺は、玉城町においてこれまで発掘調査が十分なされてこなかった地域にあたる。寺田遺跡の発掘調査は、近世城郭田丸城の成立前代の玉城町を明らかにする上で、今後、大きな意味を持つことだろう。(高松)

[註]

- (1) 『玉城町史』上巻(1995年)  
 (2) 伊藤裕偉「斎宮寮・伊勢道・条里」(『斎宮歴史博物館研究紀要』13 斎宮歴史博物館、2004年)  
 (3) 岩中淳之「田丸城」(『三重県の城』郷土出版社、1991年)

- (4) 近隣の古老の証言による。川田地蔵(首切り地蔵)は佐田村川田に田丸領の刑場があり、刑死者供養のために祀られたのだという。地蔵の前にあった池の名称については、罪人処刑後にこの池で血を洗ったことに由来するという。なお、刑場の詳細は『玉城町史』下巻(2005年)を参照されたい。

第Ⅲ-1表 寺田遺跡遺構一覧表

遺構名	形態	時期	調査回数	グリッド	長さ・長軸(m)	幅・短軸(m)	深さ(m)	備考
S D 1	溝		立会	-	2.0 ~	0.4	0.08	
S D 2	溝		立会	-	1.1 ~	0.4	0.07	
S D 3	溝	中世	立会	-	2.1	1.8 ~	1.18	
S Z 4	落込み	平安時代~中世	立会	-	1.5 ~	1.4 ~	0.14	旧河道?
S D 5	溝	古墳時代中~後期	立会	-	1.8 ~	1.5 ~	0.12	
S D 6	溝	平安時代末	立会	-	7.4 ~	4.0 ~	0.65	旧河道?
S D 7	溝	古代~中世	立会	-	1.5 ~	1.0 ~	0.51	
S Z 8	落込み	古代以降	立会	-	15.5 ~	1.5 ~	0.7	旧河道?
S D 11	溝		1次	8 A・8 B	3.0 ~	0.3	0.07	
S A 12	柱列	平安時代後期?	1次	9 B・10 B・11 B	-	-	-	3間(6.5m以上)
S A 13	柱列	平安時代末	1次	11 B・12 B	-	-	-	3間(6.6m)
S K 20	落込み	近・現代	2次(支線)	N 24	2	0.3 ~	0.16	圃場整備前の微地形
S Z 21	落込み	近・現代	2次(支線)	N 20・N 24	2.4	0.4 ~	0.19	圃場整備前の微地形
S D 22	溝	近・現代	2次(支線)	N 24	0.7 ~	0.5	0.16	
S D 23	溝	中世	2次(支線)	N 20・N 24	1.1	0.5 ~	0.09	SD23→SZ21の形成順
S Z 24	落込み	近・現代	2次(支線)	N 24・N 28	1.7	0.3 ~	0.1	圃場整備前の微地形
S Z 25	落込み	近・現代	2次(支線)	N 32	0.4 ~	0.3 ~	0.07	圃場整備前の微地形
S Z 26	落込み	近・現代	2次(支線)	N 32・N 36	3.2	0.3 ~	0.22	圃場整備前の微地形
S D 27	溝	近・現代	2次(支線)	N 36	0.9 ~	0.5	0.22	SZ28→SD27の形成順
S Z 28	落込み	近・現代	2次(支線)	N 36・N 40	1.3 ~	0.2 ~	0.12	圃場整備前の微地形
S Z 29	落込み	近・現代	2次(支線)	N 40	1.1	0.2 ~	0.06	圃場整備前の微地形
S Z 30	溝	近・現代	2次(支線)	N 8	1.1 ~	0.4 ~	0.26	
S Z 31	溝	近・現代	2次(支線)	N 8	0.6 ~	0.4 ~	0.11	
S Z 32	溝		2次(支線)	N 48・N 52	2.3	0.7 ~	0.16	
S Z 33	溝	古代~中世	2次(支線)	N 48	2.0 ~	0.7 ~	0.16	
S Z 34	溝		2次(支線)	N 12・N 16	4.4	0.9 ~	0.31	中央に近・現代の攪乱
S Z 35	落込み	近・現代	2次(支線)	N 8~N 16	8.4 ~	0.3 ~	0.23	圃場整備前の微地形
S K 36	溝	中世	2次(支線)	N 8・N 12	2.2	0.7 ~	0.06	
S K 37	土坑	古代~中世	2次(支線)	N 8	1.2	0.4 ~	0.09	
S D 38	土坑		2次(支線)	N 8	0.5 ~	0.4	0.03	
S D 39	溝	中世	2次(支線)	N 80	1.1	0.8 ~	0.14	
S D 40	溝	平安時代	2次(支線)	N 84~N 92	7	0.8 ~	0.37	
S D 41	溝		2次(支線)	N 84	2.0 ~	0.2 ~	0.13	SD41→SD40の形成順
S D 42	溝	古代~中世	2次(支線)	N 100	1.0 ~	0.4	0.15	
S D 43	溝	近・現代?	2次(支線)	N 172・N 176	6	0.8 ~	0.18	
S D 44	溝		2次(支線)	N 180・N 184	2.2	0.8 ~	0.08	
S R 45	旧河道		2次(支線)	N 56~N 80	24	0.8 ~	0.52	
S D 46	溝		2次(支線)	N 156~N 164	5.8	0.8 ~	0.13	
S D 51	落込み	平安時代~中世	2次(幹線)	W 20~W 32	9.4 ~	3.3 ~	0.3	低湿地
S D 52	落込み	平安時代~中世	2次(幹線)	W 28・W 32	5.6 ~	3.4 ~	0.29	低湿地
S D 53	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 32~W 40	6.0 ~	4.5	0.47	
S D 54	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 40・W 44	4.0 ~	1.3	0.45	
S D 55	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 44・W 48	4.5 ~	0.6	0.17	
S D 56	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 52・W 56	4.8 ~	0.4	0.25	
S D 57	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 60・W 64	4.6 ~	1	0.17	
S D 58	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 72	3.4 ~	0.8	0.27	
S D 59	溝	近・現代	2次(幹線)	W 4・W 8	5.3 ~	0.6	0.19	
S D 60	池	近・現代	2次(幹線)	W 8・W 12	6.8	3.1 ~	0.31	
S D 61	池	近・現代	2次(幹線)	W 8・W 12	-	-	-	S D 60に統合
S Z 62	落込み	中世	2次(幹線)	W 12~W 20	7.3 ~	1.8 ~	0.11	低湿地
S D 63	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 32・W 36	1.9 ~	0.4	0.25	
S Z 64	土坑	平安時代~中世	2次(幹線)	W 32	0.8	0.7	0.11	
S Z 65	土坑		2次(幹線)	W 32	1.2 ~	1.1 ~	0.25	
S Z 66	土坑	近・現代	2次(幹線)	W 28・W 32	0.8	0.8	0.18	
S Z 67	土坑		2次(幹線)	W 24	1.0 ~	0.7	0.2	
S D 68	落込み		2次(幹線)	W 28・W 32	1.2 ~	0.6 ~	-	SD68→SD52の形成順
S Z 69	土坑	古代~中世	2次(幹線)	W 20・W 24	2.2 ~	1.0 ~	0.13	
S Z 70	土坑	古代~中世	2次(幹線)	W 24	1.2	0.6	0.16	
S D 71	溝	平安時代~中世	2次(幹線)	W 96・W 100	7.0 ~	3.2	0.31	

遺構番号 9・10・14~19・47~50は欠番

第Ⅲ-2表 寺田遺跡出土遺物観察表(1)

番号	実測 番号	種類 器種等	地区	グ リ ド 等	出土位置	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
1	002-04	土師器 椀	立会		SD5	(口)14.8	ナテ→ヨコナテ	密	明赤褐 2.5YR5/6	口縁部3/12	
2	006-07	土師器 椀	立会		SD5	(口)14.5		密	橙 7.5YR7/6	口縁部2/12	摩滅のため調整不明瞭
3	004-02	土師器 椀	立会		SD5	(口)16.2		やや密	橙 5YR6/6	口縁部2/12	
4	006-08	土師器 椀	立会		SD5	(口)12.1		密	橙 2.5YR6/8	口縁部2/12	摩滅のため調整不明瞭
5	005-01	土師器 小型鉢	立会		SD5	(口)14.0	外:ミナキ 内:ナテ→ハケメ	密	外:橙 7.5YR7/6 内:浅黄橙 10YR8/3	全体3/12	
6	001-02	土師器 高坏	立会		SD5		ナテ→ヨコナテ	密	橙 7.5YR7/6	坏底部5/12	摩滅のため調整不明瞭
7	002-05	土師器 高坏	立会		SD5	(口)16.1	ナテ・ナテ→ヨコナテ	やや密	外:橙 7.5YR6/6 内:黒 10YR2/1	坏部3/12	
8	006-04	土師器 高坏	立会		SD5	(口)18.8		密	橙 5YR6/6	口縁部2/12	
9	011-04	土師器 高坏	立会		SD5	(口)13.2		やや粗	橙 5YR7/6	坏部全体 8/12	摩滅のため調整不明瞭
10	007-05	土師器 高坏	立会		SD5	(頸)3.5		密	橙 5YR6/6	坏底部6/12	摩滅のため調整不明瞭
11	007-06	土師器 高坏	立会		SD5	(頸)2.9		密	橙 7.5YR7/6	脚部3/12	
12	007-07	土師器 高坏	立会		SD5	(頸)2.9		密	にぶい黄橙 10YR6/4	脚部4/12	脚部内面に絞り痕あり
13	007-03	土師器 高坏	立会		SD5	(底)9.8	ナテ→ヨコナテ	密	外:赤褐 5YR4/6 内:橙 5YR6/8	底部2/12	摩滅のため調整不明瞭
14	007-01	土師器 台付甕	立会		SD5		ヨコナテ	密	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部小片	S字状口縁
15	001-01	土師器 甕	立会		SD5	(口)17.8	外:ナテ→ハケメ(4本/cm) 内:ナテ→ヨコナテ	密	浅黄橙 10YR8/4	口縁部9/12	
16	011-03	土師器 甕	立会		SD5		ナテ→ハケメ(5本/cm)	やや粗	橙 7.5YR6/6	全体5/12	表面磨耗は激しい
17	011-01	土師器 甕	立会		SD5	(口)14.4	ハケメ	粗	赤褐 2.5YR4/6	口縁部3/12	摩滅のため調整不明瞭
18	006-01	土師器 甕	立会		SD5	(口)15.0		密	外:灰褐 7.5YR4/2 内:橙 5YR6/6	口縁部 11/12	摩滅激しく調整不明
19	008-08	土師器 甕	立会		SD5	(口)15.1		やや密	にぶい橙 7.5YR6/4	頸部1/12	
20	006-03	土師器 壺	立会		SD5	(底)5.1		密	外:赤 10R5/6 内:暗赤灰 10R4/1	底部 ほぼ完存	摩滅激しく調整不明
21	006-02	土師器 壺	立会		SD5	(底)6.6		密	外:橙 2.5YR6/8 内:にぶい黄橙 10YR7/3 :黒褐 10YR3/1	底部 ほぼ完存	摩滅激しく調整不明
22	007-04	土師器 甌	立会		SD5			密	橙 5YR6/6	把手	
23	012-01	土師器 甌	立会		SD5	(底)14.0	ナテ	やや粗	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:明褐 7.5YR5/6	底部5/12	
24	010-01	土師器 甌	立会		SD5	(底)11.7	ナテ	やや密	にぶい黄橙 5YR6/4	底部1/12	
25	006-06	須恵器 高坏蓋	立会		SD5			密	紫灰 5PB6/1	口縁部小片	
26	008-03	須恵器 高坏蓋か	立会		SD5	(口)11.6	ロコナテ	やや密	外:灰 N5/ 内:灰 N4/	口縁部2/12	T K 47型式
27	006-05	須恵器 高坏蓋か	立会		SD5	(口)11.8	ロコナテ	密	青灰 5PB6/1	口縁部小片	T K 47型式
28	008-04	須恵器 壺	立会		SD5	(口)18.0	ロコナテ	密	外:灰 N4/ 内:灰 5Y6/1	口縁部1/12	
29	007-02	須恵器 甌	立会		SD5	(底)12.4	ナテ→ハケ(8本/cm)	密	灰白 N5/	底部2/12	
30	018-07	土製品 土錘	立会		SD5	5.2×1.2×1.15 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2 にぶい橙 7.5YR7/4	全体9/12	重さ7.46 g
31	018-09	土製品 土錘	立会		SD5	7.3×1.3×1.2 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	全体9/12	重さ9.82 g
32	018-04	土製品 土錘	立会		SD5	6.75×1.25×1.25 孔径0.3		密	にぶい黄橙 10YR7/4	完存	重さ9.95 g
33	018-02	土製品 土錘	立会		SD5	8.4×1.2×1.15 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	完存	重さ10.57 g
34	018-01	土製品 土錘	立会		SD5	8.7×1.15×1.2 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	ほぼ完存	重さ10.25 g
35	018-03	土製品 土錘	立会		SD5	6.15×1.35×1.35 孔径0.3		密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体10/12	重さ10.3 g
36	018-06	土製品 土錘	立会		SD5	6.0×1.05×1.0 孔径0.3		密	灰白 2.5Y8/2	完存	重さ7.23 g
37	018-08	土製品 土錘	立会		SD5	6.9×1.25×1.2 孔径0.4		密	灰黄橙 10YR8/4	ほぼ完存	重さ8.1 g
38	018-05	土製品 土錘	立会		SD5	6.9×1.35×1.3 孔径0.25		密	灰白 2.5Y8/2 にぶい橙 7.5YR7/4	全体10/12	重さ10.35 g
39	009-01	土製品 土錘	立会		SD5	7.3×1.3×1.3 孔径0.45		密	灰白 10YR8/2	ほぼ完存	重さ10.49 g
40	009-06	土師器 高坏	立会		SZ4			密	にぶい橙 10YR5/3	脚部6/12	摩滅のため調整不明
41	009-04	土師器 皿	立会		SZ4	(口)12.0	ナテ	やや密	浅黄 2.5Y7/3	口縁部1/12	

第Ⅲ-3表 寺田遺跡出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	種類 器種等	地区	グリップ ド等	出土位置	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
42	009-05	土師器 銅	立会		SZ4		ナテ→ヨコナテ	やや密	外:灰黄褐 10YR5/2 内:浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	
43	004-03	土師器 甕	立会		SD6		外:ナテ・ナヒエ→ハケメ→ヨコナテ 内:ナヒエ→ヨコナテ	密	にぶい褐 7.5YR5/3	頸部小片	S字状口縁
44	002-06	土師器 小皿	立会		SD6	(口)9.8	ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄褐 10YR7/3	口縁部2/12	
45	009-03	土師器 皿	立会		SD6	(口)13.5	ナテ→ヨコナテ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	全体3/12	全体に磨耗
46	009-02	土師器 皿	立会		SD6	(口)16.7		やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	全体3/12	摩滅のため調整不明
47	002-01	土師器 甕	立会		SD6	(口)15.8	外:ナヒエ→ヨコナテ 内:板ナテ→ヨコナテ	密	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部4/12	外面煤付着
48	002-02	土師器 甕	立会		SD6	(口)16.4	外:ナヒエ→ヨコナテ 内:ナテ→ヨコナテ	密	灰白 10YR8/2	口縁部3/12	外面煤付着
49	004-01	土師器 甕	立会		SD6	(口)16.0	外:ナヒエ→ヨコナテ 内:ナテ→ハケメ→ヨコナテ	やや密	外:灰黄褐 10YR6/2 内:にぶい黄橙 10YR6/3	全体2/12	
50	003-01	土師器 甕	立会		SD6	(口)24.6	外:ナヒエ→ヨコナテ 内:板ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄褐 7.5YR5/3	口縁部1/12	
51	010-04	土師器 甕	立会		SZ8	(口)20.6	ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 7.5YR7/3	口縁部1/12	摩滅のため調整不明瞭
52	008-02	陶器 椀 (山茶椀)	立会		SZ8	(底)6.6	ロコナテ→貼付ナテ	やや密	灰 5Y6/1	底部完存	渥美型第6型式
53	008-01	陶器 椀 (山茶椀)	立会		SZ8	(口)14.9(高台)6.9 (高)4.9~5.4	ロコナテ→貼付ナテ	やや密	外:灰白 5Y7/1 内:灰白 2.5Y7/1	底部完存 口縁部3/12	尾張型第6型式 初段痕あり
54	008-06	土師器 皿	立会		SD3	(口)13.0	ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄褐 10YR7/2	口縁部1/12	
55	011-02	土師器 皿	立会		SD3	(口)13.6	ナヒエ・ナテ→ヨコナテ	密	灰白 10YR7/1	口縁部9/12	
56	003-03	土師器 甕	立会		SD3	(口)17.8	外:ナヒエ 内:ハケメ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	
57	012-03	土師器 皿	立会		SD3	(口)7.4(高)2.0	ナヒエ	密	浅黄橙 7.5YR8/4	全体5/12	南伊勢系土師器皿B形態
58	012-02	土師器 皿	立会		SD3	(口)11.0(高)3.1	ナテ・指ナヒエ	やや密	灰白 2.5Y8/1	口縁部5/12	南伊勢系土師器皿B形態
59	008-07	土師器 皿	立会		SD3	(口)12.0	ナテ	やや密	灰白 2.5Y8/2	口縁部2/12	南伊勢系土師器皿B形態
60	002-03	陶器 椀 (山茶椀)	立会		SD3	(高台)8.2	ロコナテ→貼付ナテ	密	黄灰 2.5Y6/1	底部2/12	内面にわずかに自然釉
61	003-02	土師器 銅	立会		SD3	(口)30.0	ナヒエ・ナテ→ヨコナテ	やや密	外:にぶい黄橙 7.5YR5/4 内:灰黄褐 10YR6/2	口縁部1/12	南伊勢銅第2段階 外面煤付着
62	003-05	土師器 銅	立会		SD3	(口)28.4	ヨコナテ	密	外:灰褐 7.5YR4/2 内:灰白 10YR8/2	口縁部1/12	南伊勢銅第3段階
63	003-04	土師器 銅	立会		SD3	(口)29.0	ヨコナテ	密	にぶい黄橙 7.5YR6/4	口縁部1/12	南伊勢銅第4段階
64	008-05	陶器 鉢	立会		包含層	(底)15.6	ロコナテ・ロコナテ	密	灰白 N7/	底部2/12	
65	010-03	土師器 小皿	1次	11B	Pit4柱痕 (SA13)	(口)9.2	ナテ→ヨコナテ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
66	009-08	土師器 小皿	1次	12B	Pit2 (SA13)	(口)9.0	ナテ→ヨコナテ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	
67	010-02	土師器 小皿	1次	11B	Pit2	(口)9.6(高)1.9	ナテ→ヨコナテ	やや粗	灰白 10YR8/2	全体3/12	
68	009-07	土師器 小皿	1次	12A	Pit1	(口)10.0	ナヒエ・ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部3/12	
69	021-03	弥生土器 壺	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(底)3.8	ナヒエ・ナテ	やや密	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:灰 N4/	底部完存	弥生後期
70	020-03	土師器 丸底鉢	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)15.0		やや密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	全体に磨耗、調整不明瞭
71	020-06	須恵器 坏蓋	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)15.0	ロコナテ	密	外:灰白 N7/ 内:灰白 5Y7/2	口縁部1/12	
72	020-07	須恵器 坏身	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)16.0	ロコナテ・ロコナテ	密	灰白 N7/	口縁部1/12	
73	019-05	土師器 小皿	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)8.0	ナヒエ・ナテ→ヨコナテ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	全体1/12	
74	021-04	土師器 小皿	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)8.0	ナヒエ・ナテ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	全体3/12	
75	020-05	土師器 皿	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)12.0	ナヒエ・ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
76	019-06	土師器 皿	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)13.0	ナヒエ・ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
77	020-08	土師器 坏	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)13.2	ナテ・ナヒエ	密	にぶい黄橙 7.5YR7/4	口縁部2/12	
78	020-01	灰釉陶器 椀	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)22.0	ロコナテ	密	外:灰黄内:に 2.5Y7/2 ぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	
79	020-02	灰釉陶器 椀	2次 (支)	N88	SD40 第189層	(口)17.0	ロコナテ	密	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	
80	019-08	弥生土器 甕	2次 (支)	N88	SD40 第188層	(底)6.8	ナヒエ・ナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	底部2/12	弥生中期
81	020-04	土師器 皿	2次 (支)	N88	SD40 第188層	(口)14.0	ナヒエ・ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
82	019-07	灰釉陶器 椀	2次 (支)	N88	SD40 第188層	(口)14.0	ロコナテ	密	灰白 5Y7/1	口縁部2/12	
83	019-04	土師器 甕	2次 (支)	N92	SD40 第186層	(口)20.0	ヨコナテか	やや密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部1/12	全体に磨耗、調整不明瞭

第Ⅲ-4表 寺田遺跡出土遺物観察表(3)

番号	実測番号	種類 器種等	地区	グリップ ト等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
84	022-02	灰釉陶器 椀	2次 支)	N92	SD40 第186層	(口)16.2(高)5.0 (高台)7.4	ロコナテ→貼付ナテ	密	明紫灰 5P7/1	口縁部1/12 底部10/12	内面に磨耗、重ね焼き痕あり
85	053-01	土師器 甌	2次 支)	N88	SD40	(底)24.4	外:ナテ→ハケメ→ヨコナテ 内:工具ナテ→ヨコナテ	密	灰白 10YR8/2	底部1/12	内面煤付着
86	016-02	土師器 甕	2次 支)	N88	SD40	(口)17.8	ナテ→ヨコナテ	密	外:にぶい黄褐 10YR5/3 内:にぶい黄褐 10YR7/4	頸部2/12	外面煤付着
87	019-02	土師器 甕	2次 支)	N92	SD40	(口)22.0	ナテ→ヨコナテ	密	外:浅黄橙 7.5YR8/4 内:褐灰 10YR4/1	口縁部1/12	全体に磨耗、調整不明瞭
88	016-01	土師器 甕	2次 支)	N88	SD40	(口)20.8	ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部4/12	
89	022-05	ロクロ土師器 椀	2次 支)	N88	SD40	(高台)7.0	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 10YR8/2	底部 ほぼ完存	
90	022-06	ロクロ土師器 椀	2次 支)	N88	SD40	(高台)6.8	ロコナテ→貼付ナテ	やや密	灰白 10YR8/2	底部11/12	摩擦のため調整不明瞭
91	019-01	ロクロ土師器 皿	2次 支)	N88	SD40	(底)5.8	ロコナテ	やや密	外:橙 7.5YR7/6 内:明黄褐 10YR7/6	底部完存	
92	019-03	土師器 甕	2次 支)	N40	SZ28		ナテ	やや密	外:黒褐 10YR3/1 内:灰白 2.5Y8/2	口縁部小片	全体に磨耗、調整不明瞭
93	021-07	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N172	SD43	(高台)7.2	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	
94	021-06	陶器 小皿 (山皿)	2次 支)	N76	SD39	(口)8.0	ロコナテ	密	灰白 2.5Y7/1	全体2/12	
95	021-05	土師器 鍋	2次 支)	N76	SD39		ヨコナテ	やや密	灰白 2.5Y8/2	口縁部小片	南伊勢鍋第4段階
96	017-03	土師器 皿	2次 支)	N120	Pit2	(口)13.0	ナテ・ナテ→ヨコナテ	やや密	外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 2.5Y8/2	口縁部2/12	
97	017-06	土師器 甕	2次 支)	N120	Pit10			密	外:にぶい黄褐 10YR7/4 内:浅黄橙 10YR8/3	口縁部小片	摩擦のため調整不明瞭
98	016-06	土師器 甕	2次 支)	N216	Pit1	(口)24.6	外:ナテ→ヨコナテ 内:ハケメ→ヨコナテ	密	外:暗灰黄 2.5Y5/2 内:にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	
99	017-01	土師器 甕	2次 支)	N120	Pit2		ナテ→ヨコナテ	密	にぶい橙 5YR7/4	口縁部小片	
100	017-02	土師器 甕	2次 支)	N120	Pit2		ナテ→ヨコナテ	やや密	外:浅黄橙 10YR8/3 内:灰白 10YR8/2	口縁部小片	
101	017-05	土師器 蓋	2次 支)	N120	Pit8		ナテ→ヨコナテ	密	外:橙 5YR7/6 内:にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部小片	
102	017-04	ロクロ土師器 椀	2次 支)	N120	Pit2	(口)16.0	ロコナテ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	
103	017-07	ロクロ土師器 皿	2次 支)	N120	Pit11	(口)16.0	ロコナテ	密	外:灰白 2.5Y7/1 内:灰白 2.5Y8/2	口縁部1/12	
104	017-08	ロクロ土師器 台付皿	2次 支)	N120	Pit11	(高台)6.8	ロコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	高台1/12	
105	015-06	土師器 壺	2次 支)	N100	包含層			粗	浅黄 2.5Y7/3	頸部小片	古式土師器か
106	014-07	須恵器 壺	2次 支)	N120	包含層	(高台)9.2	ロコナテ	密	灰 N5/	底部1/12	
107	014-04	ロクロ土師器 椀	2次 支)	N156	包含層	(高台)6.2	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:浅黄 2.5Y8/4 内:明黄褐 10YR7/6	底部5/12	
108	014-05	陶器 小皿 (山皿)	2次 支)	N84	包含層	(口)10.0(高)2.5 (底)4.2	ロコナテ	密	灰黄 2.5Y7/2	全体3/12	
109	014-02	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N64	包含層	(高台)7.6	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 5Y7/1	底部2/12	
110	013-06	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N196	包含層	(高台)7.6	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 2.5Y7/1	底部8/12	
111	013-03	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N84	包含層	(高台)7.2	ロコナテ→貼付ナテ	やや密	灰白 2.5Y7/1	底部2/12	
112	013-04	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N176	包含層	(高台)8.6	ロコナテ→貼付ナテ	やや密	灰白 5Y1/8	底部9/12	
113	016-05	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N160	包含層	(高台)7.6	ロコナテ→貼付ナテ	密	高台:灰 N6/1 内:灰白 5Y7/1	底部2/12	
114	013-01	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N164	包含層	(高台)7.2	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 2.5Y7/1	底部3/12	
115	013-07	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N184	包含層	(高台)7.4	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:黄灰 2.5Y6/1 内:褐灰 10YR5/1	底部10/12	渥美型第6型式 初段痕あり
116	013-05	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N188	包含層	(高台)8.4	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰白 2.5Y7/1 内:灰黄 2.5Y7/2	底部4/12	初段痕あり
117	014-01	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N60	包含層	(高台)8.0	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰白 5Y7/2 内:灰白 10Y7/1	底部3/12	
118	014-03	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N84 ~88	包含層	(高台)7.8	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 2.5Y7/1	底部完存	渥美型第5型式
119	013-02	陶器 椀 (山茶椀)	2次 支)	N88	包含層	(口)17.0	ロコナテ	密	灰白 5Y7/1	口縁部1/12	
120	014-06	土師器 蓋	2次 支)	N168	包含層	(口)13.8		密	外:灰黄 2.5Y6/2 内:にぶい黄橙 2.5Y6/3	口縁部1/12	
121	015-01	土師器 羽釜	2次 支)	N188	包含層		ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	頸部小片	
122	015-05	土師器 鍋	2次 支)	N160	包含層	(口)24.0	ヨコナテ	密	外:橙 5YR6/6 内:にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12	
123	014-08	土師器 鍋	2次 支)	N84	包含層	(口)26.0	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	南伊勢鍋第4段階 外面煤付着
124	015-02	土師器 羽釜	2次 支)	N224	排土	(口)27.0	ナテ・ナテ→ハケメ→ヨコナテ	密	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:淡黄 2.5Y8/3	口縁部1/12	
125	041-03	土師器 小皿	2次 支)	W36 ~40	SD53 第94層	(口)9.8(高)2.3	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	灰黄 2.5Y6/2	全体9/12	

第Ⅲ-5表 寺田遺跡出土遺物観察表(4)

番号	実測番号	種類 器種等	地区	グリッド等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
126	041-04	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第94層	(口)10.4(高)2.5	ナシ・ナシ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体5/12	口縁部・底部外面に煤付着
127	041-05	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第94層	(口)12.2(高)2.9	ナシ・ナシ→ヨコナテ	密	灰黄褐 10YR6/2	完存	底部外側に墨書あり。文字は判別できず。
128	037-03	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)8.4	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	
129	037-01	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)9.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部3/12	
130	036-03	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)9.6(高)1.5	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体5/12	
131	036-06	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)9.7	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体3/12	
132	038-01	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)10.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部4/12	
133	041-01	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)10.5	ナシ・ナシ→ヨコナテ	密	灰黄 2.5Y6/2	口縁部3/12	
134	038-02	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)11.0(高)2.2	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体4/12	
135	040-05	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)12.2	ナシ・ナシ→ヨコナテ	密	外:にぶい黄橙 5YR5/4 内:灰黄 2.5Y6/2	口縁部2/12	
136	036-01	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)13.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	灰黄 2.5Y6/2	全体2/12	
137	037-06	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)13.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	外:にぶい黄橙 10YR7/2 内:褐灰 10YR5/1	口縁部3/12	
138	040-04	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)13.4	ナシ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	
139	040-06	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)14.2	ナシ・ナシ→ヨコナテ	密	灰黄 2.5Y6/2	口縁部1/12	
140	036-02	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)12.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体2/12	
141	036-05	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)13.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	灰黄 2.5Y7/2	全体2/12	
142	036-08	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)13.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部3/12	
143	037-04	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)13.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	外:灰黄 2.5Y6/2 内:にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	
144	036-04	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)15.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体2/12	
145	044-03	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)15.2(高)4.1	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	外:灰黄褐 10YR5/2 内:にぶい橙 7.5YR7/4	全体5/12	
146	041-02	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)15.4	ナシ→ヨコナテ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部2/12	
147	037-05	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)16.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	外:にぶい橙 7.5YR7/4 内:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部8/12	
148	040-03	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)14.0	ナシ→ヨコナテ	密	灰黄 2.5Y6/2	口縁部2/12	
149	038-04	土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)14.0(高)6.3 (高台)7.7	外:ナシ・ナシ→ヨコナテ・貼付ナシ 内:ナシ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	底部完存 口縁部9/12	
150	041-08	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)15.2	ナシ→ヨコナテ	密	灰白 10YR8/2	口縁部2/12	
151	041-07	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)16.0	外:ナシ→ヨコナテ 内:ナシ(6~7本/1cm)→ヨコナテ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部2/12	
152	041-06	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)25.2	外:ナシ(3本/1.4cm)→ヨコナテ 内:ナシ→ヨコナテ	密	外:灰白 2.5YR7/1 内:黄灰 2.5Y4/2	口縁部1/12	
153	037-02	黒色土器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)15.0	ナシ・ナシ→ヨコナテ	やや密	暗灰 N3/	口縁部2/12	黒色土器B類(両黒) 内面に鉄分付着
154	036-07	黒色土器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層		外:ナシ・ナシ→ヨコナテ 内:ナシ→ヘラミガキ→ヨコナテ	やや密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:暗灰 N3/	口縁部小片	黒色土器A類(内黒)
155	044-01	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)30.0	ロコナテ	密	外:灰 N5/ 内:灰 N4/	口縁部1/12	
156	043-01	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)30.9	ロコナテ	密	灰 5Y6/1	口縁部2/12	
157	039-02	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層		ロコナテ→タテ	密	灰白 N5/	頸部小片	
158	040-01	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層		ロコナテ→タテ	密	灰 N6/1	頸部片	
159	045-01	須恵器 大甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(頸)30.0	外:ロコナテ→格子状タテ 内:ロコナテ	密	外:灰白 N7/ 内:灰白、灰 N7/、N5/	頸部4/12	
160	046-01	須恵器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(頸)11.8	ロコナテ	密	外:灰 5Y6/1 内:黄灰 2.5Y6/1	頸部6/12	歪みあり
161	046-03	須恵器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)14.0	外:ロコナテ→貼付ナシ→ロコナテ 内:ロコナテ	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	全体に自然釉あり
162	047-03	須恵器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)14.0	外:ロコナテ→貼付ナシ→ 一部ロコナテ→タテ 内:ナシ・ナシ→ロコナテ	密	外:灰 N6/1 内:灰 7.5Y6/1	底部9/12	底部外側にヘラ記号あり
163	047-02	須恵器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)17.0	外:ロコナテ→貼付ナシ 内:ロコナテ	密	灰白 5Y7/1	底部6/12	全体に自然釉あり 焼きふくれ多い
164	047-01	須恵器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(底)13.7	外:ロコナテ→一部ロコナテ 内:ロコナテ	密	外:灰白、灰 N7/、N4/ 内:灰 N7/	底部5/12	煤付着
165	045-02	須恵器 鉢	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)32.8	外:ロコナテ→タテ 内:ロコナテ→一部ナシ	密	灰白 5Y7/1	口縁部2/12	
166	039-04	灰釉陶器 小椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)5.6	ロコナテ→貼付ナシ	密	灰白 5Y7/1	底部1/12	外、内に煤少量付着

第Ⅲ-6表 寺田遺跡出土遺物観察表(5)

番号	実測番号	種類 器種等	地区	グリップ等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
167	039-07	灰釉陶器 小椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)6.5	ロコナテ'→貼付ナテ'	密	灰白 N7/	底部1/12	
168	043-02	灰釉陶器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)7.0	ロコナテ'→貼付ナテ'	密	外:明紫灰 5P7/1 内:灰 N6/1	底部5/12	内面に磨耗あり 内外面に墨跡
169	039-06	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(頸)8.8	ロコナテ'	密	灰白 N8/	頸部片	内面に煤附着
170	039-05	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(頸)13.0	ロコナテ'	密	:灰白 7.5Y7/1 釉:杓-ア灰 10Y5/2	頸部片	
171	042-01	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(口)25.6	ロコナテ'	密	外:杓-ア灰 10Y5/2 内:灰白 7.5Y7/2	頸部5/12	172と同一個体の可能性あり
172	042-02	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(底)15.0	ロコナテ'	密	灰杓-ア 7.5Y6/2	底部3/12	171と同一個体の可能性あり
173	038-05	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層		ロコナテ'	密	外:灰 5Y6/1 内:灰白 5Y7/1	体部片	陰刻花文
174	039-08	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)13.0	ロコナテ'→貼付ナテ'	密	灰白 N8/	底部2/12	
175	039-03	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)7.0	ロコナテ'→貼付ナテ'	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	自然釉有り
176	043-03	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)6.0	ロコナテ'→貼付ナテ'	密	灰 N6/1	底部3/12	内面に磨耗あり
177	043-04	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層	(高台)7.2	ロコナテ'→貼付ナテ'	密	外:灰白 N7/1 内:灰白 7.5Y7/1	底部4/12	
178	039-01	陶器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第93層		ロコナテ'	密	:灰白 N7/ 釉:杓-ア灰 10Y5/2	頸部小片	
179	029-03	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)7.9	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	褐灰 10YR5/1	全体6/12	
180	032-09	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)8.8	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	灰黄 2.5Y6/2	全体3/12	
181	029-04	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)9.0	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体3/12	
182	030-03	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)9.0(高)2.0	ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体3/12	
183	029-02	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)9.6	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	灰黄橙 10YR5/2	全体4/12	
184	032-02	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)10.0	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	灰白 2.5Y8/1	全体3/12	
185	028-04	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)10.2	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	黄灰 2.5Y7/2	全体3/12	
186	032-01	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)10.6(高)1.9	ナテ'→ヨコナテ'	密	浅黄 2.5Y7/3	全体3/12	口縁部に煤附着
187	032-03	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)9.8(高)2.1	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:にぶい黄 2.5Y6/3	全体4/12	
188	032-04	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)9.9(高)2.0	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	灰黄 2.5Y7/2	全体3/12	
189	032-06	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)10.4(高)2.3	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体10/12	
190	030-05	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)10.4	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部3/12	
191	030-02	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)10.0(高)1.8	ナテ'→ヨコナテ'	密	灰白 10YR8/2	全体4/12	
192	030-04	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)11.2	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体3/12	
193	029-01	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)10.8	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	外:灰黄褐 10YR6/2 内:にぶい黄橙 10YR6/3	全体5/12	
194	049-04	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)11.2	ナテ'→ヨコナテ'	密	浅黄 2.5Y7/3	口縁部1/12	
195	032-08	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)15.0 (高)2.95	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	外:にぶい黄 2.5Y6/3 :灰白 2.5Y8/2 内:にぶい黄 2.5Y6/4	全体2/12	
196	032-07	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)15.0(高)2.6	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	外:灰白 2.5Y8/1 内:灰白 2.5Y8/2	全体6/12	
197	032-05	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)14.0	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR6/3	全体3/12	
198	049-02	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)16.0(高)3.6	ロコナテ'	密	にぶい橙 7.5YR7/4	全体8/12	
199	030-06	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)15.8	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体2/12	
200	030-07	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)14.2	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	外:灰黄橙 10YR6/2 内:灰黄橙 10YR4/10	口縁部2/12	
201	031-01	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)13.6	杓エ・ナテ'→ヨコナテ'	密	灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12	
202	049-01	土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)16.6	ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
203	049-05	土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)16.0	ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
204	048-02	土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)7.0	ナテ'→貼付ナテ'	密	にぶい黄橙 10YR7/3	底部5/12	
205	029-06	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)17.1	工具ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
206	029-08	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)16.0	ナテ'→ヨコナテ'	密	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12	内面煤附着
207	029-07	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)17.2	ナテ'→ヨコナテ'	密	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/12	内外面煤附着

第三 - 7 表 寺田遺跡出土遺物観察表(6)

番号	実測 番号	種類 器種等	地区	グリ ット等	出土位置	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
208	029-05	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)17.6	ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR5/4	口縁部2/12	
209	028-03	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)20.8	ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	外面煤付着
210	029-09	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)21.4	ナテ→ヨコナテ	密	灰黄橙 10YR6/2	口縁部1/12	
211	028-02	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)24.0	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	灰白 10YR8/2	口縁部2/12	内外面煤付着
212	028-01	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)24.2	外:ナテ・ナテ→ヨコナテ 内:ナテ→ヨコナテ	密	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部2/12	
213	049-03	土師器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(底)6.0	ナテ→ハヤ	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:灰白 5Y8/1	底部 ほぼ完存	
214	030-01	土師器 台付鉢か	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)13.0	ヨコナテ	密	灰黄橙 10YR5/2	高台部2/12	
215	034-03	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層		ロコナテ	密	外:灰 5Y6/1 内:灰 N5/	口縁部1/12	自然釉有り
216	033-01	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層		ロコナテ	密	灰白 N7/	口縁部小片	
217	035-02	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(底)20.3	外:ナテ→クサテ 内:ナテ	密	灰 N5/	底部1/12	
218	035-01	須恵器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(底)13.0	外:ナテ→クサテ 内:工具ナテ	密	灰白 5Y7/1	底部1/12	
219	033-05	灰釉陶器 小椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)5.8	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 5Y7/1	底部3/12	
220	048-07	灰釉陶器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)6.7	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰 5Y6/1 内:灰白 5Y7/1	底部4/12	
221	034-02	灰釉陶器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層		ロコナテ	密	外:灰白 N7/ 内:灰オリープ 7.5Y5/2	口縁部小片	
222	033-02	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(頸)9.0	ロコナテ	密	外:明利-ア 灰 2.5GY7/1 内:灰白 N7/	頸部8/12	内外面に自然釉あり
223	033-03	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)8.0	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰白 7.5Y7/1 内:灰白 N7/	底部2/12	内面に墨付着 内外面に自然釉あり
224	034-01	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(底)11.6	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰 N4/ 内:灰 N6/1	底部2/12	
225	033-04	灰釉陶器 壺	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)13.1	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰白 5Y7/1 内:灰白 7.5Y7/1	底部1/12	内外面に自然釉あり
226	048-04	ロクロ土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(底)4.6	ロコナテ	密	浅黄橙 10YR8/3	底部完存	
227	050-05	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)15.0(高)6.1	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰白 2.5Y8/2	底部完存 口縁部3/12	
228	048-09	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)19.0	ロコナテ	密	灰白 2.5Y8/2	口縁部1/12	
229	049-06	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(口)16.0	ロコナテ	密	外:灰黄褐 10YR6/2 内:褐灰 10YR5/1	口縁部1/12	内面に剥離あり
230	038-03	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)6.8	ロコナテ→貼付ナテ	密	灰黄 2.5Y7/2	底部 ほぼ完存	
231	048-05	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)7.6	ロコナテ→貼付ナテ	密	褐灰 10YR4/1 灰白 2.5Y8/2	底部9/12	
232	048-08	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)7.6	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:にぶい黄 2.5Y6/3 内:暗灰 N3/	底部6/12	内面に煤付着
233	048-06	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)6.7	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰白 2.5Y8/2 内:黄褐 2.5Y5/3	底部9/12	
234	048-01	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)7.2	ロコナテ→貼付ナテ	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:淡黄 2.5Y8/3	底部5/12	
235	048-03	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(高台)6.8	ロコナテ→貼付ナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	底部10/12	
236	035-03	陶器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第92層	(底)21.0	ナテ→ヨコナテ	密	灰 N6/1	底部2/12	渥美産
237	026-01	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)9.2(高)1.5	ナテ・ナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体4/12	
238	026-03	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)9.2(高)2.0	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	灰白 10YR8/2	ほぼ完存	
239	025-09	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)9.0	ナテ・ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄 2.5Y6/4	口縁部3/12	
240	026-02	土師器 小皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)9.1	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	灰黄 2.5Y7/2	全体2/12	
241	025-08	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)12.2	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁部3/12	
242	026-05	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)13.0(高)2.3	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体5/12	
243	026-04	土師器 皿	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)14.8(高)3.1	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体5/12	
244	026-06	土師器 坏	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)13.2	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部1/12	
245	027-04	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)17.2	ヨコナテ	密	外:にぶい黄橙 10YR7/2 内:灰白 5Y8/1	口縁部1/12	
246	026-07	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)17.2	外:ナテ・ナテ→ヨコナテ 内:ハケメ(6本/1.5cm)→ヨコナテ	密	灰褐 7.5YR6/2	口縁部2/12	摩滅のため調整不明瞭
247	027-03	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)19.2	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	外面煤付着
248	026-08	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)17.7	外:ナテ→ヨコナテ 内:ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12	
249	027-02	土師器 甕	2次 (幹)	W36 ~40	SD53 第91層	(口)21.0	ナテ・ナテ→ヨコナテ	密	浅黄 2.5Y7/3	口縁部2/12	外面煤付着

第Ⅲ－8表 寺田遺跡出土遺物観察表(7)

番号	実測番号	種類 器種等	地区	グ リ ド 等	出土位置	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
250	027-01	土師器 銅	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(口)30.0	ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	外面煤付着 南伊勢鍋第1段階
251	025-02	灰釉陶器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)8.0	ロコナテ → 貼付ナテ	やや密	灰白 2.5Y7/1	底部6/12	内面に磨耗あり
252	023-04	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(口)17.0	ロコナテ → 貼付ナテ	密	外:灰白 7.5Y7/1 :褐 7.5YR4/3 内:灰白 N7/	口縁部3/12	輪花柄・自然釉あり
253	022-04	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)7.6	ロコナテ → 貼付ナテ	密	灰白 10YR8/1	底部7/12	
254	025-06	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)8.0	ロコナテ → 貼付ナテ	密	灰白 N8/	底部2/12	
255	025-05	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)6.6	ロコナテ → 貼付ナテ	密	灰白 N7/	底部4/12	内面に磨耗あり
256	025-01	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)8.4	ロコナテ → 貼付ナテ	やや密	灰白 N8/	底部2/12	内面磨耗、重ね焼き痕、自然釉あり
257	023-02	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)8.3	ロコナテ → 貼付ナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	底部2/12	初段痕あり
258	023-01	ロクロ土師器 皿	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(底)6.1	ロコナテ	密	浅黄橙 10YR8/4	底部完存	
259	024-03	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(口)16.5	ロコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部4/12	摩滅のため調整不明瞭
260	025-07	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(口)14.0	ロコナテ	密	灰白 10YR8/2	口縁部2/12	
261	023-05	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(口)18.9	ロコナテ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	
262	022-01	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(底)7.4	ロコナテ → 貼付ナテ	やや密	灰白 10YR8/2	底部 ほぼ完存	
263	022-09	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)7.8	ロコナテ → 貼付ナテ	密	灰白 10YR8/2	底部3/12	
264	022-07	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)6.6	ロコナテ → 貼付ナテ	やや粗	灰白 2.5Y8/2	底部9/12	
265	022-03	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)6.7	ロコナテ → 貼付ナテ	密	灰白 10YR8/1	底部 ほぼ完存	
266	022-08	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(高台)6.8	ロコナテ → 貼付ナテ	やや粗	灰白 10YR8/2	底部10/12	
267	023-03	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(底)8.4	ロコナテ → 貼付ナテ	密	にぶい橙 7.5YR7/3	高台部3/12	
268	024-01	弥生土器 壺	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(口)18.2	ハ・ヨコナテ	密	橙 5YR7/6	口縁部1/12	弥生後期
269	050-02	土師器 壺	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第92層	(口)14.0	ナテ → ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部小片	古式土師器か
270	044-04	弥生土器 高坏	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層		櫛描 → 竹管文	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部9/12	弥生後期 表面に赤色顔料残る
271	049-07	土師器 高坏	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第92層			密	橙 5YR7/8	脚上部	摩滅のため調整不明瞭
272	023-06	須恵器 甗	2次 (幹)	W36 ～40	SD53 第91層	(体)11.0	ロコナテ	密	暗青灰 5PB7/1	全体1/12	
273	060-02	弥生土器 壺	2次 (幹)	W52 ～56	SD56			密	外:にぶい黄橙 7.5YR7/4 明赤褐 2.5YR5/8 内:橙 7.5YR6/8	頸部小片	外面赤色顔料あり
274	059-05	土師器 甗	2次 (幹)	W52 ～56	SD56			密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部小片	S字状口縁
275	024-02	弥生土器 壺	2次 (幹)	W32	SD68		外:櫛ガキ(6本/2.3cm) 内:ナテ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	体部小片	弥生後期
276	058-02	弥生土器 高坏	2次 (幹)	W32	SZ66	(口)21.8	ヨコナテ	密	外:にぶい黄橙 2.5Y6/3 内:浅黄橙 10YR8/3	口縁部2/12	弥生後期
277	057-02	土師器 小皿	2次 (幹)	W32	SZ66	(口)10.2(高)1.4	ナテ → ヨコナテ	密	灰白 2.5Y8/2	口縁部5/12	
278	057-04	土師器 台付甗	2次 (幹)	W16	SZ62	(高台)6.2	ナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	底部完存	
279	057-08	土師器 台付甗	2次 (幹)	W16	SZ62	(高台)8.0		密	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい黄橙 10YR6/4	台部3/12	摩滅のため調整不明瞭
280	059-06	土師器 甗	2次 (幹)	W16	SZ62			密	暗褐 10YR3/3	口縁部小片	外面煤付着
281	059-02	土師器 甗	2次 (幹)	W16	SZ62			密	外:灰白 2.5Y8/2 内:にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部小片	
282	058-04	土師器 小型甗	2次 (幹)	W24	SZ69	(口)9.9	ナテ → ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部2/12	
283	057-07	土師器 皿	2次 (幹)	W24	SD51	(口)12.2 (高)2.2	外:ナテ → ヨコナテ 内:ナテ → ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/12	
284	057-06	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W24	SD51	(口)17.2	ロコナテ	密	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	
285	058-01	土師器 甗	2次 (幹)	W32	SD52	(口)20.6	外:ナテ → ハメ → ヨコナテ 内:工具ナテ → ヨコナテ	密	外:にぶい橙 7.5YR6/3 内:灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12	
286	055-02	土師器 皿	2次 (幹)	W28	SD52	(口)14.8	ナテ → ヨコナテ	やや粗	灰白 2.5Y8/1	口縁部1/12	
287	055-01	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W28	SD52	(高台)7.2	ロコナテ → 貼付ナテ	やや密	浅黄橙 7.5YR8/4	底部10/12	
288	054-04	土師器 皿	2次 (幹)	W36	SD54	(口)15.0	ナテ → ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	全体3/12	
289	057-09	土師器 甗	2次 (幹)	W36	SD54	(口)20.0	ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/12	
290	054-06	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W4 ～8	SD59	(高台)9.6	ロコナテ → 貼付ナテ	やや密	灰白 7.5Y7/1	底部3/12	

第Ⅲ-9表 寺田遺跡出土遺物観察表(8)

番号	実測番号	種類 器種等	地区	グリ ド等	出土位置	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
291	016-04	土師器 小皿	2次 (幹)	W12	SD60	(口)9.2(高)1.65	押エ・ナテ→ヨコナテ	密	外:にぶい黄橙 10YR7/4 内:浅黄橙 10YR8/3	全体11/12	
292	057-05	ロクロ土師器 椀	2次 (幹)	W36	SD63	(高台)7.6	ロクロナテ→貼付ナテ	密	橙 7.5YR7/6	底部3/12	
293	016-03	土師器 小皿	2次 (幹)	W32	SZ64	(口)9.0(高)1.85	押エ・ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	ほぼ完存	
294	058-03	須恵器 甕	2次 (幹)	W32	SZ65	(口)28.0	ロクロナテ	密	外:褐灰 10YR5/1 内:灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	
295	053-02	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W72	SD58	(口)16.5 (高台)8.5	ロクロナテ→貼付ナテ	密	灰白 10YR7/1	底部完存 口縁部4/12	渥美型第5型式
296	055-05	土師器 小皿	2次 (幹)	W100	SD71	(口)9.6 (高)2.3	押エ・ナテ→ヨコナテ	やや密	浅黄 2.5Y7/3	全体3/12	
297	055-04	土師器 小皿	2次 (幹)	W100	SD71	(口)9.6 (高)2.5	押エ・ナテ→ヨコナテ	やや密	灰白 2.5Y8/2	全体6/12	
298	055-06	土師器 椀か台付皿	2次 (幹)	W100	SD71	(高台)7.3	ヨコナテ	密	浅黄橙 10YR8/3	高台12/12	
299	052-06	土師器 小皿	2次 (幹)	W64	SD57	(口)8.0	外:押エ→ヨコナテ 内:ナテ→ヨコナテ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/4	全体11/12	
300	052-05	土師器 小皿	2次 (幹)	W64	SD57	(口)8.0	外:押エ→ヨコナテ 内:ナテ→ヨコナテ	やや粗	浅黄橙 10YR8/4	口縁部2/12	
301	054-03	土師器 皿	2次 (幹)	W64	SD57	(口)16.0 (高)3.25	押エ・ナテ→ヨコナテ	密	外:灰黄 2.5Y7/2 内:灰白 2.5Y8/2	全体5/12	
302	052-01	土師器 皿	2次 (幹)	W64	SD57	(口)19.9	外:押エ 内:ナテ	密	橙 5YR6/8	全体3/12	内外面煤付着
303	051-02	土師器 甕	2次 (幹)	W64	SD57	(口)22.0	ナテ→ヨコナテ	やや粗	明褐灰 7.5YR7/2	口縁部4/12	
304	051-03	土師器 甕	2次 (幹)	W64	SD57	(口)26.2		密	灰褐 7.5YR6/2	口縁部1/12	
305	051-01	土師器 甕	2次 (幹)	W64	SD57	(口)29.2	ナテ→ヨコナテ	やや粗	にぶい黄橙 7.5YR7/3	口縁部6/12	
306	056-03	土師器 鉢	2次 (幹)	W64	SD57	(口)35.0	押エ・ナテ→ヨコナテ	やや密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部1/12	
307	054-02	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W64	SD57	(高台)7.5	ロクロナテ→貼付ナテ	密	灰白 2.5Y7/1	底部6/12	渥美型第4型式 釉漬け掛け
308	054-01	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W64	SD57	(口)16.7(高)5.6 (高台)7.0	ロクロナテ→貼付ナテ	密	外:灰白 5Y7/1 内:にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部5/12 底部完存	渥美型第5型式 釉漬け掛け
309	052-04	白磁 椀	2次 (幹)	W64	SD57	(高台)6.6	ナテ・リヨミ	密	釉:乳白 素:灰白 10YR8/2	底部10/12	
310	060-03	弥生土器 壺	2次 (幹)	W56	Pit 2			密	外:にぶい橙 5YR7/4 内:黄灰 2.5YR4/1	体部小片	
311	053-04	陶器 片口小椀	2次 (幹)	W68	Pit 1	(口)6.8(高)3.0 (高台)4.0	ロクロナテ→貼付ナテ	密	明紫灰 5P7/1	全体10/12	渥美産 自然釉あり
312	054-05	土師器 小皿	2次 (幹)	W72	Pit 1	(口)9.0	押エ・ナテ→ヨコナテ	やや密	外:明褐 7.5YR5/6 内:褐灰 10YR6/1	全体4/12	
313	053-03	陶器 椀 (山茶椀)	2次 (幹)	W68	Pit 1	(口)16.6 (高台)8.8	ロクロナテ→貼付ナテ	密	明紫灰 5P7/1	口縁部4/12 底部3/12	渥美型第5型式
314	056-01	土師器 小皿	2次 (幹)	W100	包含層	(口)10.2	押エ・ナテ→ヨコナテ	やや密	浅黄橙 10YR8/3	全体6/12	
315	055-08	土師器 小皿	2次 (幹)	W100	包含層	(口)10.2	押エ・ナテ→ヨコナテ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	全体4/12	
316	055-07	土師器 小皿	2次 (幹)	W100	包含層	(口)10.8	ナテ→ヨコナテ	密	外:にぶい橙 7.5YR6/4 内:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部3/12	
317	056-02	土師器 小皿	2次 (幹)	W100	包含層	(口)10.8	押エ・ナテ→ヨコナテ	やや密	灰黄 2.5Y7/2	全体6/12	
318	057-01	土師器 皿	2次 (幹)		排土	(口)15.0(高)3.0	押エ・ナテ→ヨコナテ	密	にぶい黄橙 10YR6/4	全体2/12	
319	058-05	土製品 土錘	2次 (幹)		排土	5.65×1.2×1.1 孔径0.3		密	にぶい黄橙 10YR7/3	ほぼ完存	重さ6.05g

## Ⅳ 玉城町妙法寺 田丸道遺跡(第2次)・塚田古墳群

### 1 調査の契機と経過

#### a 総説

田丸道遺跡(第2次)は、平成22年度経営体育成基盤整備事業(有田地区)に伴い調査を実施した。いわゆる「宮川用水」にあたり、田丸道遺跡の範囲では、主に幹線用水路が計画されていた。調査期間は、東西調査区(支線)は平成22年11月15日～16日(幅1.5m×全長16m)、南北調査区(幹線)は11月29日～平成23年2月10日(幅2m～3.5m×全長210m)で、最終調査面積は約661㎡であった。

なお、田丸道遺跡(第2次)発掘調査の結果、調査区内において塚田古墳群(塚田1号墳・塚田2号墳)の周溝を確認した。

#### b 協議の経過



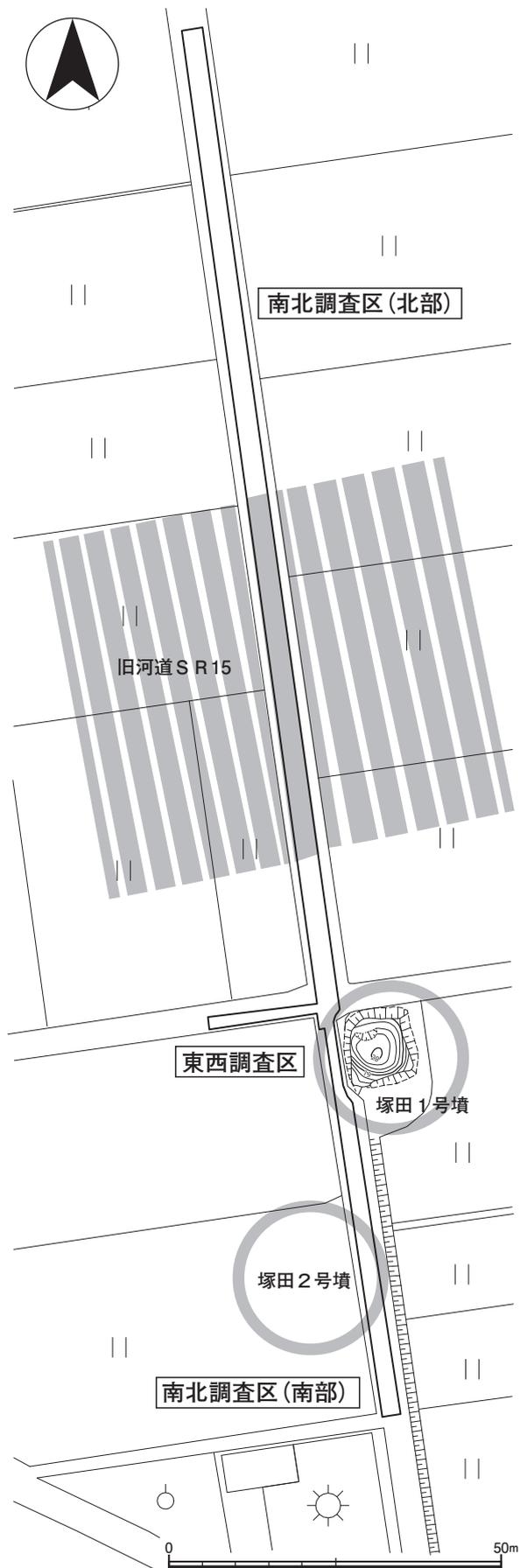
第Ⅳ－1図 調査区周辺地形図(1:5,000)

事業地は田丸道遺跡と塚田古墳に隣接していたため、範囲確認調査を実施した。平成22年4月5と11月17日に調査を行った結果、確認調査坑から古墳の周溝や、中世の遺構・遺物を確認した。これを受けて、どうしても保存困難な部分661㎡について工事立会調査を実施し、記録保存を行った。

#### c 調査の経過と各地区の概要

**調査区の設定** 東西方向の調査区(小地区W1～W16)、南北方向の調査区(小地区N4～N212)を設定した。小地区は4mごとに設定し、Wは西→東、Nは南→北に数字を付与した。

調査区は、中央を横断する旧河道SR15によって南部・旧河道・北部と概ね3つに区分される。そのうち旧河道と北部については、機械掘削・人力掘削を並行して進めることとなった。



第Ⅳ-2図 調査区の概要(1:1,000)

**【東西調査区】** 平安時代の土坑群を検出した。平成22年11月15～16日に重機掘削・人力掘削・実測を行った。

**【南北調査区(南部)】** 塚田1号墳、塚田2号墳の周溝と、中世後期の集落跡を確認した。平成22年11月29日～12月21日に重機掘削・人力掘削を行い、適宜写真撮影・実測を行った。塚田古墳群の現地説明会(第1回)は12月23日に実施し、地元小学校を中心に54名の参加があった。

**【南北調査区・旧河道(S R 15)】** 弥生時代中期から平安時代後期まで機能した旧河道である。古墳時代後期の木組みの堰を検出し、多量の木製品が出土した。期間は平成23年1月11日～2月9日で、木製品の記録・取り上げ作業等は調査区北部と並行して進められた。現地説明会(第2回)は1月23日に実施し、150名の参加者を得た。

**【南北調査区・北部】** 古墳時代後期の竪穴住居と土坑、平安時代後期の掘立柱建物群を検出した。大型の掘立柱建物は、柱穴から緑釉陶器片を伴うことから、官衙などの可能性が高い。1月20日にS R 15の北岸を検出したのち、21日～2月9日に重機掘削・人力掘削を行った。調査期間の都合上、現地説明会は行えなかった。

幅の狭い調査区であったが遺物・遺構ともに濃密で、最終的には調査研究1課職員総動員で掘削にあたる調査となった。

#### d 田丸道遺跡(第1次)の概要

第1次調査は、町道中楽朝久田線および松阪伊勢自動車道の建設に伴って実施された。平成12年11月24日に当センターが範囲確認調査を行い、対象面積4,500㎡に対し32㎡(10箇所)の確認調査坑を設定した。その結果、中世の土坑・柱穴などを確認し、田丸道遺跡を新発見の遺跡として登録した。第1次調査は、平成15年7月1日～9月30日の期間、埋蔵文化財センターの支援のもと玉城町教育委員会が主体となって行われた。調査区からは溝10条、掘立柱建物2棟、井戸2基、中世墓2基が検出されている。<sup>(1)</sup>

〔註〕

(1)三重県埋蔵文化財センター『平成15年度 三重県埋蔵文化財年報』(2004年)

## 2 層位と遺構

### a 基本層位

**地形の状況** 当地は昭和41年から同47年にかけて、県営圃場整備事業が実施された。調査地そのものは道路(農道)敷きだが、周囲は水田および一部が宅地として利用されている。調査地の標高は、現況地表面で約18m、水田部では約17.5mである。

当地の南部には外城田川が東流しており、北部および西部の丘陵部までは約1.5～2kmの隔りがある。したがって、当地は河岸段丘ないしは低湿地に相当する地形となる。ただし、先述のように圃場整備が終了しているため、現況からその状況を観察することは難しい。

調査区の層位は、上部が圃場整備事業に伴う農道設置に関する土層、下部がそれ以前のものとなる。調査の結果、遺構の基盤となるのは黄褐色系の粘土から砂へと変化する層で、基本的には低位段丘面を形成するものである。調査区南部ほど粘性で、北部ほど砂性という傾向が見られる。

田丸道遺跡・塚田古墳群の層位は、調査区南部の塚田古墳群付近、中央部の流路S R 15付近、北部の集落跡付近という3地区に大きく区分できる。そこで、この区分に沿って層位状況を見ていく。

**調査区南部(塚田古墳群付近)** (第Ⅳ-5図) 調査区南部では路床改良土の直下(標高約17.2m)で明黄褐色系粘土層(第31層)の遺構基盤層にあたる。この層以下では砂および円礫を含む層が確認でき(第32～34層)、河成層と考えられる。遺構埋土は、後述の古墳周溝では黒色土で、いわゆる「黒ボク」由来の堆積土が基本となる。遺構基盤構成土としての黒ボクは認められないので、この付近は少なく見積もっても30cm以上の削平があると考えられる。

**調査区中部(河道S R 15付近)** (第Ⅳ-6図) 黒ボク由来土が遺構埋土の基本となる調査区南部に対し、調査区中央部では黒ボク由来土は北岸部に見られるに止まる。これは、河道S R 15付近に水田耕作土が見られることとも関係すると見られる。河道S R 15の上層部には、中近世の水田土壌と考えられる層(第7・8層)が見られる。この層は、流路S R 13以北からS R 15の北岸まで見られ、S R 15の埋没後も低

地の状態としてこの部分が残されていたことを示す。

調査区中部の遺構基盤は、上部層は黄褐色系粘土(第76層)で調査区南部と同一だが、その下部層には緑灰色系粘土層(第77・78層)が見られ、特徴的である。緑灰色系粘土は、現地調査の段階ではミント色の白っぽい粘土として認識でき、若干の有機質をも含む層であった。そのため、土層図では「地山」としているが、基本的にはS R 15に先行する流路の埋土にあたる土層である。

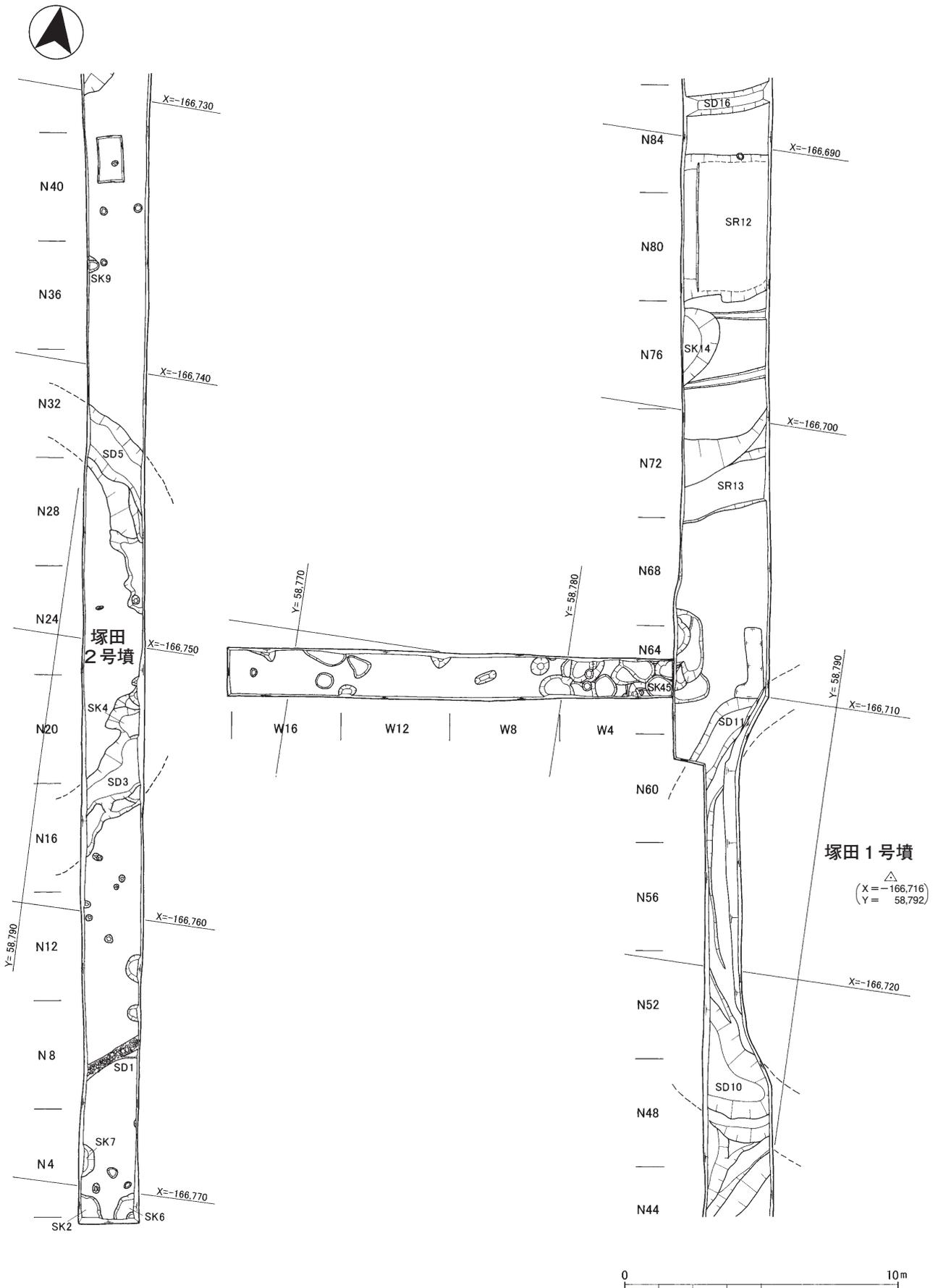
**調査区北部(集落跡付近)** (第Ⅳ-7図) 調査区北部の層位状況は、調査区南部と比較的類似するが、北端部には中近世の水田土壌が確認できるという相違点がある。遺構基盤となるのは黄褐色系粘土(第36層)で、南寄りでは標高約17.0mで検出できるが、中近世水田土壌と考えられる第6層が確認できる付近から次第に下降し、北端では標高16.5mにまで達する。黄褐色系粘土の下降に伴い、その上部に褐色シルト(第35層)が堆積している。遺構は第35層上面で確認できるが、第35層が確認できる付近から北部は遺構密度が激減している。この状況から、調査区北部のさらに北側に、流路(旧河道)が存在しているものと考えられる。

なお、調査区北部では、遺構埋土に黒ボク由来の堆積土はほとんど確認できない。ただ、先述のS R 15北岸部には黒ボク由来土と考えられる層の堆積が見られるので、調査区北部にも黒ボクは堆積していたと考えられる。

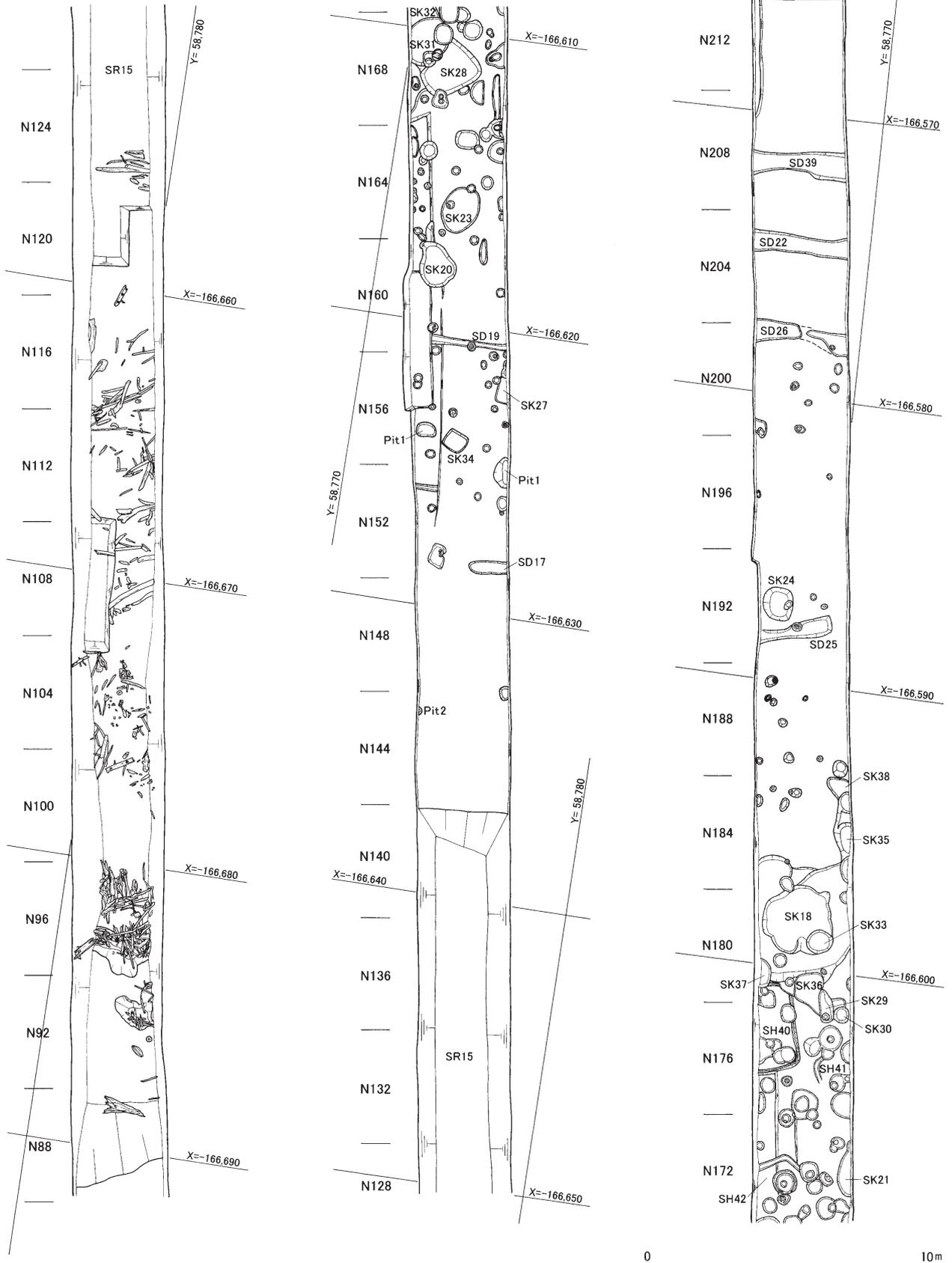
**層位の全体構成** 以上の状況から、調査区南部と調査区北部南半に良質な基盤層が存在し、中央部と北部北半に流路(旧河道)の存在が考えられる。遺構基盤は黄褐色系粘土であるが、調査区南部ではその上に黒ボクが厚く堆積していたと考えられる。以上により、段丘として最も良好な土地が調査区南部で、調査区北部南半は河道に囲まれた微高地であったと見ることができる。(伊藤)

### b 調査区南部の遺構(古墳時代後期)

**塚田1号墳** N44～N64で検出した円墳である。墳丘が残存しているが周囲が削られており、現状では1辺11m、現地表面から墳頂までの高さは2.5mの方墳状を呈している。今回の調査区では、周溝南辺にあたるS D 10、周溝北辺にあたるS D 11を検出

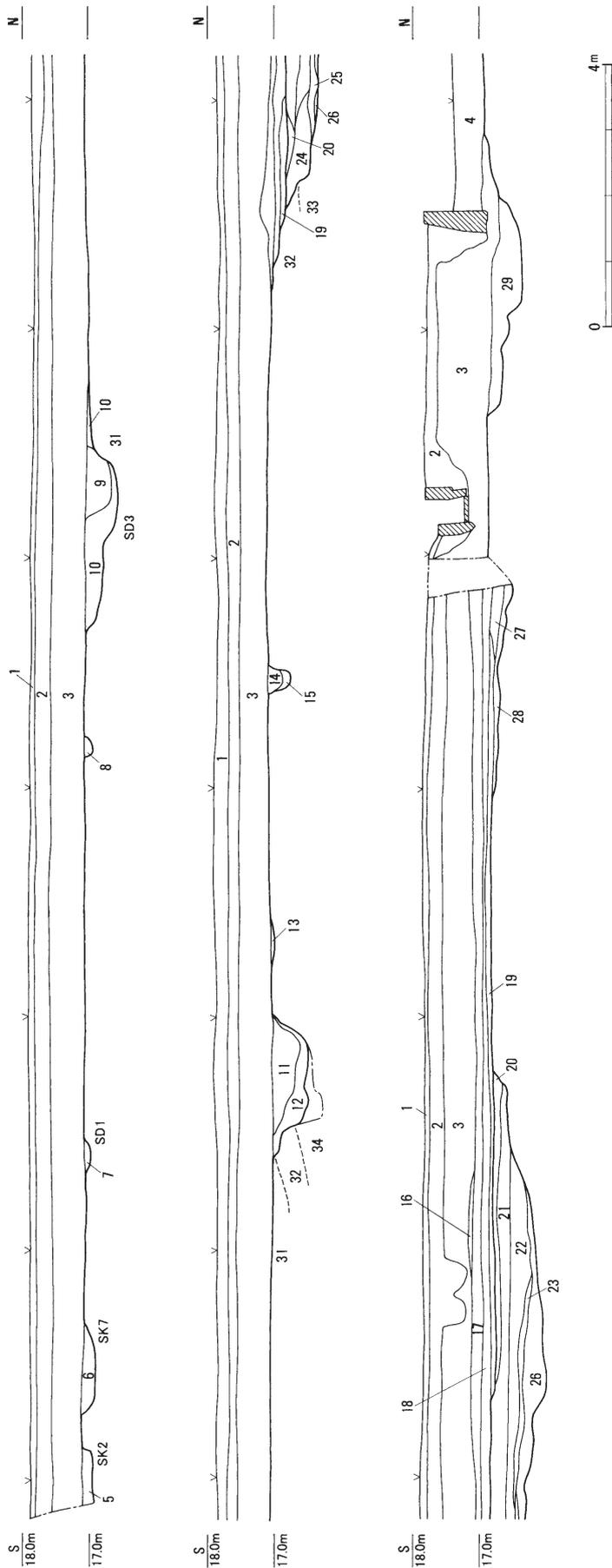


第IV-3図 田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(1) (1:200)



第IV-4図 田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(2) (1:200)

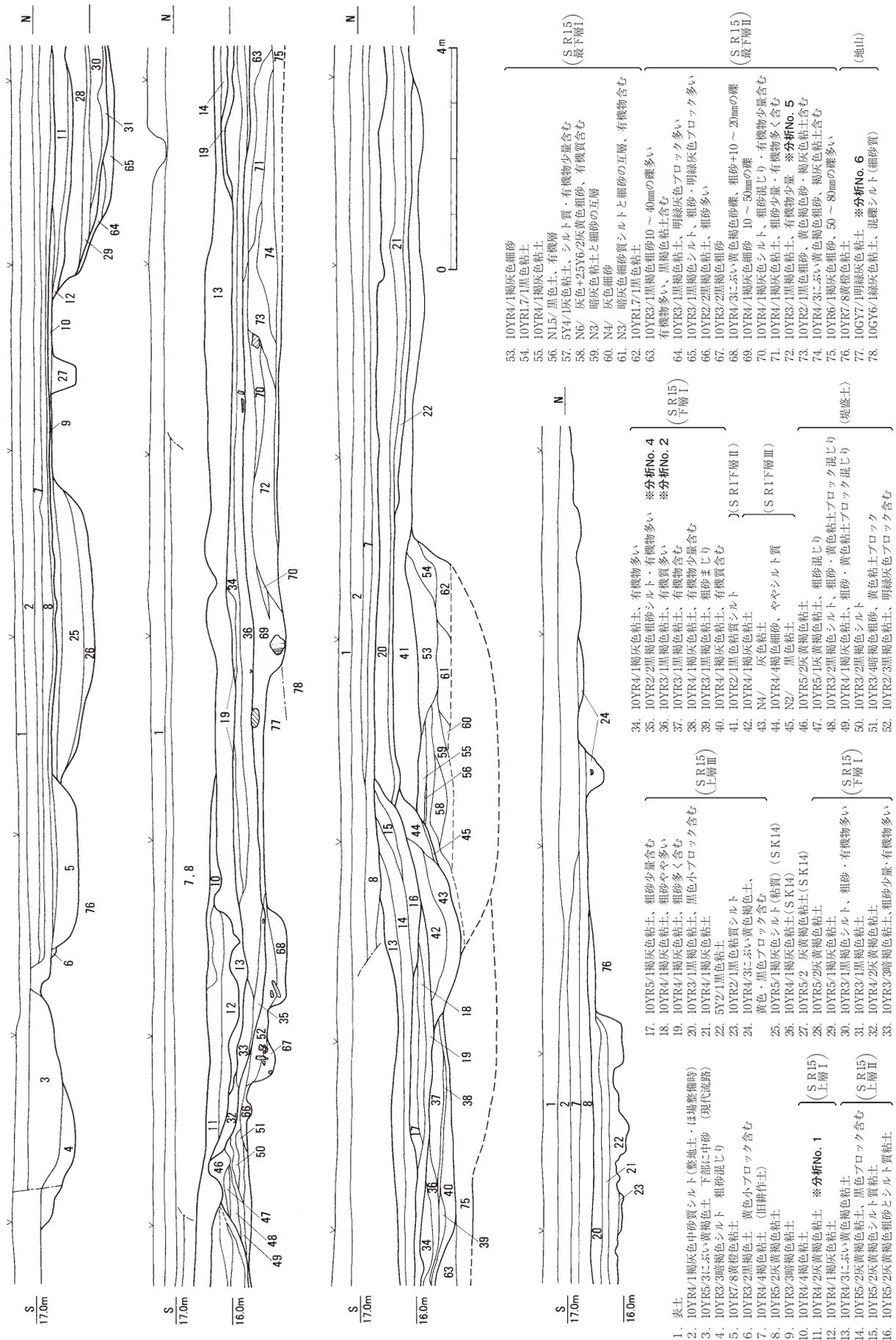
南北調査区西壁(1)



- 1. 表土
- 2. 礎石
- 3. 路床改良土
- 4. 現代耕作土(は場整備後)
- 5. 75YR3/3暗褐色土(SK2)
- 6. 75YR3/3暗褐色土、炭混じり(SK7)
- 7. 75YR3/3暗褐色土(SD1)
- 8. 75YR3/3暗褐色土(P1t)
- 9. 75YR3/1黒褐色土、粘質・ベース31プロック含む(SD3)
- 10. 75YR2/1黒色土、均質
- 11. 75YR2/1黒色土、均質
- 12. 75YR3/3暗褐色土にベース32と黒色土プロック含む(SD5)
- 13. 10YR3/3暗褐色土
- 14. 10YR3/2黒褐色土にベース32の小プロック含む(SK9)
- 15. 10YR3/2黒褐色土、粘質
- 16. 耕作土(路床改良とあまり離れない時期)
- 17. 耕作土(路床改良とあまり離れない時期)
- 18. 75YR3/3暗褐色土、シルト質粘性有り・炭・ベース32小プロック含む
- 19. 75YR3/3暗褐色土、粘質・ベース32小プロック多い
- 20. 75YR3/2黒褐色土、粘質・均質
- 21. 黒色土(75YR2/1)木プロック多い(プロック混合層)
- 22. 75YR2/2黒褐色土、粘質・ベース32の小プロック極少量
- 23. 75YR4/2灰褐色土、粘質・均質
- 24. 75YR3/3暗褐色土、粘質・ベース32小プロック多い(均質に含む・プロック少量)
- 25. 75YR4/2灰褐色土・75YR2/2黒色土・75YR3/4暗褐色土・ベース32小プロックの互層
- 26. 75YR4/4褐色土、粘質
- 27. 75YR2/2黒褐色土、均質
- 28. 25YR5/8明黄褐色土(ベースの崩落)に黒褐色小プロック少量混入
- 29. 75YR2/2黒褐色土、粘質・ベース32の小プロック含む(プロック混合層)
- 30. 75YR2/3暗褐色土、粘質
- 31. 10YR6/6明黄褐色粘土、～5mmの礫混じり
- 32. 25YR5/8明黄褐色粘土
- 33. 75YR6/6橙褐色粘土、株はやや砂質
- 34. 10YR5/6黄褐色中粒砂、～5mmの円礫含む(地山)

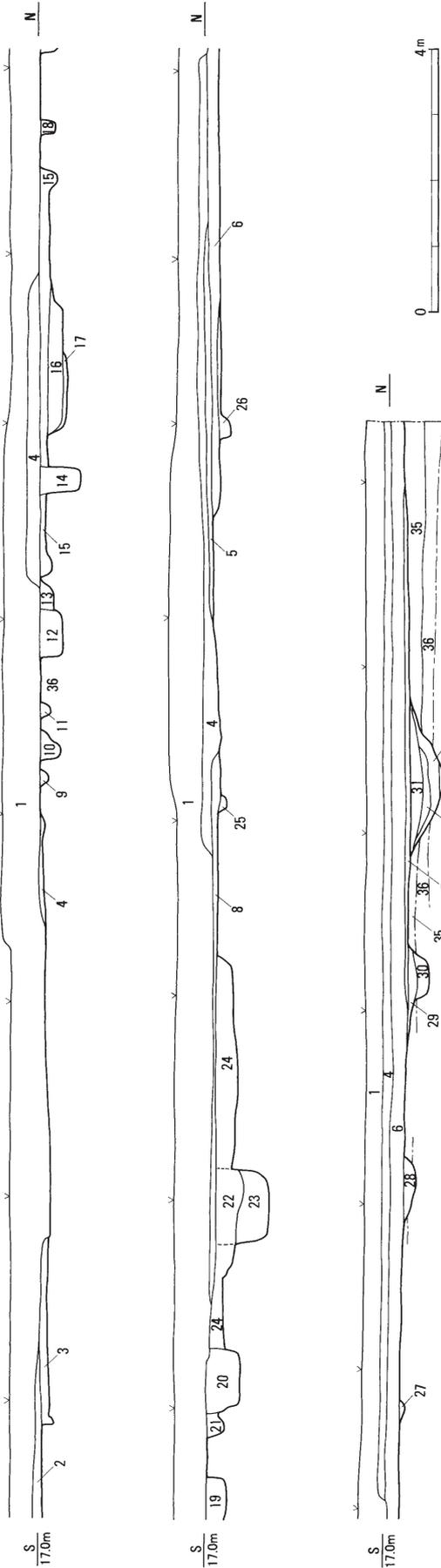
第IV-5図 田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(1) (1:100)

南北調査区西壁(2)



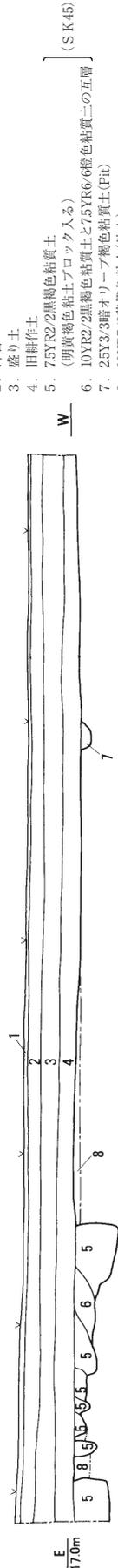
第IV-6図 田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(2) (1:100)

南北調査区西壁(3)



- 1. 表土
- 2. 10YR4/1 褐色土、灰黄褐色プロロック含む(Pt)
- 3. 10YR4/2 灰黄褐色土
- 4. 10YR4/4 褐色土 (旧耕作土)
- 5. 10YR4/1 褐色土(旧耕作土)
- 6. 10YR5/1 褐色土(旧耕作土)
- 7. 10YR4/1 褐色土(旧耕作土)
- 8. 10YR5/2 灰黄褐色土
- 9. 10YR3/2 黒褐色土
- 10. 10YR3/3 暗褐色土
- 11. 10YR4/4 褐色土
- 12. 10YR3/3 暗褐色土、地山プロロック含む(Pt)
- 13. 10YR3/3 暗褐色土(Pt)
- 14. 10YR2/3 暗褐色土、地山プロロック含む(NI68Pt4)
- 15. 10YR3/2 黒褐色土、炭混じり(SH42)
- 16. 10YR3/2 黒褐色土、地山プロロック含む(SK32)
- 17. 10YR3/3 暗褐色土、地山プロロック多い(SK31)
- 18. 10YR4/3 褐色土(Pt)
- 19. 10YR3/3 暗褐色土、炭・地山プロロック含む(Pt)
- 20. 10YR4/2 灰黄褐色土、地山プロロック含む(NI76PtH4)
- 21. 10YR3/2 黒褐色土(SH40)
- 22. 10YR3/2 黒褐色土
- 23. 10YR3/3 暗褐色土、炭混じり(SK37)
- 24. 10YR2/3 暗褐色土、炭混じり(SH40)
- 25. 10YR4/6 褐色土、灰黄褐色プロロック含む(Pt)
- 26. 10YR2/3 暗褐色土(Pt)
- 27. 10YR3/1 黒褐色土(Pt)
- 28. 10YR3/2 暗褐色土(SD26)
- 29. 10YR3/2 暗褐色土
- 30. 10YR2/1 黒褐色土、やや砂質(SD22)
- 31. 10YR4/2 灰黄褐色土
- 32. 10YR3/3 暗褐色土(SD39)
- 33. 10YR5/1 褐色土、粗砂質(地山)
- 34. 10YR4/1 褐色土
- 35. 10YR4/4 褐色土、粗砂質
- 36. 10YR5/4 褐色土、粗砂質

東西調査区南壁



- 1. 表土
- 2. 碎石
- 3. 盛り土
- 4. 旧耕作土
- 5. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 (明黄褐色粘土プロック入る)
- 6. 10YR2/2 黒褐色粘質土と7.5YR6/6 橙色粘質土の互層
- 7. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土(Pt)
- 8. 10YR7/8 黄褐色粘土(地山)

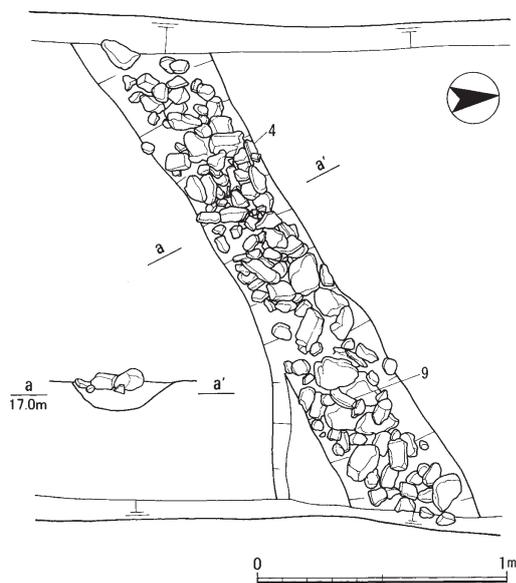
第IV-7図 田丸道遺跡・塚田古墳群調査区土層断面図(3) (1:200)

した。周溝の円周から元々は直径約20mの円墳であったと考えられ、周溝を含めた規模は直径約26mである。

北溝SD10は幅約3m、深さ約1mで、塚田2号墳の周溝に比べると深く掘り込まれている。SD10の南側で、西に向かって緩やかに弧を描く溝が重複していることから、塚田1号墳の南西方向に、さらにもう1基古墳があった可能性が考えられる。一方、南溝にあたるSD11は幅約1.4m、深さ0.3mを測り、北溝に比べ幅・深さともに規模が小さくなっている。遺構面が削平されているため全体的に浅い印象を受ける。墳丘裾西側は、後世の耕作により段状を呈している。

周溝からは遺物はほとんどみられなかったが、埋土の堆積状況が塚田2号墳と同様であることから古墳時代後期の築造と考えられる。なお『玉城町史』には、塚田古墳が直径14mの円墳であり、須恵器小片が1点採集されたと記載される。<sup>(1)</sup> 地元では「マムシ塚」と呼称されている。

**塚田2号墳** N16～N32で検出した円墳である。規模は、周溝の円周から直径約20mと推測され、調査区の西側に続いている。墳丘は削平されて現存しない。周溝は曲線的で、内外側ともになだらかに掘りこまれる。周溝計測値は北側のSD3が幅2.2m、深さ0.4m、南側のSD5が幅2.0m、深さ0.6mである。周溝埋土は黒褐色土で、いずれも均質である。



第IV-8図 SD1平面・立面図(1:30)

築造時期については、周溝底近くからの出土遺物に欠けるため明確に時期を決める資料に乏しいが、土師器甕の形態から、概ね古墳時代後期の範疇におさまるものと考えられる。また、古墳の南側で検出したSK2(中世後期)から出土した古墳時代後期の滑石製紡錘車は、元々は塚田2号墳に伴うものであった可能性が高い。したがって、墳丘が削平された時期は中世後期と推測される。

#### c 調査区南部の遺構(古代～中世)

**SK45** 東西方向にのびる調査区で検出した平安時代前期後半の遺構である。直径約1mを測る土坑が密集しており、土坑の形状と規模から粘土採掘坑の可能性はある。平安時代の遺構は、SR15の南岸ではSK45、SR13のみ確認される。

**SD1**(第IV-8図) 調査区南側のN8グリッドで検出した溝である。幅33cmの堀形を持つ石組溝で、性格は暗渠と考えられる。石組の間隙からは、構築時に廃棄されたと考えられる土師器鍋・羽釜や常滑焼大甕口縁が出土した。土器の形態から、時期は南北朝期と考えられる。

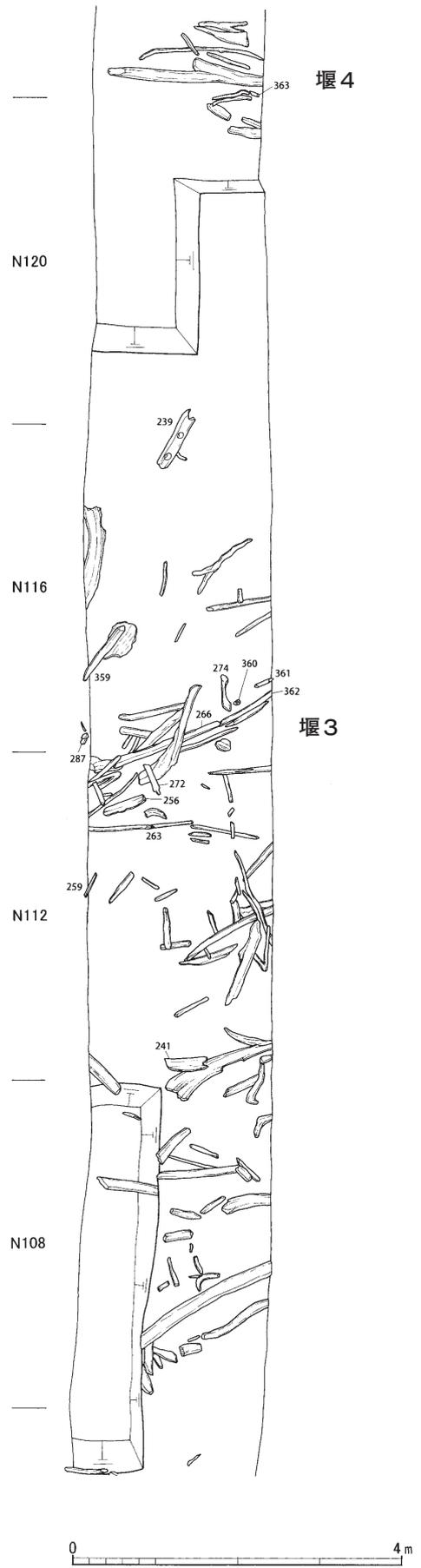
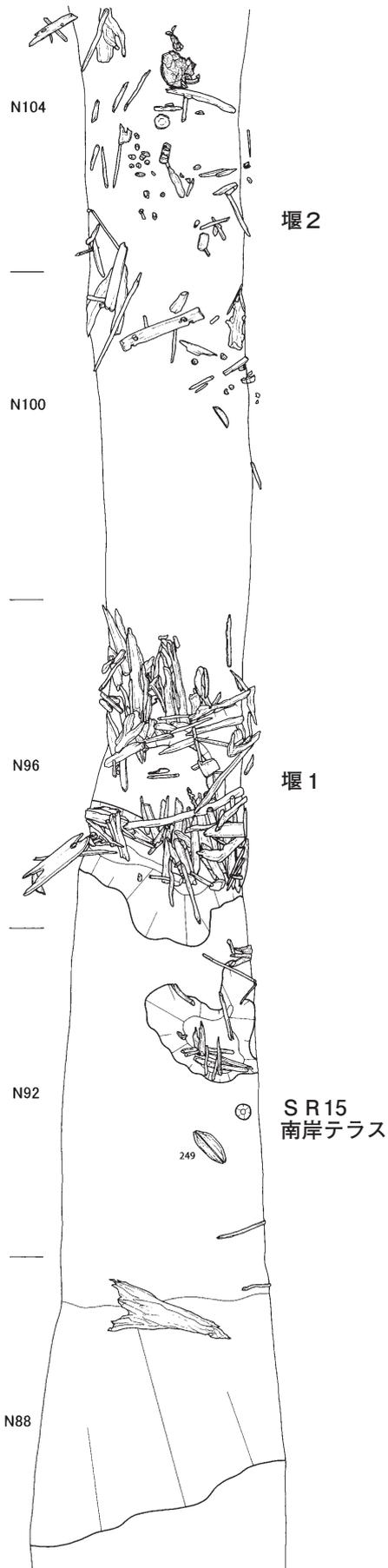
**SK2** 調査区南端N4グリッドで検出した浅い土坑である。出土遺物から、時期は室町時代後半と考えられる。古墳時代後期の紡錘車が混入している。

#### d 調査区中部の遺構(河道SR15)

**概要** 調査区のほぼ中央を河道SR15が横断する。弥生時代中期から平安時代後期にかけて機能した幅約55mの流路で、西流する。外城田川の前身と考えられる。古墳群側の南岸で、河道と平行方向に設けられた木組みの堰<sup>(2)</sup>を検出した。堰周辺からは古墳時代後期の土器や、農耕具・建築部材などの木製品が出土した。

**規模** 幅約3mの調査区内を横断する旧河道であるため、全体像は明確ではないが、兩岸間の距離は55.5m、深さは遺構面から2m以上あったと考えられる。南岸にテラス状の段を設けており、この深さは遺構面から1mである。(相場)

**遺構内構築物と層位** SR15では、自然流路段階、築堤を伴う構造物のある段階、河道がほぼ埋没した段階の、概ね3時期に区分することができる。それぞれを最下層・下層・上層とする。主に第IV-6図に基づき見ていく。



第IV-9図 SR15堰平面図(1:80)

**最下層** 最下層は、第Ⅳ－6図の第53～75層にあたるが、第53～62層を最下層Ⅰ、第63～75層を最下層Ⅱと区分できる。

最下層ⅡはSR15全体を覆う層で、加工痕の見られない自然流木や木葉を中心とした有機物、さらには自生二枚貝(マツカサガイ)が見られるのもこの層である。この状況から、当流路が河道として最も機能していた時期に形成されたのがこの層と考えられる。第69層中から弥生時代中期前葉の良好な土器が出土していること、その他の層から古墳時代前期頃までの土器が出土していることから、最下層Ⅱの形成時期はこれらの時期に相当すると考えられる。

最下層Ⅰは、SR15の北端部に見られる。幅10m程度の流路として機能していた時期のものと考えられる。第59層に砂と粘土の互層が見られるので、この段階も相応の水流があったと考えられる。出土遺物が無いので明確な時期は示しがたいが、下層の時期が古墳時代後期以降であるため、最下層Ⅰは古墳時代中期頃ではないかと考えられる。

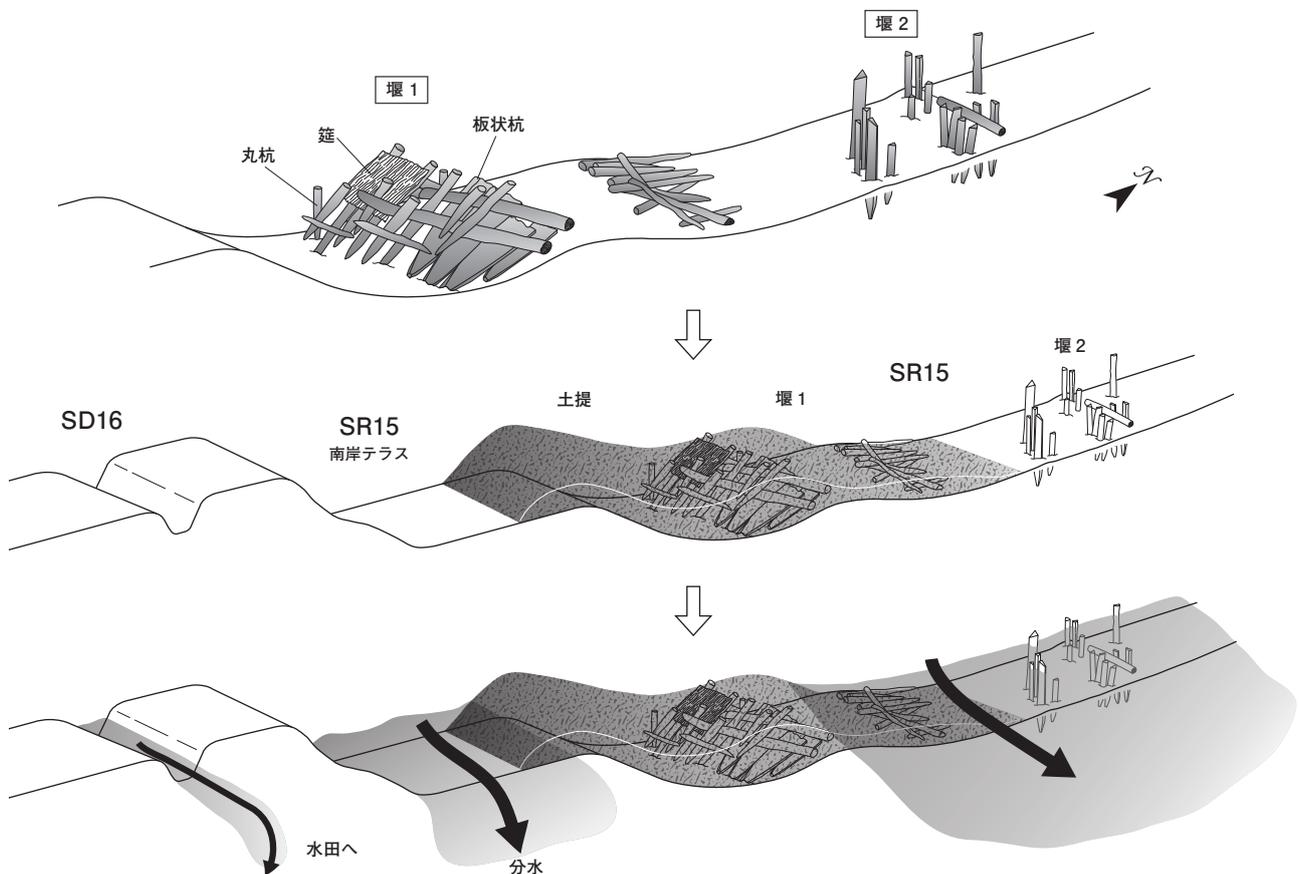
**下層** SR15のなかで、最も出土遺物の多いのが下

層である。第28～45層が相当するが、第28～40層を下層Ⅰ、第41層を下層Ⅱ、第42～45層を下層Ⅲとして区分できる。また、第46～52層の堰堤盛土も下層相当の構造物である。

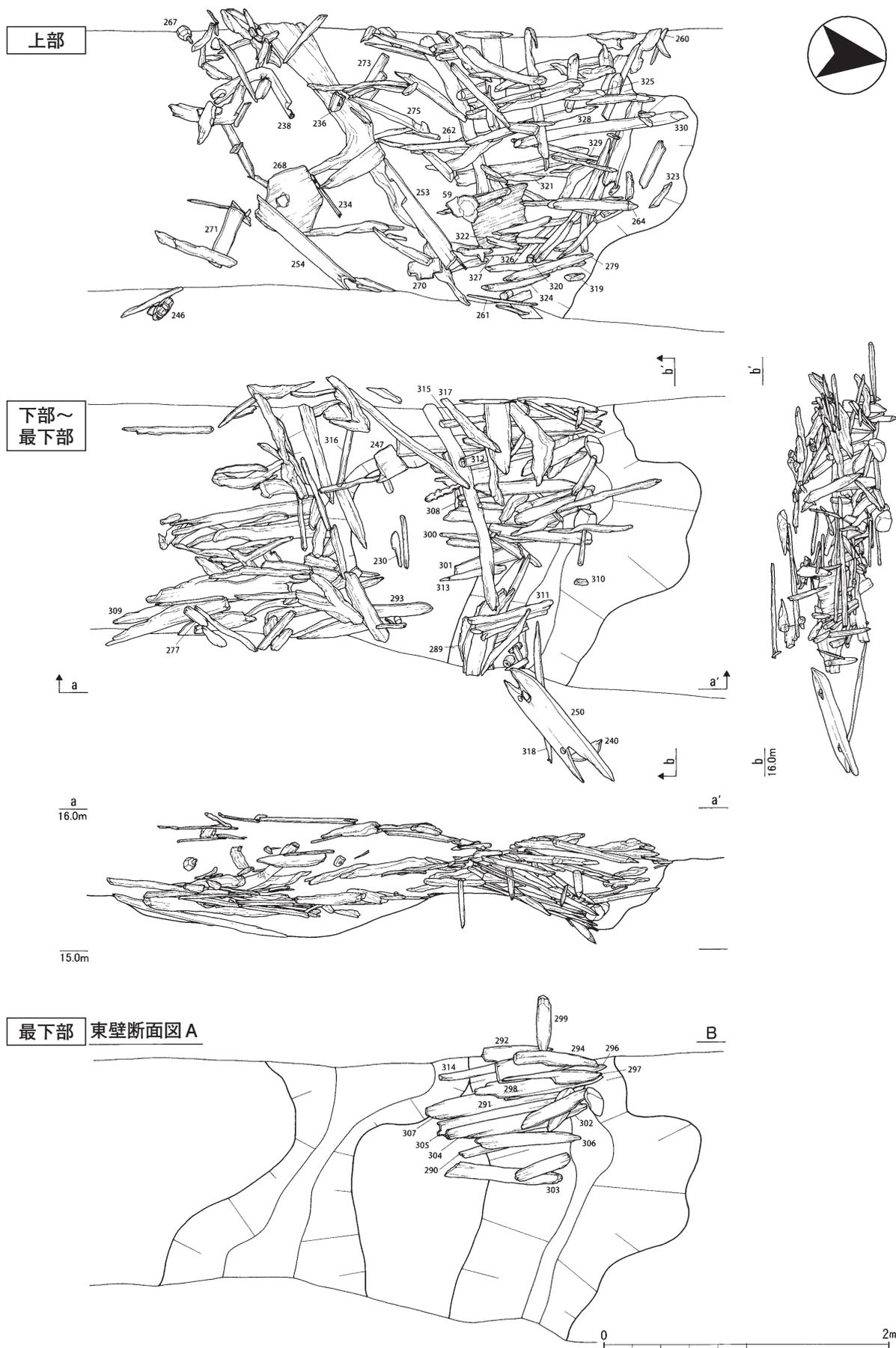
下層Ⅰは、SR15をほぼ覆う厚さ30～40cmの粘土層である。SR12とSD16の埋土も基本的にこの層と同質であり、連動して堆積したと考えられる。この層中に多くの木製品や土器類が包含されていた。粘土層であるため、それほど強い水流は無かったと考えられる。古墳時代後期を中心とした遺物を包含しているため、形成時期はその頃に求められる。

下層Ⅱは、SR15の北岸部を覆う層である。下層Ⅲによって分断されているため、下層Ⅰとの関係が明確でないが、基本的には下層Ⅰと連動した層と考えられる。

下層Ⅲは、SR15の北岸部に見られる。幅約5mの溝状を呈している。下層Ⅰ・Ⅱが埋没した後形成された小流路と考えられる。粘土層を基本とするため、下層Ⅰと同様、それほど強い水流は無かったと考えられる。



第Ⅳ－10図 堰構造模式図



第IV-11図 堰1 平面・立面図(1:40)

**下層の堰堤盛土(第IV-12図)** 下層Iの形成前に、SR15南岸部に堤状遺構が構築されている。堰堤は、SR15南岸部のテラス状部端に構築されている。その下には最下層IIの埋土がある。この結果、SR15の南端に別の流路を形成する状態となっている。

堰堤は幅約4m、遺存高約1.2mで、築堤に伴う杭列は認められないが、河道南岸部は杭およびシガラミ(堰1)で固められている。後述の堰1は、基本的には堰堤に伴う構造物と考えられる。堰堤部は、粘土およびシルトを細かく積み上げており、一種の版築技法と見ることもできる。

堰堤によって分断されたSR15南岸テラスは、SR15本体から導水するための施設として用いられたと考えられる。南方のSR12とSD16についても同種の機能が考えられる。

**上層** 上層はSR15が機能していた最終段階と考えられる層である。第IV-6図第10~24層が相当するが、第10~12層を上層I、第13~16層を上層II、第17~24層を上層IIIとして区分できる。

上層IIIは、SR15北岸部を大きく埋積する層である。SR15の中央から北側にのみ観察できる層で、黒ボク由来の黒色土を基本とする。

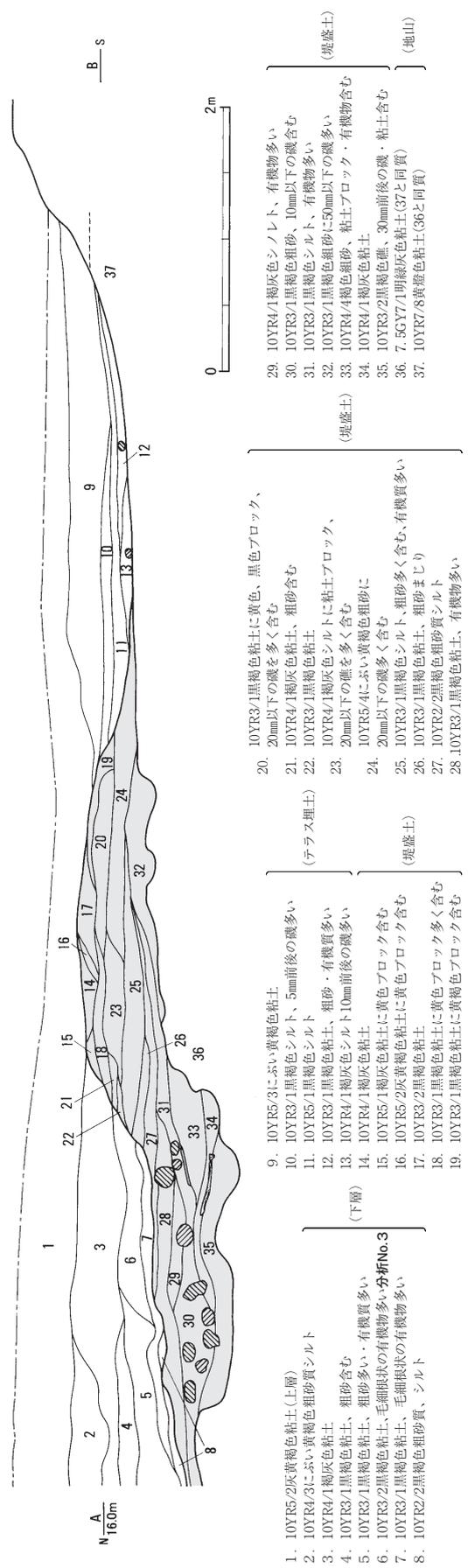
上層IIは灰黄褐色系土で、シルトおよび粘土質である。植物生痕が見られたため、水田土壌か、あるいは湿地を示す土質と考えられる。

上層IはSR15を完全に覆い尽くす層である。この層も灰黄褐色系の粘土質で、水田土壌ないしは湿地を示すと考えられる。上層からは、灰釉陶器類の出土が見られた。そのため、形成時期は平安時代中後期頃と考えられる。(伊藤)

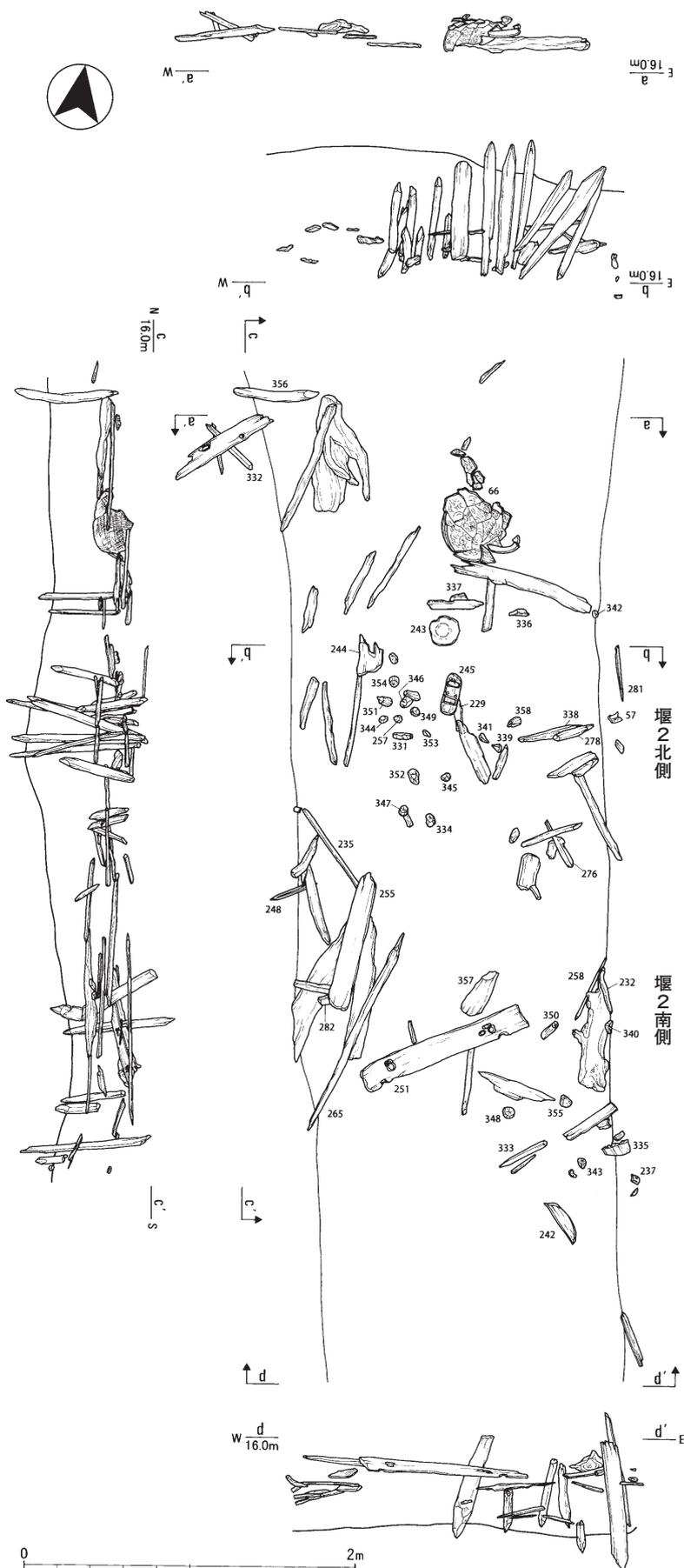
**e SR15 木組みの堰**

**概要と機能(第IV-9図)** SR15の南岸で検出した古墳時代後期の杭列で、川岸に沿うように東西に伸びる水利施設である。木組は調査区外まで続いている。杭列は4つのまとまりが確認され、便宜上岸辺から順に堰1→堰4とした。

一番岸に近い堰1は、板状杭や筵を芯とし、盛土を行う構造をもつ。これは旧河道の水流をテラスや溝に分水し、下流にある水田に流し込むための機能を有していたと思われる。一方、堰2は長い角材を、堰3~4は丸杭をほぼ垂直に打っており、水の流れ



第IV-12図 堰1 東壁土層断面図(1:50)



第IV-13図 堰2 平面・立面図 (1:40)

を緩める役割をもっている。堤によって分水された灌漑用水路は、南岸テラスやSD16、SR12が相当すると考えられる。

**堰1の構造(第IV-11図)** SR15の岸辺にあたり、南岸テラスに隣接する。杭列の方向はSR15と平行するため、流水を堰き止めるものではなく、土堤を用いて分水する機能であったと考えられる。調査区内において、長さ約1.3mの南杭列と、長さ約2mの北杭列を検出した。

構造は、まず板状杭を敷き並べるように北→南方向に斜めに打ち込んでいる(堰1最下部)。最下部で折り重なるように用いられた板状杭は、調査区内で19本確認され、そのほとんどがコナラ材であった。

板状杭の上(堰1下部)では、自然木を用いた横木を並べ、丸杭が斜めに打ち込まれている。堰1では、丸杭が調査区内で18本みられた。また、南と対になるよう北側にも板が並べられているが、これは杭ではなく板状の加工材を用い、地山を掘りくぼめた斜面に対し水平方向に敷き並べたものである。

堰上部では、丸杭と丸杭の隙間に、粗朶で製作された筵が堤の土台として用いられている。遺構検出作業は木杭を掘り下げる形で進められたが、これら木杭は全て土堤の基礎と考えられ、土層断面では堤状の高まりが確認できる。したがって、本来は木杭を覆う土手状の堤が構築されていたと想定される(第IV-10図)。

ただし、古代の堤防にみられるような土嚢積みや敷葉工法は確認されなかったことから、比較的簡易な盛土であるといえよう。なお、漂着した木製品のほとんどは、杭の直上ではなく堤の想定ラインより上から出土している。

**堰2の構造(第IV-13図)** 緩やかな傾斜を持つ堰1とは対照的に、角材が直立し、しっかりと打ち込まれるものである。

堰2では、約1.2m離れている2つのまとまりを確認した。南側では比較的大きくしっかりした杭が垂直に打たれ、中には335のように建築部材を杭に転用した板材が混じる。

一方、北側では当初より杭として用意された大型の蜜柑割材(残存長75cm程度)を主体とし、それらが川と平行して2条並ぶ。さらに、角杭の隙間を57縫うように小型の丸杭(径約5cm程度)が密集している。横木はみられないが、築堤当時は蔓状の植物や小枝・芦や葦などが横方向に「しがらみ」状に絡めてあった可能性が高い。堰2の角杭は、いずれも尖端が地山まで到達し、水の流れを緩やかにする機能を有している。

**堰3・堰4の構造**(第IV-9図) 非常に脆弱な杭列である。河床に打ち込まれている杭を確認したため、便宜上堰3・堰4としたが、堰1・堰2と比べ、まとまった単位は認められない。堰3は、丸杭が2本打たれたものである。堰4は流木を堰き止めるように直立した丸杭を1本確認した。

**遺物出土状況** 土器は、堰の上に流れ着く形でみられた。59は堰1上部の杭上面で検出した。須恵器大

甕66は、堰2北端で1個体分まとまって出土した。

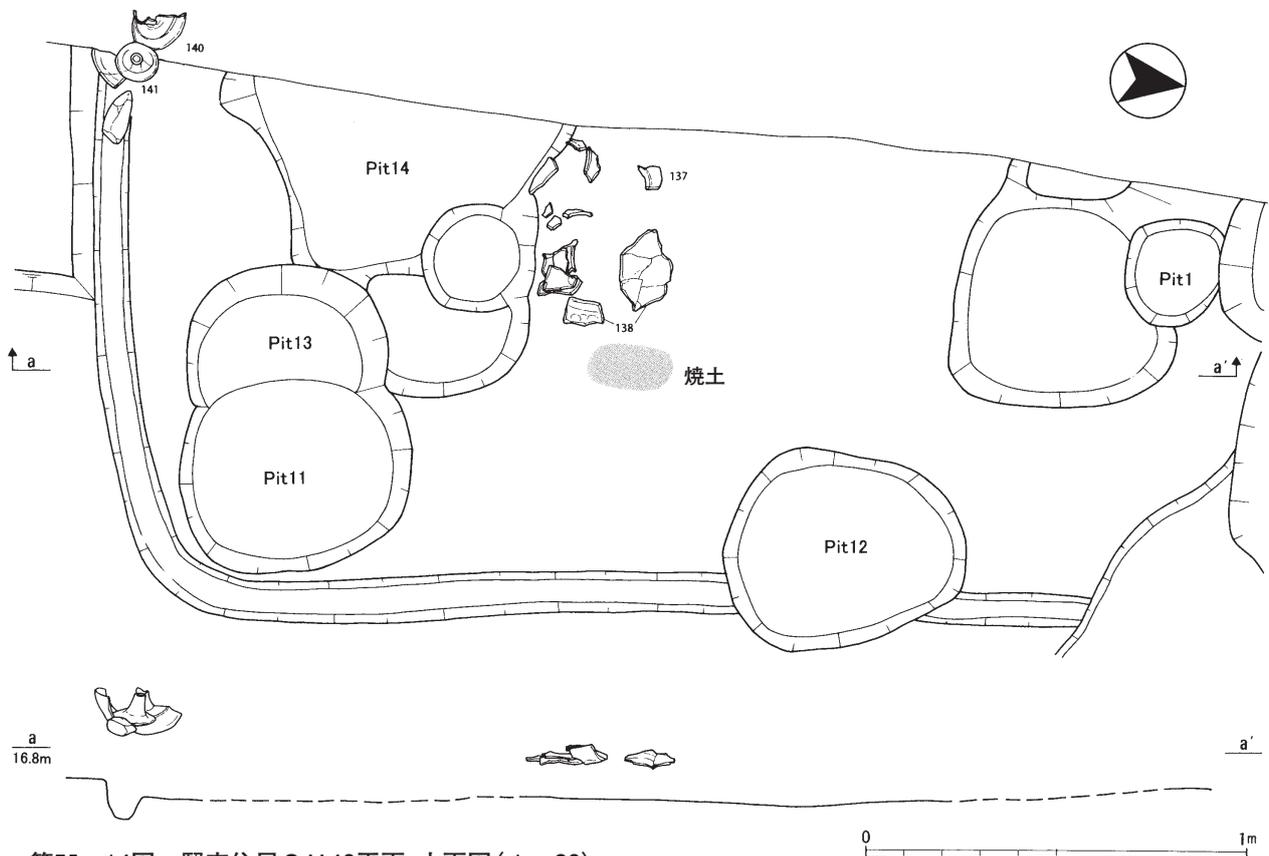
木製品は、祭祀遺物である舟形木製品が2点出土していることが特筆されよう。32.5cmの大型品249は、古墳群に近い南岸テラスの浅瀬で確認された。小型の舟形木製品248は堰2で出土した。

**f 調査区北部の遺構(古墳時代後期)**

**SK18**(第IV-15図) 径約2.4m、深さ40cmの土坑で、形状は円形を呈する。底面からはほぼ完形の須恵器蓋坏6点、壺3点のほか、古墳時代後期の土器がまとまって出土した。

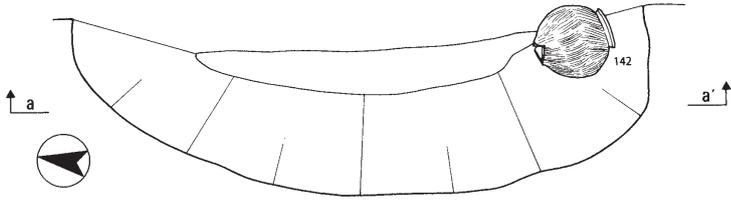
**SK34**(第IV-15図) N156グリッドで検出した、ほぼ正方形の土坑である。一辺約80cmを測る。底からやや浮いた状態で、高坏の脚部などが出土した。

**SH40**(第IV-14図) N176グリッドの西端で検出した竪穴住居である。方形のプランだが、上面および南辺は平安時代後期から中世に削平され、さらに古墳時代後期～平安時代後期のピットが重複していることから、建物に伴う主柱穴は確認できなかった。残存している東壁から推測すると規模は一辺3.1m以上で、調査区の西側に続くものである。焼土は、通常のカマド痕跡とは異なり、壁面から離れた位置

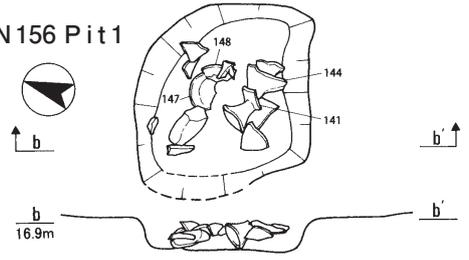


第IV-14図 竪穴住居SH40平面・立面図(1:20)

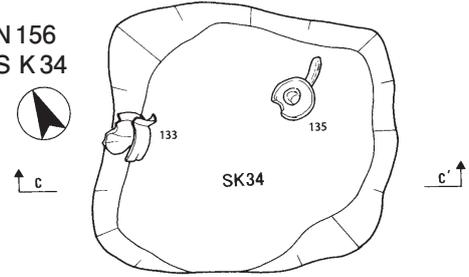
N152 Pit1



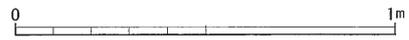
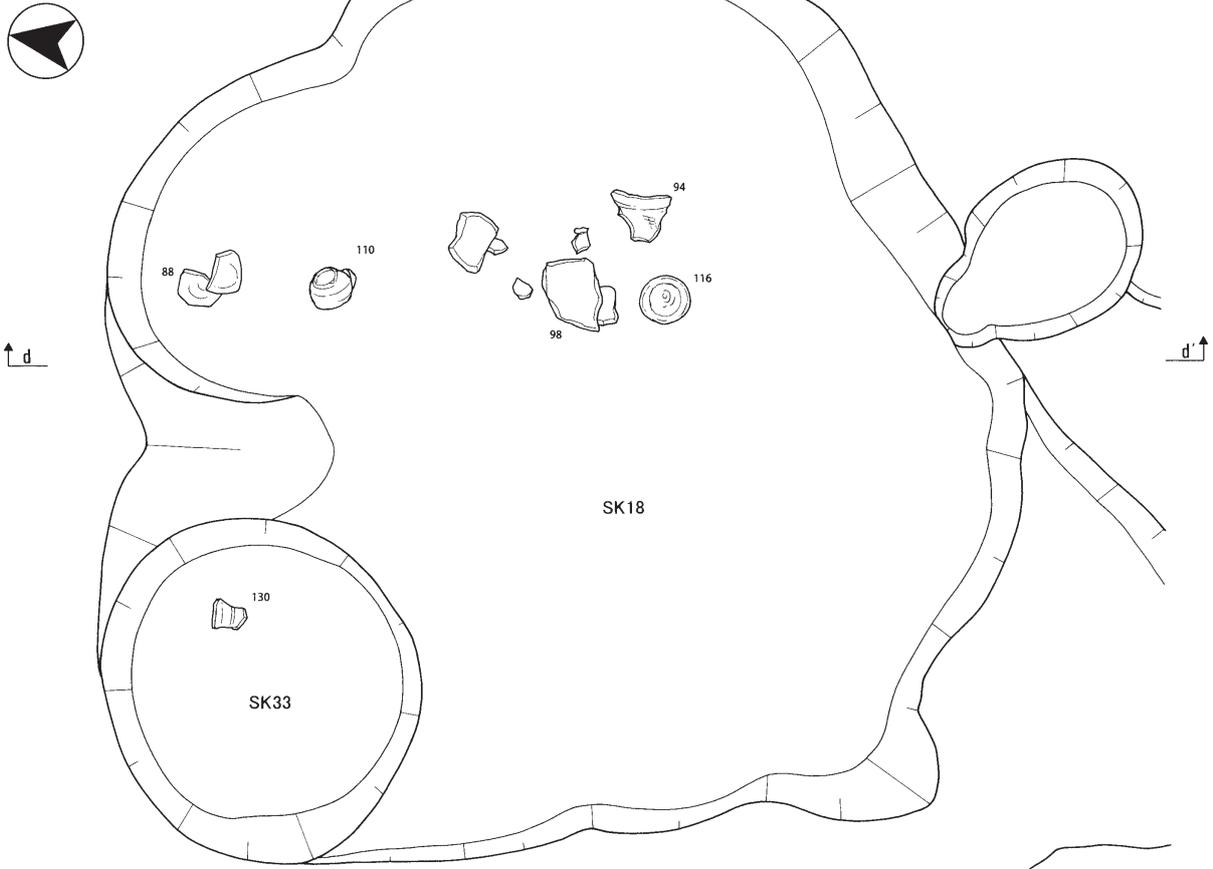
N156 Pit1



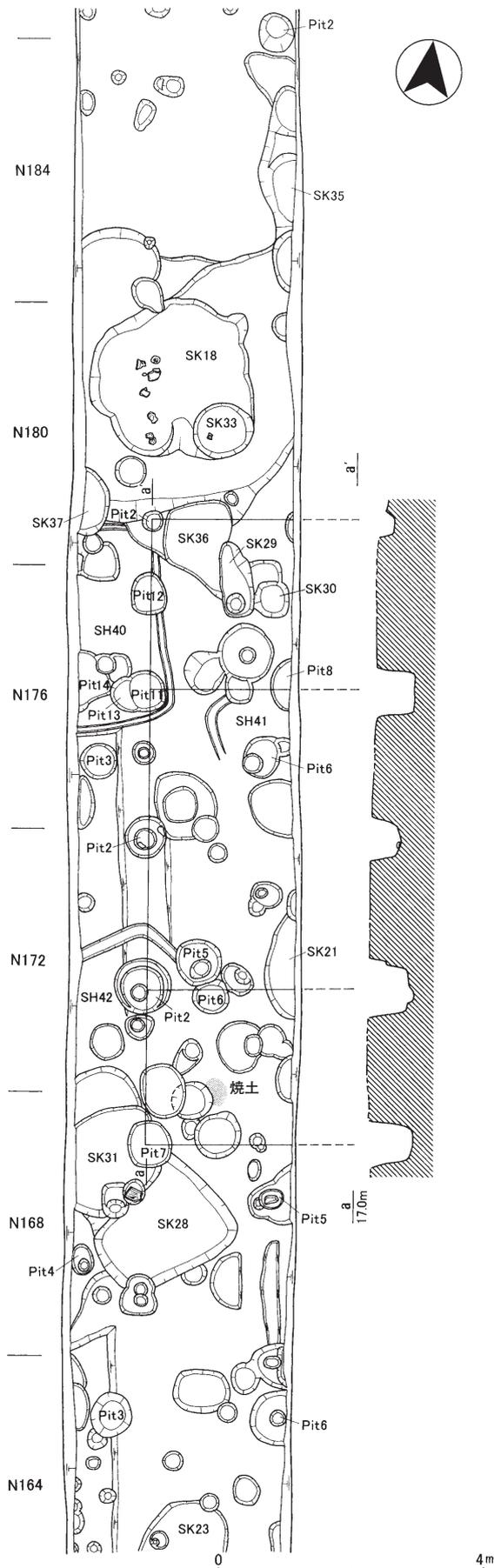
N156  
S K34



N180 S K18



第IV-15図 調査区北部個別遺構平面・立面図(1:20)



第IV-16図 SB46平面・断面図(1:100)

で検出した。竪穴住居に伴うものではないが、付近から鉄滓が出土していることから野鍛冶に関わる施設であった可能性も指摘できよう。

出土遺物は、床面から10cmほど浮いた状態で確認された。西壁上で高坏が折り重なって出土している。竪穴住居SH40は、土師器類の形態から古墳時代後期に廃絶した遺構と考えられる。

**SH41** N176グリッドで検出した竪穴住居で、北西端の壁際溝を確認した。上面は削平されている。遺物は出土しなかったが、埋土の状況からSH40と同時期にあたる古墳時代後期のものと考えられる。

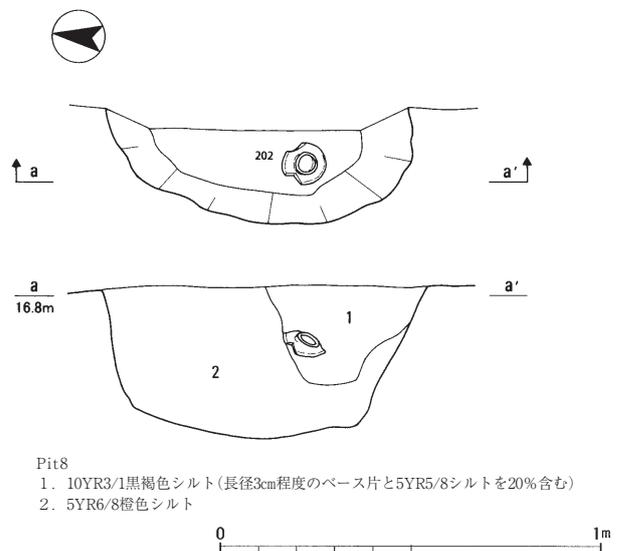
**SH42** NSH42同様、壁際溝のみ検出した。

**N152ピット1**(第IV-15図) 調査区東壁沿いで検出した土坑で、幅1.5m、深さ40cm。土坑の底から、脚台部以外ほぼ完形のS字甕が横向に出土した。

**N156ピット1**(第IV-15図) SK34に隣接している。幅45cm、高さ10cmの浅い土坑で、上面は既に削平されている。高坏の坏部や脚部がまとまって出土した。

**g 調査区北部の遺構(平安時代後期)**

**SB46**(第IV-16図) 掘立柱建物で、南北4間を確認した。柱間は南北2.5m、東西2.3mで、建物はさらに東へ続くと考えられる。両端のピットが小さいことから、南北方向に底をもつ二面廂付建物、あるいは四面廂付建物などが想定される。建物の方向はほぼ南北である。建物に伴う柱穴は円形を呈し、



第IV-17図 N176 Pit 8平面・断面図(1:20)

第Ⅳ－1表 田丸道遺跡遺構一覧表

遺構番号	形態	時期	調査区	小地区	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
S D1	暗渠	中世後期	南北	N8	2.1～	0.5	0.09	土師器(皿・鍋・羽釜・茶釜)、常滑焼、山茶碗	石組(土器片混じる)
S K2	土坑	中世後期	南北	N4	0.85～	0.85～	0.12	土師器(皿・茶釜蓋)、紡錘車	古墳時代後期の紡錘車出土
S D3	周溝	古墳後期 ～中世後期	南北	N16-N20	4.0～	2.2	0.35	上層：土師器鍋など 下層：土師器甕など	塚田2号墳周溝
S K4	土坑	不明	南北	N20	1.25	1.2	0.19	土師器片	S D3の一部か
S D5	周溝	古墳後期	南北	N24-N32	4.0～	2.0	0.55	土師器片	塚田2号墳周溝
S K6	土坑	中世後期	南北	N4	0.95～	0.75～	0.11	土師器片	
S K7	土坑	中世後期	南北	N4	1.1	0.45～	0.17	土師器(皿・鍋)	
S K8	土坑	不明	南北	N12	1	0.15～	0.33	土師器片	
S K9	土坑	不明	南北	N36	0.75	0.15～	0.08	土師器片	
S D10	周溝	古墳後期	南北	N44-N52	9.0～	3.1	1.0	土師器片	塚田1号墳周溝。幅が広く、古墳南西側に もう1基築造された可能性がある。
S D11	周溝	古墳後期	南北	N56-N64	3.0～	1.4	0.3	土師器片	塚田1号墳周溝
S R12	溝	古墳後期	南北	N80	3.0～	5.4	0.68	なし	上流の堰で分水された農耕用水路か
S R13	旧流路	現代	南北	N72	3.0～	3.3?	0.36	土師器(坏)、山茶碗、須恵器	現代流路
S K14	土坑	平安後期	南北	N76	2.85	1.3～	0.4	土師器(坏)	
S R15	旧流路	弥生中期 ～平安後期	南北	N88-N 140	3.0～	55.5	2.0～	弥生土器、土師器、須恵器、 灰釉陶器、木製品等	外城田川の前身と考えられる旧河道 南側で古墳時代後期の堰1～4を検出
S D16	溝	古墳 中～後期	南北	N84	3.0～	0.75	0.46	古式土師器(壺片)	S R15の南に位置する 上流の堰で分水された農耕用水路か
S D17	溝	中世前期	南北	N152	1.35～	0.45	0.12	土師器片	
S K18	土坑	古墳～飛鳥	南北	N180-N 184	2.4	2.5	0.4	土師器(甕・碗)須恵器(坏 身坏蓋・高坏・壺)	
S D19	溝	平安後期か	南北	N160	2.6	0.3	0.02	土師器片	
S K20	土坑	古墳後期	南北	N160	0.8	0.65	0.3	土師器(碗)	
S K21	土坑	平安後期	南北	N172	0.8	0.24～	0.17	灰釉陶器	
S D22	溝	平安後期?	南北	N204	1.5～	0.45	0.9	土師器片(坏)	
S K23	土坑	平安後期か	南北	N164	1.6	1.3	0.2	土師器片、弥生土器片	
S K24	土坑	平安後期か	南北	N192	1.2	1.1	0.2	土師器片(甕)	
S D25	溝	平安後期か	南北	N192	2.5～	0.6	0.12	土師器片(坏)	
S D26	溝	不明	南北	N200	3.0～	0.7	0.1	土師器片、弥生土器片	
S K27	土坑	平安中期	南北	N156	1.3	0.4	0.04	土師器片、灰釉陶器	
S K28	土坑	古墳後期	南北	N168	2.0	1.5	0.2	土師器(壺・甕)、須恵器(坏 蓋)、石器	方形土坑。S K31と重複 北辺付近に焼土あり
S K29	土坑	平安	南北	N176-N 180	1.2	0.45	0.06	緑釉陶器片、ロクロ土師 器	
S K30	土坑	古墳後期	南北	N176	0.5	0.5	0.3	土師器片	
S K31	土坑	古墳後期 ～古代	南北	N168	1.8	1.4	0.2	土師器(甕)	S K28、S K32の上面で検出
S K32	土坑	古代	南北	N168-N 172	1.0～	0.6	0.2	土師器片	S K31と重複、切り合い不明瞭
S K33	土坑	古墳後期	南北	N180	0.9	0.9	0.22	土師器片、須恵器	S K18の上面で検出 須恵器平瓶の口縁部出土
S K34	土坑	古墳後期	南北	N156	0.7	0.7	0.3	土師器(甕・高坏・S字甕 脚台)	
S K35	土坑	古墳後期	南北	N184	1.0	0.5～	0.2	土師器片(甕)	
S K36	土坑	古代	南北	N180	1.2	1.0	0.13	土師器片	
S K37	土坑	平安中期?	南北	N180	1.0	0.4～	0.5	土師器(甕・暗文坏)	
S K38	土坑	古墳後期	南北	N184	0.9～	0.7	0.04	土師器片、須恵器(坏身)	
S D39	溝	古墳後期?	南北	N208	3.0～	0.9	0.11	土師器片、須恵器片	
S H40	竪穴住居	古墳後期	南北	N176	3.1～	1.5	0.04	土師器(甕・高坏)、鉄滓 片	中世の遺構による上面および北壁の削平著 しい。主柱穴等は不明。
S H41	竪穴住居	古墳後期	南北	N176	2.5～	1.5～	0.02	なし	遺物なし 遺構の全体像不明
S H42	竪穴住居	古墳後期	南北	N172	1.0～	0.8～	0.11	なし	遺物なし 遺構の全体像不明
S K45	土坑	平安後期	東西	W4-W8	5	1.5～	0.27	土師器(坏)	径約1mの土坑群で、ほぼ同一の埋土 粘土採掘坑の可能性ある
S B46	掘立柱 建物	平安後期	南北	N168-N 180	9.5	2.3～	-	土師器(坏・碗・甕)、灰釉陶器、 緑釉陶器、黒色土器、刀子	大型の掘立柱建物で、調査区の東側に続く と考えられる。柱間は南北25m、東西23mか。

掘方約75cm、柱穴は25cmである。確認された柱穴7つのうち、N168ピット7、N172ピット2、N176ピット2、N180ピット2およびN176ピット8からは緑釉陶器片が出土している。なかでも、N176ピット8の柱穴跡から出土した完形の緑釉陶器皿は、口縁部が意図的に打ち欠きされており、建物の廃絶期に地鎮として投棄された可能性が高い(第IV-15図)。時期は、柱穴出土の灰釉陶器が猿投窯H72型式併行期に相当し、平安時代後期の10世紀末頃。

**柱穴群** SB46周辺から、建物に伴う柱穴群を検出した。出土遺物はいずれも平安時代後期の範疇に収まることから、あまり時期をおかず、同じ場所に建物を建て替えているといえよう。(相場)

[註]

(1)玉城町編『玉城町史』上巻(1995年)

(2)ここでは、河川などから農業用水を水路へ引き入れるための施設に対し、「堰」という名称を使用する。

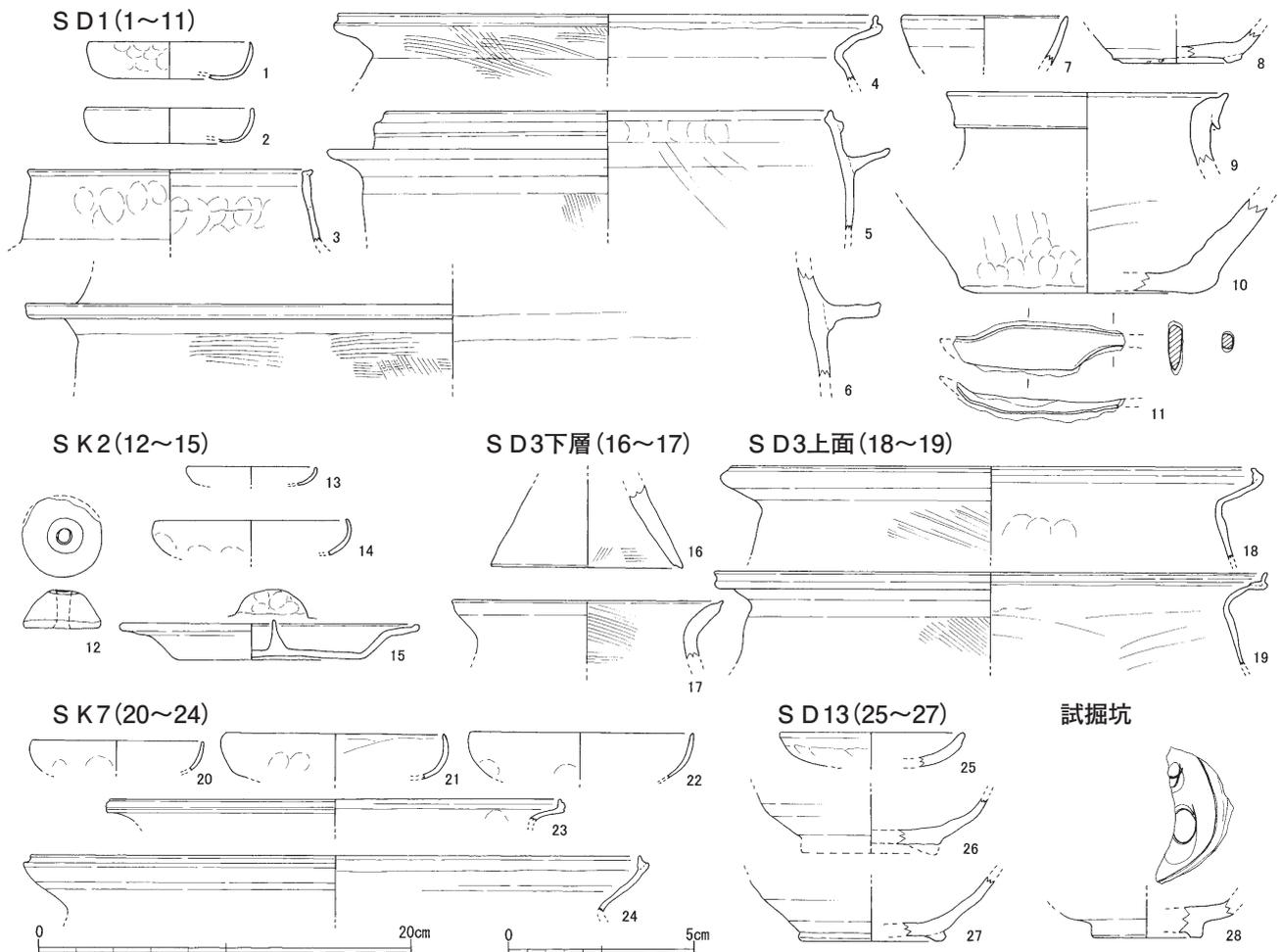
### 3 出土遺物

田丸道遺跡(第2次)で出土した遺物は、土器・石製品・金属製品・木製品で、土器の量はコンテナケース約21箱である。以下では、特徴的な遺構のみ記述する。個々の詳細については遺物観察表(土器・石製品・金属製品：第IV-2～7、木製品：第IV-8～11表)を参照されたい。<sup>(1)</sup>

まず土器・金属製品の特徴を述べ、次に木製品の特徴を述べる。土器は、南北調査区南部・SR15・同北部・東西調査区の順で記述した。なお、木製品は全てSR15から出土している。

#### a 調査区南部の出土土器・石製品

**SD1出土遺物(1～11)** 土器器皿、茶釜、鍋、羽釜などが出土しており、これらは南伊勢中世Ⅲb期の状況を示している。7は古瀬戸の丸椀。8は山茶椀で、藤澤編年第5型式に相当する。9～10は常



第IV-18図 田丸道遺跡出土遺物実測図(1)…調査区南部SK・SD・SR(土器1:4、鉄器1:2)

滑産の陶器で、9は広口壺で常滑窯編年6 a 型式期のものである。11は鉄製のヤリガンナである。

**S K 2 出土遺物**(12～15) 12は古墳時代後期の紡錘車である。滑石製で、塚田2号墳など周辺の埋没古墳から出土した可能性が高い。13～14は土師器皿、15は茶釜の蓋で、南伊勢中世Ⅲ b 期と考えられる。

**S D 3 出土遺物**(16～19) 下層出土16～17は古墳時代後期の甕である。17～19は土師器鍋で、南伊勢中世Ⅲ b 期に相当する。

**S K 7 出土遺物**(20～24) 20～22は土師器皿、23～24は土師器鍋で、これらはS D 1 と同じく南伊勢中世Ⅲ b 期の状況を示している。

**S D 13 出土遺物**(25～27) 25は平安時代後期の土師器小皿で、混入品。26～27は猿投・知多産の山茶碗で、藤澤編年の第5型式に相当する。

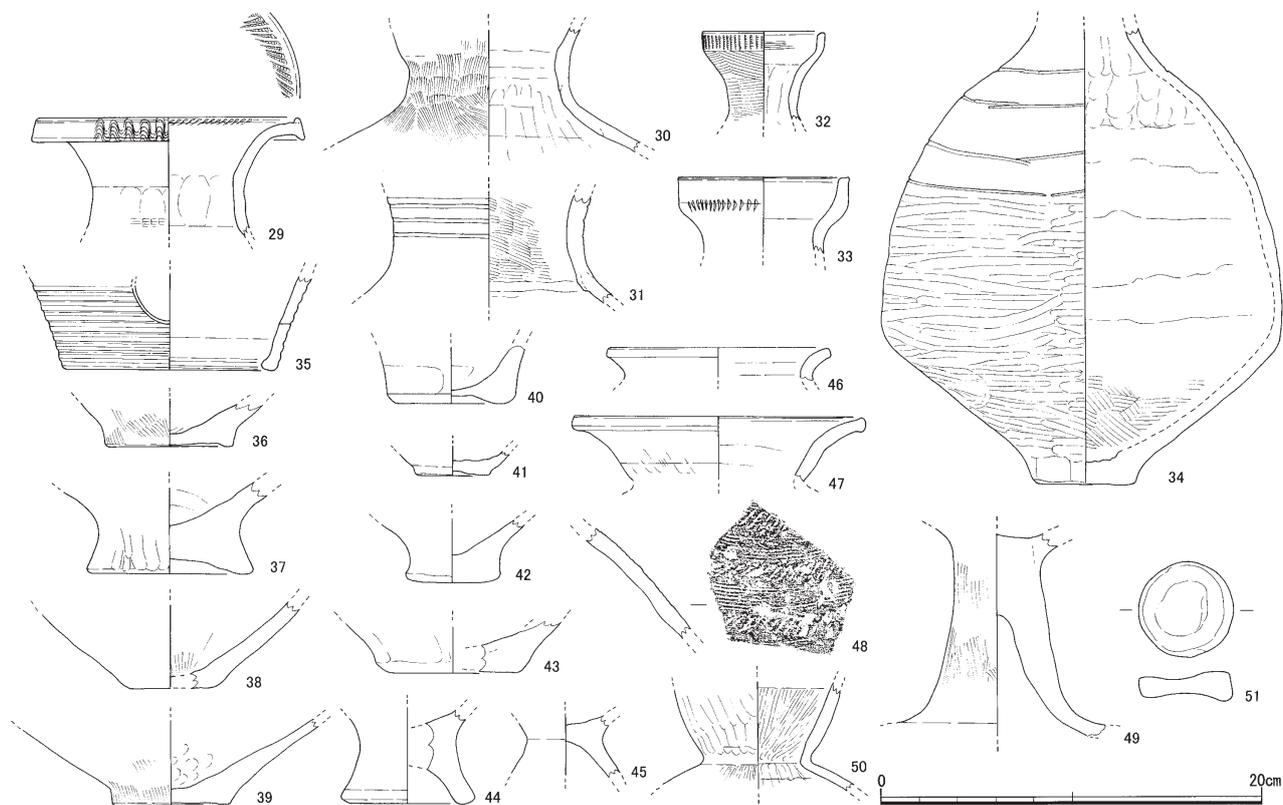
**b S R 15 出土土器**

**最下層出土遺物**(29～51) S R 15 堰周辺もしくは最下層から出土した遺物で、弥生時代中期から古墳時代前期の土器群である。29～30は壺の口縁部および頸部で、時期は第Ⅲ様式期後半頃と考えられる。

31～35は弥生時代中期の範疇におさまるもの。34は壺で、体部はほぼ完形。35は弥生第Ⅳ様式期に畿内で見られる台付無頸壺の台部である。円形の透孔があり、下半に凹線文を巡らすもので、玉城町波瀬B 遺跡から完形が出土している。<sup>(註2)</sup> 36～44は甕もしくは壺の底部で、中期もしくは後期のもの。45～46は甕で、45は脚台部、46は口縁部。47は壺の口縁部で、時期は後期前半のもの。49は高坏で、時期は後期前半か。51は加工円盤であるが、全体的に摩滅しており調整等不明である。

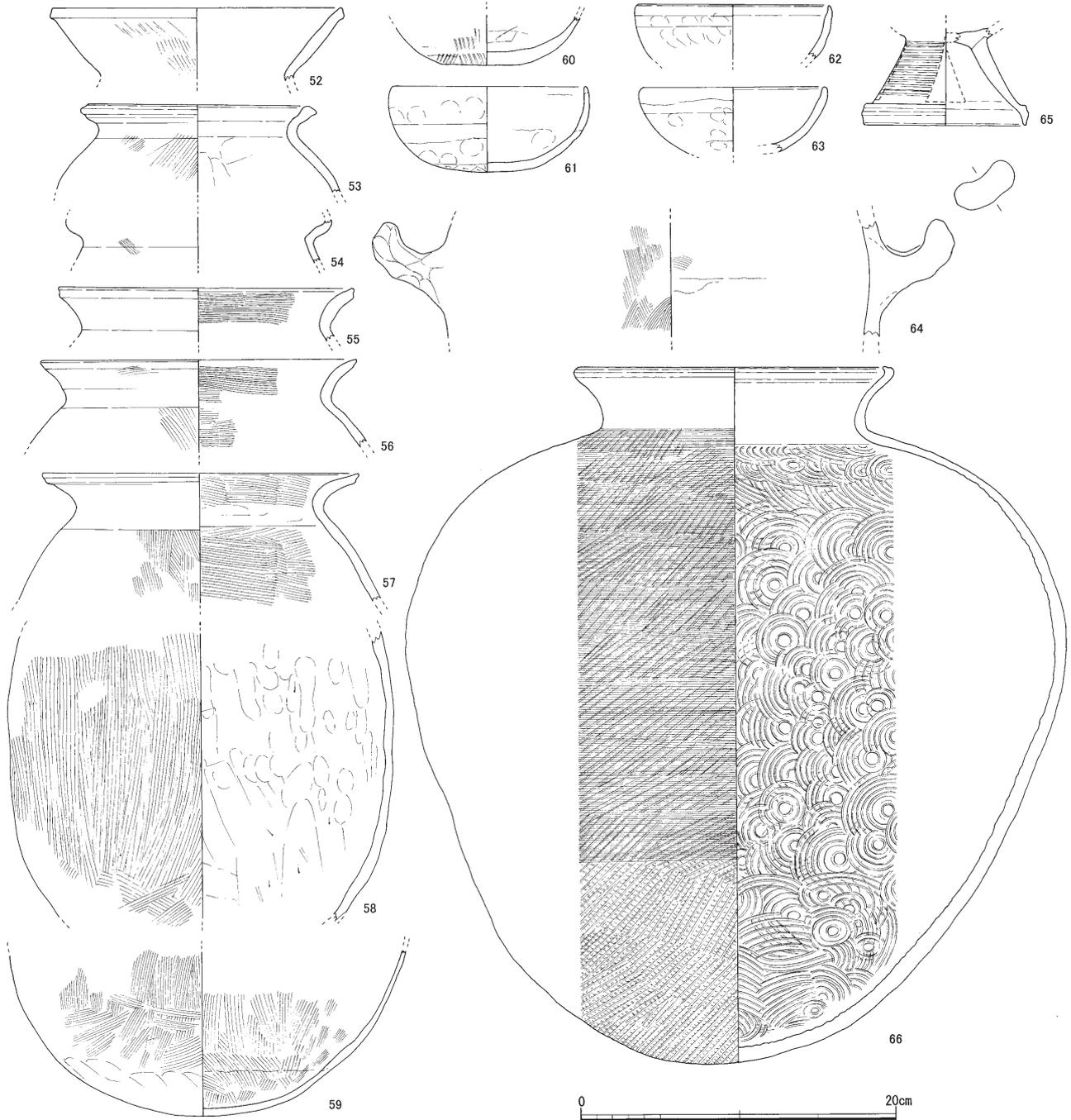
**下層出土遺物**(52～66) いずれも堰周辺で出土した。52～53は比較的古い様相を示すもので、53の台付甕はS 字甕D 類に近い形状を持つもの。54～60は甕もしくは長胴甕片である。59は堰1 で検出した筵直上から出土した。61から63は土師器碗で、いずれも古墳時代後期。

須恵器高坏(65)は透孔を4方向にもつが、形態から田辺編年T K 23～47型式に併行すると考える。66は体部外面にタタキのちカキメを施し、田辺編年T K 217型式に相当する。

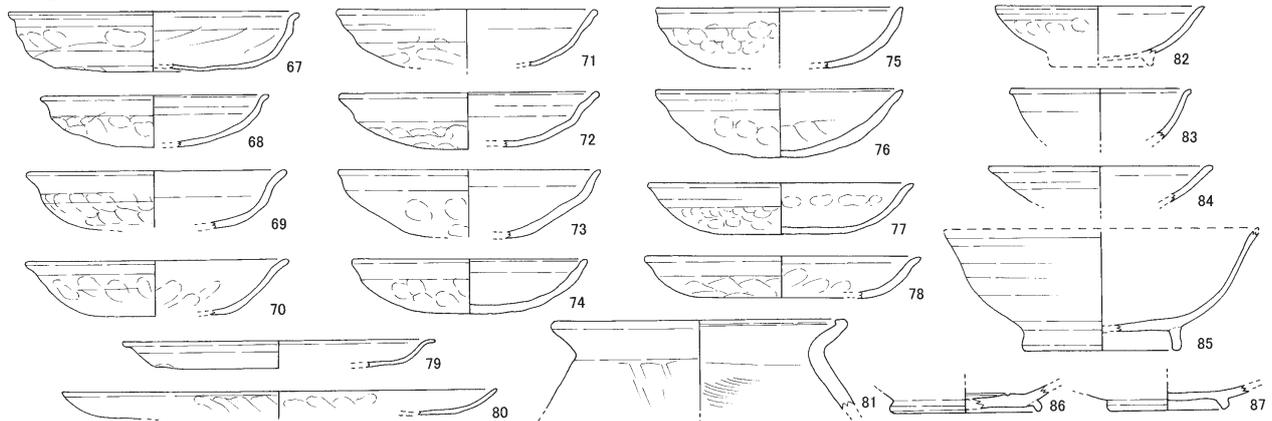


第Ⅳ-19図 田丸道遺跡出土遺物実測図(2)…S R 15最下層(1 : 4)

下層

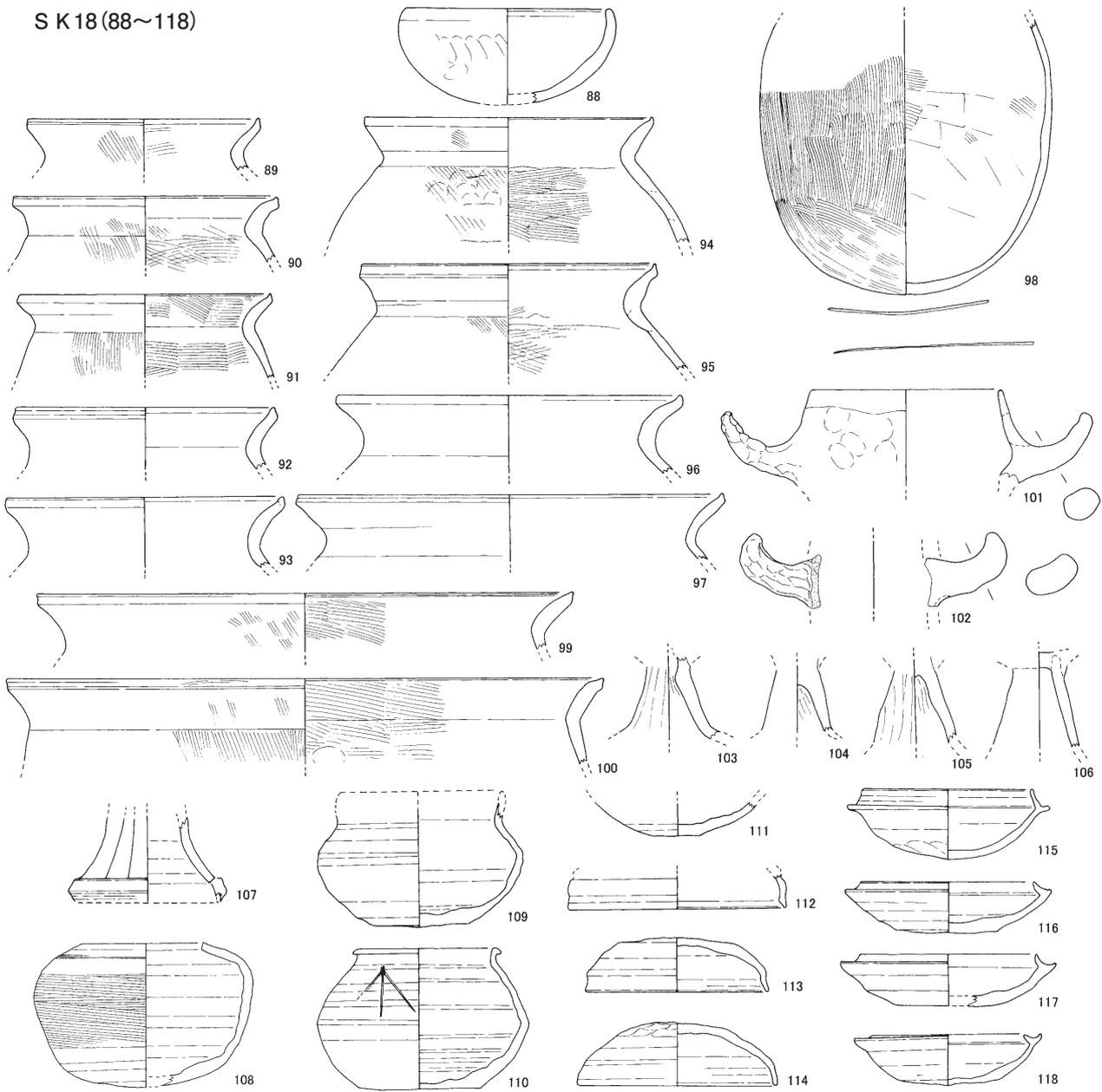


上層

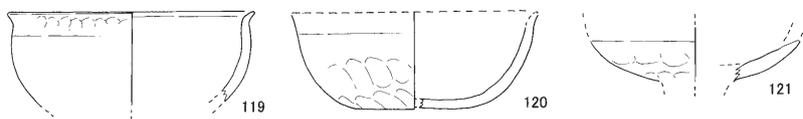


第IV-20図 田丸道遺跡出土遺物実測図(3)…S R 15下層・上層 (1 : 4) (下層 : 52 ~ 66、上層 : 67 ~ 87)

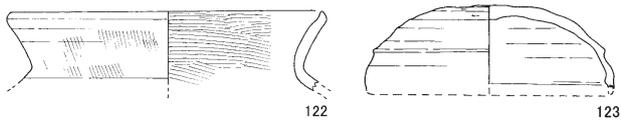
S K 18 (88~118)



S K 20 (119~121)

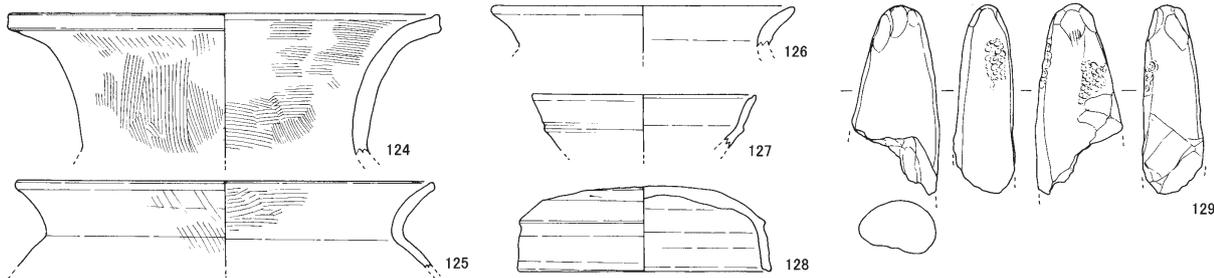


S K 21 (122~123)

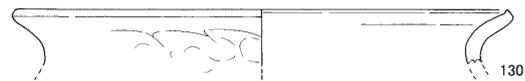


第IV-21図 田丸道遺跡出土遺物実測図(4)…調査区北部(S K 18・S K 20)(1 : 4)

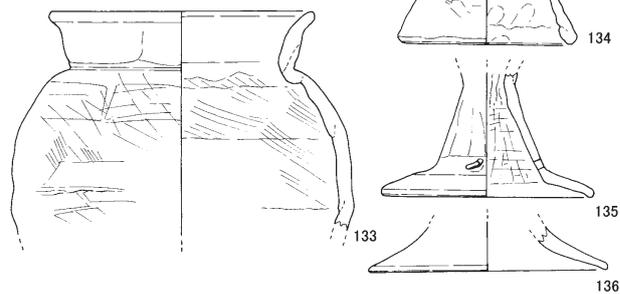
S K 28 (124~129)



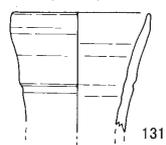
S K 31 (130)



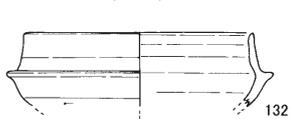
S K 34 (133~136)



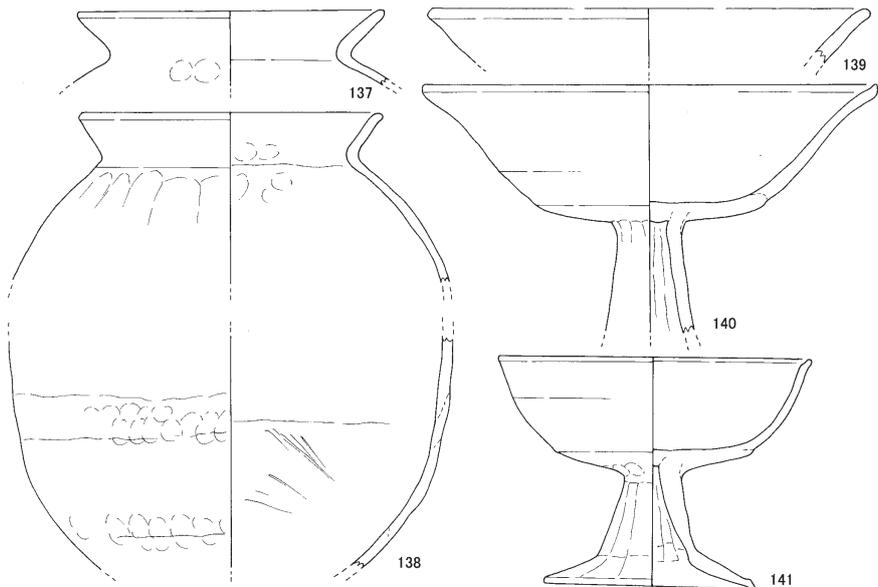
S K 33 (131)



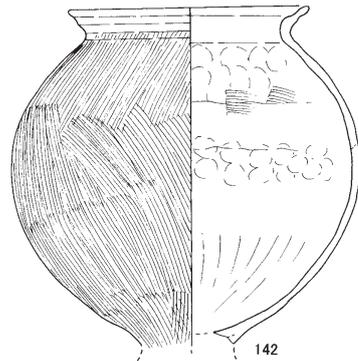
S K 38 (132)



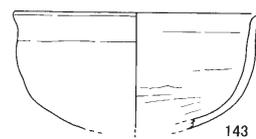
S H 40 (137~141)



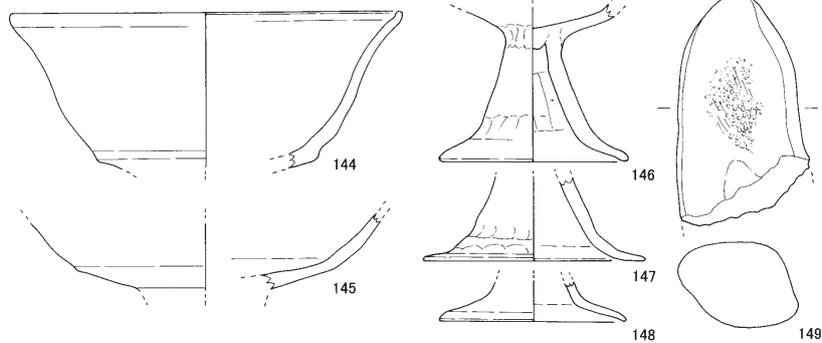
N 152 Pit1 (142)



N 164 Pit4 (143)



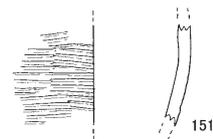
N 156 Pit1 (144~149)



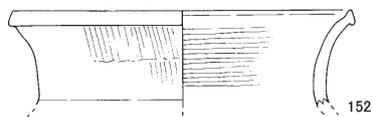
N 164 Pit3 (150)



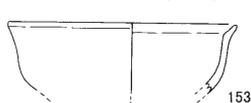
N 168 Pit4 (151)



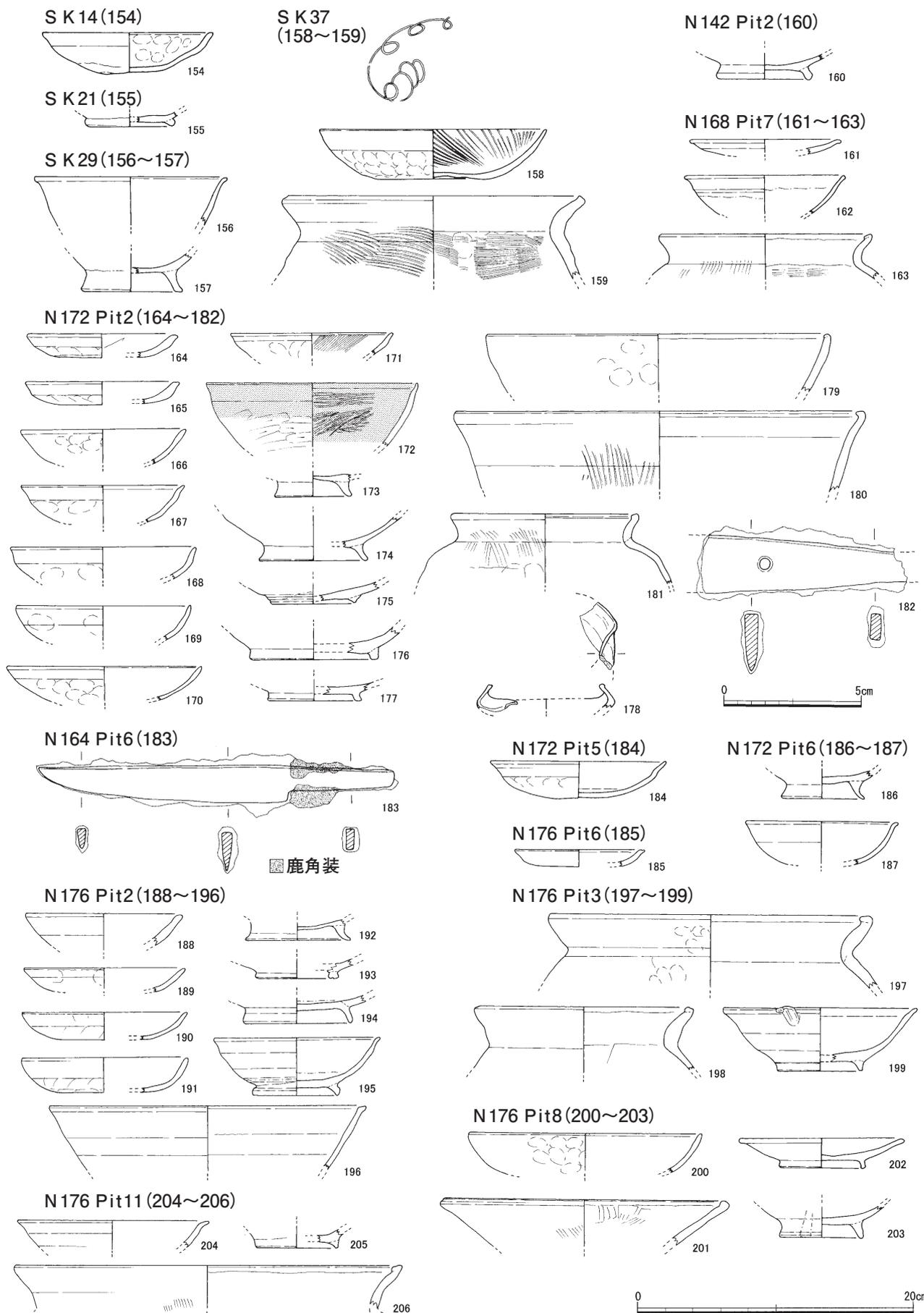
N 168 Pit5 (152)



N 176 Pit4 (153)



第IV-22図 田丸道遺跡出土遺物実測図(5)…調査区北部(SK・SH・Pit) (1:4)



第IV-23図 田丸道遺跡出土遺物実測図(6)…調査区北部(SK・Pit) (1:4) (182・183は1:2)

**上層出土遺物(67～87)** 67～78は土師器坏。67は体部下半部にケズリがみられるやや古い様相を示し、時期は斎宮編年第Ⅰ期第4段階～第Ⅱ期第1段階と考えられる。土師器坏(68～78)、皿(79～80)、甕(81)は、概ね斎宮編年Ⅲ期に相当する。82は土師器の小椀で、おそらく高台をもつものである。

83は緑釉陶器椀で、美濃産と考えられる。84～87は灰釉陶器の椀と皿で、高台の形から、猿投窯H72型式併行期であろう。

**c 調査区北部の出土土器・金属製品(古墳時代)**

**S K 18出土遺物(88～118)** 88～106は土師器である。88は椀、89～97は甕の口縁部。98は長胴甕で、底部外面に2本の線刻が施される。99～102は鉢片、103～106は高坏の脚柱部である。

107～118は須恵器である。107は高坏で、田辺編年T K 23～MT 15併行期と考えられ、他の遺物に比べやや古い様相を示す。108は無頸壺か。109～110は短頸壺で、110は口縁部の形態から田辺編年T K 217型式の古い段階であろうか。111は壺の底部。112～114は坏蓋で、112がやや新しく、113と114は同時期であるが系統が異なっているものである。115～118は坏身で、115がやや古い様相を示す。蓋坏の時期は、概ね田辺編年T K 217型式併行期であろう。

**S K 20出土遺物(119～121)** 119～121は土師器椀、121は土師器高坏で、いずれも古墳時代後期のものである。

**S K 21出土遺物(122～123)** 122は土師器甕。123は須恵器坏蓋で、田辺編年T K 10型式に併行する。

**S K 28出土遺物(124～129)** 124は土師器壺、125～126は土師器甕である。127は須恵器の高坏で、自然釉が付着している。128は須恵器坏蓋で、田辺編年MT 15型式併行期であろう。129は叩き石である。

**S K 38出土遺物(132)** 132は須恵器坏身で、時期は田辺編年MT 15型式併行期と考えられる。

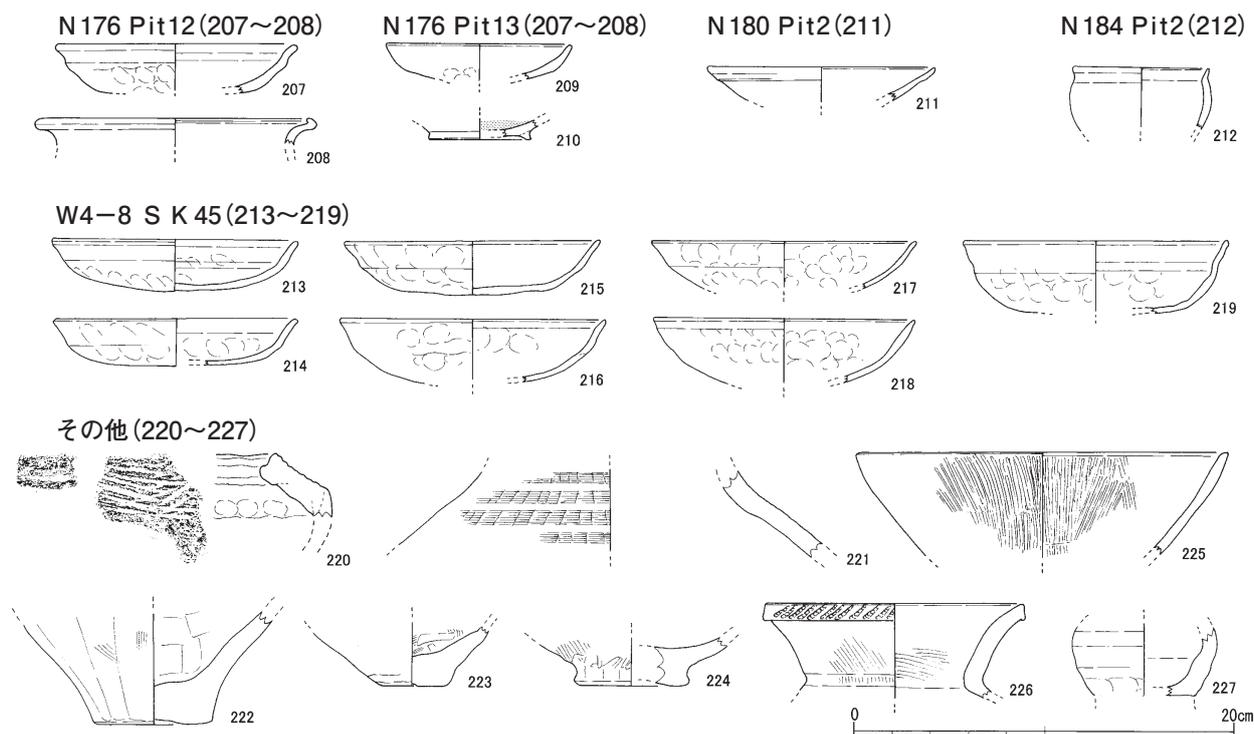
**S H 40出土遺物(137～141)** 土師器がまとまって出土した。137～138は甕、139～141は高坏で、いずれも古墳時代後期の範疇におさまるものである。

**N 156ピット1出土遺物(142)** ほぼ完形のS字状口縁甕体部片で、口縁部の形態からD類に相当する。

**d 調査区北部の出土土器・金属製品(平安時代)**

**S K 37出土遺物(158～159)** 158は土師器坏で、坏部内面に放射状暗文+螺旋状暗文が施されている。159は土師器甕で、これらは斎宮編年Ⅱ期第2段階に相当すると考えられる。

**S K 29出土遺物(156～157)** 156は緑釉陶器椀の高台で、美濃産。157は土師器の椀。



第Ⅳ-24図 田丸道遺跡出土遺物実測図(7)…調査区北部(Pit・その他)(1:4)

**N168ピット7出土遺物**(161～163) 161は緑釉陶器の皿で、深緑の釉がかかっており美濃産と考えられる。162は灰釉陶器の小椀で渥美産。163は土師器甕である。

**N172ピット2出土遺物**(164～182) 164～171は土師器坏で、いずれも斎宮第Ⅱ期第4段階に相当する。172は黒色土器の椀で、大川編年における平安時代V期の椀Bである。173～174はロクロ土師器の椀。175～176は灰釉陶器の椀で、時期はH72型式期の10世紀後半頃。177～178は軟胎の緑釉陶器で、いずれも東濃産と考えられる。177は椀である。178は耳皿で、破片資料だが、伊藤編年の耳皿3類であろうか。<sup>(3)</sup> 179～180は土師器鉢で、180は大型のもの。181は土師器甕である。182は刀子片であるが柄縁装は認められず、木質等も不明である。鑿などで切断した可能性がある。

**N164ピット6出土遺物**(183) 183は茎部を鹿角装で拵えている。鹿角の下地に有機物の付着がみられるが、布地か木質かは不明である。

**N176ピット2出土遺物**(188～196) 188～192は斎宮第Ⅲ段階前半に併行する土師器で、188～190は皿、191は坏、192は椀である。193は軟胎の緑釉陶器で近江産。194～195は灰釉陶器椀、196は灰釉陶器鉢である。いずれもH72型式に併行するもの。

**N176ピット8出土遺物**(200～203) 200は土師器坏、201は土師器鉢である。202は完形の緑釉陶器皿で、軟胎であり東濃産と考えられる。高台内面まで釉薬が施されており、一部欠損した口縁部は意図的な打ち欠きの可能性がある。203は灰釉陶器椀で、高台部の形状がH72型式に相当する。

#### e 東西調査区出土土器・その他

**N172ピット2出土遺物**(213～219) 土師器坏である。いずれも坏部外面に圧痕跡が多くみられ、斎宮編年第Ⅱ期第4段階と考えられる。

**その他**(220～227) 遺構に伴わないものや、包含層出土のものを「その他」とした。出土した地点は、主に南北調査区S K18周辺である。

220は条痕紋系土器様式の一器種、内傾する非常に厚い口縁部を持ついわゆる「厚口鉢」で、弥生時代前期後半から中期前葉にかけて、尾張平野から三河を中心とした地域に分布する土器である。<sup>(4)</sup> 口縁端

部と口縁部外面に貝殻条痕文がみられるが、比熱を受けた痕跡は認められない。伊勢湾を介した搬入品で、三重県内では鈴鹿市域の東庄内B遺跡や須賀遺跡に分布する<sup>(5)</sup>。

227は須恵器のミニチュア壺で、底部が剥離していることから、子持ち高坏の壺の可能性はある。

#### f S R15出土木製品

木製品は、S R15下層以下から出土しており、全て古墳時代後期に製作されたものと考えられる。製品・建築部材と、築堤に用いられた杭にわけて記述した。なお、杭に転用された部材は、製品として記述している。<sup>(6)</sup>

**木札**(228) 木簡状の木札で、堰1上部から出土した。残存長12.7cm、残存幅1.5cmで、右上はほぼ直角に成形しており、右辺には紐のようなものを括り付けた圧痕が3カ所みられる。厚みは2.5cmである。表面には炭素反応を示す墨痕が認められるが、文字は判別できない。

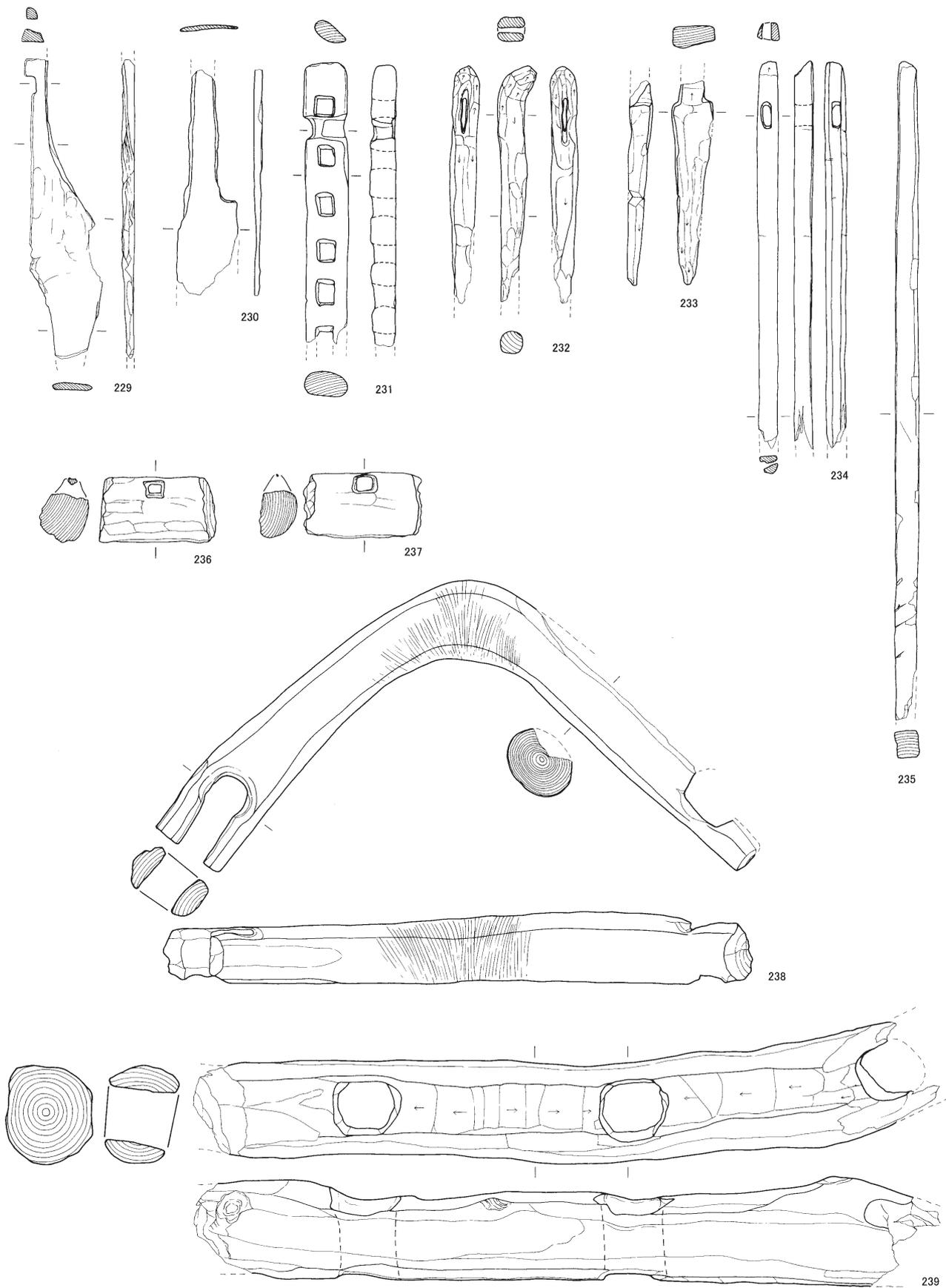
**農耕具**(229～231) 229はナスビ形曲柄又鋏で、片側のみ残存している。231は方形枠付田下駄の枠木で、形状から右側後ろの外側枠板と考えられる。

**工具**(232～233) 鎌の柄であるが、いずれも杭に転用されており尖端が折損している。

**編み具**(234～237) 234は高機部材「経返し具」と推測されるもので、糸による擦痕がある。<sup>(7)</sup> 不明材・残材とした262～263も、織機の可能性がある。

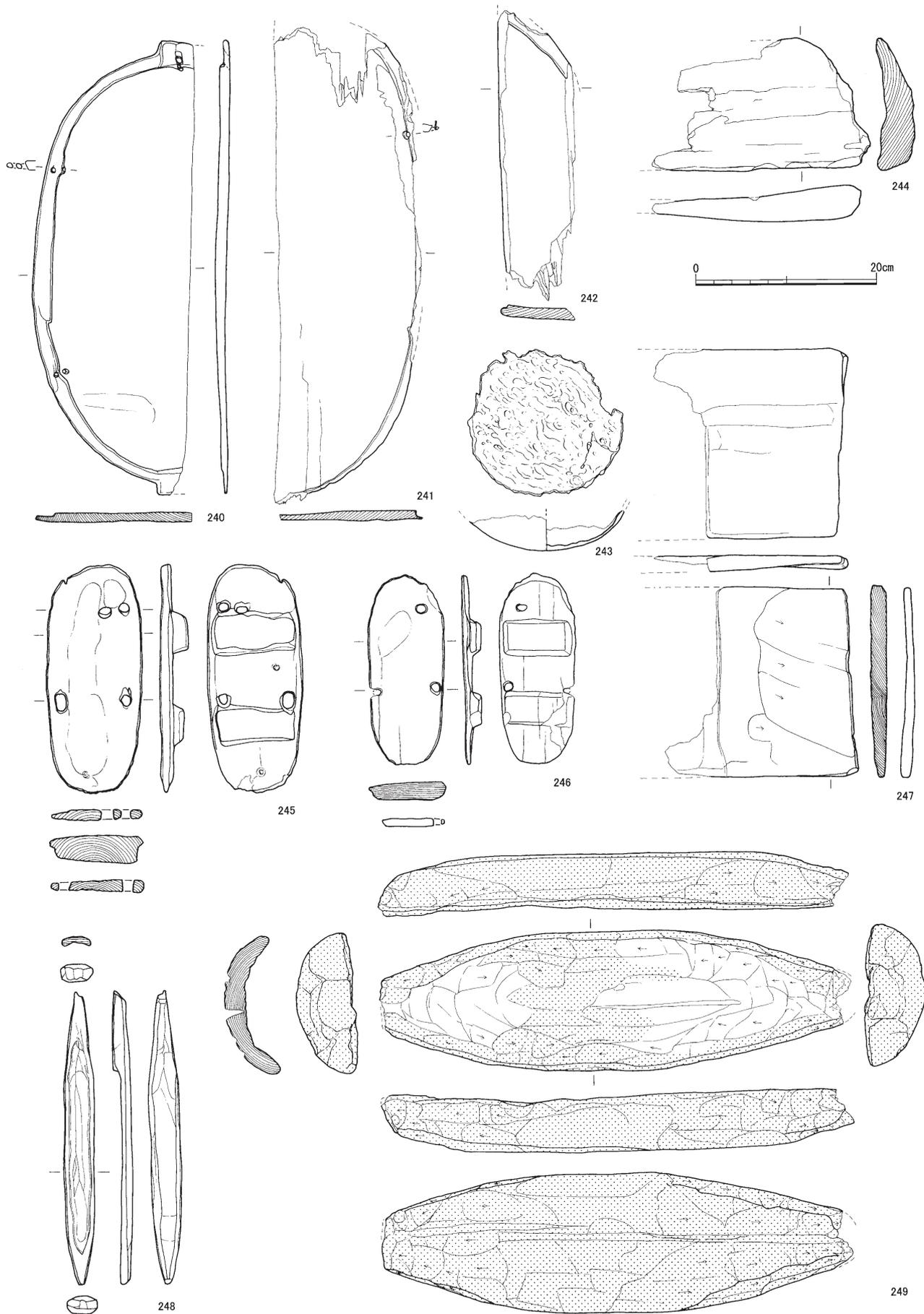


第IV-25図 田丸道遺跡出土遺物実測図(8)  
写真IV-1 木札の赤外線写真

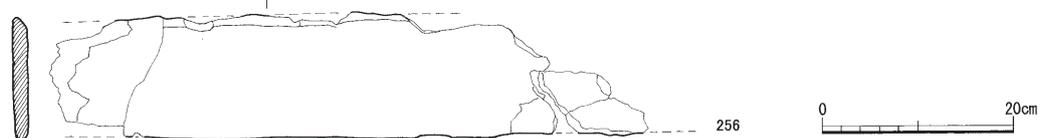
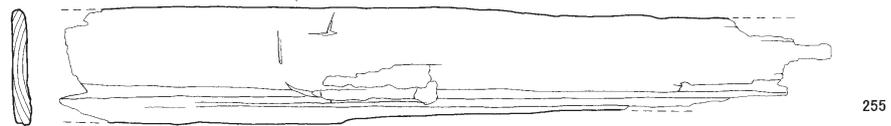
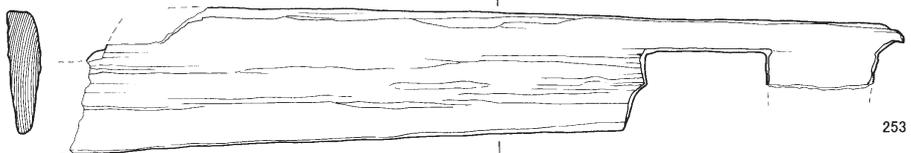
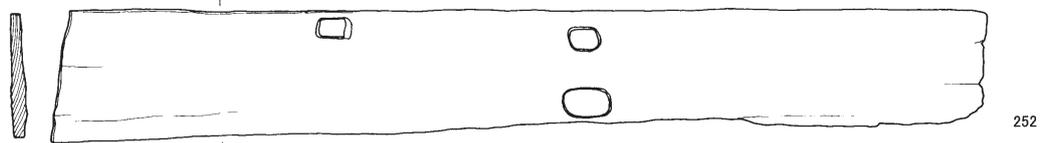
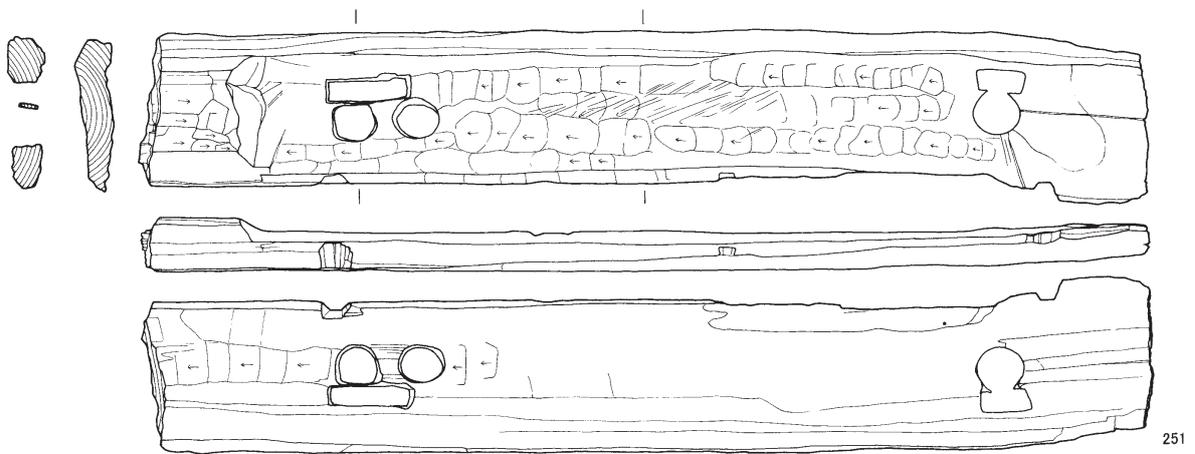
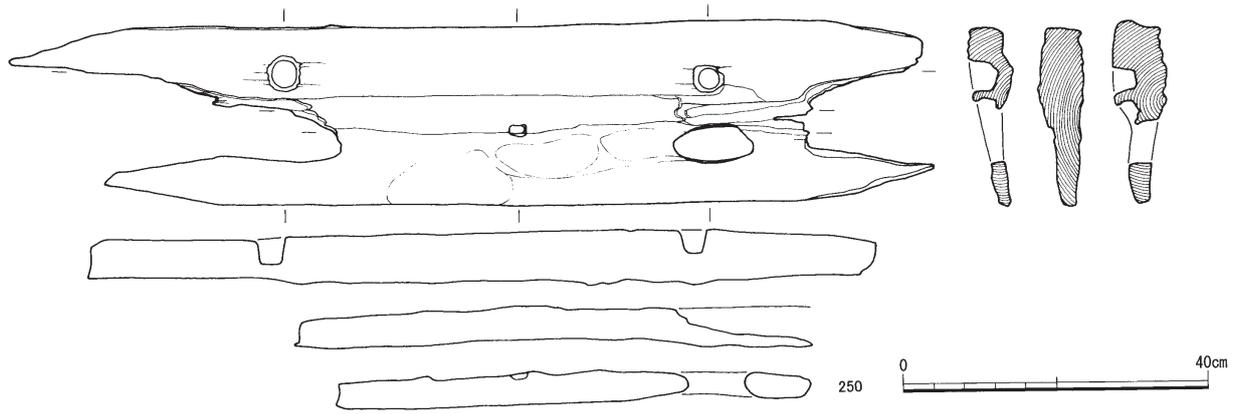


第IV-26図 田丸道遺跡出土遺物実測図(9)…SR15 (1:6)

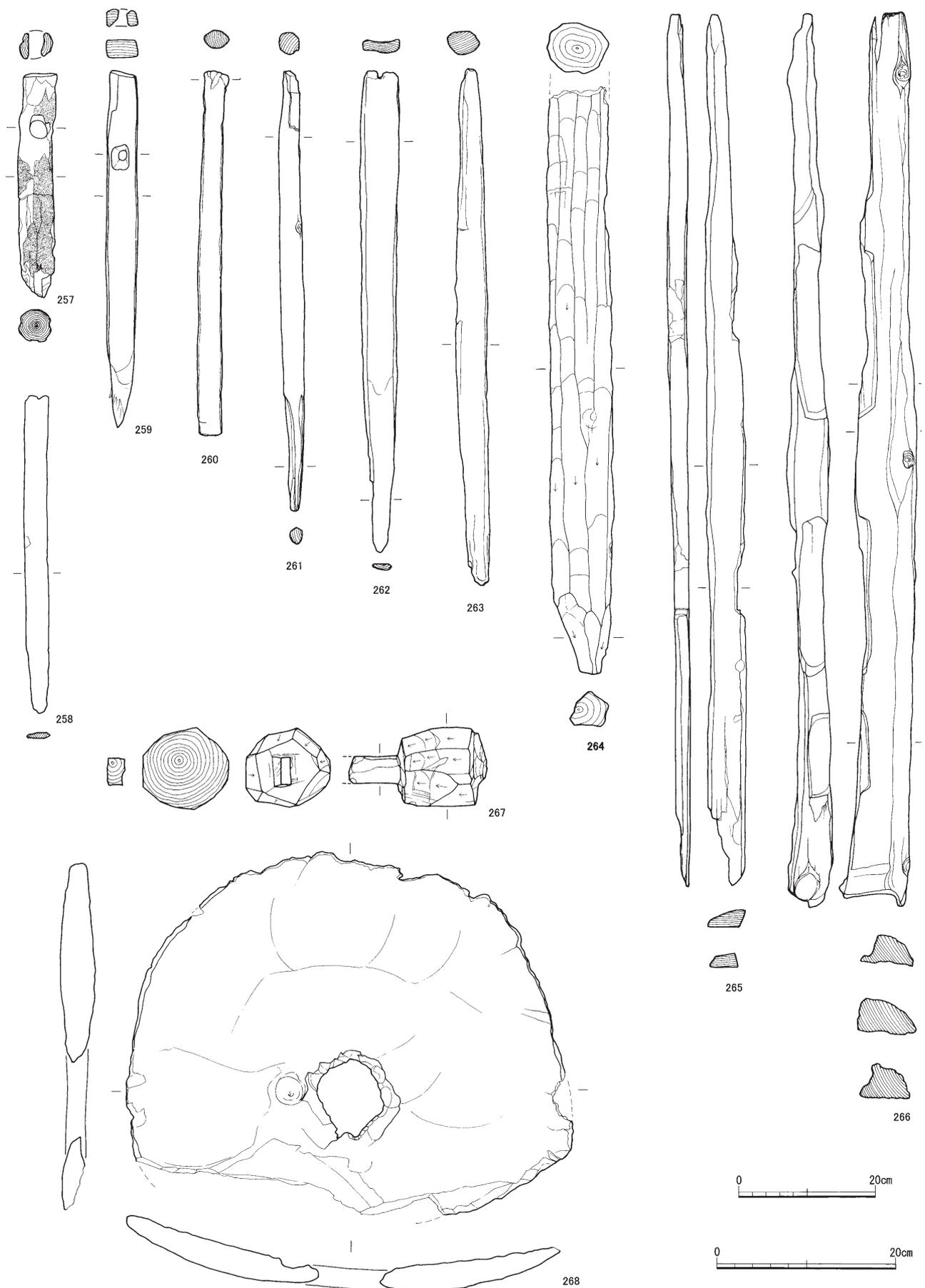
0 20cm



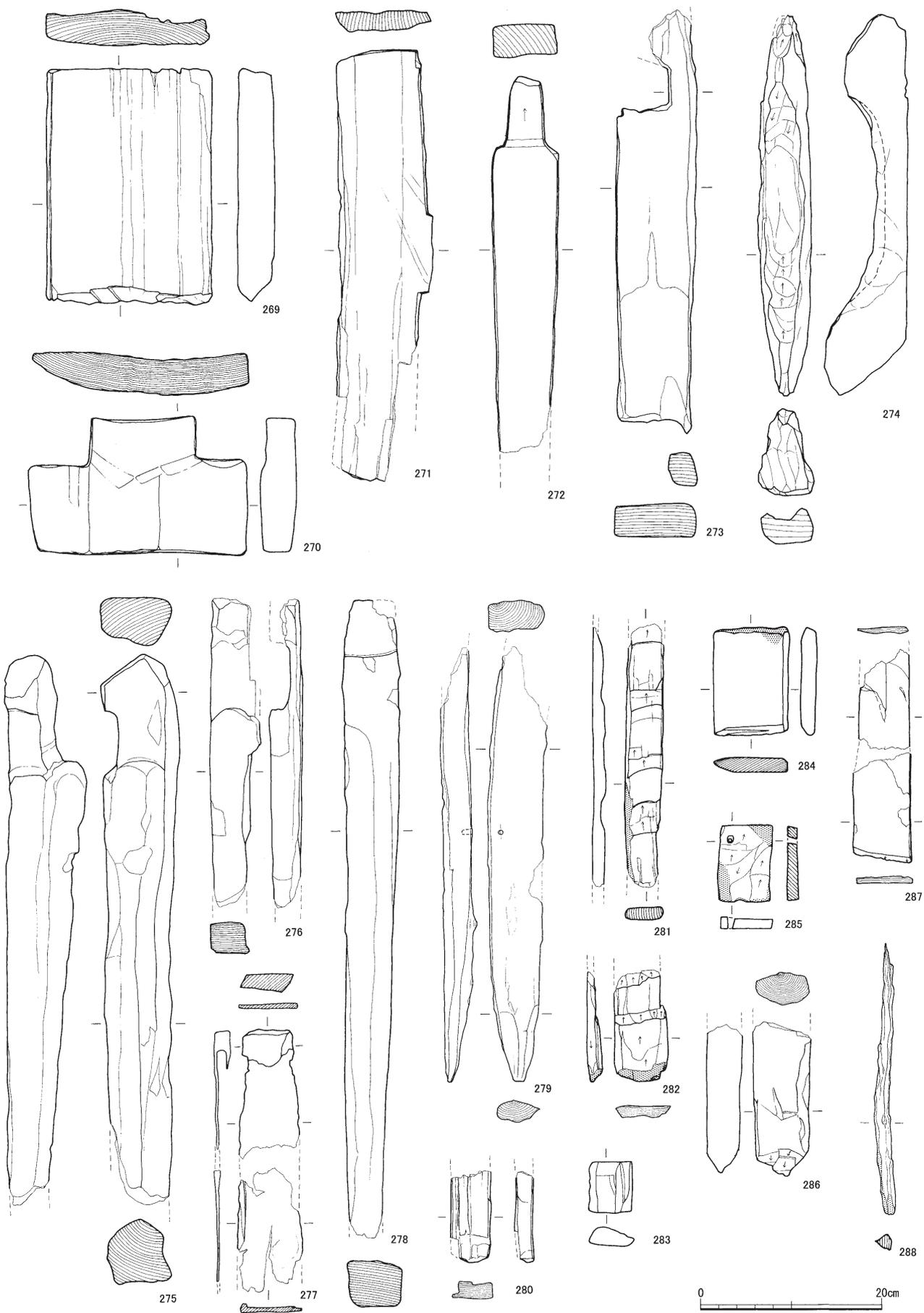
第IV-27图 田丸道遺跡出土遺物実測図(10)…SR15 (1:6)



第IV-28図 田丸道遺跡出土遺物実測図(11)…SR15 (250は1:10、その他1:8)

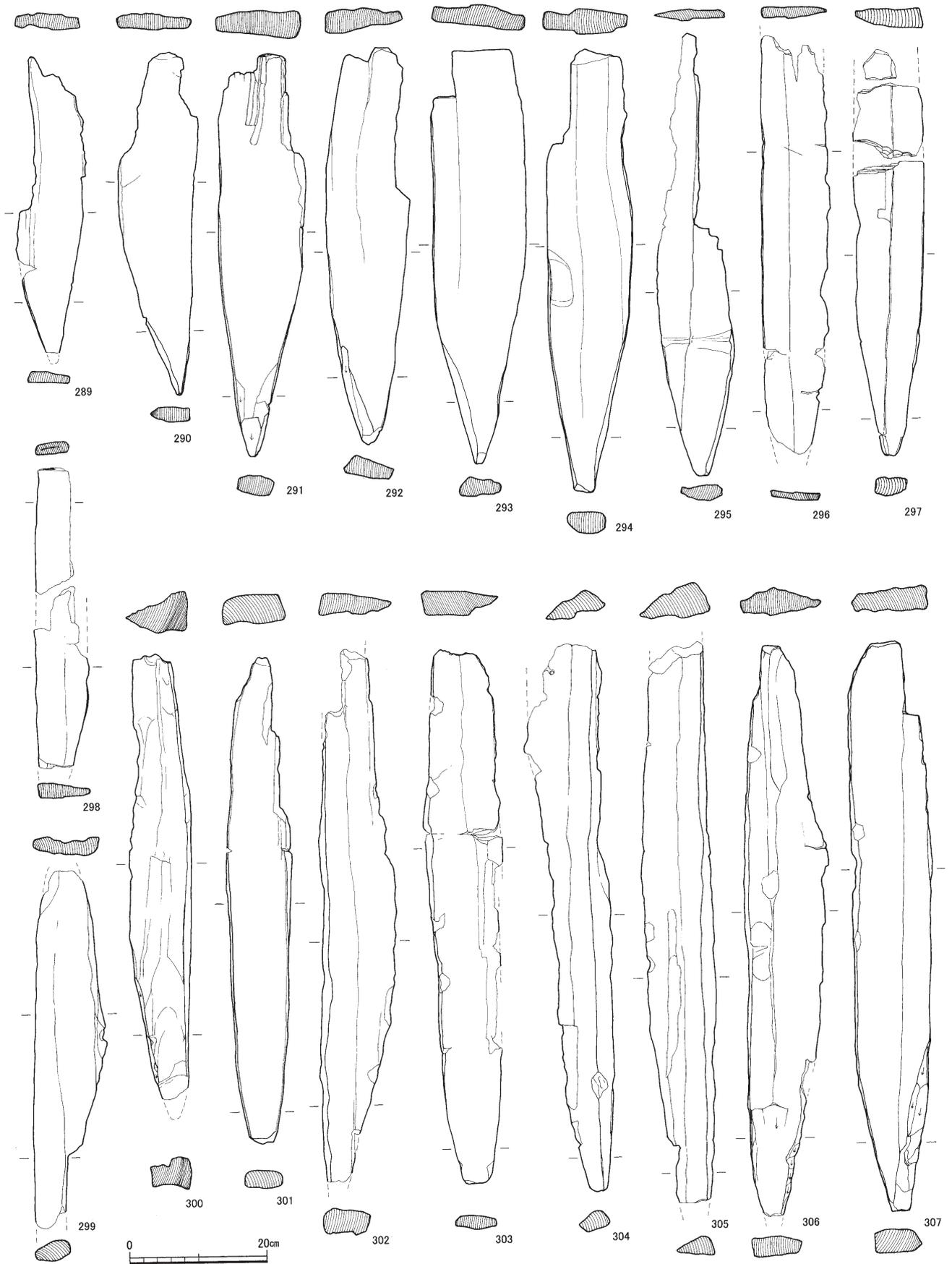


第IV-29図 田丸道遺跡出土遺物実測図(12)…S R 15 (265～266は1：8、その他1：6)



第IV-30図 田丸道遺跡出土遺物実測図(12)…SR15 (1:6)

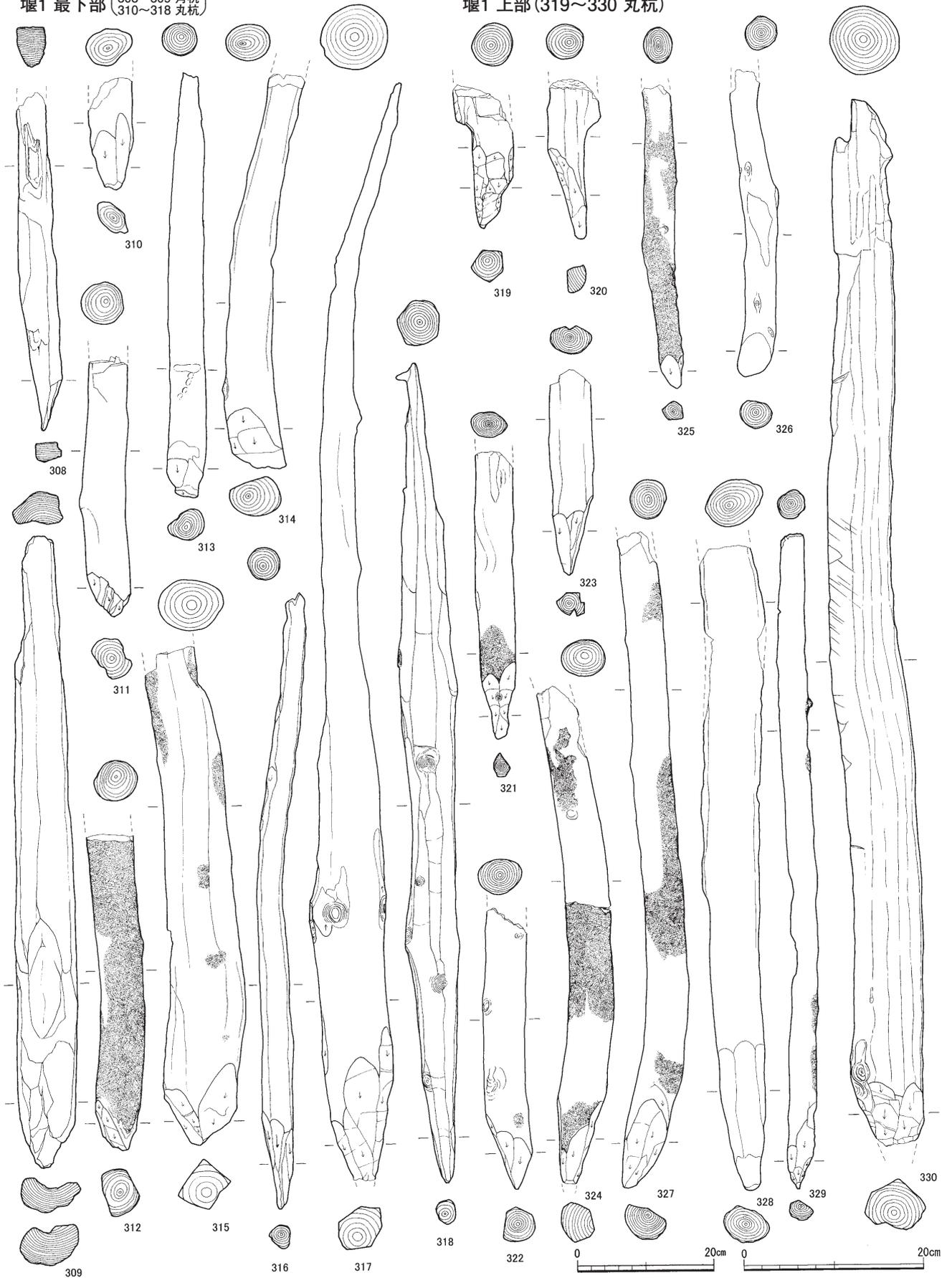
堰1 最下部 (289~307 板状杭)



第IV-31图 田丸道遺跡出土遺物実測図(14)…SR15 (1:8)

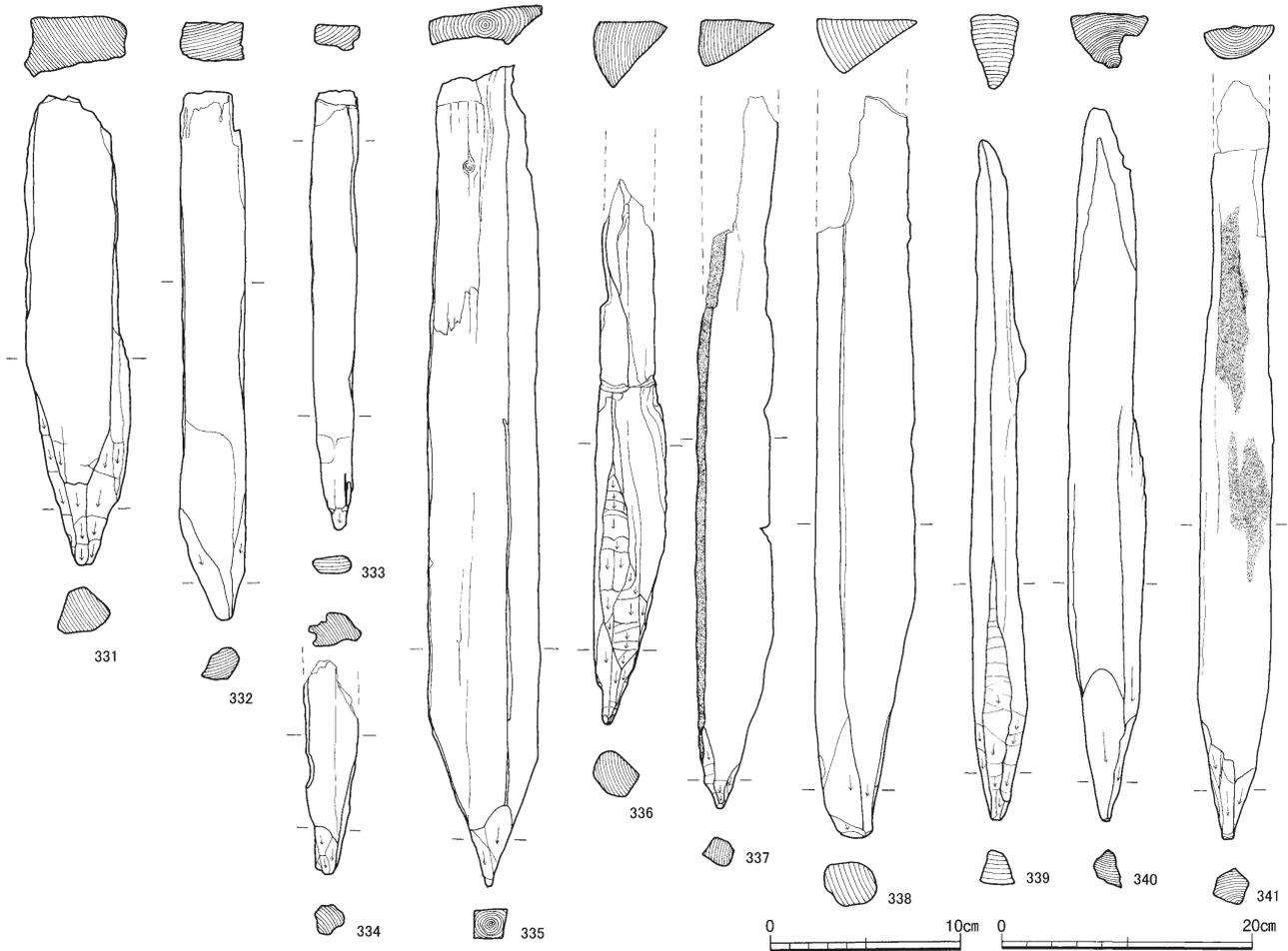
堰1 最下部 (308~309 角杭)  
(310~318 丸杭)

堰1 上部 (319~330 丸杭)



第IV-32図 田丸道遺跡出土遺物実測図(15)…S R 15 (390は1 : 8、その他1 : 6)

堰2 (331~342 角杭)

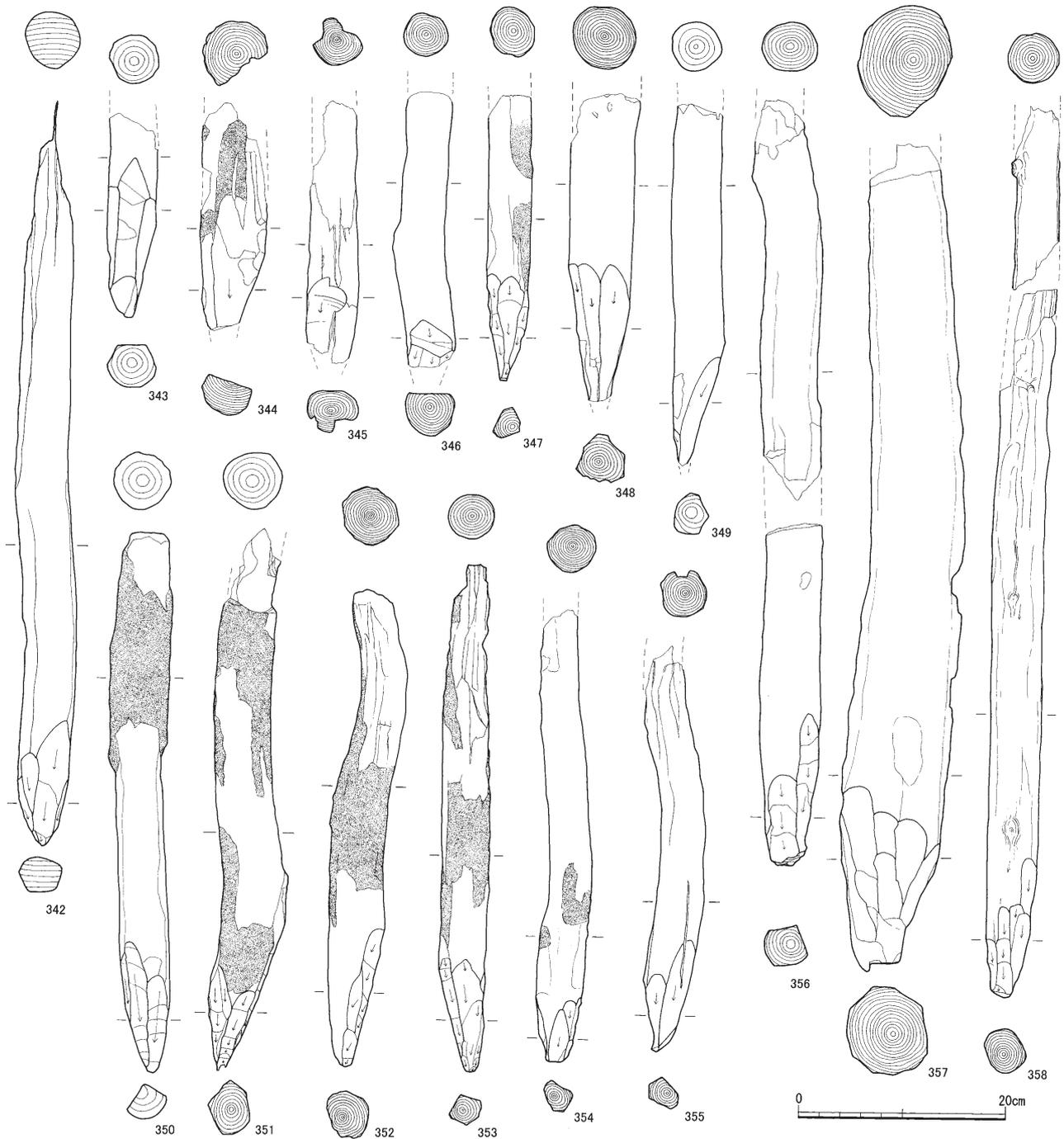


第IV-33図 田丸道遺跡出土遺物実測図(16)…SR15 (331~334は1:6、その他1:8)

236~237は木錘で『木器集成』で5類とされるもの。  
**運搬具**(238~239) 238は軛である。239は櫓の左側滑走台で、芯持ち材を利用する。内面にあたる側は平坦になるよう調整され、下面は曲面を呈する。  
**容器**(240~242) 240~242は曲物底板である。大型品(240~241)は、桜の綴じ皮が残存している。243は樹皮を利用した容器と考えられ、底部のみ残存する。244はアスナロを用いた材である。白とは木取りが異なり、一木鋤の場合はカシを用いるため、大型の槽や盤の未製品と想定される。  
**装身具**(245~246) 右足用の下駄で、245は親指の踏み込み痕が明瞭に残る。  
**祭祀具**(248~249) 舟形木製品が2点出土した。248は32cmの小型品。アスナロ材を用い側面を精巧に作ったもので、船尾などの表現がみられる。一方、51cmの大型品(249)はコウヤマキの丸太材の中心部分をくり抜いたもので、全面に焼けが残る。

**建築部材**(250~256、264~268) 250~251は高床倉庫の扉口に据え置かれる材である。250は観音扉用の蹴放し材で、両側端部に柱固定用の両つの造り出しが存在している。材のほぼ中央にある方形状にくぼんだ軸釣穴を中心として、縦壁板(方立)をはめ込むための円形状のくぼみ・溝・楕円形の穿孔が一对ある。扉口部分の柱間は50cm、1枚約25cmの扉板が想定される。木取りは桁目ではなく、細い木の端を利用した板目材で、粗い造りになっている。251は楣材で、柱間は約60cm。扉の振れ止め機能を持つ突起は材側面部にあり、断面はL字状を呈する。<sup>(8)</sup>  
 264は丸太材を用いた面取り束柱である。杭に転用されているため両端は欠損しているが、全面に手斧による丁寧な削りが施される。267はほぞを持つ五画柱の部材で側面は丁寧に削られており、天地は凸状と考えられるが、用途は不明である。268はクスノキの樹皮を用いており、鼠返しと考えられる。

堰2 (343~358 丸杭)



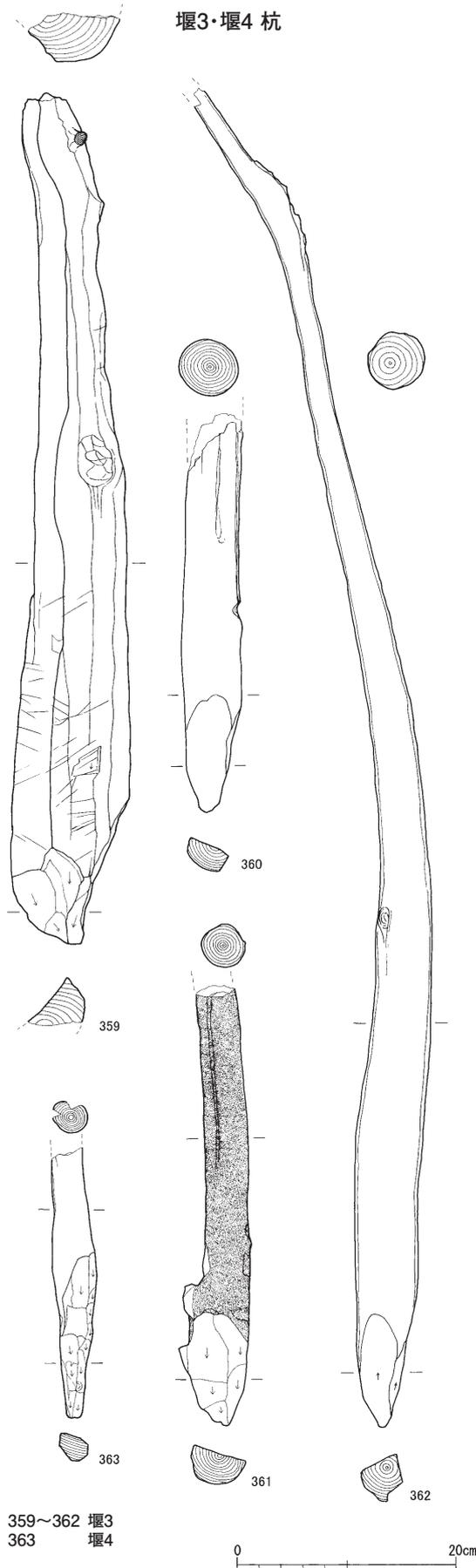
第IV-34図 田丸道遺跡出土遺物実測図(17)…SR15 (1:6)

不明品・残材(257~263、269~287) 275は、断面形態から校倉造りなどの壁板材か。288は火付け木。

堰1出土 杭(289~330) 289~307は堰1最下部出土の板状杭で、堰の基部を構成していたものである。樹種は289以外全てコナラで、いくつかは木の捻れや節が同一であることから、同時期に伐採・加工されたと推測される。308~309は堰1最下部出土角杭である。310~318は堰1最下部出土の丸杭で、

芯持ち丸太材。315・318は横木の可能性がある。319~330は堰1上部出土の丸杭で、樹皮を残したまま使用されているものが多い。

堰2出土 杭(331~358) 331~342は角杭で、ヒノキなどの建築部材を転用した可能性が高い。蜜柑割の杭は、堰2の北側に集中しており、樹皮が残るものが散見される。342は断面が円形状の辺材である。343~358は丸杭で、芯持ち丸太材である。径



堰3・堰4 杭

359~362 堰3  
363 堰4

0 20cm

の小さいものは樹皮が残っており、これらは堰2北側で蜜柑割材の合間を縫うように刺さっていたものである。大型品(256~258)は堰2の南北両端で出土しており、小型品とは用途が異なる。

**堰3出土 杭(359~362)** 359は側面に面をもち擦痕があることから、転用材の可能性はある。

**堰4出土 杭(363)** 堰4出土の丸杭で、自然木を用いた大型品である。

[註]

(1) 編年・時期に関しては、以下の編年を参考にした。

- ・上村安生「伊勢・伊賀地域」(『弥生土器の様式と編年』木耳社、2002年)
- ・田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ、1966年)、田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1980年)
- ・斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』(2001年)
- ・古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』(1992年)、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(1976年)
- ・大川勝宏「斎宮の黒色土器—供膳形態を中心に—」(『斎宮歴史博物館 研究紀要』2 斎宮歴史博物館1993年)
- ・伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」(『三重県史』資料編 考古2、2008年)
- ・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター、1994年)
- ・藤澤良祐ほか『愛知県史』別編窯業2 中世・近世 瀬戸(2007年)
- ・柴垣勇夫ほか2012『愛知県史』別編窯業3 中世・近世 常滑系(2012年)

(2) 三重県埋蔵文化財センター『波瀬B遺跡発掘調査報告』(1992年)

(3) 伊藤正人「耳皿ノート」(『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会、2000年)

(4) 永井宏幸「条痕紋系土器様式の研究」(『研究紀要』愛知県埋蔵文化財センター、2007年)

(5) 三重県教育委員会「東庄内B遺跡」『日本道路公団 東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(1970年)、鈴鹿市考古博物館『須賀遺跡(第5次)』(2012年)

(6) 木製品の器種名に関しては、以下を参考にした。

- ・上原真人『木器集成図録 近畿原始篇(解説)』(奈良文化財研究所、1993年)
- ・三重県埋蔵文化財センター『六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)』(2002年)

(7) 穂積裕昌「古墳時代機織研究の新展開」(『研究紀要』三重県埋蔵文化財センター、2008年)

(8) 穂積裕昌「大溝出土の木製品について」(『松ノ木遺跡・森山遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1993年)、松岡良憲「古墳時代以前の扉口装置」(『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会、1997年)

第Ⅳ-35図 田丸道遺跡出土遺物実測図(18)…SR15(1:6)

第Ⅳ-2表 田丸道遺跡出土遺物観察表(1) (土器類等)

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	26-06	土師器 皿	N 8	SD1	(口)8.6 (高)2.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰黄褐10YR5/2	口縁部 2/12	
2	29-02	土師器 皿	N 8	SD1	(口)9.2 (高)1.9	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 2/12	体部内外面摩滅
3	28-04	土師器 茶釜	N 8	SD1	(口)15.4	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 3/12	
4	27-03	土師器 鍋	N 8	SD1	(口)29.0	外:ハケメ→口淵部ヨコナデ 内:ナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 3/12	煤付着
5	27-02	土師器 羽釜	N 8	SD1	(口)24.0	外:ハケメ→鈔部分ヨコナデ 内:ナデ→オサエ・工具痕	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
6	27-01	土師器 羽釜	N 8	SD1	(鈔)46.0	外:ハケメ→鈔部分ヨコナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	ツバ部 2/12	
7	29-03	陶器 (古瀬戸) 丸椀	N 8	SD1	(口)9.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:オリーブ黄5Y6/3	口縁部 2/12	古瀬戸産 口縁部に漆による補修痕あり
8	26-07	陶器 (山茶椀) 椀	N 8	SD1	(底)7.0	外:回転ナデ・底部糸切り→高台貼付 後ナデ 内:回転ナデ	密	外:灰黄2.5Y6/2 内:灰白N7/0	底部 3/12	第5型式。知多・猿投産 底部モミガラ痕あり
9	28-03	陶器 (常滑焼) 壺	N 8	SD1	(口)15.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:灰白5Y7/1 内:赤灰2.5YR4/1	口縁部 3/12	常滑産
10	28-02	陶器 (常滑焼) ねり鉢	N 8	SD1	(底)13.6	外:オサエ 内:ナデ(研磨あり)	粗	外:にぶ赤褐2.5YR5/3 内:明褐灰5YR7/2	底部 2/12	常滑産
11	69-01	金属製品 ヤリガンナ	N 8	SD1	(長)4.65 (幅)1.5		-	-	-	重量:5.64g 厚み0.6
12	45-02	石製品 紡錘車	N 4	SK2	(底)4.2 (高)2.0	孔径0.8	-	-	ほぼ 充形	頂径1.9・重量:47.55g 滑石製・線刻なし
13	30-03	土師器 小皿	N 4	SK2 上層	(口)7.2	外:ナデ 内:ナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	
14	30-02	土師器 小皿	N 4	SK2 上層	(口)10.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/12	
15	30-01	土師器 茶釜 壺	N 4	SK2 上層	(口)16.0 (高)2.1	外:ヨコナデ→つまみ部分オサエ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:灰白2.5Y7/1	口縁部 1/12	室町後期
16	30-07	土師器 甕	N16-20	SD3	(脚台)10.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	外:浅黄橙7.5YR8/4 内:にぶい橙5YR7/4	脚部 2/12	
17	30-06	土師器 甕	N16-20	SD3	(口)14.6	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	密	褐灰7.5YR4/1	口縁部 1/12	
18	30-04	土師器 鍋	N16-20	SD3 上層	(口)28.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ・オサエ	やや 密	外:浅黄橙10YR8/4 内:浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1.5/12	
19	30-05	土師器 鍋	N16-20	SD3 上面	(口)29.6	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ・オサエ・工具痕あり	密	外:オリーブ黒5Y3/1 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12弱	
20	31-04	土師器 皿	N 4	SK7	(口)9.2	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	
21	31-03	土師器 皿	N 4	SK7	(口)11.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
22	31-05	土師器 皿	N 4	SK7	(口)12.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
23	31-02	土師器 鍋	N 4	SK7	(口)24.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・オサエ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12弱	
24	31-01	土師器 鍋	N 4	SK7	(口)32.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12弱	
25	63-03	土師器 小皿	N68-72	SR13 淡黄灰色層	(口)10.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや 密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3-4/12	平安後期
26	62-07	陶器 (山茶椀) 椀	N68-72	SR13 灰色粘土	(底)7.0	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付 後ナデ 内:回転ナデ・研磨	密	灰白5Y7/1	底部 4-5/12	猿投・知多産
27	63-01	陶器 (山茶椀) 椀	N68-72	SR13 灰色粘土	(底)7.6	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付 後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白7.5Y7/1	底部 4/12	猿投・知多産
28	31-06	青磁 皿	試掘	試掘坑 No.1	(底)6.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→進弁文→施釉	密	素地:灰N6/ 外:灰利-ブ 7.5Y5/2	底部 5/12	削り出し高台
29	41-05	弥生土器 壺 (口縁)	N108	SR15 下層	(口)14.0	外:ヨコナデ→籐状文・波状文 内:ヨコナデ・オサエ→刺突文	やや 密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	弥生Ⅲ様式後半 口縁部内面に歯状刺突文
30	41-06	弥生土器 甕 (頸部)	N100	SR15 最下層	(頸)8.4	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ・シボリメ	粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:灰褐10YR5/2	頸部 12/12	弥生Ⅲ様式後半か
31	40-04	弥生土器 壺 (頸部)	N92	SR15堰 1 最下層	(頸)10.0	外:ナデ→ヘラ描き沈線文 内:ナデ→ハケメ→シボリメ	やや 密	外:暗灰黄2.5Y5/2 内:黄灰2.5Y4/1	頸部 2/12	弥生中期 頸部内面魚け付着
32	41-03	弥生土器 壺 (口縁)	N98	SR15 最下層	(口)6.4	外:ヨコナデ→櫛描直線文→刺突文 内:ヨコナデ	粗	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:黒5Y2/1	口縁部 3/12	弥生中期。口縁部の刺突文 (櫛歯)は7本/0.8cm
33	40-06	弥生土器 壺 (口縁)	N94	SR15 最下層	(口)9.1	外:ヨコナデ→刺突文 内:ヨコナデ・ナデ	粗	にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 3/12	弥生中期
34	42-01	土師器 壺	N102	SR15 最下層	(底)5.3 (体)21.1	外:ヨコナデ→ミガキ→沈線 内:ヨコナデ→ハケメ・オサエ	密	外:にぶい橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR7/3	体部 充形	弥生中期
35	41-01	弥生土器 壺	N96	SR15 最下層	(脚幅)11.2	外:ヨコナデ→凹線文 内:ヨコナデ	粗	にぶい黄橙10YR6/4	脚部 2/12	弥生中期(Ⅳ様式)台付無頸壺 円形透かし1カ所
36	39-02	弥生土器 壺 (底部)	N88	SR15 最下層	(底)6.7	外:ナデ・オサエ→ハケメ 内:ナデ→底部工具痕	粗	外:黄灰2.5Y5/1 内:灰黄褐10YR6/2	底部 3/12	堰なくほみ出土
37	39-01	弥生土器 壺 (底部)	N88	SR15 最下層	(台)8.8	外:ナデ 内:ナデ	やや 粗	外:灰褐7.5YR6/2 内:黒褐2.5Y3/1	底部 1/12	堰なくほみ出土 体部内面に魚け付着
38	40-07	弥生土器 甕 (底部)	N96	SR15 最下層	(底)4.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ・ハケメ	粗	外:オリーブ黒5Y3/1 内:灰5Y5/1	底部 3/12	
39	39-04	弥生土器 壺 (底部)	N88	SR15 最下層	(底)6.3	外:ナデ・ハケメ 内:ナデ・オサエ	やや 粗	灰黄褐10YR5/2	底部 9/12	堰なくほみ出土 体部外面付着
40	39-06	弥生土器 壺 (底部)	N96	SR15堰 1 最下層	(底)6.8	外:ナデ 内:ナデ	粗	灰黄褐10YR6/2	底部 4/12	

第Ⅳ-3表 田丸道遺跡出土遺物観察表(2) (土器類等)

報告	実測 番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
41	41-02	弥生土器 壺 (底部)	N96	SR15 最下層	(底)4.0	外:ナデ 内:ナデ→板ナデ	粗	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:黒褐10YR3/1	底部 9/12	弥生後期
42	39-05	弥生土器 壺 (底部)	N88	SR15 最下層	(底)5.0	外:ナデ 内:ナデ	粗	灰黄褐10YR5/2	底部 12/12	弥生後期・堰南くぼみ出土・ 体部外面煤付着
43	39-03	弥生土器 壺 (底部)	N88	SR15 最下層	(底)7.0	外:ナデ 内:ナデ	粗	褐灰10YR5/1~灰黄褐 10YR6/2	底部 2/12	弥生後期 堰南くぼみ出土
44	41-04	弥生土器 台付甕 (台部)	N108	SR15 最下層	(脚台)7.0	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	外:灰褐7.5YR5/2 内:褐灰7.5YR5/1	台部 3/12	弥生中期
45	39-08	弥生土器 台付甕 (脚台部)	N92	SR15 最下層	(脚上端) 3.5~4.0	外:ナデ 内:ナデ	粗	外:黄褐2.5Y5/1 内:暗灰N3/	脚台部 12/12	弥生後期
46	40-05	弥生土器 甕 (口縁)	N92	SR15 最下層	(口)11.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	外:黒5Y2/1 内:暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 2/12	弥生中期~後期
47	40-02	弥生土器 壺 (口縁)	N92	SR15 最下層	(口)15.2	外:ヨコナデ→ミガキ・オサエ 内:ヨコナデ	やや粗	外:灰褐7.5YR4/2 内:灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	弥生後期前半
48	40-03	弥生土器 壺 (肩部)	N92	SR15 最下層	-	外:ナデ→櫛描直線文・刺突文 内:ナデ・オサエ	やや粗	外:にぶい黄橙10Y6/4 内:黒褐10YR3/1	体部 小片	弥生後期・櫛描直線文は1条7 本、櫛歯による刺突文は5本
49	42-02	土師器 高坏	N92	SR15 最下層	(脚柱)4.5	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ナデ・シボリメ	やや粗	暗赤-灰2.5GY4/1	頸部 12/12	弥生後期前半 焼成不良
50	39-07	弥生土器 壺 (頸部)	N92	SR15 最下層	(頸)5.6	外:ヨコナデ→タテミガキ 内:ヨコナデ→ハケメ・シボリメ	やや粗	にぶい黄褐10YR5/3	頸部 12/12	古墳前期初頭
51	39-09	弥生土器 加工円盤	N92	SR15 最下層	(底)5.0	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	外:灰黄褐10YR5/2 内:褐灰10YR4/1	完形	摩滅のため調整不明瞭
52	35-07	土師器 壺	N108	SR15 下層	(口)18.6	外:ハケメ 内:摩滅	やや密	外:黄灰2.5Y6/1 内:灰白10YR7/1	口縁部 1/12	
53	36-01	土師器 台付甕	N96	SR15 下層	(口)15.0	外:ハケメ 内:ケズリ・オサエ	やや密	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 1/12	S字状口縁甕D類 焼成やや不良
54	35-05	土師器 甕	N108	SR15 下層	(頸)13.6	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
55	34-05	土師器 甕	N108	SR15 下層	(口)17.8	外:ナデ 内:ナデ→ハケメ	密	明褐灰7.5YR7/1	口縁部 2/12	
56	34-08	土師器 甕	N96	SR15 下層	(口)20.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12弱	
57	37-01	土師器 甕	N100	SR15 下層	(口)20.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12強	
58	43-01	土師器 長胴甕	N92	SR15 最下層	(体)24.5	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ→板ナデ・オサエ	密	にぶい黄橙10YR7/3	体部 9/12	
59	36-04	土師器 長胴甕	N100	SR15 最下層	-	外:ハケメ→ナデ 内:ハケメ	やや密	外:灰黄褐10YR5/2 内:暗灰黄2.5Y5/2	底部 完存	外面煤付着
60	36-02	土師器 甕	N96	SR15 最下層	(底)4.6	外:ハケメ 内:板ナデ	密	外:灰黄褐10YR5/2 内:にぶい黄褐10YR5/3	底部 12/12	
61	36-03	土師器 椀	N92	SR15 最下層	(口)12.3	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR5/2 内:灰黄褐10YR6/2	口縁部 6/12	
62	35-03	土師器 椀	N104	SR15 最下層	(口)12.6	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰白2.5Y7/1	口縁部 2/12	
63	34-06	土師器 椀	N96	SR15 最下層	(口)12.0	外:ヨコナデ→オサエ・ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	密	褐灰10YR4/1	口縁部 2/12	
64	37-02	土師器 把手付鉢	N92	SR15 最下層	(体)25.0	外:オサエ・ナデ→ハケメ 内:オサエ・ナデ	やや密	外:暗灰黄2.5Y5/2 内:浅黄褐10YR8/4	把手の み	
65	34-07	須恵器 高坏	N108	SR15 最下層	(脚裾)10.4	外:回転ナデ→カキメ 内:回転ナデ	密	外:灰白N5/0 内:灰白N6/0	脚部 2/12	4方透かし TK23~47型式
66	38-01	須恵器 甕	N108	SR15 最下層	(口)20.2 (高)45.0	外:回転ナデ→タタキ→カキメ 内:回転ナデ→同心円状タタキ	密	外:灰N5/0~灰N4/0 内:灰N5/0~灰褐5YR5/2	口縁部 6/12	底部内面は体部外面と同一 の工具で成形、TK217型式
67	32-02	土師器 坏	N104	SR15 最下層	(口)15.4 (高)3.2	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ→工具痕	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:浅黄2.5Y7/3	口縁部 5/12	
68	32-03	土師器 坏	N104	SR15 最下層	(口)12.0 (高)2.7	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄2.5Y7/3	口縁部 5/12	
69	32-08	土師器 坏	N112	SR15 最下層	(口)13.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部 3/12	
70	32-05	土師器 坏	N112	SR15 最下層	(口)13.8 (高)3.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 2/12	
71	33-01	土師器 坏	N112	SR15 最下層	(口)13.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	
72	32-07	土師器 坏	N112	SR15 最下層	(口)13.8 (高)2.9	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰黄2.5Y7/2	口縁部 5/12	
73	32-06	土師器 坏	N112	SR15 最下層	(口)13.8 (高)3.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰黄2.5Y7/2	口縁部 2/12	
74	35-04	土師器 坏	N116	SR15 最下層	(口)12.4 (高)2.9	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	
75	35-02	土師器 坏	N116	SR15 最下層	(口)13.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	外面煤付着
76	32-01	土師器 坏	N100	SR15 最下層	(口)13.1 (高)3.55	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ→工具痕	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 6/12	
77	35-01	土師器 坏	N116	SR15 最下層	(口)14.0 (高)2.7	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y7/1	口縁部 4/12	
78	33-05	土師器 皿	N92	SR15 最下層	(口)14.5 (高)2.15	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12	
79	33-02	土師器 皿	N112	SR15 最下層	(口)16.4 (高)1.5	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1/12以下	
80	33-03	土師器 皿	N112	SR15 最下層	(口)23.0 (高)1.4	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部 1~2/12	
81	33-07	土師器 甕	N132	SR15 最下層	(口)15.6	外:摩滅(ハケメカ) 内:ハケメ	密	外:浅黄橙10YR8/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2~3/12	

第Ⅳ-4表 田丸道遺跡出土遺物観察表(3) (土器類等)

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
82	32-04	土師器 小椀	N100	SR15 上層	(口)11.0	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:淡黄2.5Y8/3	口縁部 12/12	
83	56-05	緑釉陶器 椀	N96	SR15 上層	(口)9.6	外:回転ナデ→ミガキ?→施釉 内:回転ナデ→ミガキ?→施釉	密	素地:灰7.5Y5/1 釉:緑	口縁部 2/12	硬胎、美濃産
84	33-04	灰釉陶器 椀	N112	SR15 上層	(口)11.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰白7.5Y7/1	口縁部 2/12	知多・猿投産 釉薬なし
85	34-01	灰釉陶器 椀	N96	SR15 上層	(高台)8.4	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付 後ナデ 内:回転ナデ	やや 密	灰白5Y7/1	高台部 6/12	猿投・知多産、H72型式 釉薬なし、内面に煤付着
86	34-03	灰釉陶器 皿	N116	SR15 上層	(高台)8.0	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付 後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 2/12	知多・猿投産、O53型式 釉薬なし
87	34-04	灰釉陶器 皿	N128	SR15 上層	(高台)6.4	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付 後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	高台部 3/12	知多・猿投産、O53型式 釉薬あり
88	62-01	土師器 小型椀	N180- 184	SK18	(口)12.4	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい褐7.5YR5/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 5/12	
89	57-04	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)14.0	外:ハケメ・ヨコナデ 内:ハケメ・ヨコナデ	やや 粗	浅黄2.5Y7/4	口縁部 1/12	
90	58-01	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)18.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	明黄褐10YR7/6	口縁部 11/12	
91	57-01	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)15.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや 密	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 4/12	
92	57-02	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)15.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
93	55-03	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)16.8	外:摩滅 内:摩滅	密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 3/12	
94	59-05	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)17.6	外:ハケメ・オサエ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや 密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12強	
95	57-03	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)17.8	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ・オサエ 内:ハケメ	やや 粗	浅黄褐10YR8/4	口縁部 3/12	
96	58-04	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)20.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	
97	58-02	土師器 甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)25.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや 粗	にぶい黄橙10YR5/4	口縁部 1/12	
98	55-02	土師器 長胴甕	N180- 184	SK18	(体)17.4	外:ハケメ 内:板ナデ	やや 密	灰白10YR8/2	胴部 完形	
99	58-03	土師器 把手付甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)32.4	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
100	57-05	土師器 把手付甕	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)36.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ・オサエ	密	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:明黄褐10YR7/6	口縁部 1/12	残存率悪く、双方に把手がつくかは不明
101	60-01	土師器 小型椀	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)13.4	外:ナデ・オサエ→口縁部ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12	把手付
102	56-01	土師器 把手	N180- 184	SK18 極暗褐色層	-	外:ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	把手 のみ	甌か把手付鍋の把手
103	59-02	土師器 高坏 (脚部)	N180- 184	SK18 極暗褐色層	-	外:板ナデ 内:シボリメ	やや 密	赤褐2.5YR4/8	脚部 のみ	
104	59-01	土師器 高坏 (脚部)	N180- 184	SK18 極暗褐色層	-	外:摩滅 内:シボリメ	密	にぶい黄橙7/4	脚部 のみ	
105	59-03	土師器 高坏 (脚部)	N180- 184	SK18 極暗褐色層	-	外:板ナデ 内:シボリメ	やや 密	明赤褐2.5YR5/6	脚部 のみ	
106	59-04	土師器 高坏 (脚部)	N180- 184	SK18 極暗褐色層	-	外:ナデ 内:板ナデ・ケズリ	やや 密	にぶい橙5YR7/4	脚部 のみ	
107	44-06	須恵器 高坏 (脚部)	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(底)9.6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰N6/0	底部 1/12	方形3方透し TK23-47~MT15型式併行期
108	45-01	須恵器 無頸壺	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)7.55 (高)8.9	外:回転ナデ→回転ケズリ→沈線・カ キメ 内:回転ナデ	密	灰N6/1	口縁部 11/12	6世紀後半~7世紀前半 TK209型式併行期
109	55-04	須恵器 壺	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(底)6.0 (頸)10.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ→ナデ	密	灰白2.5Y7/1	底部 9/12	MT15~TK209型式併行期
110	61-07	須恵器 壺	N180- 184	SK18	(口)15.2	外:回転ナデ→ヘラ記号 内:回転ナデ	粗	外:灰N5/1 内:灰10Y6/1	口縁部 2~3/12	ヘラ記号・自然釉あり TK217型式古相併行期か
111	60-04	須恵器 壺	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(底)3.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	粗	灰黄2.5Y7/2	底部 12/12	
112	58-05	須恵器 蓋	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)13.2	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰5Y5/1	口縁部 1/12	MT15型式併行期頃か
113	44-01	須恵器 蓋	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)11.2 (高)3.3	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	外:灰N5/0 内:灰N6/0	口縁部 11/12	TK217型式併行期
114	44-03	須恵器 蓋	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)12.0 (高)3.8	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	灰N6/0	口縁部 11/12	TK217型式併行期
115	44-02	須恵器 坏身	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)10.4 (高)4.2	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	灰N6/0	口縁部 8/12	受部径12.2 TK217型式併行期
116	44-04	須恵器 坏身	N180- 184	SK18	(口)10.6 (高)3.1	外:回転ナデ→ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部 9/1	受部径12.5。TK217型式併行期 焼成不良
117	60-02	須恵器 坏身	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)10.6	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ・ヘラ 切り 内:回転ナデ	やや 密	灰白5Y7/2	口縁部 11/12	TK217型式併行期 焼成不良
118	44-05	須恵器 坏身	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(口)9.4 (高)3.0	外:回転ナデ→ヘラ切り 内:回転ナデ	密	灰N6/0	口縁部 4/12	受部径11.8 TK217型式併行期
119	61-01	土師器 椀	N160	SK20 黒褐色層	(口)13.0	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	橙7.5YR6/6	口縁部 1~2/12	
120	61-05	土師器 椀	N160	SK20 黒褐色層	(底)6.2	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	やや 密	橙7.5YR6/6	底部 5/12	

第Ⅳ-5表 田丸道遺跡出土遺物観察表(4) (土器類等)

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
121	61-06	土師器 高坏(坏部)	N160	SK20 黒褐色層	(口)11.0	外:オサエ→摩滅 内:摩滅	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2-3/12	
122	62-03	土師器 甕	N172	SK21 黒褐色層	(口)17.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや粗	外:にぶい橙2.5YR6/4 内:灰褐7.5YR4/2	口縁部 3/12	
123	62-05	須恵器 坏蓋	N172	SK21 黒褐色層	(口)13.0	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	密	灰N5/1	口縁部片	
124	65-04	土師器 壺	N168	SK28 黒褐色層	(口)22.8	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	外:褐10YR4/6 内:黄褐10YR5/6	口縁部 1/12	T K10型式併行期?
125	65-03	土師器 甕	N168	SK28 黒褐色層	(口)22.0	外:ヨコナデ→ハケメ・オサエ 内:ナデ→口縁部ハケメのちヨコナデ	密	にぶい黄褐10YR5/4	口縁部 1/12	
126	65-02	土師器 甕	N168	SK28 黒褐色層	(口)16.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR6/4 内:褐灰10YR4/1	口縁部 1/12	煤付着
127	64-05	須恵器 高坏(坏)	N168	SK28 黒褐色層	(口)11.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	外:灰N5/0 内:灰N6/0	口縁部 2/12	自然釉付着
128	65-01	須恵器 蓋	N168	SK28 黒褐色層	(底)13.3 (高)4.5	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ 内:回転ナデ→回転ヘラケズリ	密	灰N6/0	底部 8/12	M T15型式併行期
129	66-01	石製品 叩き石	N168	SK28 黒褐色層	(長)10.0 (厚)2.8	敲打痕あり 先端ケズリ	-	-	-	残存幅4.0・重量:150g
130	61-04	土師器 甕	N168	SK31	(口)25.8	外:ヨコナデ・オサエ 内:ヨコナデ	やや粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
131	61-03	須恵器 平瓶	N180	SK33	(口)7.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや粗	灰5Y5/1	口縁部 完形	
132	65-05	須恵器 坏身	N184	SK38 褐灰色層	(口)12.0 (径)14.0	外:回転ナデ→回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	密	灰N6/0	口縁部 1/12	M T15型式併行期
133	64-01	土師器 甕	N156	SK34	(口)14.0	外:ハケメ→板ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	
134	64-03	土師器 甕(脚台)	N156	SK34 黒褐色層	(脚)9.4	外:ヨコナデ→ハケメ 内:板ナデ→オサエ	密	にぶい黄橙10YR6/4	底部 1-2/12	
135	64-04	土師器 高坏(脚部)	N156	SK34 黒褐色層	(脚)11.2	外:板ナデ→裾部ヨコナデ 内:シボリメ→ケズリ	密	橙5YR6/6	底部 10/12	穿孔は1カ所のみ
136	64-02	土師器 高坏(脚部)	N156	SK34 黒褐色層	(脚裾)12.6	外:ナデ 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/4	底部 2/12	摩滅のため調整不明瞭
137	67-04	土師器 甕	N176	SH40	(口)16.0	外:剥離 内:剥離	やや密	にぶい黄2.5Y6/3	口縁部 2/12	
138	68-02	土師器 甕	N176	SH40	(口)16.0	外:オサエ・ナデ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや粗	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:灰黄褐10YR5/2	口縁部 5/12	煤付着
139	68-03	土師器 甕	N176	SH40	(口)23.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	
140	67-05	土師器 高坏	N176	SH40	(口)24.0	外:摩滅 内:坏部摩滅、脚部シボリメ	やや密	橙5YR6/6	口縁部 4/12	
141	67-01	土師器 高坏	N176	SH40	(口)16.5 (脚裾)10 (高)12.0	外:坏部ヨコナデ・ナデ、脚部ケズリ 内:坏部ヨコナデ・ナデ、脚部シボリメのちケズリ→裾部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/6	口縁部 5/12	摩滅のため調整不明瞭
142	55-01	土師器 甕	N152	Pit1 黒色層	(口)12.7	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ・オサエ・板ナデ	やや粗	褐灰7.5YR5/1	口縁部 5/12	S字状口縁甕D類
143	49-02	土師器 小型鉢	N164	Pit2	(口)13.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ→板ナデ	やや密	外:にぶい橙5YR6/3 内:橙5YR7/6	口縁部 1/12	古墳後期
144	52-02	土師器 高坏(坏部)	N156	Pit1	(口)20.8	外:摩滅 内:摩滅	密	橙5YR6/8	口縁部 2/12	
145	52-01	土師器 高坏(坏部)	N156	Pit1	-	外:ナデ 内:ナデ	密	外:浅黄橙7.5YR8/6 内:浅黄橙10YR8/4	脚部 2/12	
146	49-04	土師器 高坏(脚部)	N156	Pit1 (脚裾)10.0		外:ヨコナデ 内:板ナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:灰白10YR8/2	底部 2/12	焼成不良
147	52-03	土師器 高坏(脚部)	N156	Pit1 (脚裾)11.6		外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙7.5YR8/4	底部 4/12	
148	52-04	土師器 高坏(脚部)	N156	Pit1 (脚裾)9.8		外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR7/4	底部 3/12	
149	52-08	石製品 叩き石	N156	Pit1	(長)12.3 (厚)4.6	一面に研磨痕あり	-	-	-	残存幅6.3
150	49-09	土師器 ミニチュア鉢	N164	Pit3	(口)5.2	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 3/12	
151	52-07	土師器 甕	N168	Pit4 黒褐色層	-	外:ナデ→タタキ 内:ナデ	密	にぶい黄橙10YR6/4	体部片のみ	タタキ甕搬入品か
152	47-03	土師器 甕	N168	Pit5 黒褐色層	(口)18.2	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	やや密	にぶい褐7.5YR6/3	口縁部 1/12	古墳中期
153	48-02	土師器 小型鉢	N176	Pit14	(口)12.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい褐7.5YR5/4	口縁部 2/12	
154	63-04	土師器 坏	N76	SK14 灰色粘土	(口)11.4	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや粗	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 4/12	
155	62-02	灰釉陶器 小皿	N172	SK21 黒褐色層	(底)6.0	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ・研磨	やや密	灰白2.5Y7/1	口縁部 4/12	猿投産 O53型式
156	56-07	緑釉陶器 椀	N176-180	SK29 黒褐色層	(口)14.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰白N7/0 釉:暗緑-ブ5Y4/3	口縁部 1/13	硬胎、美濃産 二次的な被熱痕あり
157	61-02	土師器 椀	N176-180	SK29 黒褐色層	(底)7.5	外:ヨコナデ→高台貼付け後ナデ 内:ナデ	密	灰白10YR8/1	底部 2/12	
158	68-01	土師器 坏	N180	SK37 黒褐色層	(口)16.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ・暗文	密	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:灰褐7.5YR5/2	口縁部 5/12	坏C
159	67-02	土師器 甕	N180	SK37 黒褐色層	(口)22.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12	
160	47-06	灰釉陶器 椀	N140	Pit2	(高台)7.0	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白N7/0	底部 12/12	O53型式

第Ⅳ-6表 田丸道遺跡出土遺物観察表(5) (土器類等)

報告	実測番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
161	56-04	緑釉陶器	皿	N168	Pit7 黒褐色層 (口)11.0	外:回転ナデ→ミガキ?→施釉 内:回転ナデ→ミガキ?→施釉	密	素地:灰白7.5Y/1 釉:深緑	口縁部 2/12	硬胎、美濃産か
162	46-06	灰釉陶器	小椀	N168	Pit7 黒褐色層 (口)11.6	外:回転ナデ→施釉ハケぬり? 内:回転ナデ	密	灰5Y6/1 (釉)灰黄2.5Y7/2	口縁部 2/12	渥美産
163	46-03	土師器	甕	N168	Pit7 黒褐色層 (口)15.6	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ→ハケメ	やや密	灰黄2.5Y7/2	口縁部 3/12	
164	50-05	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色層 (口)12.4	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
165	50-03	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色層 (口)12.6	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 1/12強	
166	48-03	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色均質土 (口)12.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部 2/12	
167	50-06	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色層 (口)12.6	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	口縁部 1/12	
168	50-07	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色層 (口)13.5	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
169	51-01	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色層 (口)11.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
170	51-05	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色層 (口)14.2	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
171	48-04	土師器	坏	N172	Pit2 黒褐色均質土 (口)11.8	外:ヨコナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ハケメ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	
172	51-02	黒色土器	椀	N172	Pit2 黒褐色層 (口)15.6	外:ヨコナデ→ケズリ 内:ヨコナデ→ミガキ	密	外:にぶい褐7.5YR6/3 内:黒7.5Y2/1	口縁部 1/12	内面黒色 10世紀前半から半ば、V期
173	49-08	ロクロ土師器	椀	N172	Pit2 黒褐色層 (高台)7.6	外:ナデ→高台貼付け後ナデ 内:ナデ	やや密	灰白10YR8/2	底部 1/12	
174	49-03	ロクロ土師器	椀(底部)	N172	Pit2 黒褐 (高台)7.8	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	やや密	橙5YR7/6	底部 4/12	
175	54-07	灰釉陶器	椀	N172	Pit2 黒褐色層 (高台)6.0	外:回転ナデ→底部条切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	素地:灰白2.5Y7/1 釉:内:灰白5Y7/2	高台部 4/12弱	H72型式
176	47-07	灰釉陶器	椀	N172	Pit2 黒褐色均質土 (高台)9.4	外:回転ナデ→底部条切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	H72型式
177	56-08	緑釉陶器	皿(高台)	N172	Pit2 黒褐色層 (高台)6.8	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→ミガキ?→施釉	密	素地:灰白5Y7/1 釉:鸚鵡緑	高台部 2/12	軟胎、美濃産
178	56-02	緑釉陶器	耳皿	N172	Pit2 黒褐色層 (口)8.4	外:ナデ?→施釉 内:ナデ?→施釉	密	素地:にぶい黄橙 釉:常磐緑847	耳部片	焼成不良 美濃産
179	48-06	土師器	鉢	N172	Pit2 黒褐色均質土 (口)25.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	
180	51-03	土師器	大型鉢	N172	Pit2 黒褐色層 (口)30.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:ヨコナデ	密	灰褐7.5YR5/2	口縁部 1/12	
181	53-08	土師器	甕	N172	Pit2 黒褐色層 (口)13.7	外:ハケメ→オサエ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12	
182	69-03	金属製品	刀子	N172	Pit2 黒褐色層 (長)7.7 (幅)2.5	-	-	-	-	重量:33.07g、厚み1.3 目釘穴あり
183	69-02	金属製品	刀子	N164	Pit6 黒褐色層 (長)13.2 (幅)2.4	-	-	-	-	重量:30.07g、厚み1.35 柄部鹿角装。
184	49-01	土師器	皿	N172	Pit5 黒褐色層 (口)12.8 (高)2.65	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2~橙 7.5YR7/6	口縁部 6/12弱	
185	53-01	土師器	皿	N176	Pit6 掘形 (口)9.4 (高)1.2	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1~2/12	
186	47-08	ロクロ土師器	椀(底部)	N172	Pit6 黒褐色層 (高台)6.2	外:回転ナデ→底部条切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	やや密	外:淡黄2.5Y8/3 内:にぶい橙7.5YR7/3	底部 2/12	
187	47-02	灰釉陶器	小椀	N172	Pit6 黒褐色層 (口)11.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰白5Y7/1 (釉)オリープ灰10Y6/2	口縁部 1/12	猿投・知多産 釉薬なし
188	50-01	土師器	皿	N176	Pit2 黒褐色層 (口)11.6	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12	
189	50-08	土師器	皿	N176	Pit2 黒褐色層 (口)11.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部 1/12強	
190	50-02	土師器	皿	N176	Pit2 黒褐色層 (口)12.0 (高)2.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12強	
191	49-05	土師器	坏	N176	Pit2 黒褐色層 (口)12.2	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:剥離	やや密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 3/12	
192	49-06	土師器	椀	N176	Pit2 黒褐色層 (高台)7.4	外:ナデ→高台貼付け後ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	底部 6/12	
193	56-09	緑釉陶器	皿(高台)	N176	Pit2 掘形 (高台)6.0	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→ミガキ?→施釉	密	素地:浅黄橙10YR8/3 釉:常磐緑847	高台部 3/12	軟胎、近江産 外面は釉薬によりミガキ不明
194	49-07	灰釉陶器	椀	N176	Pit2 黒褐色層 (高台)8.0	外:回転ナデ→高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ→施釉	密	外:灰白2.5Y7/1 内:灰黄2.5Y6/2	底部 2/12	H72型式
195	53-07	灰釉陶器	椀	N176	Pit2 黒褐色層 (口)12.0 (高台)6.3 (高)4.2	外:回転ナデ→底部条切り・高台貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	灰白5Y7/1	口縁部 2/12	H72型式
196	48-01	灰釉陶器	鉢	N176	Pit2 黒褐色層 (口)23.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	灰白5Y7/1	口縁部 1/12	
197	47-01	土師器	甕	N176	Pit3 黒褐色層 (口)23.6	外:ヨコナデ→オサエ 内:ヨコナデ	やや密	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
198	46-02	土師器	甕	N176	Pit3 黒褐色層 (口)16.0	外:ヨコナデ 内:板ナデ	やや密	外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12	
199	46-01	灰釉陶器	椀	N176	Pit3 黒褐色層 (口)14.1 (高台)6.2 (高)4.6	外:回転ナデ→底部条切り・高台貼付け後ナデ→輪花・施釉 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	口縁部 2/12	輪花あり、渥美産 内面底部研磨される
200	48-05	土師器	坏	N176	Pit8 黒褐色層 (口)17.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12	

第Ⅳ-7表 田丸道遺跡出土遺物観察表(6) (土器類等)

報告	実測 番号	器種・質等	小地区	遺構・層位	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
201	53-03	土師器 鉢	N176	Pit8	(口)21.0	外:ヨコナデ→ハケメ 内:板ナデ・ハケメ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
202	56-03	緑釉陶器 皿	N176	Pit8 黒褐色層	(口)12.0 (高台)6.3 (高)2.2	外:回転ナデ→底部へラ切り?・高台 貼付け後ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰5Y5/1 釉:松葉色851	ほぼ 完形	軟胎、美濃産 高台内面まで釉薬あり 口縁部は意図的な打ち欠きか
203	53-02	灰釉陶器 椀	N176	Pit8	(高台)6.1	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ→施釉	密	灰白2.5Y7/1	高台部 12/12	内面全面に釉薬あり H72型式
204	51-04	土師器 甕	N176	Pit11 黒褐色層	(口)28.2	外:ヨコナデ→ハケメ・オサエ 内:ヨコナデ	やや 密	淡橙5YR8/3	口縁部 1/12	
205	53-04	土師器 椀	N176	Pit11	(高台)6.0	外:摩滅 内:摩滅	密	橙5YR6/8	高台部 2/12	
206	50-04	土師器 皿	N176	Pit11 黒褐色層	(口)14.0	外:ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12	11世紀後半頃
207	54-01	土師器 皿	N176	Pit12 黒褐色層	(口)12.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	
208	54-02	土師器 甕	N176	Pit12 黒褐色層	(口)14.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	平安中期 煤付着
209	53-06	土師器 皿	N176	Pit13	(口)9.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1~2/12	
210	53-05	黒色土器 椀	N176	Pit13	(高台)5.4	外:高台貼り付け後ナデ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:黒N2/0	高台部 3/12	内面黒色
211	56-06	緑釉陶器 皿	N180	Pit2	(口)12.0	外:回転ナデ→ミガキ?→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰黄褐10YR5/2 釉:萌葱色832	口縁部 2/12	硬胎、美濃産 内面は釉薬でミガキ不明瞭
212	54-06	土師器 ミニチュア 土器	N184	Pit2 黒褐色層	(口)7.2	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:あ灰黄2.5Y7/2	口縁部 1~2/12	
213	26-05	土師器 皿	W4-8	SK45	(口)13.0 (高)2.65	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい褐7.5YR6/3 内:灰褐7.5YR6/2	口縁部 3/12	口径任意
214	26-08	土師器 皿	W4-8	4区Pit	(口)13.0 (高)2.4	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 3/12	
215	29-01	土師器 皿	W4-8	Pit1	(口)13.4 (高)2.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:ナデ・口縁部ヨコナデ	密	灰白10YR8/1	口縁部 3/12	摩滅のため調整不明瞭
216	26-03	土師器 皿	W4-8	4区Pit	(口)14.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 2/12	口径任意
217	26-04	土師器 皿	W4-8	4区Pit	(口)14.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	口径任意
218	26-02	土師器 皿	W4-8	4区Pit	(口)13.8	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	
219	26-01	土師器 皿	W4-8	4区Pit2	(口)14.0	外:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ・口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12	
220	46-05	弥生土器 厚口鉢	N176	Pit5 黒褐色層	-	外:ナデ→貝殻条痕文 内:ナデ・オサエ	粗	外:灰黄褐10YR6/2 内:褐灰10YR4/1	口縁部 小片	弥生前期後半~中期前葉 岩滑式厚口鉢・搬入品
221	43-02	弥生土器 壺	N160	SK20 黒褐色層	(肩)14.9	外:ナデ→簾状文 内:摩滅	やや 粗	橙7.5YR7/6	肩部 1/12	弥生中期 肩部外面簾状文4条残存
222	46-04	弥生土器 (底部)	N164	Pit5	(底)6.2	外:ナデ→工具痕 内:ナデ→板ナデ	やや 粗	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:褐灰10YR4/1	底部 11/12	弥生中期
223	62-06	土師器 壺	N180- 184	SK18	(底)3.8	外:ナデ 内:板ナデ	やや 粗	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:褐灰10YR4/1	底部 11/12	弥生後期~古墳初頭
224	42-03	土師器 台部	N180- 184	SK18 極暗褐色層	(底)6.0	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ→ハケ→ナデ	やや 粗	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:オリープ黒5Y3/1	底部 1/12	弥生後期~古墳初頭
225	54-05	土師器 高坏	N184	Pit2 黒褐色層	(口)19.6	外:ミガキ 内:ミガキ	密	灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12	弥生後期~古墳初頭
226	54-04	土師器 壺	N164	Pit9 黒褐色土	(口)13.6	外:ハケメ→刺突文 内:ハケメ・ヨコナデ	密	外:橙7.5YR7/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 2/12	弥生後期~古墳初頭。口縁部にへ ラ状工具による刺突文(左→右)
227	63-02	須恵器 壺	N148	暗褐色層	(底)5.4	外:回転ナデ・オサエ 内:回転ナデ	密	灰5Y6/1	底部 2/12	子持ち高坏の壺の可能性あり 自然釉付着

第Ⅳ－8表 田丸道遺跡出土遺物観察表(7) (木製品) …SR15出土

報告 番号	取上 番号	実測 番号	器種			遺構		法量(cm)			木取り等	樹種	特記事項
			大別分類	細別用途・器種	器種・備考	小地区	位置	全長	幅	厚さ			
228	-	009-03	板状	木札	墨書	N96	塚1 上部	127	1.5	2.5	板目	広葉樹か	墨書あり
229	W26	007-01	農具	耕起具	ナスビ形曲柄又鍬	N104	塚2	31.9	6.8	1.3	割材削り出し	コナラ属アカガシ亜属	先端折損
230	W119	003-09	農具	耕起具?		N96	塚1 最下部	24.0	6.3	0.9	割材削り出し	コナラ亜属コナラ節	先端折損
231	W174	002-04	農具	方形枠付田下駄	枠木	N104	塚2 周辺	30.0	4.5	2.7	割材削り出し	アスナロ属	右後ろ外側枠板か。底面は平坦。先端折損。
232	W34	001-04	工具	鎌の柄	杭に転用	N100	塚2 周辺	25.2	2.8	2.8	割材削り出し	クリ	先端炭化。芯持ち材ではなく刃材を使用。先端折損。
233	W185	001-08	工具	鎌の柄	杭に転用	N104	塚2	22.0	4.5	2.5	割材削り出し	アカガシ亜属	
234	W11	002-05	編み具	織機		N96	塚1 上部	41.3	2.2	2.0	割材削り出し	ヒノキ属	織機の先端材 先端折損、断面台形
235	W31	013-01	編み具	織機?		N104	塚2	71.0	2.6	2.9	割材削り出し	コウヤマキ	糸状の圧痕残る 先端折損
236	W24	002-03	編み具	木錘		N96	塚1 上部	12.4	7.1	5.1	半截削り出し	アスナロ属	ハンドバッグ形
237	W44	007-02	編み具	木錘		N100	塚2	12.6	7.0	3.8	半截削り出し	アスナロ属	ハンドバッグ形
238	W58	016-01	運搬具	輓		N96	塚1 上部	63.2	31.9	6.2	芯持削り出し	イヌマキ	材屈曲部を利用して製作か
239	W56	016-03	運搬具	檣	滑板	N116	塚3 周辺	80.0	11.5	11.8	芯持削り出し	アスナロ属	左滑走台 底面は加工あり、側面は加工なし
240	W164	001-02	容器	曲物	底板	N96	塚1 上部	50.2	12.1	1.1	板目	ヒノキ属	桜の綴じ皮残る
241	W45	006-07	容器	曲物	底板	N112	塚3	52.8	15.6	1.2	板目	ヒノキ属	桜の綴じ皮残る
242	W20	006-08	容器	曲物	上板	N100	塚2	32.0	8.3	1.3	板目	ヒノキ属	
243	W183	008-01	容器?	刳物		N104	塚2	φ17.0	4.5	0.4	樹皮か	樹皮?	樹皮を使用
244	W28	007-03	容器?	刳物	槽か盤?	N104	塚2	22.9	14.3	3.7	割材削り出し	ケヤキ	未製品か 横木取り
245	W21	009-02	装着具	下駄		N104	塚2	25.3	10.5	2.1	板目	コウヤマキ	親指の踏み込み痕あり
246	W170	004-03	装着具	下駄		N92	塚1 上部	20.9	8.4	2.0	板目	ヒノキ属	
247	W118	001-03	家具	案	天板	N96	塚1 下部	21.0	21.0	1.8	板目	アスナロ属	
248	W113	009-01	祭祀具	形代	舟形	N104	塚2	32.5	3.4	1.9	割材削り出し	アスナロ属	ほぼ完形(両端部欠損)。側面は斜めに削り込まれる。全面焼けあり。
249	W173	001-01	祭祀具	形代	舟形	N92	S015南 テラス	51.7	15.5	6.5	半截削り出し	コウヤマキ	ほぼ完形 底部を中心に全面が炭化
250	W163	019-01	建築部材	扉口装置	蹴放し材	N96	塚1 上部	119.5	24.3	6.0	板目	アスナロ属	柱間44cm
251	W38	013-03	建築部材	扉口装置	楣材	N100	塚2	105.7	17.0	5.0	板目	ヒノキ属	柱間60cm。全面に手斧による丁寧な爪削りを施す。
252	W184	017-05	建築部材	板状	有孔材	N120	塚4	99.3	13.9	1.8	板目	アスナロ属	
253	W10	017-03	建築部材	板状	有孔材	N96	塚1 上部	88.0	12.8	3.3	板目	アスナロ属	
254	W12	017-04	建築部材	板状	くりこみ有り	N96	塚1 上部	85.5	9.4	3.8	板目	アスナロ属	
255	W30	013-02	建築部材	板状	くぼみ有り	N100	塚2	81.0	12.5	2.0	板目	ヒノキ属	
256	W48	006-01	建築部材	板材		N112	塚3	62.6	13.3	1.7	追柁目	シオジ類	腐食著しい
257	W94	011-04	不明品・残材	板状	有孔材 杭に転用	N104	塚2	25.3	径3.8	-	芯持削り出し	不明(広葉樹)	
258	W35	002-06	不明品・残材	棒状		N104	塚2	38.5	2.6	0.7	割材削り出し	スギ	
259	W52	006-05	不明品・残材	板状	有孔材 杭に転用	N112	塚3	40.1	3.8	2.1	板目	不明 (スギかヒノキ)	
260	W116	024-01	不明品・残材	棒状		N96	塚1 上部	54.3	径2.6	-	割材削り出し	スギ	一部炭化
261	W7	002-09	不明品・残材	棒状	杭に転用	N96	塚1 上部	49.5	径3.4	-	割材削り出し	コウヤマキ	
262	W15	017-02	不明品・残材	棒状	杭に転用	N96	塚1 上部	53.7	4.2	2.0	板目	コウヤマキ	編み具か?
263	W47	015-04	不明品・残材	棒状	杭に転用	N112	塚3	58.0	3.7	2.6	割材削り出し	ヒノキ属	編み具か?
264	W3	017-01	建築部材	面取束柱	杭に転用	N96	塚1 上部	65.6	6.7	6.6	芯持削り出し	クスギ節	全面に手斧による丁寧な爪削りを施す
265	W32	013-04	建築部材	板状	くりこみ有り	N100	塚2	129.0	5.6	2.5	割材削り出し	カヤ	くりこみ2カ所
266	W53	024-03	建築部材	板状	くりこみ有り	N116	塚3	132.2	7.7	9.2	四分割削り出し	モミ属	
267	W59	004-04	建築部材?	五角柱部材	ほぞ有り	N96	塚1 上部	15.5	8.9	9.4	芯持削り出し	モミ属	天地は凸状か。ケズリの方向は下から上。ほぞ部分の先端欠損。

第Ⅳ－9表 田丸道遺跡出土遺物観察表(8) (木製品) …SR15出土

報告 番号	取上 番号	実測 番号	器種			遺構		法量(cm)			木取り等	樹種	特記事項
			大別分類	細別用途・器種	器種・備考	小地区	位置	全長	幅	厚さ			
268	W60	025-01	建築部材?	鼠返し?	有孔材	N96	堰1上部	49.0	40.0	9.2	樹皮か	クスノキ	高さ8.0
269	W181	006-02	不明品・残材	板状		N96	堰1最下部	26.2	18.3	4.0	板目	ヒノキ属	
270	W23	002-10	不明品・残材	板状		N96	堰1上部	15.4	23.8	4.0	板目	ヒノキ属	
271	W14	006-04	不明品・残材	板状		N96	堰1上部	48.0	10.3	2.3	柃目	コナラ属アカガシ亜属	
272	W46	006-06	建築部材	板状	ほぞ有り	N112	堰3	40.0	7.1	3.7	割材削り出し	ヒノキ属	
273	W72	016-04	建築部材?	板状	有孔材	N96	堰1上部	46.7	8.9	3.7	板目	ヒノキ属	
274	W51	001-05	不明品・残材	板状	くぼみ有り	N116	堰3	42.0	6.0	7.2	割材削り出し	スギ	焼けあり。舟形木製品の未製品の可能性あり。
275	W66	015-05	建築部材?	板状	壁板材か	N96	堰1上部	61.3	8.0	8.5	四分割削り出し	クリ	校倉造りの構造材か
276	W22	005-01	不明品・残材	棒状		N104	堰2	31.1	3.6	5.6	板目	針葉樹(ヒノキ?)	
277	W149	015-02	不明品・残材	板状		N96	堰1下部	27.8	7.2	1.7	割材削り出し	キハダ	北側出土
278	W104	015-06	不明品・残材	板状	段あり 杭に転用	N100	堰2	70.8	6.0	5.5	割材削り出し	シイ類	
279	W4	003-05	不明品・残材	板状	有孔材 杭に転用	N96	堰1上部	63.5	径7.9	-	半截削り出し	クリ	
280	W182	001-07	不明品・残材	板状	段あり	N100	堰2	10.0	4.4	2.0	板目	ヒノキ属	
281	W57	006-03	建築部材?	板状		N104	堰2	28.0	3.9	1.5	柃目	コウヤマキ	一部炭化 二次加工あり?
282	W40	001-06	不明品・残材	板状		N104	堰2	12.3	5.9	1.7	板目	不明 (スギかヒノキ)	
283	W179	005-14	不明品・残材	板状		N96	堰1上部	5.7	(5.0)	2.1	割材削り出し	コウヤマキ	
284	W177	005-12	不明品・残材	板状		N116	堰4	12.0	8.1	1.8	割材削り出し	ヒノキ属	
285	W178	005-13	不明品・残材	板状	有孔材	N96	堰1上部	8.4	5.7	1.3	割材削り出し	ツバキ属	焼けあり
286	W180	005-11	不明品・残材	棒状		N112	堰3	17.1	径6.0	-	半截削り出し	スギ	
287	W50	005-10	不明品・残材	板状		N116	堰3	(13.4)	6.2	0.8	板目	コウヤマキ	
288	-	008-02	不明品・残材	火付け木		N96	堰1上部	29.5	1.7	-	芯持ち削り出し	不明	先端炭化
289	W143	003-07	杭	角杭	板状	N96	堰1下部	44.5	径9.3	-	割材	スギ	横木か
290	W133	003-08	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	42.0	7.6	2.3	割材	コナラ亜属	東側出土
291	W159	018-04	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	52.4	10.3	2.8	割材	コナラ亜属	東側出土
292	W162	003-10	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	49.3	10.8	2.4	割材	コナラ亜属	東側出土
293	W153	021-01	杭	角杭	板状	N96	堰1下部	56.2	12.0	3.8	割材	コナラ亜属	北側出土
294	W155	018-01	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	57.7	11.3	3.5	割材	コナラ亜属	
295	W156	018-03	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	60.7	13.5	3.2	割材	コナラ亜属	
296	W147	020-03	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	64.8	12.4	4.0	割材	コナラ亜属	東側出土
297	W146	020-02	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	64.7	10.3	3.0	割材	コナラ亜属	東側出土
298	W158	021-02	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	58.3	9.9	1.6	割材	コナラ亜属	東側出土
299	W168	004-02	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	58.2	10.2	3.1	割材	コナラ亜属	
300	W134	023-02	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	65.1	9.0	6.0	割材	コナラ亜属	東側出土
301	W141	018-09	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	71.0	9.5	4.4	割材	コナラ亜属	東側出土
302	W125	018-06	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	77.6	10.5	3.5	割材	コナラ亜属	
303	W135	021-06	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	78.0	11.2	3.5	割材	コナラ亜属	東側出土
304	W148	018-07	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	79.9	10.8	4.1	割材	コナラ亜属	東側出土
305	W157	018-08	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	81.8	10.2	4.9	割材	コナラ亜属	東側出土
306	W122	023-01	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	83.7	12.2	4.1	割材	コナラ亜属	
307	W161	021-04	杭	角杭	板状	N96	堰1最下部	85.4	11.4	3.6	割材	コナラ亜属	東側出土
308	W136	003-04	杭	角杭	方形	N96	堰1最下部	37.9	径4.3	-	板目	コナラ亜属	建築部材転用か

第Ⅳ-10表 田丸道遺跡出土遺物観察表(9) (木製品) … S R15出土

報告 番号	取上 番号	実測 番号	器種			遺構		法量(cm)			木取り等	樹種	特記事項
			大別分類	細別用途・器種	器種・備考	小地区	位置	全長	幅	厚さ			
309	W154	021-05	杭	角杭	半裁材	N96	塚1 最下部	93.9	9.0	5.4	半裁割り出し	コナラ属アカガシ亜属	東側出土
310	W121	003-01	杭	丸杭		N96	塚1 下部	12.5	径4.9	-	丸太材	クリ	
311	W128	023-03	杭	丸杭		N96	塚1 下部	29.0	径4.7	-	丸太材	コナラ亜属	
312	W126	023-04	杭	丸杭		N96	塚1 下部	35.3	径4.7	-	丸太材	シオジ類	樹皮残る
313	W132	003-06	杭	丸杭		N96	塚1 下部	47.0	径4.2	-	丸太材	コナラ亜属	
314	W160	018-02	杭	丸杭		N96	塚1 最下部	44.2	径5.8	-	丸太材	ネムノキ	
315	W140	022-02	杭	丸杭		N96	塚1 下部	55.6	径8.6	-	丸太材	コナラ亜属	横木か
316	W152	018-10	杭	丸杭		N96	塚1 下部	68.5	径3.6	-	丸太材	スギ	北側出土
317	W138	022-01	杭	丸杭		N96	塚1 最下部	122.5	径7.5	-	丸太材	ヒノキ属	東側出土
318	W172	020-05	杭	丸杭		N96	塚1 最下部	91.1	径6.4	-	丸太材	ヒノキ属	横木か
319	W5	002-02	杭	丸杭		N96	塚1 上部	16.0	径4.7	-	丸太材	ヒノキ属	
320	W9	002-01	杭	丸杭		N96	塚1 上部	17.8	径4.3	-	丸太材	ネジキ	
321	W73	005-09	杭	丸杭		N96	塚1 上部	32.0	径4.0	-	丸太材	シイ類	樹皮残る
322	W8	002-07	杭	丸杭		N96	塚1 上部	31.4	径4.7	-	丸太材	ムクノキ	樹皮残る
323	W1	005-07	杭	丸杭		N96	塚1 上部	22.8	径4.8	-	丸太材	コナラ亜属	
324	W6	002-08	杭	丸杭		N96	塚1 上部	55.7	径4.9	-	丸太材	カエデ類	樹皮残る
325	W71	005-08	杭	丸杭		N96	塚1 上部	33.9	径4.0	-	丸太材	リョウブ	樹皮残る
326	W112	005-05	杭	丸杭		N96	塚1 上部	34.3	径3.8	-	丸太材	コナラ亜属	
327	W111	005-06	杭	丸杭		N96	塚1 上部	73.4	径4.4	-	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
328	W70	018-05	杭	丸杭		N96	塚1 上部	71.8	径6.1	-	丸太材	クリ	
329	W68	015-03	杭	丸杭		N96	塚1 上部	72.9	径3.1	-	丸太材	クリ	樹皮残る
330	W18	004-01	杭	丸杭		N96	塚1 上部	116.7	径8.1	-	丸太材	コナラ亜属	側面に削痕あり
331	W92	011-06	杭	角杭	板材転用	N104	塚2	37.6	7.9	4.5	割材割り出し	シイ類	樹皮残る
332	W166	020-01	杭	角杭	板材転用	N104	塚2	42.3	5.2	3.1	割材割り出し	ヒノキ属	
333	W33	012-06	杭	角杭	板材転用	N100	塚2	35.1	3.8	2.0	割材割り出し	コウヤマキ	
334	W89	010-05	杭	角杭	板材転用	N104	塚2	17.1	3.3	3.5	割材	ヒノキ属	
335	W79	024-02	杭	角杭	板材転用	N100	塚2	86.8	11.4	4.0	芯持割り出し	スギ	
336	W106	011-03	杭	角杭		N104	塚2	57.9	7.1	8.2	蜜柑割り	シイ類	
337	W105	014-06	杭	角杭		N100	塚2	75.4	4.7	7.7	蜜柑割り	ヒノキ属	樹皮残る
338	W93	014-07	杭	角杭		N104	塚2	71.9	5.0	7.6	蜜柑割り	シイ類	
339	W102	014-03	杭	角杭		N104	塚2	78.2	10.4	6.0	蜜柑割り	ヒノキ属	
340	W85	014-05	杭	角杭		N100	塚2	75.4	6.9	7.9	蜜柑割り	イヌガヤ	
341	W101	014-04	杭	角杭		N104	塚2	80.0	7.3	7.3	半裁材	シイ類	樹皮残る
342	W107	014-02	杭	丸杭		N104	塚2	71.8	径5.2	-	割材	コナラ属アカガシ亜属	辺材、建築部材転用か
343	W82	015-01	杭	丸杭		N100	塚2	19.7	径4.7	-	丸太材	コナラ亜属	
344	W95	011-05	杭	丸杭		N104	塚2	21.9	径6.4	-	丸太材	ヒノキ属	樹皮残る
345	W88	012-05	杭	丸杭		N104	塚2	26.4	径5.0	-	丸太材	ヒノキ属	
346	W98	010-02	杭	丸杭		N104	塚2	26.7	径4.3	-	丸太材	ネジキ	
347	W90	012-04	杭	丸杭		N104	塚2	27.7	径4.3	-	丸太材	ハンノキ類	樹皮残る
348	W81	010-03	杭	丸杭		N100	塚2	29.7	径6.2	-	丸太材	モミ	
349	W99	010-01	杭	丸杭		N104	塚2	35.1	径4.9	-	丸太材	ハンノキ類	

第Ⅳ-11表 田丸道遺跡出土遺物観察表(10) (木製品) …SR15出土

報告 番号	取上 番号	実測 番号	器種			遺構		法量(cm)			木取り等	樹種	特記事項
			大別分類	細別用途・器種	器種・備考	小地区	位置	全長	幅	厚さ			
350	W84	014-01	杭	丸杭		N100	塚2	52.1	径5.5	-	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
351	W96	011-01	杭	丸杭		N104	塚2	52.3	径5.6	-	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
352	W91	012-02	杭	丸杭		N104	塚2	46.3	径5.1	-	丸太材	コナラ属アカガシ亜属	樹皮残る
353	W100	011-02	杭	丸杭		N104	塚2	49.3	径4.4	-	丸太材	シイ類	樹皮残る
354	W97	012-03	杭	丸杭		N104	塚2	43.9	径4.6	-	丸太材	シイ類	樹皮残る
355	W80	010-04	杭	丸杭		N100	塚2	39.2	径4.7	-	丸太材	ヒノキ属	
356	W114	010-06	杭	丸杭		N104	塚2	(72.4)	径5.9	-	丸太材	ムクノキ	
357	W83	015-07	杭	丸杭		N100	塚2	80.2	径9.0	-	丸太材	スギ	
358	W103	012-01	杭	丸杭		N104	塚2	86.6	径4.8	-	丸太材	シイ類	
359	W54	016-02	杭	角杭		N116	塚3	78.1	10.5	5.6	蜜柑割り	スギ	
360	W109	005-03	杭	丸杭		N116	塚3	36.4	径5.4	-	丸太材	クリ	
361	W108	005-04	杭	丸杭		N116	塚3	40.3	径4.0	-	丸太材	コナラ亜属	樹皮残る
362	W171	020-04	杭	丸杭		N116	塚3	122.7	径6.0	-	丸太材	スギ	
363	W110	005-02	杭	丸杭		N124	塚4	24.8	径4.1	-	丸太材	ムクノキ	

田丸道遺跡 凡例

- ・ 施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社『日本の伝統色』第5版(1989年)を用いて補っている。
- ・ 木製品の樹種は、保存処理を行った40点を株式会社吉田生物研究所に委託し、その他127点を布谷知夫氏(三重県立博物館)に依頼した。保存処理を行った製品は229～234、236～242、244～254、264～270、272～275、277、280～281、284～285である(このほか228・257・259・276・282も保存処理を行っている。ただし樹種は不明である)。
- ・ 木製品の実測図に用いたスクリーントーンは下記の通りである。



焼き



樹皮

## 4 自然科学分析と樹種同定

### a 自然科学分析の目的

花粉分析は生活圏からやや離れた範囲の植生が復元される。一方、植物珪酸体分析は、栽培植物であるイネ属の同定が可能である。

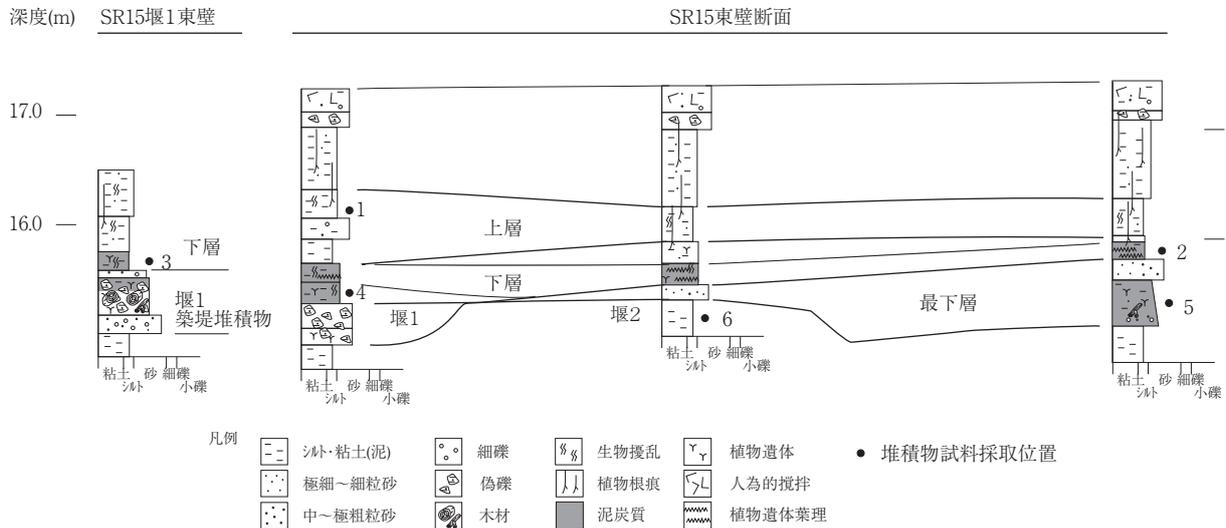
田丸道遺跡SR15の時期は、大きく3期に分かれる。最下層は弥生時代～古墳時代、下層は古墳時代後期、上層は平安時代に堆積したことが出土遺物から推測される(第IV-36図)。

今回は、周辺古環境復元を目的として、SR15

の断面堆積物試料および下層堆積試料7点について、花粉分析と植物珪酸体分析を行い、うち2点について種実同定を実施した(第IV-12表)。

また、発掘調査時に主に堰1から出土した種実約200粒、昆虫約20片について同定を行った。さらに、古代の築堤技術の復元を試みることを目的としてSR15の堰に用いられた筵状製品(粗朶)の材質同定を実施した。

以上の分析・同定および考察は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。(相場)



第IV-36図 調査地点の層序および堆積物試料採取位置

第IV-12表 堆積物試料一覧

番号	遺構	位置	層位・地点	層相	分析項目		
					花粉	植物珪酸体	種実
試料1	SR15	(上層)	上層	10YR4/2灰黄褐。細礫・粗粒～細粒砂混じり泥からなる。著しく撈拌されている。垂直方向の幅1mm以下の植物根根が認められる。	○	○	
試料2	SR15	堰3付近	下層	10YR3/1黒褐。植物遺体葉理を挟む極細粒砂～細粒砂混じり有機質泥からなる。	○	○	
試料3	SR15	堰1堤	下層 東壁	10YR3/2黒褐。粗粒～中粒砂を挟む泥炭質ないし有機質泥からなる。生物撈乱により初生の堆積構造は乱れている。微細な植物根および地下茎などを未分解植物遺体を多く含み、5mm以下の炭化材片混じる。	○	○	○
試料4	SR15	堰1	下層 堰の直上	10YR2/2黒褐色。中粒砂から細粒砂混じり有機質泥、著しい生物撈乱により初生の堆積構造とみられる葉理構造が確認されるが、生物撈乱により乱れている。未分解植物遺体・炭化材片が混じる。	○	○	○
試料5	SR15	堰3付近	最下層	10YR4/2灰黄褐。泥質細粒～中粒砂から細粒砂質有機質泥からなる。初生の堆積構造とみられる葉理構造が確認されるが、生物撈乱により乱れている。未分解植物遺体・炭化材片が混じる。	○	○	
試料6	SR15	堰2北側	ベース土	10GY7/1明緑灰。見かけ上塊状をなす洩汰の良いシルト質粘土からなる。生物撈乱の痕跡が確認される。	○	○	
試料7	SR15	堰1南側	最下層 ベース	10YR3/2黒褐。泥質細粒～中粒砂から細粒砂質有機質泥からなる。初生の堆積構造とみられる葉理構造が確認されるが、生物撈乱により不連続となっている。未分解植物遺体・炭化材片が混じる。	○	○	

b 花粉分析

**方法** 試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態等の情報についても記録する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

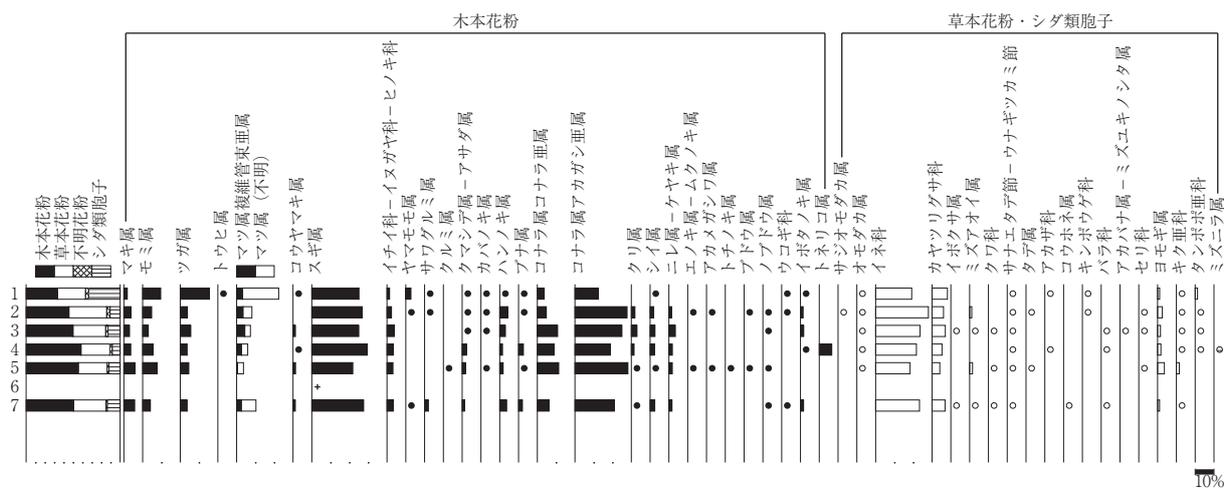
**結果** 結果を第IV-13表、第IV-37図に示す。流路底の基盤堆積物にあたる試料6以外の試料から、花粉化石が多く検出された。花粉化石群集は、検出された6点ともほぼ同様な組成であるが、上層に相当する試料1のみやや異なる。

木本花粉と草本花粉の比率は、木本花粉の方がやや多い。いずれの試料も、スギ属とアカガシ亜属の割合が高く、マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ亜属を伴う。試料1のみ、アカガシ亜属がやや減少し、マツ属、モミ属、ツガ属が増加する。その他、クリ属、シイノキ属、ニレ属-ケヤキ属を含む。

草本花粉は6試料全てでイネ科の割合が高く、次いでカヤツリグサ科、ヨモギ属と続く。オモダカ属、ミズアオイ属、イボクサ属などの水生植物も含む。(パリノ・サーヴェイ株式会社/田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

第IV-13表 花粉分析結果

種類(分類群)	地点・試料番号						
	S R 15						
	1	2	3	4	5	6	7
木本花粉							
マキ属	4	8	7	10	13	-	14
モミ属	21	10	7	15	17	-	10
ツガ属	34	8	13	10	10	-	9
トウヒ属	2	-	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	7	7	10	7	1	-	6
マツ属(不明)	42	10	7	9	7	-	19
コウヤマキ属	1	-	3	2	3	-	3
スギ属	55	56	58	80	48	2	67
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	5	9	9	7	-	8
ヤマモモ属	6	1	-	-	-	-	1
サワグルミ属	1	2	-	-	-	-	5
クルミ属	-	-	-	-	1	-	-
クマシデ属-アサダ属	1	1	1	6	4	-	3
カバノキ属	1	1	1	-	1	-	-
ハンノキ属	2	9	7	4	4	-	9
ブナ属	1	2	-	7	1	-	5
コナラ属コナラ亜属	8	10	25	24	25	-	15
コナラ属アカガシ亜属	27	58	58	51	62	-	51
クリ属	-	4	7	4	2	-	1
シイ属	1	4	6	6	1	-	6
ニレ属-ケヤキ属	-	3	8	5	4	-	4
エノキ属-ムクノキ属	-	1	-	-	1	-	-
アカメガシワ属	-	1	-	-	1	-	-
トチノキ属	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	-	1	-	-	1	-	-
ノブドウ属	-	2	1	-	2	-	1
グミ属	-	1	-	-	-	-	-
ウコギ科	1	1	-	-	-	-	1
エゴノキ属	-	-	-	2	-	-	-
イボタノキ属	1	3	4	2	-	-	4
トネリコ属	-	-	-	18	-	-	-
ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	1
タニウツギ属	-	-	-	-	1	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	2	-	-
草本花粉							
サジオモダカ属	-	1	-	-	-	-	-
オモダカ属	1	1	2	1	2	-	-
イネ科	122	124	107	98	71	-	111
カヤツリグサ科	52	27	32	24	16	-	33
イボクサ属	-	-	1	-	-	-	1
ミズアオイ属	-	5	1	-	6	-	3
ユリ科	-	-	-	-	-	-	3
クワ科	-	-	1	-	1	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	3	1	1	2	-	3
タデ属	-	1	-	-	1	-	-
アカザ科	1	-	-	1	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	1	-	-	-
コウホネ属	-	-	-	-	-	-	1
カラマツソウ属	-	1	-	-	-	-	-
キンポウゲ科	1	1	-	-	-	-	-
アブラナ科	-	-	-	1	-	-	-
バラ科	-	-	1	3	-	-	2
マメ科	-	1	-	-	-	-	-
フウロソウ属	-	1	-	-	-	-	-
アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	-	1	-	-	-	-
セリ科	-	1	3	-	1	-	-
オミナエシ属	-	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	7	11	7	8	14	-	5
キク亜科	2	4	3	3	6	-	4
タンポポ亜科	8	2	1	1	-	-	-
不明花粉							
不明花粉	22	17	12	12	8	1	7
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	3	-	2	-	1	-	1
イノモトソウ属	14	3	3	3	-	-	-
ミズニラ属	-	-	-	1	-	-	-
他のシダ類胞子	204	46	55	35	46	-	65
合計							
木本花粉	219	209	232	271	220	2	243
草本花粉	196	184	161	142	121	0	167
不明花粉	22	17	12	12	8	1	7
シダ類胞子	221	49	60	39	47	0	66
合計(不明を除く)	636	442	453	452	388	2	476



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出。●は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料から産出した種類を示す。

#### 第IV-37図 花粉化石群集

##### c 植物珪酸体分析

**分析方法** 各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由

来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

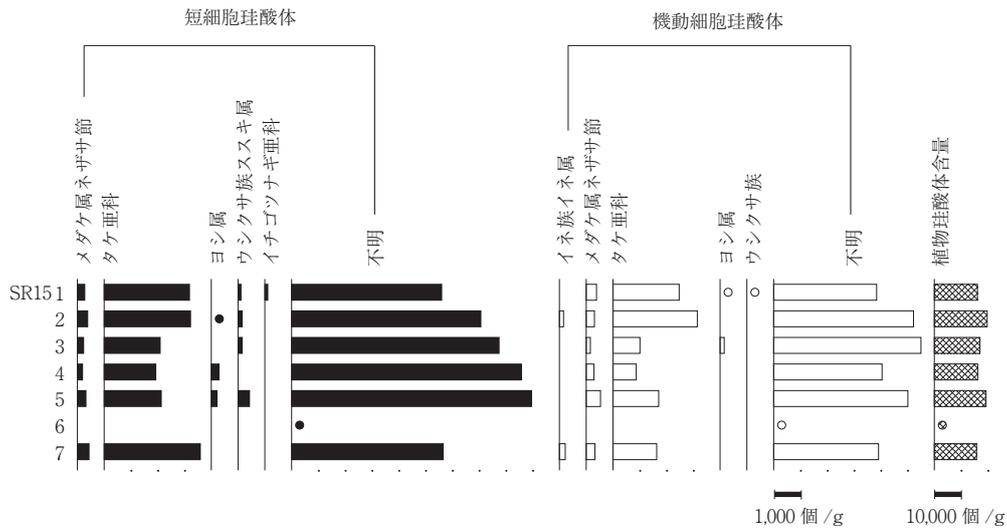
分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層的变化から古植生

第IV-14表 植物珪酸体含量

種類(分類群)	地点・試料番号						
	S R 15						
	1	2	3	4	5	6	7
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>							
メダケ属ネザサ節	300	400	200	200	300	-	400
タケ亜科	3200	3200	2100	1900	2100	-	3600
ヨシ属	-	<100	-	300	200	-	-
ウシクサ族ススキ属	100	200	200	-	400	-	-
イチゴツナギ亜科	100	-	-	-	-	-	-
不明	5600	7100	7700	8600	9000	<100	5700
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>							
イネ族イネ属	-	200	-	-	-	-	200
メダケ属ネザサ節	400	300	200	300	500	-	300
タケ亜科	2500	3100	1000	900	1700	-	1600
ヨシ属	<100	-	200	-	-	-	-
ウシクサ族	<100	-	-	-	-	-	-
不明	3800	5200	5500	4000	5000	<100	3900
<b>合計</b>							
イネ科葉部短細胞珪酸体	9300	10900	10200	11000	12100	<100	9700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6800	8800	6800	5200	7300	<100	6100
植物珪酸体含量	16100	19700	17000	16200	19300	100	15800

数値は10の位で丸めている含量密度(個/g)を示す。<100は100個/g未満を示す。



乾土 1g あたりの個数で示す。○●は 100 個未満、○(内部に模様) は 1,000 個未満を定性的に示す。

#### 第IV-38図 植物珪酸体群集

について検討するために、植物珪酸体含量の層的变化を図示する。

**結果** 結果を第IV-14表、第IV-38図に示す。SR15の各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。試料6を除き、各試料では同様な産状が見られる。すなわち、メダケ属(ネザサ節)を含むタケ亜科および分類群が明確にできない不明の産出が目立つ。また、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科がわずかにあるいは稀に認められる。試料2と7では、栽培植物であるイネ属の機動細胞珪酸体もわずかに産出する。なお、試料6では不明がわずかに認められるに過ぎない。(パリノ・サーヴェイ株式会社/田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

#### d 種実同定

**分析方法** 土壌試料は、200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料および洗浄済み試料を粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。

同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)、岡本(1973)、伊藤(2001)、徳永(2004)等との対照より実施し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸して保管する。

**結果** 結果を第IV-15~16表に、各分類群の写真を写真図版4、5に示す。

全10試料を通じて、木本26分類群(ヤマモモ、オニグルミ、イヌシデ、ウバメガシ、ウバメガシーコナラ、クヌギ節-カシワ、クヌギ節-カシワ-ナラガシワ、カシワ、ナラガシワ、コナラ亜属、ケヤキ、アブラチャン、スモモ、モモ、ハギ属、イヌザンショウ、サンショウ属、カエデ属A・B、ゴズイ、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科、クマノミズキ、エゴノキ、ムラサキシキブ属) 257個、草本23分類群(オモダカ科、ヒルムシロ属、イネ、イネ科、アゼスゲ類、スゲ属(3稜)、ホタルイ属、カヤツリグサ科(3稜・2面)、カラムシ属、ギシギシ属、ミゾソバ近似種、サナエタデ近似種、タデ属(3稜網目)、ナデシコ科、アブラナ科、ミズオトギリ、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、カタバミ属、スミレ属、イヌコウジュ属、シソ科、キク科) 87個、計344個の種実遺体が抽出・同定された。種実以外では、木の芽、木材、炭化材、植物のトゲ、菌核、昆虫類の破片などが、主に土壌試料より確認された。

栽培種は、スモモの核が3個(No. 4, 9, 11)、モモの核が5個(No. 9, 11)、イネの穎の破片が3個(No. 4)と、栽培種の可能性があるブドウ属の種子の破片が1個(No. 4)確認された。

栽培種を除いた分類群は、木本は全て広葉樹で、常緑高木のヤマモモ、常緑低木のウバメガシ、ウバ

第IV-15表 種実同定結果(1)

分類群	部位	状態	1段目：試料状態、2段目：位置、3段目：遺構名、4段目：層位										備考		
			土壌試料		水洗選別済み試料										
			3	4	8	9	10	11	12	13	14	15			
			東壁 断面	断面	N95	N96	N96	N104	N108	N112	N116	N112			
			SR15 堰1堤	SR15 堰1	SR15 堰1	SR15 堰1	SR15 堰1	SR15 堰2	SR15 堰2	SR15 堰2	SR15 堰3	SR15 堰2			
下層	しが らみ 直上	下層	下層	最下層	下層	下層	下層	下層	下層						
ヤマモモ	核	破片		1											
オニグルミ	核	完形 破片			1					1					
イヌシデ	果実	完形												8	
ウバメガシ	果実	破片 基部				1								1	
ウバメガシ-コナラ	殻斗	完形 破片			1	1						1		4	1
クヌギ節-カシワ	果実	破片 基部			2										接合
クヌギ節-カシワ- ナラガシワ	果実	破片 頂部 破片			1 9										
カシワ	殻斗 殻斗・果実	破片 破片								1 1					
ナラガシワ	幼果 殻斗 殻斗・果実 果実	完形 花柱残存 破片 完形 破片 完形 破片 頂部 破片 基部 破片				4 5 1 1	1		3	1 3 1 1		1		10 1 1 4	殻斗内に果実残存
コナラ亜属	幼果 果実 果実(未熟果)	完形 花柱欠損 破片 破片 頂部 破片 完形					1 3							7 3 1	
ケヤキ	果実	完形												1	
アブラチャン	果実・種子 種子	完形 完形				1			1						
スモモ	核	半分 破片		1		1			1						
モモ	核	完形 半分				2			1 2						接合
ハギ属	種子	完形												1	
イヌザンショウ	種子	完形	1												
サンショウ属	種子	破片	9	24											
カエデ属A	果実	完形												5	
カエデ属B	果実	完形												2	
カエデ属	種子	完形 破片	1	1 1											
ゴンズイ	核	完形												1	
ブドウ属(栽培種?)	種子	破片		1											
ブドウ属	種子	破片	2												
ノブドウ	種子	完形												1	
ブドウ科	種子	破片	1	1											
クマノミズキ	核	破片												1	
エゴノキ	果実・種子 種子	完形 完形 破片		1		1 10 1		6 1	4 1	1	2 3		1	7 15	
ムラサキシキブ属	核	完形 破片	6 1	17											
オモダカ科	種子	完形	1	1											
ヒルムシロ属	果実	完形												1	
イネ	穎	破片 破片 破片		1 1 1											
イネ科	果実	完形	1	4											
アゼスゲ類	果実	完形 破片	2 3	1 1											

第IV-16表 種実同定結果(2)

分類群	部位	状態	1段目：試料状態、2段目：位置、3段目：遺構名、4段目：層位										備考	
			土壌試料		水洗選別済み試料									
			3	4	8	9	10	11	12	13	14	15		
			東壁 断面	断面	N95	N96	N96	N104	N108	N112	N116	N112		
SR15 堰1堤	SR15 堰1	SR15 堰1	SR15 堰1	SR15 堰1	SR15 堰2	SR15 堰2	SR15 堰2	SR15 堰3	SR15 堰2					
下層	しが らみ 直上	下層	下層	最下層	下層	下層	下層	下層	下層					
スゲ属	果胞	破片		1										
スゲ属(3稜)	果実	完形 破片	2 1	1										
ホタルイ属	果実	完形 破片	2	3 3										
カヤツリグサ科(3稜)	果実	完形 破片	1	2										
カヤツリグサ科(2面)	果実	完形					1							
カラムシ属	果実	完形	2	2										
ギシギシ属	花被	破片		1										
ミゾソバ近似種	果実	破片		1										
サナエタデ近似種	花被	破片		1										
草本	タデ属(3稜網目)	果実	1	2										
	タデ属(網目)	果実	4	15										
ナデシコ科	種子	完形		1										
アブラナ科	種子	完形		1										
ミズオトギリ	種子	完形	2											
キジムシロ類*	核	完形		2										
		破片		3										
カタバミ属	種子	破片	1											
スマレ属	種子	完形		2										
		破片		2										
イヌコウジュ属	果実	完形		3										
		破片		4										
シソ科	果実	完形	1											
キク科	果実	完形	1											
その他	木の芽		+	+										
	木材		+	+										
	炭化材		+	+										
	植物のトゲ		+	+										
	菌核		+					+						
	昆虫類		+	+										
分析量			200cc 210g	200cc 258g										

注)\*キジムシロ類：キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

メガシまたは落葉高木のコナラ、落葉高木のクヌギ節またはカシワ、カシワ、ナラガシワ、オニグルミ、イヌシデ、ケヤキ、クマノミズキ、落葉高木または小高木のカエデ属、落葉小高木のゴンズイ、エゴノキ、低木のアブラチャン、イヌザンショウ、ムラサキシキブ属、落葉低木または多年草のハギ属、落葉籐本のブドウ属、ノブドウ、ブドウ科などが確認された。ナラガシワなどのコナラ亜属が多く、果実や殻斗、幼果(未熟個体)が確認された。

草本は、2個以外が土壌試料から抽出された。明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属

する分類群から成り、オモダカ科、ヒルムシロ属、アゼスゲ類、ホタルイ属、ミゾソバ近似種、ミズオトギリなどの水湿地生植物を含む。

以下に、主な分類群の形態的特徴等を記す。

〈栽培種〉

・スモモ(*Prunus salicina* Lindley)バラ科サクラ属  
核(内果皮)は灰褐色、完形ならばレンズ状広楕円体。最大片の残存長は14.6mm(No.11)、残存幅は11.6mm(No.11)、厚さは7.3mm(No.4)。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状

部がある。No.11は、縫合線に沿って半割した破片である。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。半割した内側表面は平滑で、種子1個が入る卵状の窪みがみられる。

・モモ(*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色、やや偏平な広楕円体。最小核は、長さ21.3mm、幅16.9mm、厚さ14.2mm(No. 9)、最大核は、長さ25.0mm、幅19.1mm、厚さ14.2mm(No. 9)。核の頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。No.11の半分2個は、縫合線に沿って半割した破片で接合し1個体となる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。半割した内側表面は平滑で、種子1個が入る卵状の窪みがみられる。

・ブドウ属(*Vitis*) ブドウ科

種子は灰黒褐色、完形ならば狭～広倒卵形、側面観は半広倒卵形、やや偏平なこん棒状など。基部は嘴状に尖る核嘴があり、腹面側の先に臍がある。腹面は正中線上に(鈍)稜をなし、細い筋が走る。正中線の左右には、各1個の長さ2mm、幅0.3～0.4mm程度の広線～狭楕円形で深く窪む核窪みがある。背面は、正中線上に1個の倒へら形、卵形の合点があり、細く浅い溝に囲まれる。種皮表面は粗面、断面は柵状。

No. 4は、腹面と背面上半部を欠損した破片で、残存長3.5mm、残存幅3.2mm。基部の核嘴は、長さ1.3mm、幅1.7mmと太く長く突出することから、栽培種のブドウ(*V. vinifera* L.)に由来する可能性がある。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎(果)は淡～灰褐色、炭化個体は黒色。完形ならば長さ6～7.5mm、幅3～4mm、厚さ2mm程度のやや偏平な長楕円体。破片の大きさは、最大2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。果皮は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

〈その他〉

・ウバメガシ(*Quercus phillyraeoides* A. Gray) ブ

ナ科コナラ属コナラ亜属ウバメガシ節

果実は茶褐色、楕円体。破片の残存長17.6mm、残存径11.5mm(No. 9)。頂部はやや尖り、殻斗の圧痕である輪状紋は確認されず、花柱を欠損する。果皮表面はやや平滑で、浅く微細な縦筋が配列し、破片は縦筋に沿って割れている。基部はやや突出し、果皮とは別組織の着点がある。着点は灰褐色、径4.4～4.5mmの円形。着点が非常に小さい点を同定根拠とした。

殻斗は灰褐色、総苞片は浅い杯状。長さ(高さ)5.3～7.2mm、径8.5～13.7mmの浅い杯状。杯の壁の厚さは0.9～1.4mmで、ナラガシワよりも薄い。表面には、卵形～長楕円形で鈍頭の総苞片が螺旋状に配列する。殻斗については、本地域に分布するコナラ(*Q. serrata* Thunb. ex Murray; コナラ亜属コナラ節)の殻斗との区別が困難であるため、両種をハイフォンで結んでいる。

・クヌギ節(*Quercus Sect. Cerris*) - カシワ(*Quercus dentata* Thunb. ex Murray) ブナ科コナラ属コナラ亜属

果実は黒褐色。完形ならば径2～3cm程度の球～楕円体。破片は、基部全面を占める着点で、径10.5mmの円形。果皮の下端よりもやや突出し、基部は平ら。表面には粗く不規則な粒状紋様がある。着点がやや凹むナラガシワとは区別される。

本地域に分布するクヌギ節は、クヌギ(*Q. acutissima* Carruthers)とアベマキ(*Q. variabilis* Blume)がある。カシワを含めて、着点の形状のみでは区別が困難であるため、ハイフォンで結んでいる。

・カシワ(*Quercus dentata* Thunb. ex Murray) ブナ科コナラ属コナラ節

殻斗、果実は灰黒褐色、殻斗の破片は、残存長(高)1.3cm、径2.1cm程度の椀状。表面には皮針形でクヌギやアベマキよりも質の薄い総苞片が螺旋状に配列し、反り返る先端付近を欠損する。殻斗に包まれる果実は、上半部を欠損する破片である(No.12)。果皮外面は平滑で、浅く微細な筋が縦列する。

・ナラガシワ(*Quercus aliena* Blume.) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

幼果、殻斗は灰黒褐色。幼果は径0.5～1.3cm程度の椀型で、頂部には3花柱が残存する。殻斗は長さ(高

さ) 0.8 ~ 1.5cm、径1.8 ~ 2.7cmの椀状。椀の壁は、厚さ2.2 ~ 3.1mmで、先端は内側を向く。幼果と殻斗の表面には、狭卵形の総苞片が螺旋状に配列する。

殻斗に包まれる果実は茶褐色。完形ならば広卵体。最大片の残存長2.6cm(No.13)、径19.7mm(No. 9)。頂部は尖り、輪状紋は確認されない。果皮表面は平滑で、浅く微細な縦筋が配列する。基部は切形で、果皮とは別組織の着点がある。着点は灰褐色、径9.3 ~ 12.1mm の円形で、果皮下端よりやや凹む。表面には維管束の穴が輪状に並ぶ。なお、種の同定根拠となる花柱を欠損する幼果や、果実や殻斗の破片をコナラ亜属(*Q. subgen. Quercus*)にとどめている。

・アブラチャン(*Lindera praecox* (Sieb. et Zucc.) Blume) クスノキ科クロモジ属

果実、種子は灰黒褐色、長さ11.3 ~ 12.0mm、径10.6 ~ 10.9mmの偏球体。果実は頂部に点状の小突起がある。果皮は薄く、表面には小斑点がある。種子は、頂部にやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く、表面は粗面。

・カエデ属(*Acer*) カエデ科

果実は形状が異なる2型が確認された。茶褐色、

長さ4.7 ~ 5.6mm、幅3.7 ~ 4.6mm、厚さ2.5 ~ 3.7mmの楕円体で、イロハモミジ(*A. palmatum* Thunb.)の類に似る果実をカエデ属A、黒褐色、長さ7.2 ~ 7.5mm、幅4.6 ~ 5.0mm、厚さ1.7 ~ 2.2mmの偏平な非対称楕円体の果実をカエデ属Bとしている。果実はいずれも頂部から伸びる翼の先端部を欠損する。基部は切形で2翼果の合着面は平ら。両面の正中線上に鈍稜がある。果皮表面には葉脈状の隆条模様がある。

(パリ)ノ・サーヴェイ株式会社/田中義文・馬場健司・松元美由紀・齊藤崇人・高橋敦)

#### e 昆虫同定

**分析方法** 2ケースから、保存状態が良いと思われる20片について、双眼実体顕微鏡やルーペを用いて同定を実施した。なお、同定にあたっては、東京農業大学松本浩一氏の協力を得た。

**結果** 結果を表IV-17表に示す。試料16(堰1)のうち、種まで同定できたものは、コガネムシ、ドウガネブイブイ、クロツヤクシコメツキコアオハナムグリの4種、試料17(堰2)のうち、種まで同定できたものは、コガネムシ1種である。なおNo.1とNo.2のコガネムシは同一個体の可能性がある。コガネムシは、河川

第IV-17表 昆虫同定結果

試料番号	遺構名	採取日	目名	科名	種名	部位
16	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	右上翅の一部
	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	前胸背板
	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	ドウガネブイブイ	左上翅基部
	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	コメツキムシ	クロツヤクシコメツキ	前胸
	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コアオハナムグリ	左上翅末端部
	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	不明	不明	胸部の一部
	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	胸部の一部
	SR15 堰1	2011/1/13	コウチュウ	不明	不明	脚の一部
17	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	右上翅の一部
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	中胸側板
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	中胸腹板
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	尾節板
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	左上翅
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	腹部腹板
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	上翅の一部
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ	左中腿節
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	不明	不明	脚の一部
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	ハナムグリ属の一種	左中頸節
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	不明	不明	腹部の一部
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	胸部前側板
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	口器の一部
	SR15 堰2	2011/1/20	コウチュウ	コガネムシ	コガネムシ科の一種	脚の一部

敷などの開けた場所のギシギシ・イタドリ類を摂食する。ドウガネブイブイは、各種広葉樹の葉を摂食する。クロツヤクシコメツキは本州以西の平地に普通に生育する種類である。コアオハナムグリは各種植物の花に集まる。(パリノ・サーヴェイ株式会社／田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

#### f 土壌分析および種同定の考察

**調査区および周辺の植生** 今回分析を行った弥生時代から古墳時代後期の最下層・下層堆積物は砂層を挟在する植物遺体混じりの有機質泥ないし泥炭質泥からなり、いずれの層準も程度の違いはあるものの生物擾乱の影響を受けている。このような層相から、最下層・下層堆積物は周辺からの氾濫堆積物が流入する時期を挟在するが、基本的には比較的静穏な堆積環境で形成されたことが推定される。このような堆積物中の植物化石群集は、調査地点近辺の流路沿いの植生を強く反映している可能性が高いと推定される。植物化石群集から過去の植生を復元する場合、花粉・胞子・種実・葉・木材・植物珪酸体といった、植物体の各部位の各植物遺体群がどのような過程(堆積物中への取り込まれ方、堆積時後の分解作用の影響など)を経て形成されたものか(タフォノミー)を検討し、それを複合的に調査することで、母植物の統一的把握、母植物の生育地の推定や植生の空間的分布状況の把握が可能となることが指摘されている(辻ほか,1986)。

今回の分析結果でも、花粉化石群集と種実化石群集を比較すると、両者で共通して産出する種類として、落葉広葉樹の種類や草本植物が、花粉のみで産出する種類として針葉樹や常緑広葉樹が認められる。このような両群集での産出の差異は、上記の堆積環境を踏まえると、母植物の生育地の違いを反映している可能性が高く、両者に共通する種類は流路沿いの植生を反映しており、花粉化石でのみ産出する種類はより離れた場所の植生を反映しているものと推定される。

流路沿いの植生を反映しているとみられる落葉広葉樹の種類をみると、種実と花粉化石で概ね対応する種類が確認されている。産出した主な落葉広葉樹は、オニグルミ、イヌシデ、クヌギアベマキ、ウ

バメガシ、ナラガシワ、カシワ、ケヤキ、アブラチャン、イヌザンショウ、サンショウ属、カエデ属、ゴンズイ、ブドウ属、ノブドウ、クマノミズキ、エゴノキ、ムラサキシキブ属などである。これらの種類は河畔や林縁など明るい林地を好む種類のほか、成長が早く、自然・人為的攪乱を受けた場合でも萌芽による再生が可能な種類を含む。すなわち、洪水などによって植生が失われた場所や人為的攪乱などを受けた領域に先駆的に侵入して林分を構成する要素が多い。これらの木本類が流路沿いの植生を構成する要素であったと推定される。

一方、草本植物は、花粉・種実ともに多く検出されている。花粉化石では、イネ科やカヤツリグサ科が多く含まれるが、種実でもイネ科やスゲ類などのカヤツリグサ科が含まれ、周辺に生育していたと考えられる。なお、植物珪酸体ではネザサ節を含むタケ亜科が多い。タケ亜科は植生が失われた場所に先駆的に進入して篠地を作るほか、林床に生育する種類も多く、周辺には比較的多く存在していたことが伺われる。しかし、分類群を明確にできない不明も概して多い。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤,1982;杉山・藤原,1986)、他の種類よりも残留しやすい。このため、実際には、今回の産状に見られるほどタケ亜科が繁茂していたとは考えにくい。その他、ヨシ属やススキ属、イチゴツナギ亜科も認められ、これらのイネ科植物も生育していたと思われる。また、花粉化石や種実遺体では水生植物(もしくは水生植物を多く含む分類群)の産出もみられる。ヒルムシロ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ホタルイ属、ミゾソバ、ミズオトギリが検出されており、流路内あるいは集水域に生育していたと考えられる。その他、カラムシ属、ギシギシ属、タデ、ナデシコ科、アブラナ科、キジムシロ類、カタバミ属、スミレ属等は開けた草地を好むことから、氾濫もしくは人為的影響によって植生が失われた場所に草地を形成していたと考えられる。

以上のことから、SR15を充填する下層・最下層が形成された弥生時代～古墳時代後期には、流路沿いの氾濫低地には落葉広葉樹の林分や草本類が卓越

する植生が存在したことが推定される。一方、花粉化石でのみ多産したアカガシ亜属やシイ属などの常緑広葉樹や、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹はこれらの植生より離れた場所に生育していたものと思われる。

中勢道路建設に伴う中林・中道遺跡や小津遺跡など伊勢湾南岸部の海岸平野の花粉分析結果でも、今回と同様中世以前においては、アカガシ亜属やシイ属などの常緑広葉樹と、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹の花粉化石群集が確認されている。これらのうち、アカガシ亜属やシイ属は、安定した土地条件に常緑広葉樹林を作る主要素であり、現在でも自然度の高い場所にはこれらの森林が成立している。このことから、当時の後背山地など土地的に安定した場所には、常緑広葉樹林が存在していたとみられる。また、針葉樹のマキ属、モミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が検出される。この中でもスギ属の割合が多い。スギ属は沖積地や扇状地の土地条件の悪い場所でも生育可能であることから、沖積地を中心に多く生育していたと考えられる。しかし、スギは花粉生産量が多く、多量に飛散することから実際の植生と比較して花粉化石の割合は高くなる。このため当時のスギ属は、花粉化石から推測されるほど多くなかったと考えられる。また、スギは種実遺体が検出されていない。おそらく、化石としての残りやすさに由来していると考えられるが、SR15の河畔ではなく、やや離れた地域に分布していたと推定される。他の針葉樹は、斜面地、尾根沿い、谷頭など土壌が流出しやすく、土地条件の悪い場所に生育することが多いことから、周辺の丘陵地の谷筋などに生育していたと思われる。

平安時代と推定される上層堆積物ではマツ属花粉が増加傾向を示している。マツ属花粉の増加は、周辺の森林破壊等にもなうマツ二次林の増加に由来する可能性があるが、これまでの調査によれば、雲出川流域などでのマツ属花粉の増加は中世以降であることから、今後、調査地域の地形発達や人間による山林活用動態を踏まえた評価が必要である。

**植物利用** 弥生時代から古墳時代の堆積物から検出された植物遺体には、栽培植物に由来するものが認

められる。その種類は植物珪酸体で検出されたイネと、スモモ、ウメ、モモ、イネである。いずれも日本各地の多くの遺跡で出土例があり、本地域でも広く栽培・利用されていたことが推定される。

また、ヤマモモ、オニグルミ、ナラ類のドングリ、ブドウ属は、種実が食用可能である。出土状態や出土部位から食用後の残渣が廃棄された可能性は低いが、遺跡近くに分布していたことから、当時の人々が利用していた可能性はある。

**下層堆積物の昆虫化石について** 堰を覆う堆積物から産出した昆虫化石は、すべてコウチュウ目のものであった。さらに1点のコメツキムシ科を除く他の大部分はコガネムシ科の体の一部であった。種まで同定できたものは、コメツキムシ科のクロツヤクシコメツキ、コガネムシ科のコガネムシ、ドウガネブイブイ、コアオハナムグリの4種であり、いずれも現代では日本全土もしくは関東以西の平地から低山地に極めて普通な種である。クロツヤクシコメツキは草地や荒地などの二次的環境に多くみられ、草本植物などの根を幼虫が摂食する。ドウガネブイブイは林地・草地・荒地など広く多様な環境に生息し、各種広葉樹の葉を摂食する。コアオハナムグリも草地や荒地などの二次環境に見られる環境適応力の強い種であり、幼虫が各種草本の根を食害し、成虫は各種植物の花を摂食する。コガネムシは河川敷などの開けた環境に生息し、ギシギシ・イタドリ類の葉を摂食する。コガネムシの中には同一個体と思われるものがみられた。また、種の決定部位が見られないためコガネムシ科の一種と同定されたものも、本種の一部である可能性が高い。これらは少なくとも数個体分の遺体の断片であると考えられる。これらの昆虫が生育する環境は、植物化石から推測される古植生に近いものであり、調和的といえる。(パリノ・サーヴェイ株式会社/田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

#### g 粗朶の樹種

**試料** 対象資料は、下層の堰の柵を構成している粗朶である(試料18)。粗朶は2ブロックに分けて採取されている。このうち、1ブロックでは、比較的径の揃った丸棒状の木材が隙間無く並ぶ部分と薄い植物遺体が幾重にも重なっている部分とがある。樹種

第IV-18表 筵の樹種同定結果

資料番号	位置	遺構名	層位	試料情報				樹種
				仮番	形状	径	長さ	
試料18	N96	SR15堰1	下層	W-1	芯持丸木	0.4cm	21.5cm以上	広葉樹(当年性)
				W-2	芯持丸木	0.4cm	22cm以上	広葉樹(当年性)
				W-3	芯持丸木	0.4cm	10.8cm以上	広葉樹(当年性)
				W-4	芯持丸木	0.4cm	12.3cm以上	広葉樹(当年性)
				W-5	芯持丸木	0.4cm	16.5cm以上	広葉樹(当年性)

同定試料は、丸棒状の木材の中から5点(W-1~5)、植物遺体から2点(W-6,7)の合計7点を選択した。

**分析方法** 資料の状態・木取りを観察した上で、分析用の木片試料を採取する。剃刀を用いて木片から木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。

**結果** 樹種同定結果を表IV-18表に示す。粗朶木のうち木材は全て広葉樹の当年枝であり、組織の状況から同一種と考えられるが、木材組織が発達していないために樹種は不明である。また植物遺体は、2点とも草本類と考えられる。解剖学的特徴等を記す。

・広葉樹

道管は単独または2~3個が放射方向に複合して散在するが、全体的に放射方向に道管が揃う傾向がある。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、ほぼ単列であるが、所々で2列になり、1-30細胞高。

・草本類

軸方向組織のみで構成され、放射組織は認められない。軸方向組織は、道管と柔細胞が認められ、道管は2-3個が集合した状態で散在している。

放射組織が認められないことから草本類であり、道管の配置状況からイネ科に似ているが、保存状態が悪く、種類は不明である。

**考察** 河道SR15の堰1下層から採取された粗朶は、直径0.4cm、長さ10.8~22cm以上の丸棒状の木

材が並べられた下に圧密により薄くなっている草本植物の植物遺体が幾重にも重なっている。観察した範囲では、丸棒状の木材は一方向にのみ並んでおり、直交するような状況は見られないが、草本類については交差して設置されている状況が確認される。これらは、木杭で固定されており、土堤を築く際の土盛り等のために使用された可能性が考えられている。丸棒状の木材は、いずれも広葉樹の当年性の枝等と考えられる。種類の同定はできなかったが、組織の特徴からいずれも同一種と考えられる。また、いずれも端部を欠損しているが、長い資料では22cmを超えている。これらのことから、枝がよく分岐し、当年性の小枝が比較的長く伸びるような種類が想定される。粗朶の木材を遠方から調達したとは考えにくく、周囲に生育していた樹木の枝等を利用したと考えられる。

丸棒状の上に見られる植物遺体は、葉等に由来する可能性があるが、保存状態が悪く、形状が明確な資料は得られなかった。丸棒状の木材を並べ、その上に植物遺体を敷くことで隙間を埋めたこと等が考えられる。(パリノ・サーヴェイ株式会社/田中義文・馬場健司・松元美由紀・斉藤崇人・高橋敦)

h 樹種同定の目的

**杭における樹種同定の目的** SR15出土木製品について樹種同定を行った。木製品における樹種を選択を検討するとともに、身近な植生を反映する杭の樹種から古環境を復元することを目的とした。

樹種同定を行うにあたり、調査終了後の段階で中原計氏(鳥取大学)に、目視による検討および指導をいただいた。樹種同定は、保存処理を行った木製品40点については株式会社吉田生物研究所に委託した。堰に用いられた杭127点については三重県立博物館館長布谷知夫氏に同定を依頼し、結果報告を頂いた。なお、個別の同定結果は、遺物観察表(第IV-8~11表)に記載している。(相場)

## i 樹種同定結果

県立博物館に持参された127の試料について、かみそりで薄片を作り生物顕微鏡で観察して樹種同定を行った。その結果、同定した樹種数は17種(属ふくむ)であった(第IV-19表)。

全ての資料が杭材であるため、その材の由来は選択された利用材の一部であったり周囲の林からの伐採材であったりと、さまざまなものが混在していると考えられる。そのために個々の材の由来についての考察には無理があるが、一般的な樹種の生育地などについて簡単に述べる。

### イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia*

やや湿気た森林内部の樹種であり、暖温帯から冷温帯まで幅広く見られる亜高木の常緑針葉樹、非常に粘りのある樹種であるために、選択して利用されることがある。

### モミ *Abies firma*

もともとは暖温帯と冷温帯の中間部分などの岩場を生育地とする常緑針葉樹であり、脂分が少なく白い材であることを生かして、有用材として利用されることがある。なお日本のモミ属にはモミ以外にも分布するが、全体の立地からモミとした。

### スギ *Cryptomeria japonica*

加工がしやすく多用される材であるが、現在見るスギはほとんどが植林由来であり、もともとはさほどどこにも見られる樹種ではない。本来は大きな河川の河口部などが生育地であり、田丸道遺跡周辺のそのような場所から材として運ばれてきた可能性が高い。

### コウヤマキ *Sciadopitys verticillata*

湿気に強く材として利用されることが多いが、本来は亜高山の樹種であり、また現在では四国の一部や信州の高山帯、紀伊半島の産地などに見られるが、以前はかなり広く高山で見られたとされている。低地での生育は見られないために、運ばれてきた樹種である。

### ヒノキ *Chamaecyparis obtuse*

材として多用される樹種であるが、スギと同様に現在見られる林はほとんどが植林由来であり、もともとは山地のやや乾いた立地を好む樹種であり、やはり運ばれてきた樹種と考えられる。なお日本のヒノキ属にはヒノキ以外にも分布するが、全体の立地か

らヒノキとした。

### ハンノキ属 *Alnus sp.*

氾濫原のような低湿地に見られる樹種であり、有用材としての利用はあまり例がないが、遺跡からの出土例は多い。なお、ハンノキ属には山地を生育地とする樹種もある。

### シイ属 *Castanopsis sp.*

暖温帯の最も主要な優占種であり、丘陵地などの安定した立地での極相林である。なおシイ属にはコジイとスダジイがあり、材からも区分はできるが連続的な特徴であるためにシイ属とした。

### クリ *Castanea crenata*

材も湿気に強く利用されるが、むしろ果実を食用として利用している。本来の生育地は暖温帯の上部、あるいは中間温帯と呼ばれる立地になり、平地では生育しない樹種であるが、近年では、古くからの半栽培状態で人里近くに、見られたのではないかと、言う意見が強い。

### アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis*

暖温帯の優占樹種、いわゆるカシ類である。カシ類には丘陵地にも見られる樹種が数種あるが、その区別は材では難しく、区分はしていない。

### コナラ亜属

### *Quercus subgen.*

### *Quercus*

一般的には常緑樹であるカシ類の林を伐採した後に成立する落葉樹林の優占種であるナラ類である。コナラとクヌギ、アベマキの仲間との区分ができる。今回の試料の中でも典型的なコナラあるいはクヌギあるいはアベマキと思えるものは見られたが、本来は連続的なものであり、今

第IV-19表 杭の樹種同定結果

塚名	資料数
コナラ亜属	32
スギ	18
ヒノキ	16
コウヤマキ	14
シイ類	9
アカガシ亜属	9
クリ	7
ムクノキ	5
ネジキ	3
リョウブ	3
ハンノキ類	2
ネムノキ	2
カエデ類	2
シオジ類	2
イヌガヤ	1
モミ	1
ヤマハゼ	1
計127点	

回は区分していない。

#### ムクノキ *Aphananthe aspera*

河川周辺の自然堤防の上など、やや多湿な安定した立地で見られる。特別な目的で使われる有用中でも内が、巨木となるために、利用価値は高い。

#### ネムノキ *Albizia julibrissin*

河川堤防や低湿地などの多湿な日が当たる立地にパイオニア的に進入する樹種であり、亜高木であることもあって、有用樹としては特別な利用はない。種子は風散布であり、広く分布される。

#### ヤマハゼ *Rhus sylvestris*

ウルシの仲間であり、新たに作られた日が当たる立地にパイオニアとして進入する樹種である。亜高木であり、差ほど大きな材を持たないために特別な有用材ではないが、細工物などに利用する例はある。

#### カエデ属 *Acer* sp.

カエデ類はその種数が多いが、材での区分は難しくカエデ類とした。その多くは山地の溪谷の岩場を立地とするものが多い。ただ種子が風邪で運ばれて、やや日が当たる湿気たコケや多湿地などで発芽することが多く、遺跡周辺に生育した可能性も高い。

#### ネジキ *Lyonia ovalifolia*

コナラ林やアカマツ林の中のやや日が当たる立地で生育する典型的な二次林樹種。特別な材の利用はない。

#### リョウブ *Clethra barbinervis*

暖温帯から冷温帯にかけてみられ、幅広い二次林の中での樹種。特別な材の利用例はないが、材の硬いことには特徴がある。

#### シオジ属 *Fraxnus* sp.

アオダモやシオジなどの仲間であり、樹種によってやや幅広い環境下に見られるが、共通した生育環境は、やや明るい落葉樹林の中である。材は粘りがあることと木目がケヤキに似て好まれる。

このように同定した17種については、その立地はかなり幅があり、ごく周辺の林から伐採した樹種、周囲にある常緑樹の林から運んだもの、材が有用であるために遠方から運んだものなどが混在していると考えられる。

なお、種ごとの試料数についても大きな差がある。数の多いものでは、針葉樹のスギ、コウヤマキ、ヒ

ノキなどであり、広葉樹ではシイ類、クリ、カシ類、ナラ類などである。その他では大半は1～3点である。どちらかと言うと試料数の多い樹種は、有用樹として利用している種が多く、再利用や利用残材の可能性もある。逆に点数の少ない樹種はどちらかといえば、周辺から伐採してきて使ったと思われる樹種が見られる。(布谷知夫)

[パリノ・サーヴェイ株式会社 引用文献]

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I) . Almqvist&Wiksell,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) .147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アキラコーラル企画,155p.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤ふくお,2001,どんぐりの図鑑,北川尚史監修,トンボ出版,79p.

近藤錬三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究,昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書,32p.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版) .大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.

岡本素治,1973,どんぐりのはなし(3) .Nature Study,19巻8号,大阪市立自然科学博物館編,大阪自然科学研究会,7-10.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態,大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

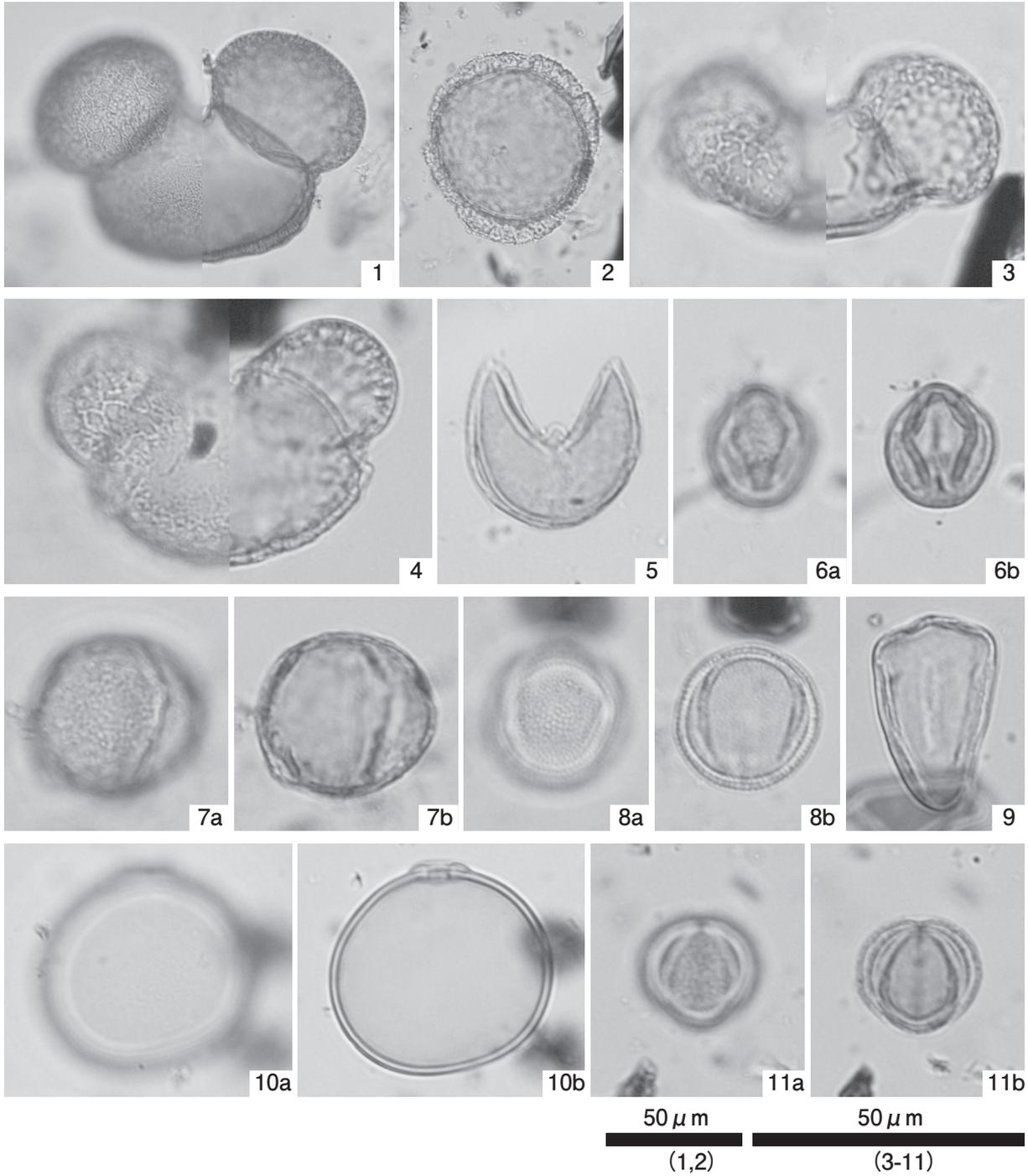
杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として- .考古学と自然科学,19,69-84.

徳永桂子,2004,日本どんぐり大図鑑,偕成社,156p.

辻 誠一郎・南木睦彦・鈴木三男・能城修一・鈴木三男・吉川純子・橋屋光孝,1987,東京都中里遺跡の縄文時代以降の古植生.「中里遺跡2-遺跡と古環境2-」,中里遺跡調査団編,東北新幹線中里遺跡調査会,321-323.

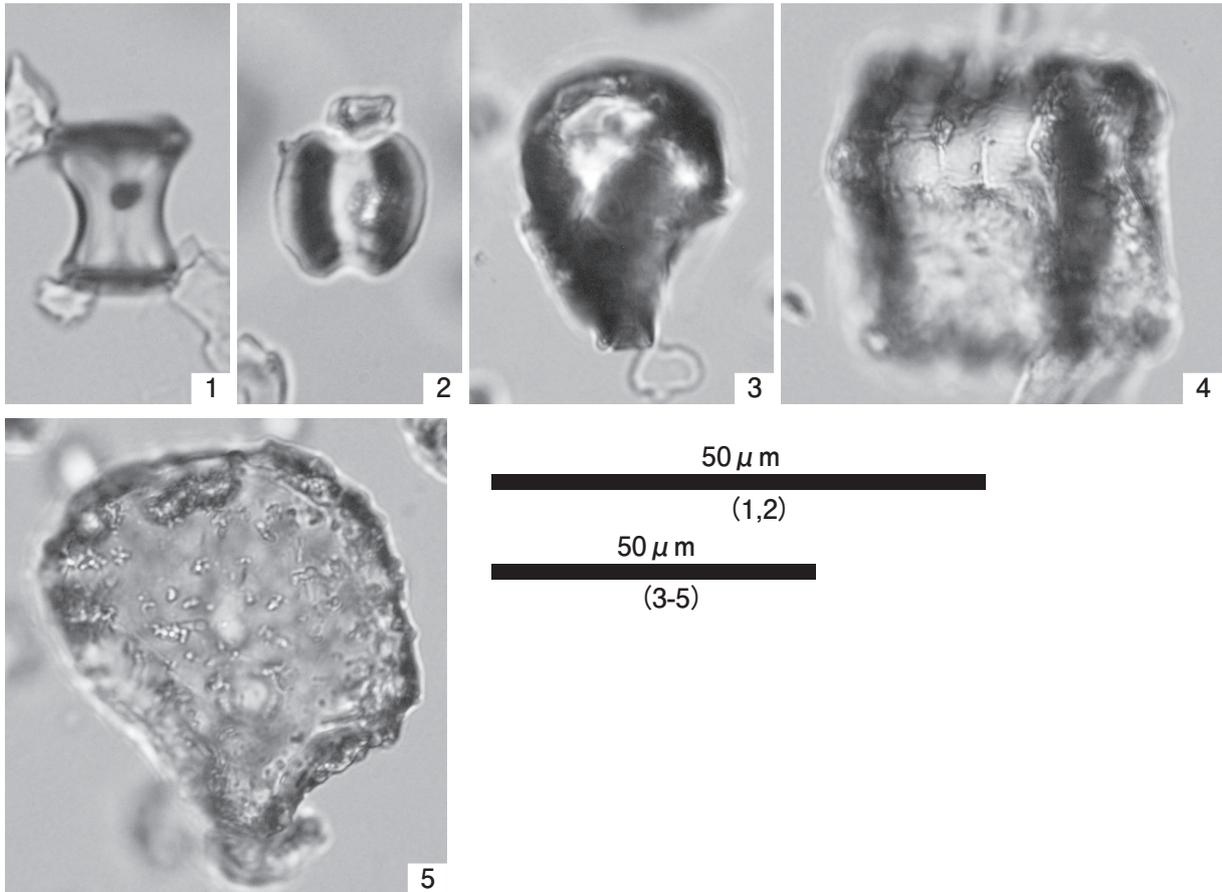
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) ,1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) ,海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

写真図版2 花粉化石



- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| 1. モミ属 (SR15;4)        | 2. ツガ属 (SR15;2)         |
| 3. マキ属 (SR15;5)        | 4. マツ属 (SR15;2)         |
| 5. スギ属 (SR15;3)        | 6. コナラ属 アカガシ亜属 (SR15;2) |
| 7. コナラ属 コナラ亜属 (SR15;4) | 8. トネリコ属 (SR15;4)       |
| 9. カヤツリグサ科 (SR15;7)    | 10. イネ科 (SR15;2)        |
| 11. ヨモギ属 (SR15;2)      |                         |

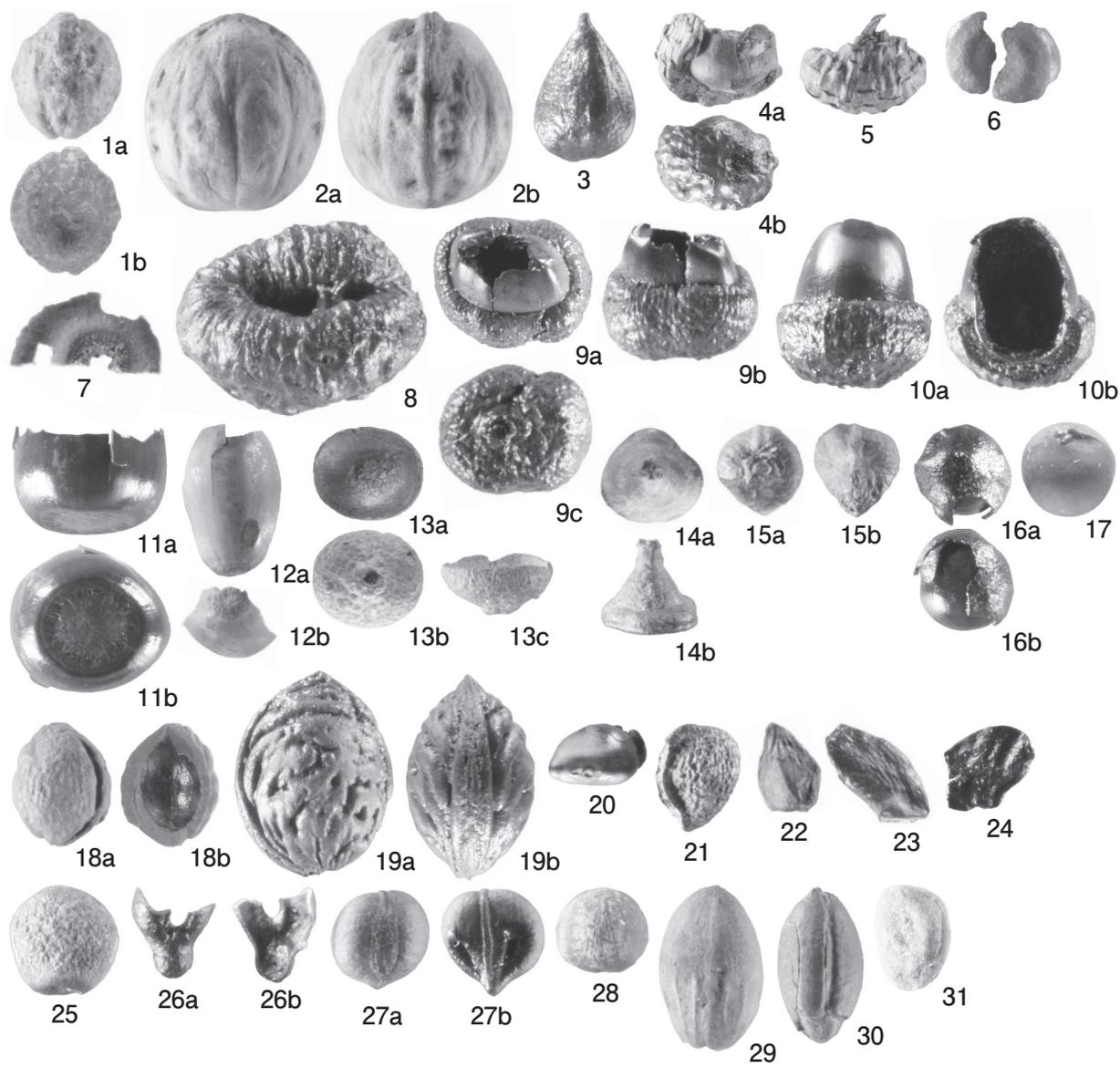
写真図版3 植物珪酸体



1. ネザサ節短細胞珪酸体(SR15;1)
3. イネ属機動細胞珪酸体(SR15;1)
5. ヨシ属機動細胞珪酸体(SR15;2)

2. ヨシ属短細胞珪酸体(SR15;3)
4. ネザサ節機動細胞珪酸体(SR15;1)

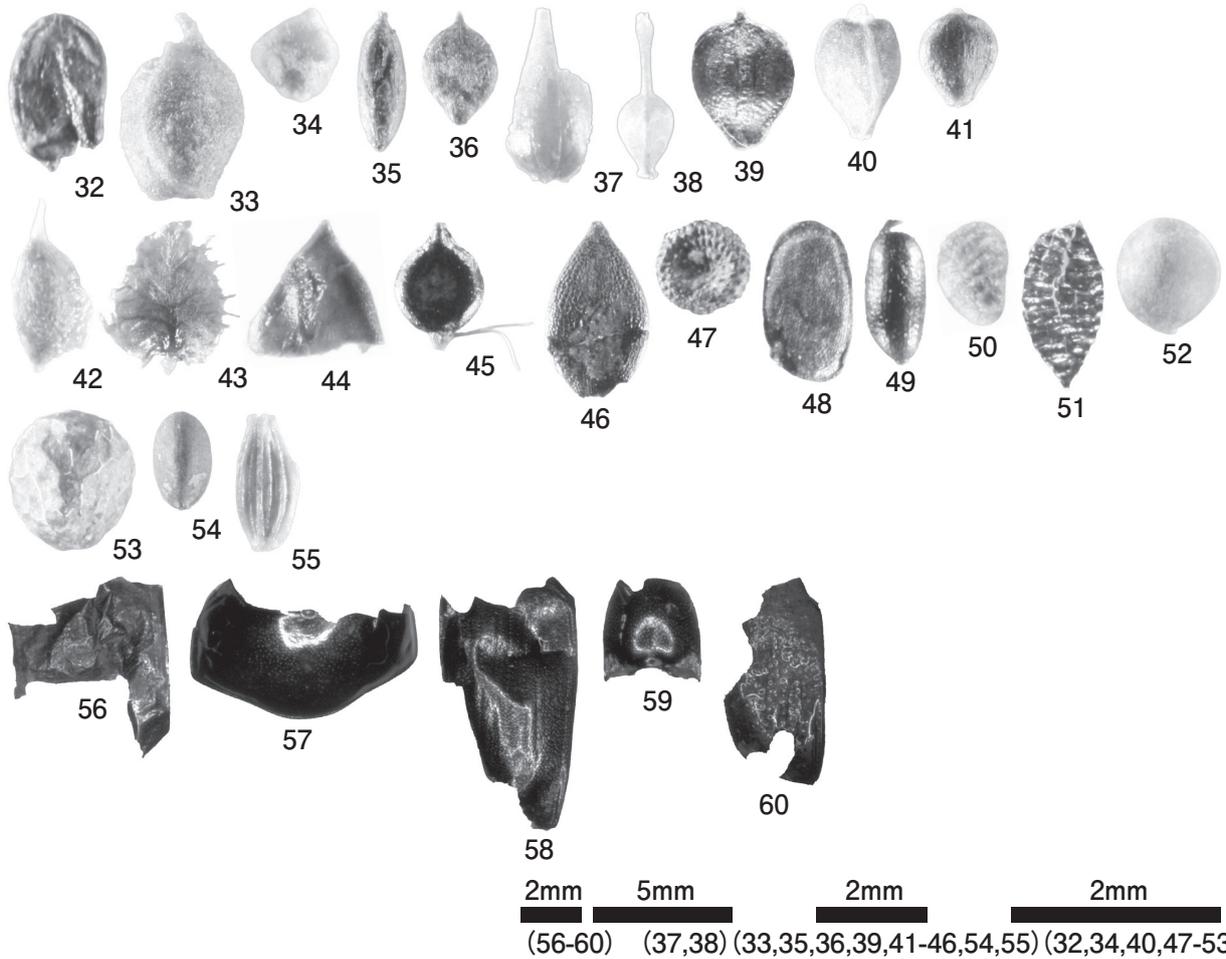
写真図版4 種実遺体(1)



1cm      5mm      5mm      5mm      2mm  
 (2,4-7,9-13,16-19)(22,23,29,30)(1,8,24,25)(3,14,15,20,21,26-28) (31)

- |                                  |                            |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1. ヤマモモ 核(SR15;4)                | 2. オニグルミ核(SR15;12)         |
| 3. イヌシデ 果実(SR15;15)              | 4. カシワ 殻斗・果実(SR15;12)      |
| 5. カシワ 殻斗(SR15;12)               | 6. クヌギ節ーカシワ 果実(基部)(SR15;8) |
| 7. クヌギ節ーカシワーナラガシワ 果実 頂部)(SR15;8) | 8. ナラガシワ 幼果(SR15;15)       |
| 9. ナラガシワ 殻斗・果実(SR15;12)          | 10. ナラガシワ 殻斗・果実(SR15;8)    |
| 11. ナラガシワ 果実(基部)(SR15;9)         | 12. ウバメガシ 果実(SR15;9)       |
| 13. ウバメガシーコナラ 殻斗(SR15;15)        | 14. コナラ亜属 果実(未熟果)(SR15;15) |
| 15. ケヤキ 果実(SR15;15)              | 16. クスノキ科 果実・種子(SR15;11)   |
| 17. クスノキ科 種子(SR15;9)             | 18. スモモ 核(SR15;11)         |
| 19. モモ 核(SR15;9)                 | 20. マメ科 種子(SR15;15)        |
| 21. イヌザンショウ種子(SR15;3)            | 22. カエデ属A 果実(SR15;15)      |
| 23. カエデ属B 果実(SR15;15)            | 24. カエデ属 種子(SR15;3)        |
| 25. ゴンズイ 核(SR15;15)              | 26. ブドウ属(栽培種?) 種子(SR15;4)  |
| 27. ノブドウ 種子(SR15;15)             | 28. クマノミズキ 核(SR15;15)      |
| 29. エゴノキ 果実・種子(SR15;13)          | 30. エゴノキ 種子(SR15;13)       |
| 31. ムラサキシキブ属 核(SR15;4)           |                            |

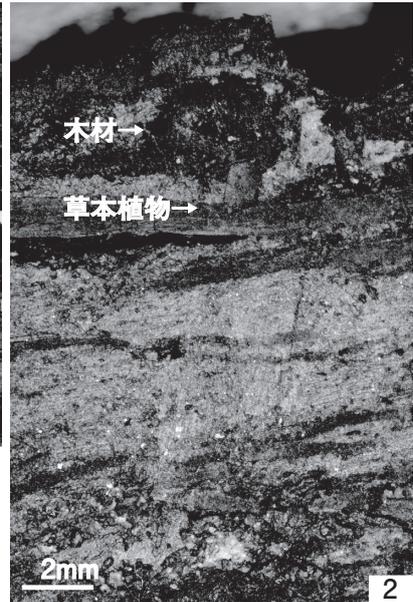
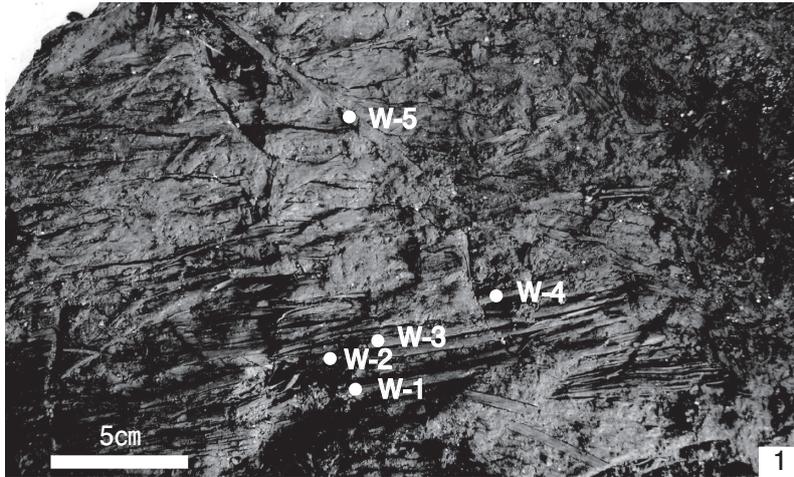
写真図版5 種実遺体(2)・昆虫遺体



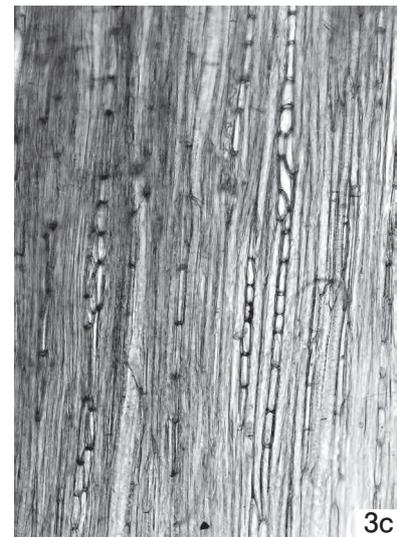
- 32. オモダカ科 種子(SR15;3)
- 34. イネ 穎(SR15;4)
- 36. アゼスゲ類 果実(SR15;3)
- 38. スゲ属(3稜) 果実(SR15;4)
- 40. カヤツリグサ科(3稜) 果実(SR15;4)
- 42. カラムシ属 果実(SR15;3)
- 44. ミゾソバ近似種 果実(SR15;4)
- 46. タデ属(網目) 果実(SR15;4)
- 48. アブラナ科 種子(SR15;4)
- 50. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(SR15;4)
- 51. カタバミ属 種子(SR15;3)
- 53. イヌコウジュ属 果実(SR15;4)
- 55. キク科 果実(SR15;3)
- 57. コガネムシ 前胸背板(SR15;16)
- 59. クロツヤクシコメツキ 前胸(SR15;16)

- 33. ヒルムシロ属 果実(SR15;15)
- 35. イネ科 果実(SR15;4)
- 37. スゲ属 果胞(SR15;4)
- 39. ホタルイ属 果実(SR15;4)
- 41. カヤツリグサ科(2面) 果実(SR15;10)
- 43. ギシギシ属 花被(SR15;4)
- 45. サナエタデ近似種 果実(SR15;3)
- 47. ナデシコ科 種子(SR15;4)
- 49. ミズオトギリ 種子(SR15;3)
- 52. スミレ属 種子(SR15;4)
- 54. シソ科 果実(SR15;3)
- 56. コガネムシ 右上翅(SR15;16)
- 58. ドウガネブイブイ 左上翅(SR15;16)
- 60. コアオハナムグリ 左上翅(SR15;16)

写真図版6 粗朶

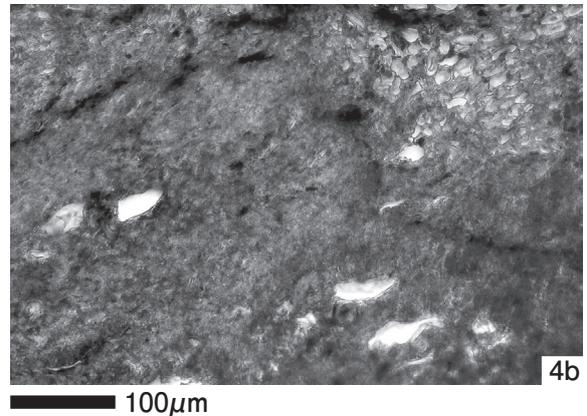
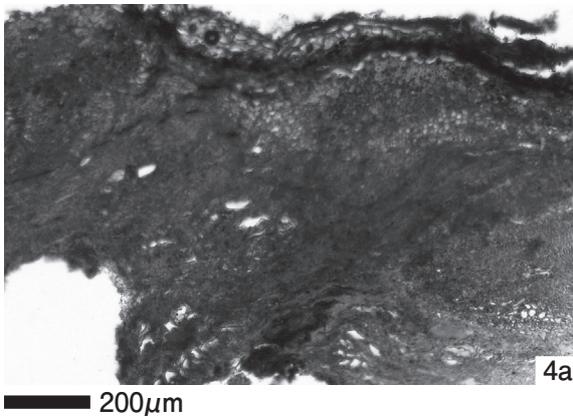


1. 粗朶の外観と樹種同定試料採取位置  
2. 粗朶の断面 草本植物同定試料採取位置



3. 広葉樹(W-1) a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 $\mu$ m:3a 100 $\mu$ m:3b,c



4. 草本類 横断面

## 5 調査のまとめと検討

### a 田丸道遺跡の変遷

**弥生時代** S R 15は、弥生時代中期から機能した旧河道である。調査区内ではS R 15以外に弥生時代に帰属する遺構は確認されていないが、上流にあたる寺田遺跡でも弥生土器が確認されていることから、周辺に集落があったことは明らかであろう。

また田丸道遺跡調査区南部の包含層からは尾張・三河からの搬入品と考えられる厚口鉢が出土しており、当遺跡内においても弥生時代中期の遺構が存在する可能性は十分に考えられる。

**古墳時代** S R 15から、わずかながら古墳時代初頭の土器が出土している。

明確な遺構として捉えられるのは古墳時代後期に入ってからで、南から順に塚田古墳群～旧河道(堰)～竪穴住居群・土坑群が確認される。狭く縦長の調査区であったが、このような「集落と生産と墓」の立地関係を明らかに出来た意義は大きい。7世紀前葉、北岸に集落が営まれ、対岸に灌漑(と水田)と塚が造営される。S R 15以南では生活痕跡が認められないことから、居住域と墓域・生産域が流路によって区分されていたことがうかがえる。

出土した木製品から推測すると、古墳時代後期における先進的な集落であった可能性が高い。塚田古墳群の南方に位置する佐田山3号墳からは7世紀代と考えられる銅鏡が出土しており、当該地における有力者の存在を示しているものといえよう。

**平安時代** 平安時代前半の遺物はほとんど認められない。S R 15の水流は弱く湿地状であったと推測され、平安時代後期には埋没する。平安時代後期、S R 15北岸に遺構が集中する。掘立柱建物に伴う柱穴群がみられ、特にS B 46を構成する柱穴からはいずれも東濃産の緑釉陶器が出土している。S B 46は南北方向に庇をもつ二面廂付建物、あるいは四面廂付建物などが想定され、官衙や有力者の館のような性格を有していたと考えられる。

**中世以降** 調査区南端に南北朝期の遺構が散見する。埋没しているとはいえ、幅が50m以上あったS R 15の上面は生活に適しているとは思えず、川を越えた調査区北部にも遺構はない。第1次調査区の成果か

ら、集落は遺跡の南西方向に広がっていると考えられる。同時期、集落を展開するにあたり塚田2号墳を削平したことが紡錘車の混入から推測される。なお、近世の遺構・遺物は確認されなかった。

### b 塚田古墳群

**圃場整備前の状況** 塚田1号墳、塚田2号墳ともに径20mほどの円墳である。現在は水田のなかに1号墳の墳丘のみが残存している状態であるが、昭和5年に圃場整備が行われる前は周囲に古墳が複数あったとされ、塚田古墳群は2基以上で構成されていたものと考えられる。遺構面は少なくとも30cmほど削られていることから、周溝の規模は検出状況より広く深く想定する必要がある。

**築造時期** 昭和36年に行われた踏査では、塚田1号墳から須恵器片がみついているが、今回の調査では遺物はほとんど出土しなかった。しかし、古墳周辺の土坑から出土した石製紡錘車(12)は、塚田2号墳もしくは周辺の埋没古墳に副葬されていたものと考えられる。紡錘車は截頭円錐形を呈し、側面傾斜角は58°である。線刻文様が無いため決め手には欠くが、三重県内の石製紡錘車を分類した河北秀実氏の論考におけるI c類に相当し、6世紀代のものと考えられる。<sup>(1)</sup> なお、塚田古墳から約4.5km西方に位置する小金塚4号墳からもほぼ同様の形状を呈した滑石製紡錘車が出土しており、6世紀後半から末頃のものと推定されている。<sup>(2)</sup>

調査区内における古墳時代の遺構では、まず堰の時期は田辺編年T K 209型式併行期の6世紀後半と推測される。調査区北部では土坑群から同M T 15～T K 10型式併行期、S K 18から同T K 217型式併行期の須恵器が出土しており、概ね6世紀半ばから7世紀前半頃にかけて集落が営まれたと考えられる。

次に、塚田古墳周辺の古墳群に目を向ける。隣接する茶臼塚古墳群は、昭和36年の宅地造成の際に6基中5基が削平され、現在は1号墳のみ墳丘が残存する。消滅した2～4号墳からは、人骨・直刀・須恵器坏蓋・提瓶・平瓶が出土している。採集遺物ではあるが、茶臼塚古墳群からは田辺編年T K 209～217型式併行期に属する須恵器平瓶が、中樂集落周辺からは同T K 43～T K 209～217型式併行期の蓋坏がみつかり、この時期に帰属する古墳が複

数基あったことが想定される。<sup>(3)</sup>

以上のことから塚田古墳群が築造された時期を推測すると、6世紀後半から7世紀初頭にあたると思われる。

### c 古墳時代の木製品

木製品はすべてS R 15の堰に漂着する形で出土した。時期は、概ね都城編年飛鳥I期直前の6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる。

まず、墨痕が残る木札(288)が注目される。墨痕は赤外線による炭素反応が認められ、筆の返しなどから文字に見えるが識別はできない。側面に糸を括った圧痕があり木簡のようにもみえるが、同時期の木簡は全体的に厚いものであるため、削り屑のように薄い288は木簡とは言い難い。<sup>(4)</sup> 筆致は、同時期の難波宮や桑津遺跡<sup>(5)</sup>などの事例と同じく全体的になめらかであり、文字としての时期的な類似点は指摘される。流路出土かつ全体像をうかがい知ることができない破片資料であるためこれ以上のことは不明であるが、いずれにせよ田丸道遺跡に筆と墨を持っていた人物がいたことを示しており、一般的な集落とは異なる性格を有していた可能性が高い。

出土した建築部材をみても、観音扉の蹴放材や校倉造の壁材などから、高床の建物があったことが想定される。古代から平安時代前期にかけて空白の期間はあるものの、平安時代後期には同一の場所に官衙の様相を呈する遺構がみられる点も、古墳時代後期段階の先進的な集落の存在を裏付けよう。

そのほか、祭祀具の舟形木製品が2点見つかったことが注目される。大型品(249)は全面的に焼けていることが特徴で、堰で分断された浅瀬にあたる南岸で水辺のまつりが行われたことを示している。

### d 古墳時代の堰

**S 15木組の堰** 田丸道遺跡の水制遺構は、同時代のS D 16・S R 12がS R 15と併走していること、河岸にテラスを設けていることから、護岸や堤防といった治水施設ではなく、水を得るための利水施設であったと考えられる。貯水場など木器生産に関する施設も想定されるが、未製品が少ないこと、集落の対岸に位置することから可能性は低いといえよう。

本来、堰とは川の流れに対し直交方向に構築し流れを堰き止めるものであるが、今回は堰1・2とも

に川の流れと平行して杭列が並んでいる。

木組みの堰は、横木の前足を直立した杭で止める「直立型堰」と、横木を挟み込む杭が斜めに打ち込まれた「合掌型堰」に分類され、5世紀末～6世紀初頭になると堤防によって自然河川を堰き止め流路を変更する方式が出現する。<sup>(6)</sup> これに則って見ていくと、堰1は丸太の横木を芯とし板状杭と自然木を並べ重ね、その上に盛土を行う堤防状を呈するものである。堰1は流れそのものを変えるものではなく、例えばより上流部に第一段階の堰があり、堰1は堤を用いて水田への取水を行う第二段階にあたるものと想定される。

一方、堰2は蜜柑割の長い材をしっかりと河床に打ち込んでおり上記の「直立型堰」に分類される。堰2は、流れを堰き止め水位を変える構造をとる。

**三重県内における木組みの堰** 弥生時代末から古墳時代前期段階は、自然河道そのものを制御することが困難であったため人工の流路を附設することで水流を調整し、古墳時代中期以降になると大溝や自然流路など一定の水流があるものを制御している状況が推測されている。<sup>(7)</sup> 田丸道遺跡の堰についても、堰1～堰2にかけて何段階かの構造を用いており、非常に川幅の広い自然河道の水位を調節していたことがうかがえる。

伊賀市森脇遺跡旧河道S R 413の木組み遺構は、古墳時代後期から飛鳥時代に造られたもので、砂防堰もしくは導水施設の性格をもつ。<sup>(8)</sup> 津市蔵田遺跡の堰は古墳時代中期後半から後期前半の旧河道に築かれ、排水および水田用の取り水施設と考えられる。<sup>(9)</sup> いずれの事例も、川幅は狭いものの自然河道に直接杭が穿たれていることが共通している。また蔵田遺跡の事例は丸杭を斜め方向に打ち込み、イネ科の植物を用いて築堤している。

**杭の樹種**(第IV-9～11表) 堰1～4から、計93本の杭が出土した。そのうち製品や板材を転用している7本を除いた86本の樹種の分析を行った。<sup>(10)</sup>

杭は、耐久性・加工性の求められる製品や建築部材と比べ、木材選択時にあまり付加価値を求める必要がない材である。製作時には遺跡周辺から材を調達していたと考えられるため、杭の樹種はもっとも身近な地域の植生を反映しているといえる。<sup>(11)</sup>

コナラ亜属がもっとも多くみられる理由は、堰1最下部に用いられた板状杭のほとんどがコナラ亜種であるため、築堤時にまとめて伐採した(もしくは1本の木から製作した)ことが原因であろう。同様の理由からか、丸杭もコナラ亜種が一番多い。

次に多くみられるクリ・カシ類・シイ類(いずれも広葉樹)は、丸太材で樹皮が残るもの(353～354)があり、転用材ではなく杭用に調達されている。また、同定の結果丸杭には多くの樹種が少量ずつ使用されていたことがわかり、布谷氏の検討にもあるように遺跡周辺に植生が認められる樹種が多い。

堰2の蜜柑割材は、河床までしっかりと突き刺して水の流れを緩める働きを有していたと考えられる。このように長さや強度が必要な角杭にはスギ、ヒノキ属、コウヤマキなど建築部材に用いられる種がみられ、実際に建築部材の転用も5点認められた。

**樹種の選択と周辺環境** 以上のことから、杭の製作に際して、丸杭には遺跡周辺の木材を、角杭は用途に応じて樹種を選択していたことがうかがえる。

自然科学分析の結果とあわせてみると、まず流路沿いにはクスギやカシワなどの落葉広葉樹、イネ科やスゲ類などの草本植物がみられた。遺跡の縁辺地には針葉樹と常緑広葉樹があり、丸杭に用いられたアカガシ亜属やシイ類などは川の氾濫低地から離れた場所に生育していたとされる。また花粉分析では、主に山地に分布するとされる針葉樹(スギ・コウヤマキ・ヒノキ)が検出されており、これらについても花粉の届く地域内に分布していたことが確認された。

丸杭に多かったコナラやクスギなどのブナ科植物は、森林を開発したのち形成される二次林に多い分類群である。したがって、築堤の際には流路近隣のこれら雑木林から用材を調達したことが推測される。

最後に、丸杭にヒノキ属が用いられている点が注目される。ヒノキ属は山地などを好む樹種のため、スギやコウヤマキとともに遺跡からやや離れた位置から運ばれてきた材と考えられるが、丸杭としても一定量が出土している。ヒノキ属の丸杭(317～319)は樹皮を剥がし、節を削った痕跡がみられることから、建築部材加工時の残材を用いた可能性が高い。

**木製品の樹種** スギ・ヒノキ・コウヤマキといった針葉樹が、建築部材をはじめ下駄・曲物底板・舟形

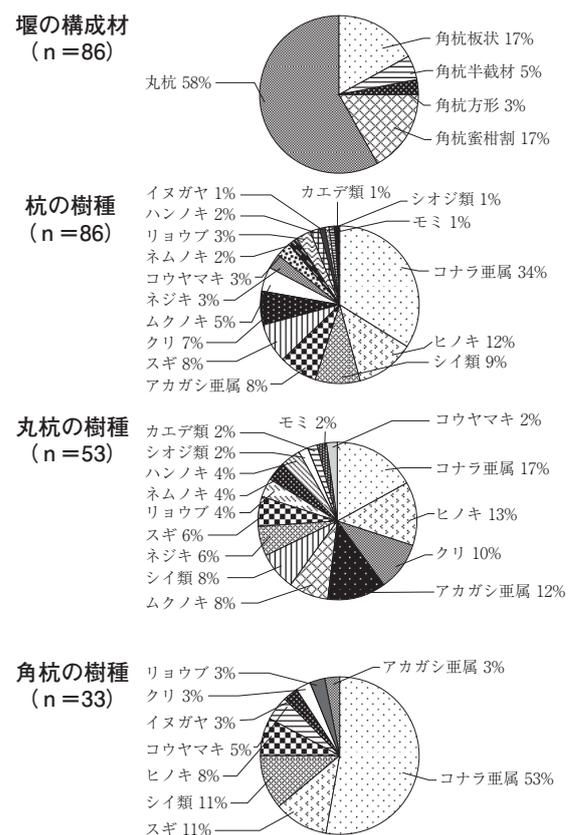
などに利用され、これらは強度の必要な堰2にも選択して転用されている。また、杭にはみられなかったアスナロ属が木錘・田下駄・杵・杵・案ほか多くの木製品に使用されている。

#### e 平安時代の官衙的遺構

**掘立柱建物S B46** 調査区南部で、古墳時代の集落と重複して10世紀後半の柱穴群を検出した。

掘立柱建物S B46の規模は、調査区外に続くため詳細は不明であるが、建物を構成する柱穴は直径75cmの大きな堀方をもつもので、同時代の斎宮跡で検出する法量と比べても遜色ない。また、どの柱穴からも平安時代後期の緑釉陶器の椀や耳皿が出土していることから、いわゆる「官衙」や有力者の館であったと考えるのが妥当であろう。

#### 第IV-39図 杭の種類および同定結果



#### 第IV-20表 S R15堰一覧

堰名	杭の種類(本数)					備考
	丸	板状	半截	方形	蜜柑	
堰1	26	19	1	1	0	最下部は板状杭が主体
堰2	23	1	3	1	6	蜜柑割り材が主体、転用材多い
堰3	3	0	0	0	1	丸杭がまばらに打たれる
堰4	1	0	0	0	0	丸杭がまばらに打たれる
合計	53	20	4	2	7	計86本

玉城町内の調査事例に目を向けると、上田辺<sup>かみたぬい</sup>に位置する師子焼遺跡で猿投産の緑釉陶器片が1点出土している。<sup>(12)</sup> 鎌倉時代の井戸から出土しているため建物跡に伴うものではないが、玉城町域の緑釉陶器出土事例は田丸道遺跡と併せ2例のみである。また、先述した師子焼遺跡の850m北方に位置する長谷町遺跡では、9世紀後半から10世紀前半の灰釉陶器長頸瓶を用いた火葬墓や土坑が検出している。<sup>(13)</sup> 上田辺は古代から明治維新まで皇大神宮の祢宜職を世襲した荒木田氏二門の本願地とされることから、師子焼遺跡、長谷町遺跡では同氏との関わりが指摘され、被葬者像にも斎宮、東寺領大国荘関係者のほか同氏が想定される。また、同氏の氏寺にあたる田宮寺と近接する上の山遺跡では10世紀前半の掘立柱建物が検出されており<sup>(14)</sup>、平安時代の玉城町域における荒木田氏の影響は看過できない。

10世紀前半に盛行を迎えた斎宮も、11世紀前半頃になると祭主の受領化が進行し建物数が減少するなど、衰退期となることが指摘されている。<sup>(15)</sup> 田丸道遺跡は斎宮に近く、出土遺物も類似性がみられる。しかし、掘立柱建物群が使用された10世紀後半は斎宮の衰退への過渡期にあたることから、斎宮だけでなく、荒木田氏のような在地勢力の影響と関わりも想定する必要がある。

#### f 中世後期の田丸道遺跡

中世後期の遺構は、調査区の南端に集中している。付近の遺構面は圃場整備時に30cmほど削平されているため、調査区内で検出した浅い土坑群はより深いものであったと考えられる。第2次調査区内において、SD1以北からは遺構は認められない。第1次調査区内では、掘立柱建物2棟・井戸2基・中世墓2基を確認しており、居住域は古墳群から北西方向に広がっていることがわかる。

#### g 調査のまとめと課題

田丸道遺跡は、妙法寺と中楽の集落間にある田面全てを範囲とした大きな遺跡である。全長210mの細長い第2次調査内は旧河道によって南北に分断され、時代によって土地の利用に明確な差がみられた。

周辺には塚田古墳群や茶臼塚古墳群に連なる複数の埋没古墳が存在する可能性が高い。また、川幅の広いSR15が田丸城から北東方向へ流れているため、

今後の調査を行うにあたっては流路域の推定が重要となろう。(相場)

[註]

- (1) 6世紀後半～7世紀初頭は近畿地方で石製紡錘車が盛行し、南勢地域でもその時期の増加例が多くみられる。田丸道遺跡周辺では、寺田遺跡で放射状線刻の施された6世紀前半の石製品紡錘車が出土している。石製紡錘車については以下の文献を参照した。
  - ・ 國下多美樹「京都府下の紡錘車について」(『京都考古』第50号京都考古刊行会、1988年)
  - ・ 河北秀実「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」(『Mie history』No.3 三重県歴史文化研究会、1991年)
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告』(2010年)
- (3) 相場さやか「玉城町中楽の考古資料～古墳群出土資料を中心に～」(『研究紀要』第21号 三重県埋蔵文化財センター、2011年)
- (4) 墨痕の残る木札については、館野和己氏、榎村寛之氏にご教示頂いた。
- (5) 木簡学会編『木簡研究』14(1992年)、22(2000年)
- (6) 広瀬和雄「古代の開発」(『考古学研究』第30巻第2号、考古学研究会、1983年)
- (7) 和気清章「三重県の治水・利水遺跡について」(『治水・利水遺跡を考える』第7回東日本埋蔵文化財研究会 資料編、1998年)
- (8) 三重県埋蔵文化財センター『森脇遺跡(第4次)・遊山城跡発掘調査報告』(1996年)
- (9) 津市教育委員会『三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報 蔵田遺跡 平田遺跡 位田東遺跡』(1993年)
- (10) 種同定を行った器種は、杭86点・板材転用杭7点・材片34点の計127点で、実測図を取ったものについては遺物観察表に反映した。ただし、杭18点と材片23点は残存状況が悪く、実測図は掲載できなかった。この杭18点の樹種は、第IV-19表に反映している。板材23点の内訳はスギ7、コウヤマキ5、ヒノキ4、コナラ亜属2、カエデ類・ムクノキ・ヤマハゼ各1、不明1である。杭の樹種同定に関して、以下の文献を参考にした。
  - ・ 佐々木由香・能城修「東京都下宅部遺跡の水場遺構材から復元する縄文時代後期の森林資源利用」(『植生史研究』第12巻-1、2004年)
- (11) 樹種の選択については、中原計氏にご教示頂いた。
- (12) 三重県埋蔵文化財センター『師子焼遺跡発掘調査報告』(2009年)
- (13) 三重県埋蔵文化財センター『長谷町遺跡・斎宮池遺跡・真木谷遺跡・与五郎谷遺跡発掘調査報告』(2010年)
- (14) 三重県埋蔵文化財センター『上の山遺跡発掘調査報告』(1992年)
- (15) 榎村寛之『伊勢神宮と古代王権』(筑摩選書、2012年)

## V 玉城町世古 世古里中遺跡

### 1 調査経緯と調査区の状況

世古里中遺跡は度会郡玉城町世古字里中に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成23年11月22日から同年12月20日にかけて断続的に事前調査(工事立会)を実施した。最終調査面積は146㎡である。

今回の調査地は、世古集落南縁の道路部分に埋設水路を設置する工事に伴っている。そのため、調査区の幅は70～80cm程度と狭いが、総延長は約207mと長い。調査区の標高は、西端部で約17.7m、東端部で約16.6mで、東に向かって緩やかな傾斜をしている。世古集落が微高地上に立地し、道路を挟んで南は水田である。したがって、調査区は世古集落の乗る微高地と低地である水田域のちょうど境目にあたる場所であった。

調査に当たっては、西端から埋設管(4m)を基準にグリッドとしたが、接続の関係で一部それ以外の単位となったものもある。

### 2 層位と遺構

**層位** 埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外のため、層位はその間の状況を把握した(第V-3・4図)。層の最深部には白灰～青白色を呈する粘土層がある(第14層)。この層は、深いところでは路面下約200cmで見られるが、a15～25グリッド付近では路面下約110cmまで高くなる。深い部分については、微高地縁辺を巡っていた流路に伴う落ち込みではないかと考えられる。a34グリッド付近で見られた杭列は、これに関連すると考えられる。

白色系粘土層の上には、黒褐色系粘土が堆積する(第10・11層)。一部に有機質と砂利層を含むため、流路構成土層と考えられるが、土質は水流が穏やかであったことを示している。この層には一部奈良時代の遺物を含むが、中心となるのは鎌倉時代から江戸時代初期の遺物で、とくに戦国時代末期から江戸時代初期にかけての遺物は多量に含まれていた。

黒褐色系粘土層の上は、現代のは場整備や道路改良に伴う整地層・改良土層である。

**遺構** 白色系粘土層上面に、不定形な土坑が散在しているほか、流路に伴う落ち込みと考えられる遺構が見られた。土坑は直径1.5～2.0m程度の不整楕円形を呈するものが多い。白色系粘土層に達するように掘られているため、粘土採掘坑かと考えられる。粘土採掘坑からの出土遺物は少ないが、a5グリッド検出の土坑から12世紀後葉頃の土師器甕が完形に近い状態で出土していることから、古くはその時代まで及ぶと考えられる。また、黒褐色系粘土層からの遺物出土状態から見て、戦国時代末期頃の粘土採掘坑も確実に存在すると考えられる。

### 3 出土遺物

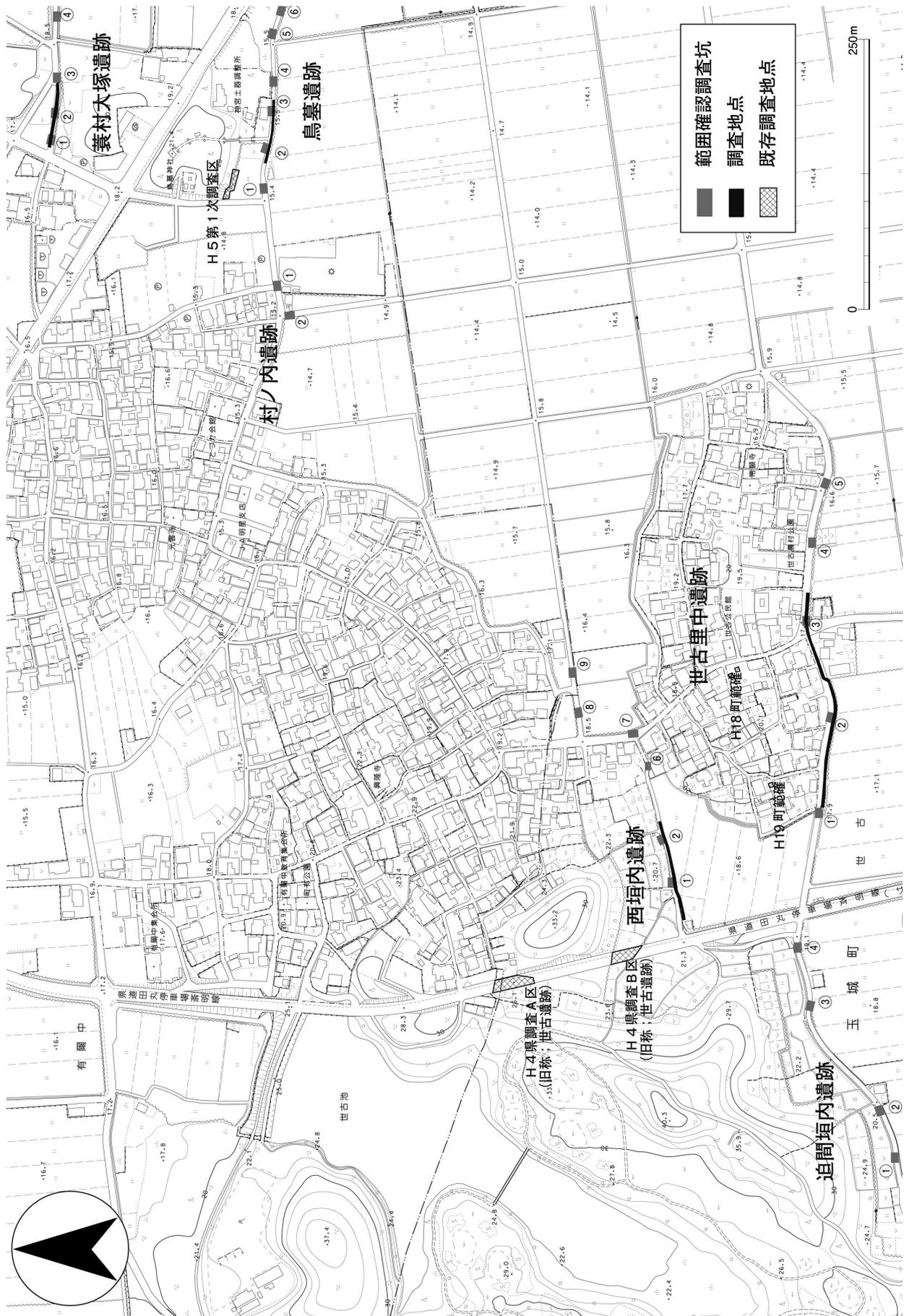
今回の調査で出土した遺物を第V-5・6図に示した。奈良時代(1～8)、平安時代末期～鎌倉時代(10～19)、戦国時代末期～江戸時代初期(20～70)に大別される。これ以外では、時期不明の石製品・土製品(71～76)もある。

奈良時代の土器は、3のように比較的良好的な破片もある。8は細い棒に粘土を巻き付けたまま焼成したと考えられる把手で、中の棒は炭化して遺存する。15は知多半島産の陶器椀(山茶椀)で、高台内面には「有田」と考えられる墨書がある。20～57は16世紀後葉から17世紀初頭頃の土師器類で、多様な形態が見られる。

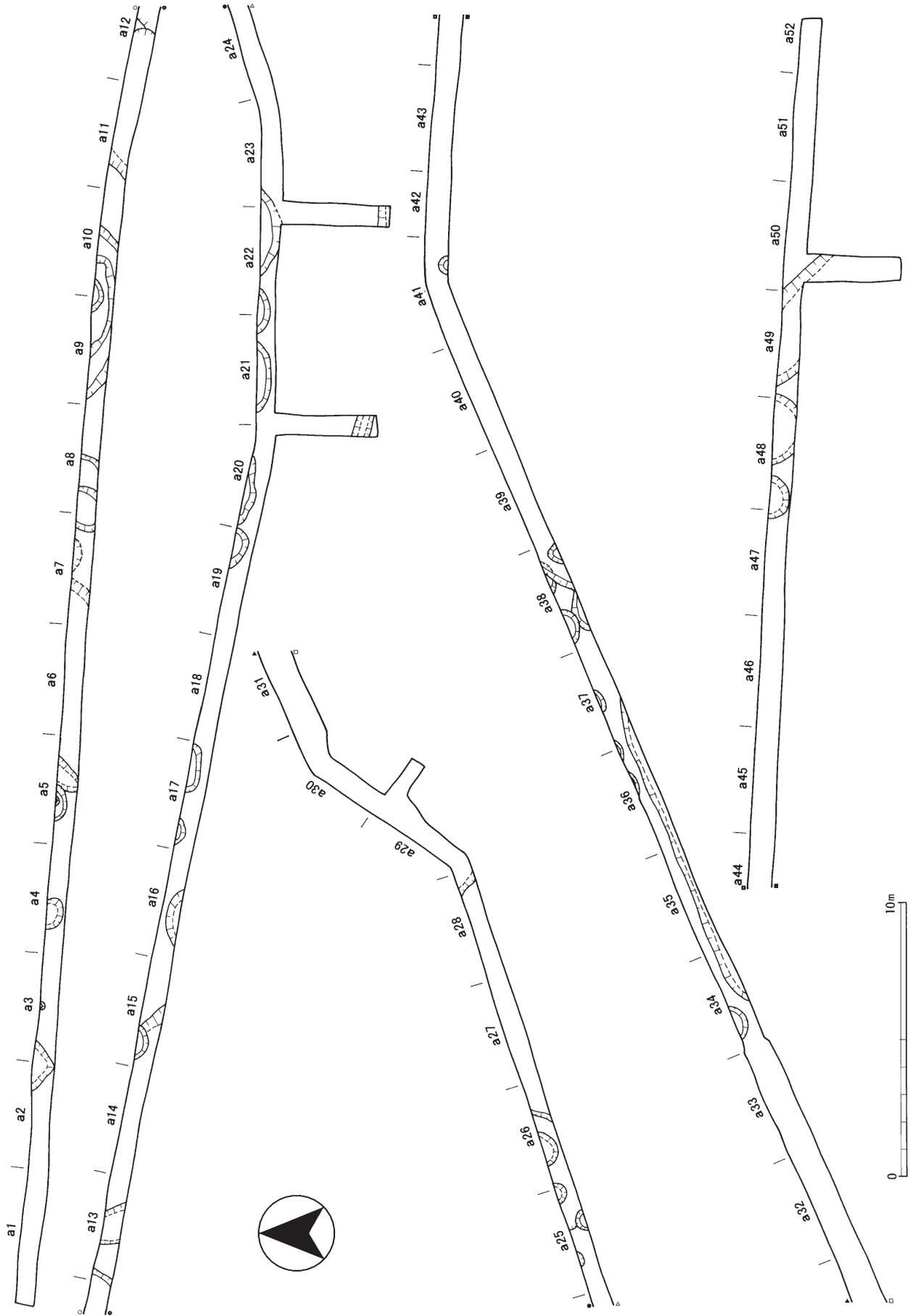
71は棒状土製品で、土器窯に伴う窯道具と考えられる。76は硯の転用と考えられ、鋸歯状の凹凸があり、一面には「爾候」の刻字が読める。

### 4 小結

今回の調査は、遺跡縁辺部分に長大なトレンチを設定した状況であった。調査の状況から見て、調査区を境に、現在の世古集落部分に出土遺物が示す時期の集落跡があり、調査区の南部には湿地(流路を含む)が広がっていたと考えられる。両者の境目には粘土採掘坑があった。棒状土製品の出土もあわせ、世古里中遺跡の本体は土器窯とその関連集落遺跡と考えることができよう。(伊藤)



第V-1図 世古里中遺跡ほか調査区位置図(1:5,000)

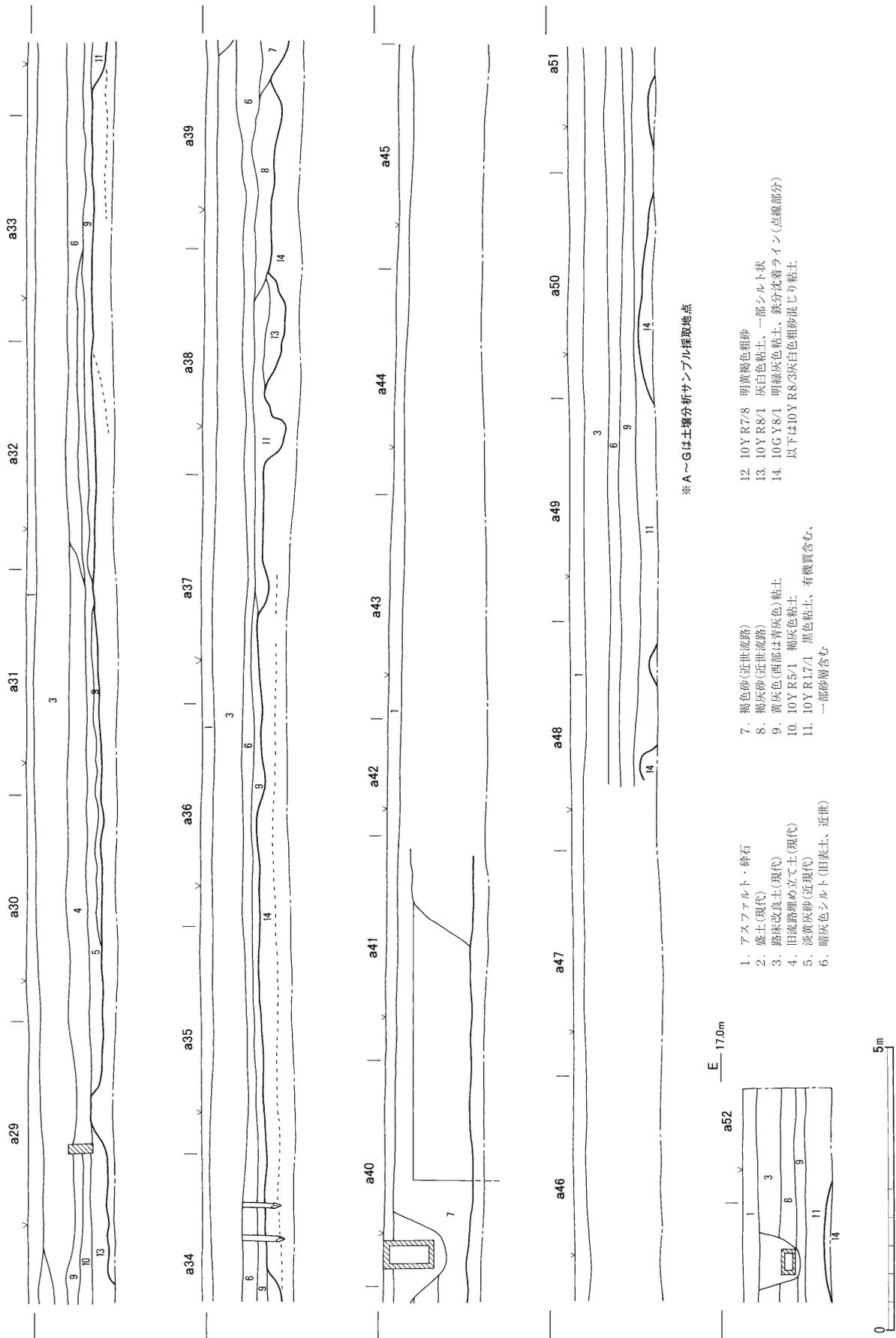


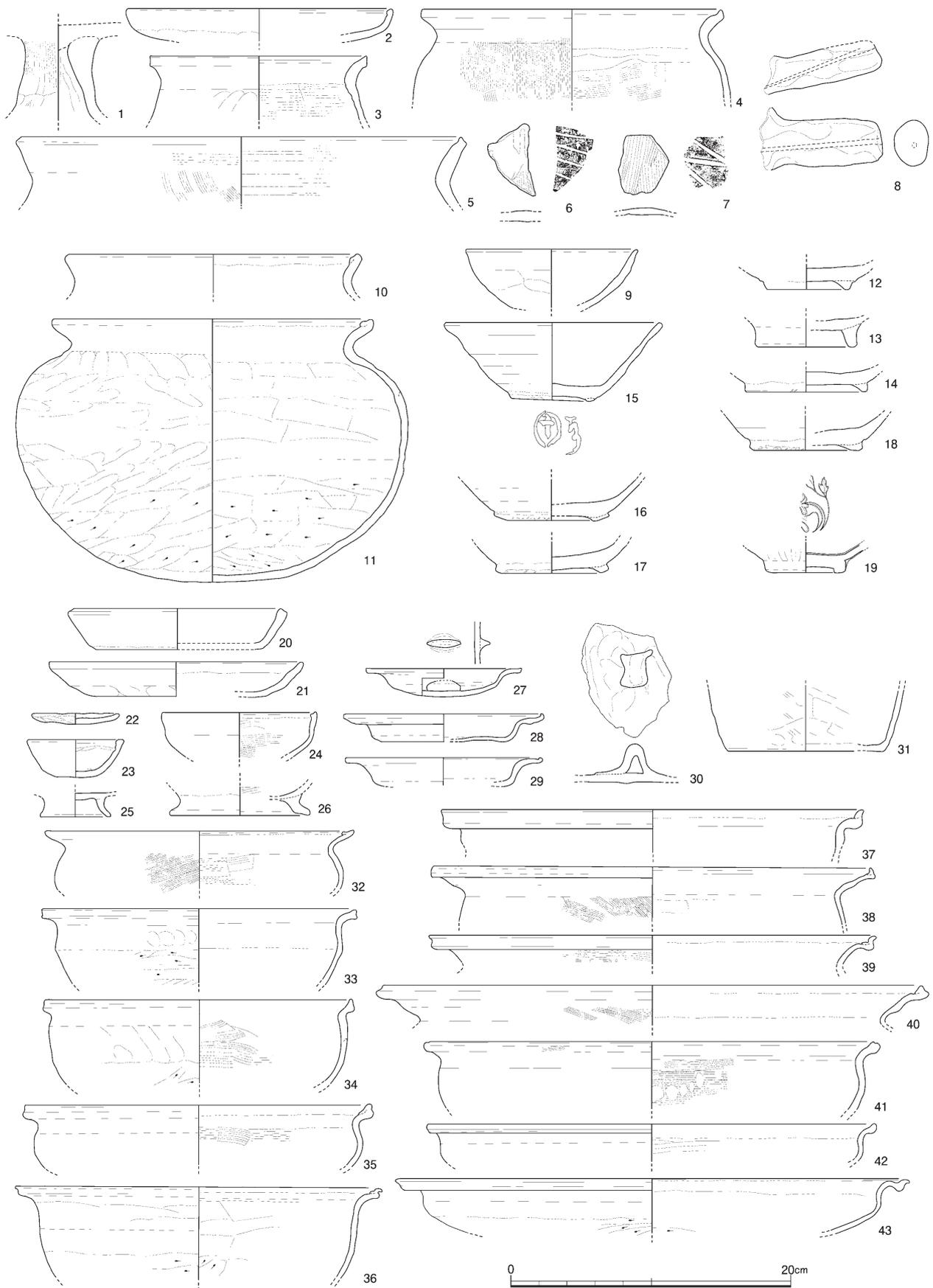
第V-2図 世古里中遺跡調査区平面図(1:200)



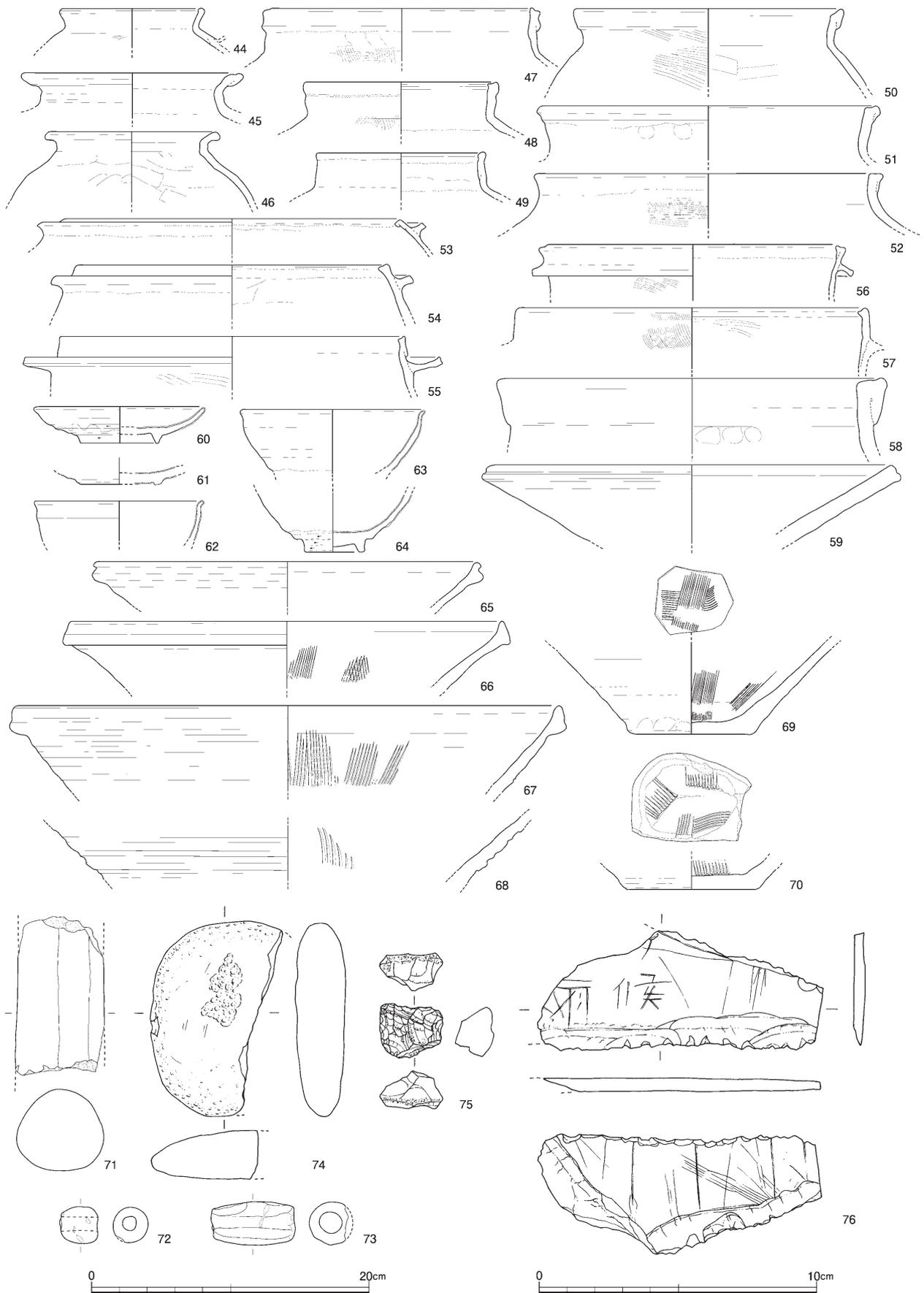
第V-3图 世古里中遺跡調査区北壁土層(1) (1:100)

第V-4図 世古里中遺跡調査区北壁土層(2) (1:100)





第V-5图 世古里中遺跡出土遺物実測図(1) (1:4)



第V-6図 世古里中遺跡出土遺物実測図(2) (76は1:2、他は1:4)

第V-1表 世古里中遺跡出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	1-3	土師器	高杯脚	a 1 4	灰褐粘	(脚柱)4.8	外:ハケメ 内:シボリメ→オサエ・ナデ	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙	脚柱12/12	奈良時代
2	1-2	土師器	皿	a 1 1	黒褐粘	(口)17.0	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁2/12	奈良時代
3	1-1	土師器	甕	a 1 1	青灰粘~黒褐粘	(口)15.4	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/2 灰黄褐	口縁5/12	奈良時代
4	4-4	土師器	甕	a 1 1	青灰粘~黒褐粘	(口)21.5	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR6/4 にぶい黄橙	口縁1/12未満	奈良時代
5	1-4	土師器	把手付鉢	a 1 3	青灰粘~灰褐粘	(口)320 推定	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁1/12	奈良時代
6	4-6	土師器	甕	範囲確認 調査坑	No. 2	-	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヘラ状工具による沈線状施文?	密	10YR7/3 にぶい黄橙	小片	奈良時代 沈線状のものは 葉脈痕かも
7	4-5	土師器	甕	a 3 9	褐灰砂	-	外:ハケメ→ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヘラ状工具の沈線状施文?	密	5Y7/1 灰白	体部片	奈良時代
8	4-3	土師器	把手	a 3 2	黄灰砂	(残長)8.6	外:円棒状具の挿入→ナデ・オサエ	やや密	10YR7/4 にぶい黄橙	把手部分	円棒状具は刺さった状態で 焼成(炭化材が入っている)
9	10-4	土師器	椀	a 5	黒褐粘土	(口)12.2	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	10YR6/2 灰黄褐	口縁1/12	平安時代後期
10	7-6	土師器	甕	a 2 3	灰褐粘	(口)21.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y5/3 黄褐	口縁1/12	平安時代後期
11	12-1	土師器	甕	a 5	黒褐粘土	(口)22.8 (高)18.8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	粗	2.5Y7/1 灰白	口縁9/12	平安時代後期末
12	1-5	陶器	椀	a 4 4~ 4 6	暗灰シルト	(高台)6.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け 高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	2.5Y7/1 灰白	高台9/12	山茶椀 渥美 内外面摩滅
13	1-6	灰釉 陶器	椀	a 4 4~ 4 6	暗灰シルト	(高台)7.3	外:ロクロナデ→糸切り?→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	5Y7/1 灰白	高台4/12	山茶椀 渥美
14	2-2	陶器	椀	a 4	黒褐粘土	(高台)8.7	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	2.5Y7/1 灰白	高台7/12	山茶椀 知多・猿投
15	13-1	陶器	椀	a 3 4	黒褐粘	(口)15.5 (高台)5.9	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ヨコナデ 内:ロクロナデ	やや粗	N7/ 灰白	口縁6/12 高台12/12	山茶椀 知多・猿投 高台 に墨書「有田」か?
16	2-3	陶器	椀	範囲確認 調査坑	No. 4	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	7.5RY6/2 灰褐	高台6/12	山茶椀 渥美
17	2-1	陶器	椀	a 3 4	黄灰砂	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切り?→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	7.5Y7/1 灰白	高台6/12	山茶椀 渥美 内面研磨
18	1-7	陶器	椀	a 2 9	灰褐粘シルト	(高台)8.0	外:ロクロナデ→糸切り?→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	5Y7/1 灰白	高台4/12	山茶椀 知多・猿投
19	2-4	青磁	椀	a 4 9	灰砂シルト	(高台)5.7	外:ロクロケズリ→鑄造弁文 内:ロクロナデ→スタンプ花文	密	10Y5/2 オリーブ灰 (釉) N7/ 灰白(地)	高台6/12	龍泉窯
20	5-1	土師器	皿	a 3 2	黄灰砂	(口)15.6	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期~近世前期
21	11-5	土師器	皿	a 2 6	灰褐粘シルト	(口)18.0	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR5/2 灰黄褐	口縁2/12	中世後期
22	8-3	土師器	小皿	a 2 3	灰褐粘	(口)5.8 (高)0.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	完存	中世後期~近世前期
23	5-6	土師器	小椀	a 2 2	灰褐粘	(口)5.8~6.8 (高)2.7	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/4 浅黄	口縁3/12	中世後期~近世前期
24	10-2	土師器	小椀	a 1 4	灰褐粘	(口)11.1	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁2/12	中世後期~近世前期
25	9-9	土師器	小椀	a 2 9	灰褐粘シルト	(高台)5.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	2.5Y7/3 浅黄	高台3/12	中世後期
26	5-4	土師器	椀	a 3 2	黄灰砂	(高台)10	外:貼り付け高台→ナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	高台3/12	中世後期~近世前期
27	8-6	土師器	落とし蓋	a 2 3	灰褐粘	(口)11.0 (高)2.0	外:ナデ→ヨコナデ→摘部付加 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y6/3 にぶい黄	口縁3/12	中世後期 茶釜蓋
28	9-8	土師器	落とし蓋	a 2 2	灰粘シルト	(口)14.2	外:ナデ→ヨコナデ→摘部付加 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁2/12	中世後期 内面に炭化物
29	10-7	土師器	落とし蓋	a 2 5	灰褐粘シルト	(口)14.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5YR6/3 にぶい黄	口縁2/12	中世後期
30	7-7	土師器	落とし蓋	a 1 6	灰褐粘	(摘幅)2.3	外:ナデ 内:ナデ	密	2.5Y5/2 暗灰黄	摘部12/12	中世後期~近世前期
31	11-6	土師器	壺	a 2 2	灰褐粘	(底)11.4	外:板ナデ 内:板ナデ	密	2.5Y6/1 黄灰	口縁1/12	中世後期~近世前期
32	8-4	土師器	鍋	a 3 1	黄灰砂	(口)22.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	5Y8/2 灰白	口縁1/12	中世後期
33	5-3	土師器	鍋	a 3 4	黄灰砂	(口)22.4	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/3 淡黄	口縁1/12	中世後期末
34	5-5	土師器	鍋	a 3 4	黄灰砂	(口)22.2	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ・ケズリ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	口縁2/12	中世後期~近世前期
35	7-2	土師器	鍋	a 3 4	黄灰砂	(口)24.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	口縁2/12	近世初頭
36	10-1	土師器	鍋	a 2 9	灰褐粘シルト	(口)26.0	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密	10YR5/1 褐灰	口縁3/12	近世初頭
37	11-1	土師器	鍋	a 2 9	灰褐粘シルト	(口)30.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁1/12	近世初頭
38	11-3	土師器	鍋	a 2 5	灰褐粘シルト	(口)31.6	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y7/2 灰黄	口縁1/12	中世後期
39	6-1	土師器	鍋	a 2 9	灰褐粘シルト	(口)31.8	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁1/12	中世後期
40	6-3	土師器	鍋	a 2 4	灰褐粘	(口)39.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	口縁1/12	中世後期~近世前期

第V-2表 世古里中遺跡出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
41	6-2	土師器	鍋	a 3 2	黄灰砂	(口)32.4	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁1/12	中世後期～近世前期
42	7-1	土師器	焙烙	a 3 2	黄灰砂	(口)32.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	近世初頭
43	6-4	土師器	焙烙	a 3 4	黄灰砂	(口)36.6	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁1/12	近世初頭
44	8-5	土師器	把手付丸鍋	a 3 1	黄灰砂	(口)10.4	外:ハケメ→ヨコナデ→把手付加 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/3 淡黄	口縁2/12	中世後期
45	5-2	土師器	壺	a 2 3	灰褐粘	(口)15.8	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁2/12	中世後期～近世前期
46	10-3	土師器	壺	a 8	青灰～黒褐粘	(口)12.4	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y6/1 黄灰	口縁2/12	中世後期～近世前期
47	11-4	土師器	茶壺	a 2 9	灰褐粘シルト	(口)20.1	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁1/12	中世後期～近世前期
48	7-3	土師器	壺	a 3 2	黄灰砂	(口)14.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	口縁2/12	外側の沈線状窪みは、ヘラ状工具による
49	5-8	土師器	壺(茶釜)	a 3 2	黄灰砂	(口)12.2	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR6/3 にぶい橙	口縁2/12	中世後期～近世前期
50	8-1	土師器	壺	a 2 4	灰褐粘	(口)19.4	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	5Y7/2 灰白	口縁2/12	中世後期～近世前期
51	5-7	土師器	壺	a 3 4	黄灰砂	(口)24.6	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/2 灰白	口縁2/12	中世後期～近世前期
52	7-4	土師器	壺	a 3 2	黄灰砂	(口)25.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/4 淡黄	口縁1/12	近世初頭
53	11-2	土師器	羽釜	a 5	黒褐粘土	(口)24.0 (鏝)27.8	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y8/1 灰白	口縁1/12	中世後期
54	8-2	土師器	羽釜	a 3 1	黄灰砂	(口)22.2	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/2 灰白	口縁1/12	中世後期
55	10-5	土師器	羽釜	a 1 7	灰褐粘	(口)24.7 (鏝)30.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR6/1 褐灰	口縁1/12	中世後期～近世前期
56	10-6	土師器	羽釜	a 2 9	灰褐粘シルト	(口)22.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期～近世前期
57	7-5	土師器	羽釜	a 3 4	黄灰砂	(口)25.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	近世初頭
58	3-3	陶器	甕	a 3 2	黄灰砂	(口)28.0	外:回転ナデ 内:オサエ→回転ナデ	やや密	5YR6/6 橙	口縁1/12未満	常滑
59	2-5	陶器	練鉢	a 3 4	黄灰砂	(口)30	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	5YR7/6 橙	口縁1/12	常滑 口縁端部摩耗
60	9-2	陶器	皿	a 3 2	黄灰砂	(口)12.2 (高)2.6	外:ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	5Y6/2灰オリブ(釉) 5Y7/1灰白(地)	"口縁3/12 高台5/12"	志野丸皿
61	9-1	陶器	皿	a 3 2	黄灰砂	(高台)6.0	外:ケズリ出し高台→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	2.5Y8/1 灰白(釉・地)	高台3/12	志野
62	9-6	陶器	天目茶碗	a 3 2	黄灰砂	(口)12.2	外:ロクロナデ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	密	5YR2/1黒褐(釉) 2.5Y8/2 灰白(地)	口縁1/12	瀬戸美濃 大窯1期
63	9-7	陶器	天目茶碗	a 1 3	青灰～灰褐粘	(口)14.2	外:ロクロナデ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	やや密	7.5YR2/1黒(釉) 2.5Y8/1 灰白(地)	口縁1/12	瀬戸美濃 大窯3期か? 外面下半は錆釉
64	9-5	陶器	天目茶碗	a 3 1	黄灰砂	(高台)4.3	外:ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉 内:ロクロナデ→施釉	やや密	7.5YR3/1黒褐(釉) 2.5Y7/2 灰黄(地)	口縁11/12	瀬戸美濃 天目茶碗F類 大窯3期前半
65	3-2	陶器	播鉢	a 3 2	黄灰砂	(口)28.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	10YR4/1 褐灰(釉)	口縁1/12	瀬戸美濃 大窯1期
66	3-1	陶器	播鉢	a 2 9	灰褐粘シルト	(口)32.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→播り目	やや密	5YR5/2 灰褐(釉)	口縁1/12	瀬戸美濃 大窯2期前半
67	3-4	陶器	播鉢	a 2 0	灰粘シルト	(口)40.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→播り目	密	7.5YR3/2 黒褐(釉)	口縁1/12	瀬戸美濃 大窯2期前半
68	4-1	陶器	播鉢	a 2 7	灰褐粘土～シルト		外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→播り目	密	7.5YR5/1 褐灰(釉)	体部片	瀬戸美濃 大窯期
69	4-2	陶器	播鉢	a 2 5	灰褐粘シルト	(底)9.0	外:ロクロナデ→糸切り 内:ロクロナデ→播り目(7方向)	密	2.5YR4/1赤灰(釉) 10YR8/3浅黄橙(地)	底部6/12	瀬戸美濃 大窯期
70	12-2	陶器	播鉢	a 4 0	現代流路	(底)9.6	外:ロクロナデ→糸切り 内:ロクロナデ→播り目	やや密	10YR8/3 浅黄橙	底3/12	瀬戸美濃 大窯期 底部片を研磨工具に転用
71	13-2	土師質	柱状土製品	a 3 1	黄灰砂	(幅)6.2	外:オサエ・ナデ 断面形は不整の三角形に成形	粗	2.5Y7/2 灰黄	-	全体に2次被熱
72	9-3	土師質	土錘	a 2 2	灰褐粘	(長)2.75 (幅)2.7	孔径約1.0cm	密	10YR4/1 褐灰	完存	重さ14.63 g
73	9-4	土師質	土錘	a 3 8	黒灰粘	(長)6.0 (幅)3.1	孔径約1.6cm	やや密	5Y7/1 灰白	一部欠損	重さ42.82 g
74	14-1	石製品	敲き石	a 3 2	黄灰砂	(長)14.1 (幅)9.4	上面に敲打痕・研磨痕	-	-	重さ600 g	花崗斑岩製
75	14-2	石製品	火打石	a 3 4	黄灰砂	(長)4.5 (幅)3.95	稜部に敲打痕	-	-	重さ56.17 g	チャート製
76	13-3	石製品	鋸状刃部	a 3 4	黄灰砂	(長)4.35 (幅)10.2	碗を転用? 端部はノコギリ状となる	-	黒灰	重さ28.88 g	粘板岩製 「…爾候」の刻書

## Ⅵ 玉城町世古 西垣内遺跡(第2次)

### 1 調査経緯と調査区の状況

西垣内遺跡は度会郡玉城町世古字西垣内に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成23年11月22日から同年12月20日にかけて断続的に、52㎡の工事立会を実施した。

今回の調査地は、世古集落北西丘陵部の道路部分に埋設水路を設置する工事に伴って実施した。調査区の標高は、西端部で約18.8m、東端部で18.1mである。調査にあたっては、西端からおよそ4m毎にグリッドを分けていった。

なお、県道田丸停車場斉明線の道路改良工事に伴い、平成4年度に調査された「世古遺跡」は、現在の認識でいう西垣内遺跡に相当する。そのため、今回の調査を「西垣内遺跡第2次」とする。

### 2 層位と遺構

**層位** 埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外のため、層位はその間の状況を把握した。層序の最深部には、黄橙～白灰色の粘土層が見られる(第10層)。この層は、西端部では掘削深度以下に達して谷状地を形成し、a2グリッド付近では標高18m程度、a19グリッド付近では17.3m程度の高さである。つまり、調査区西端部に谷状地を形成しているものの、全体としては東側に下降する形状といえる。a7グリッド付近では杭列もあったため、全体として湿地状の落ち込みを呈していると見られる。

白色系粘土層の上部には、灰色～淡灰褐色系粘土が堆積する(第8・9層)。これらは、a15グリッド以西には薄く堆積し、それ以东では遺構埋土として見られる。ここからは、一部奈良時代のものを含むが、鎌倉時代から江戸時代初期にかけての遺物が見られる。とくに戦国末期から江戸初期にかけての遺物は、世古里中遺跡同様多く含んでいた。

灰色～淡灰褐色系粘土層の上は、ほ場整備や道路改良に伴う整地層・改良土層である。

**遺構** 全体として湿地状の落ち込みを呈するが、a15グリッド以东では白褐色系粘土層上面に不定形な

土坑が見られた。土坑は直径1.5～2.0m程度の不整形楕円形を呈し、白色系粘土層に達するように掘られているため、世古里中遺跡の遺構と同様な粘土採掘坑かと考えられる。粘土採掘坑からの出土遺物は少ないが、a18グリッド検出の土坑から12世紀後葉頃の土師器甕が出土しており、この頃を中心とした時期のものと考えられる。また、世古里中遺跡と同様に、戦国末期頃の粘土採掘坑もあると考えられる。

### 3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物を第Ⅵ-2図に示した。遺物には、奈良時代(1～3)、平安時代末期から鎌倉時代(5～11)、室町時代(12)、戦国末期から江戸初期(13～23)のものがある。4は形態的には古代以前のものに類似するが、焼成が硬質で、調整手法も江戸期のもものと共通するため、江戸期のものである可能性が高いと考えている。これ以外では、時期不明の石製品・土製品(24～28)や、銭貨(29)もある。図示した以外の遺物では、古墳時代の土師器高坏、12世紀代の渥美産陶器壺、16世紀代の瀬戸大窯系播鉢などがある。

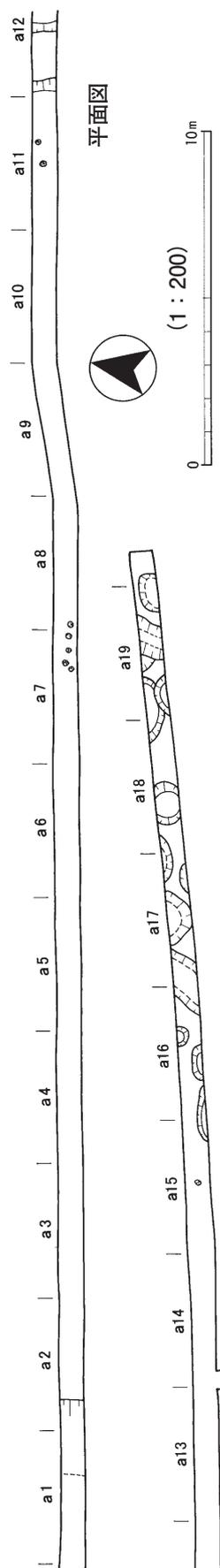
24～26は棒状土製品で、断面はやや方形気味の楕円形である。29は北宋銭「熙寧元寶」である。

### 4 小結

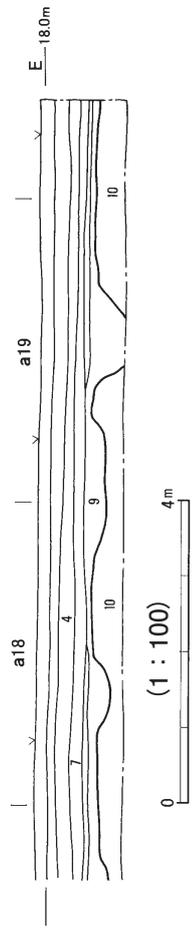
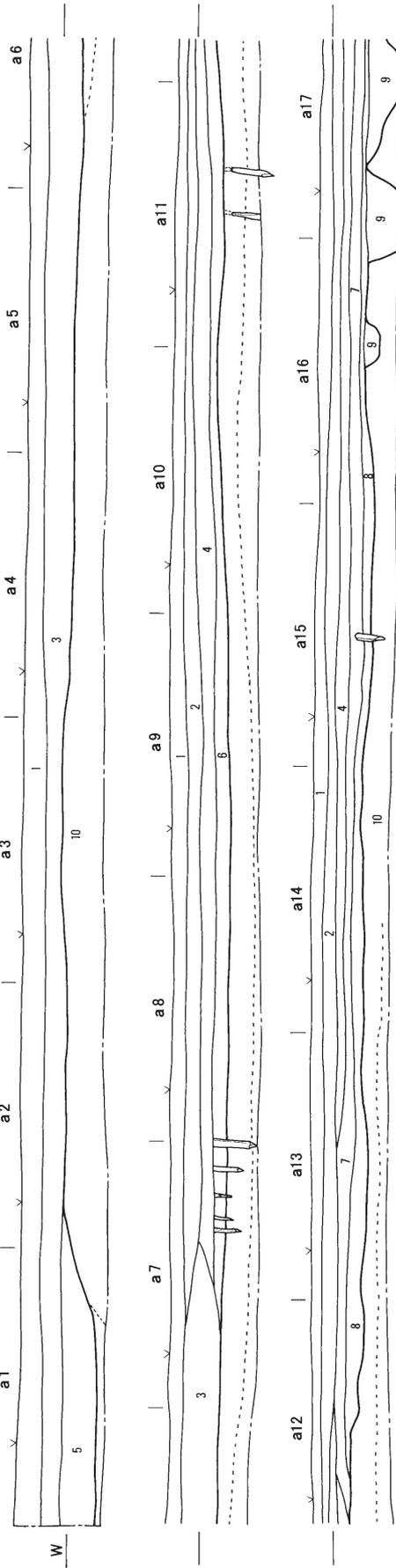
西垣内遺跡は、今回の調査地から約50m西にあたる地点で平成4年に県道改良工事に伴う発掘調査が実施されている(第Ⅴ-1図)。平成4年調査B区では、大量の土師器類とともに重複する掘立柱建物群が確認されている。西垣内遺跡の中心は、平成4年調査区を含む丘陵部にあると考えられる。

今回の調査区は、西垣内遺跡の中心部となる丘陵部の南縁辺部分にあたる。世古里中遺跡と同様、調査区の南部には湿地(流路を含む)が広がっており、調査区付近は粘土採掘坑として利用された地と考えられる。

世古里中遺跡と同様、当遺跡は土器窯とその関連集落遺跡と考えることができよう。(伊藤)

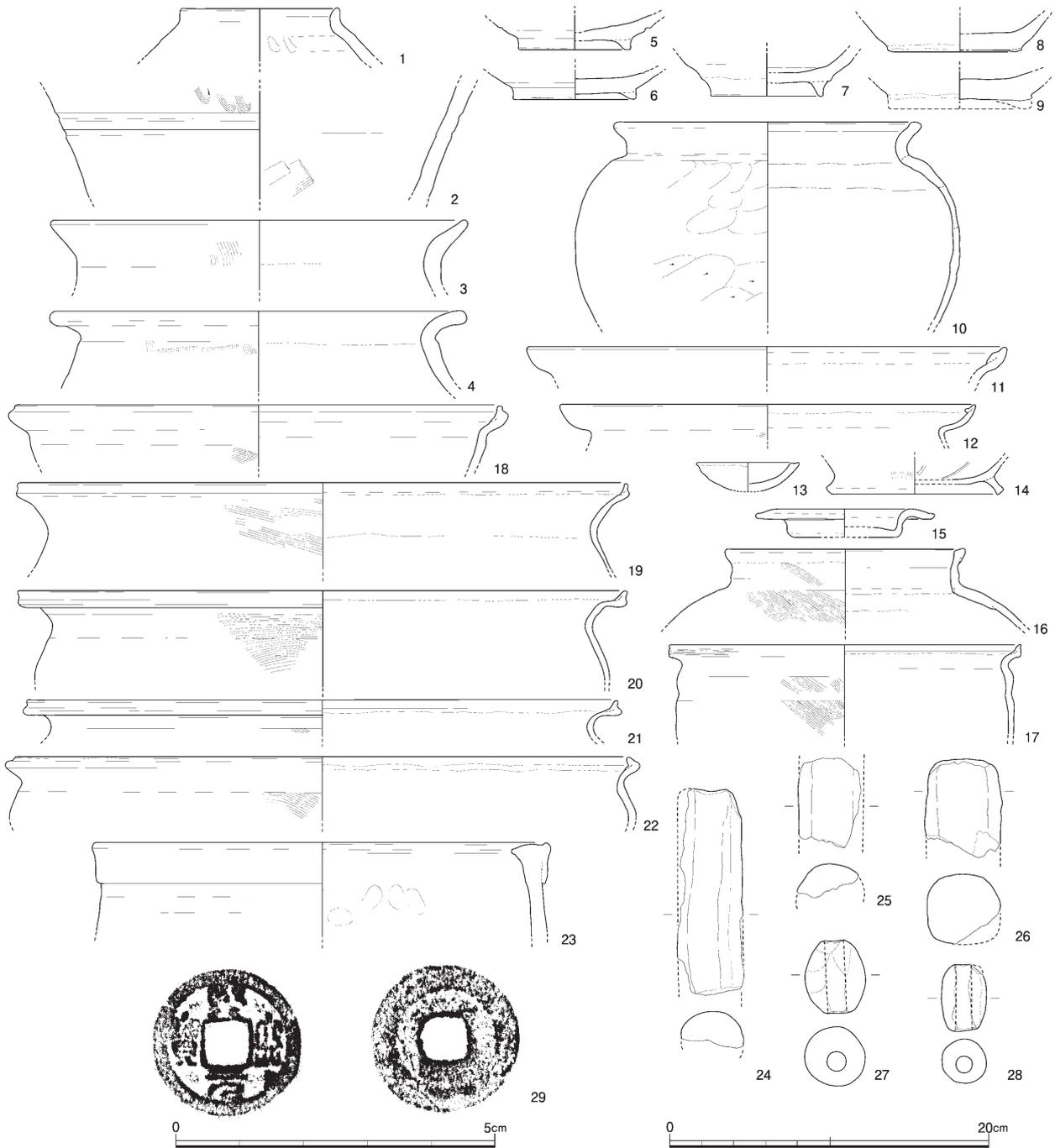


調査区北壁土層



- 1. アスファルト・碎石
- 2. 路床盛土(現代)
- 3. 円礫層(水田用貯集埋土、現代)
- 4. 灰色粘土と白色粘土の混合層(現代)
- 5. 淡褐色粘土
- 6. 灰色～灰褐色粘土、ややシルト質
- 7. 灰褐色粘土
- 8. 10Y R 4/4 褐色シルト、砂質強い(土器多量)
- 9. 10Y R 4/1 褐灰色粘土
- 10. 10Y R 8/1 灰白色粘土、下部は褐色強い

第VI-1図 西垣内遺跡調査区平面図および土層断面図



第Ⅵ-2図 西垣内遺跡出土遺物実測図 (29は1:1、他は1:4)

第Ⅵ-1表 西垣内遺跡出土遺物観察表(1)

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	6-1	須恵器	短頸壺	a 1 4	灰褐土	(口)10.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密	5Y5/1 灰	口縁2/12	奈良-平安時代
2	5-1	須恵器	壺	a 1 4	灰褐土	(頸)21.2	外:回転ナデ→カキメ→沈線・波状文 内:板ナデ→回転ナデ	やや密	10Y R7/4 にぶい黄橙	頸部1/12	古墳時代-奈良時代
3	4-2	土師器	甕	a 1 5	灰褐土	(口)26.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10Y R7/3 にぶい黄橙	口縁1/12未満	奈良時代
4	5-2	土師器	甕	a 1 2	灰褐土	(口)26.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	2.5Y7/2 灰黄	頸部2/12	近世初頭?
5	6-3	陶器	椀	a 1 4	灰褐土	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け 高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	2.5Y7/1 灰白	高台4/12	山茶椀 渾美 内面研磨
6	5-5	灰釉陶器	椀	範囲確認 調査坑	No. 1	(高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け 高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	5Y7/1 灰白	高台12/12	猿投・知多 高台に茎状の 庄痕
7	6-4	陶器	椀	a 1 5	灰褐土	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け 高台・ナデ 内:ロクロナデ	密	2.5Y8/1 灰白	高台3/12	山茶椀 渾美
8	5-3	陶器	椀	a 1 0	灰褐土	(高台)8.4	外:ロクロナデ→糸切り→貼り付け 高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	5Y7/1 灰白	高台5/12	山茶椀 渾美 全体に摩滅

第Ⅵ-2表 西垣内遺跡出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	様・質	器種等	グリッド	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
9	54	陶器	椀	a 13	灰色土	(底部)9.0	外:ロクロナデ→糸切り?→貼り付け高台・ナデ 内:ロクロナデ	やや密	2.5Y8/2 灰白	底部3/12	山茶椀 渾美
10	6-2	土師器	甕	a 18	灰褐色土	(口)19.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR6/2 灰黄褐	口縁小片	平安時代後期末
11	44	土師器	鍋	a 10	灰褐色土	(口)30	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	10YR6/4 にぶい黄橙	口縁1/12未滿	中世前期
12	43	土師器	鍋	a 19	灰褐色土	(口)26	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR5/2 灰黄褐	口縁1/12未滿	中世後期
13	35	土師器	小椀	範囲確認調査坑	No. 1	(口)6.4	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁5/12	中世後期～近世初頭
14	33	土師器	台付椀?	a 8	灰色粘土	(高台)11	外:ハケメ→貼り付け高台、ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	密	2.5Y8/3 淡黄	高台3/12	中世後期～近世初頭
15	1-1	土師器	落とし蓋	a 10	灰褐色土	(蓋)11.2 (高)1.8"	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁2/12	中世後期～近世初頭
16	3-2	土師器	壺	a 9	灰色粘土	(口)15	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/2 灰黄	口縁3/12	中世後期～近世初頭
17	3-1	土師器	鍋	範囲確認調査坑	No. 1	(口)22	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/2 灰白	口縁1/12	中世後期
18	2-1	土師器	鍋	範囲確認調査坑	No. 1	(口)31.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期～近世初頭
19	2-3	土師器	鍋	a 8	灰色粘土	(口)38.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/1 灰白	口縁1/12	中世後期
20	2-2	土師器	鍋	a 7	灰色粘土	(口)38	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期
21	1-3	土師器	鍋	範囲確認調査坑	No. 1	(口)37.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y7/3 浅黄	口縁1/12	中世後期末
22	1-4	土師器	鍋	範囲確認調査坑	No. 1	(口)39.5	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y8/2 灰白	口縁1/12	中世後期～近世初頭
23	4-1	陶器	甕	a 15	灰褐色土	(口)28.5	外:回転ナデ 内:オサエ・ナデ→回転ナデ	密	5YR4/2 灰褐(釉) 2.5YR5/2 灰赤(地)	口縁1/12未滿	常滑
24	3-4	土師質	棒状土製品	a 10	灰褐色土	(幅)4.0	外:ナデ・オサエ 断面形は円形	密	10YR8/2 灰白	-	全体に2次被熱
25	3-7	土師質	棒状土製品	a 15	灰褐色土	(幅)3.7以上	外:ナデ・オサエ 断面形は不整形円形	密	10YR8/3 浅黄橙	-	全体に2次被熱
26	3-6	土師質	棒状土製品	a 18	灰褐色土	(幅)4.5	外:ナデ・オサエ 断面形は不整形方形	密	2.5Y6/2 灰黄	-	全体に2次被熱
27	46	土師質	土錘	a 19	灰褐色土	(長)4.6 (幅)3.8	孔径約 1.2 cm	やや密	2.5Y7/2 灰黄	完存	重さ50.78g
28	45	土師質	土錘	a 15	灰褐色土	(長)4.2 (幅)2.8	孔径約 1.1 cm	やや密	10YR7/2 にぶい黄橙	一部欠損	重さ27.93g
29	3-8	銅製品	銭貨	a 13	灰褐色土	(径)2.3	北宋銭「熙寧元寶」篆書体	-	-	完存	

## Ⅶ 明和町蓑村 鳥墓遺跡(第2次)

### 1 調査経緯と調査区の状況

鳥墓遺跡は多気郡明和町蓑村<sup>とつか</sup>字鳥墓に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成23年12月5日から同月7日にかけて断続的に、30㎡の工事立会を実施した。

今回の調査地は、鳥墓神社(明和町指定史跡鳥墓神所跡)の南辺道路部にあたる。埋設水路を設置する工事に伴って実施した。調査区の標高は概ね15.5m前後である。なお、平成5年度に実施した第1次調査区(工事立会)は、今回の調査区の北側約20mの位置にある。

調査にあたっては、西端からおおよそ4m毎にグリッドを分けていった。

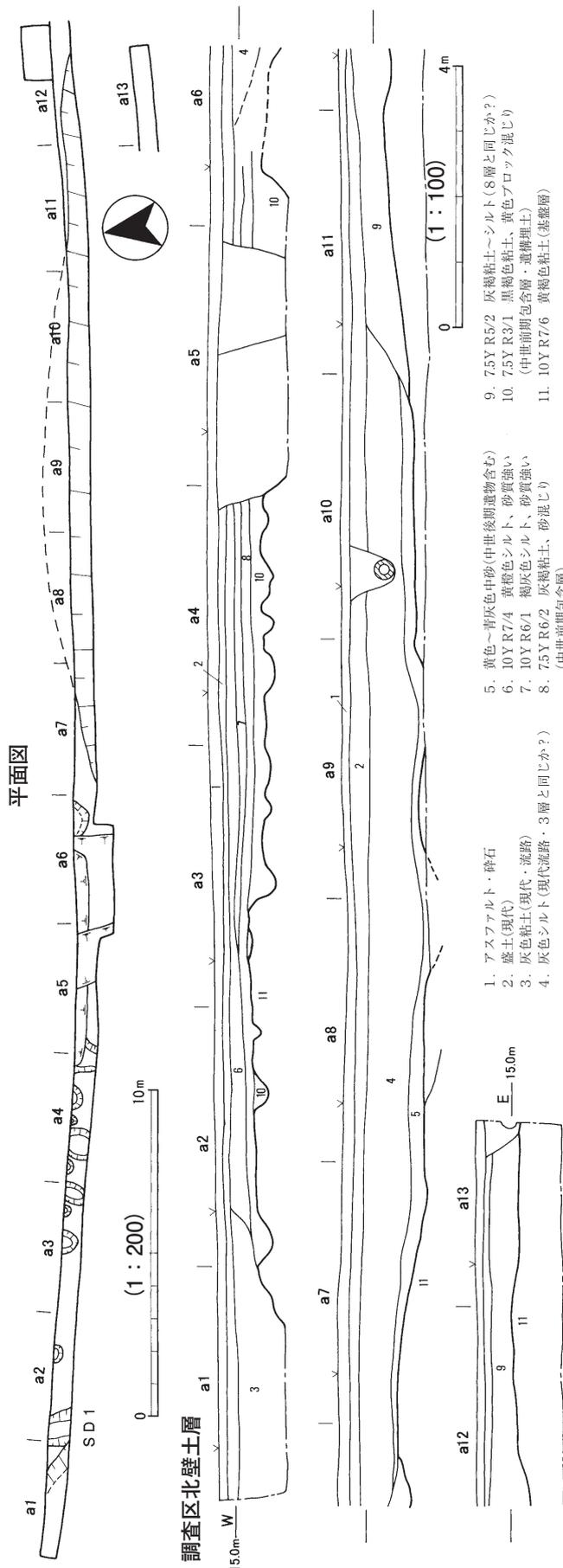
### 2 層位と遺構

**層位** 埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外で

ある。鳥墓遺跡では、遺構の基盤となる層(ここでは地山)が比較的浅かったため、その面で確認を行った。

遺構の基盤となる層は橙色粘土で、a 3グリッド付近では標高約14.8m(地表下約60cm)で検出した。基盤層はa 8グリッド付近から東に向かって下降し、標高14m以下となる。しかし、a 10グリッド付近から再度高さを増し、a 13グリッド付近では標高15m付近にまで達している。

a 2～a 4グリッドにかけては、基盤層上面に黒褐色系粘土層(第Ⅶ-1 図10層)が確認できる。これらは下部の遺構にも伴うもので、平安時代末期頃を中心とした遺物が含まれている。この層の上面には灰褐色系砂質土層(第Ⅶ-1 図6～8層)が見られる。これらは、当地に形成されていた耕作地(田畠)の造成土と考えられる。室町戦国期から江戸時代にかけてのものと思われる。



第Ⅶ-1図 鳥墓遺跡調査区平面図および土層断面図

(伊藤)

a 1グリッド付近およびa 6～a 10グリッドの間は流路を示す層が確認できる。出土遺物からは江戸時代以降、明治時代頃までのものと考えられる。両者は一連の流路と考えられる。

以上のことから、今回の調査地は概ね台地縁辺部にあたり、その裾部をめぐる流路を一部確認していると考えられる。

**遺構** 台地縁辺部にあたるa 2～a 5グリッド付近を中心に遺構が見られた。SD 1は鎌倉時代(13世紀中頃)の溝と考えられる。a 2～5グリッドでは、不整楕円形の土坑を5基ほど確認した。いずれも不定形で、遺物はあまり含まないが、概ね平安時代末頃(12世紀後葉頃)のものとして大過ない。

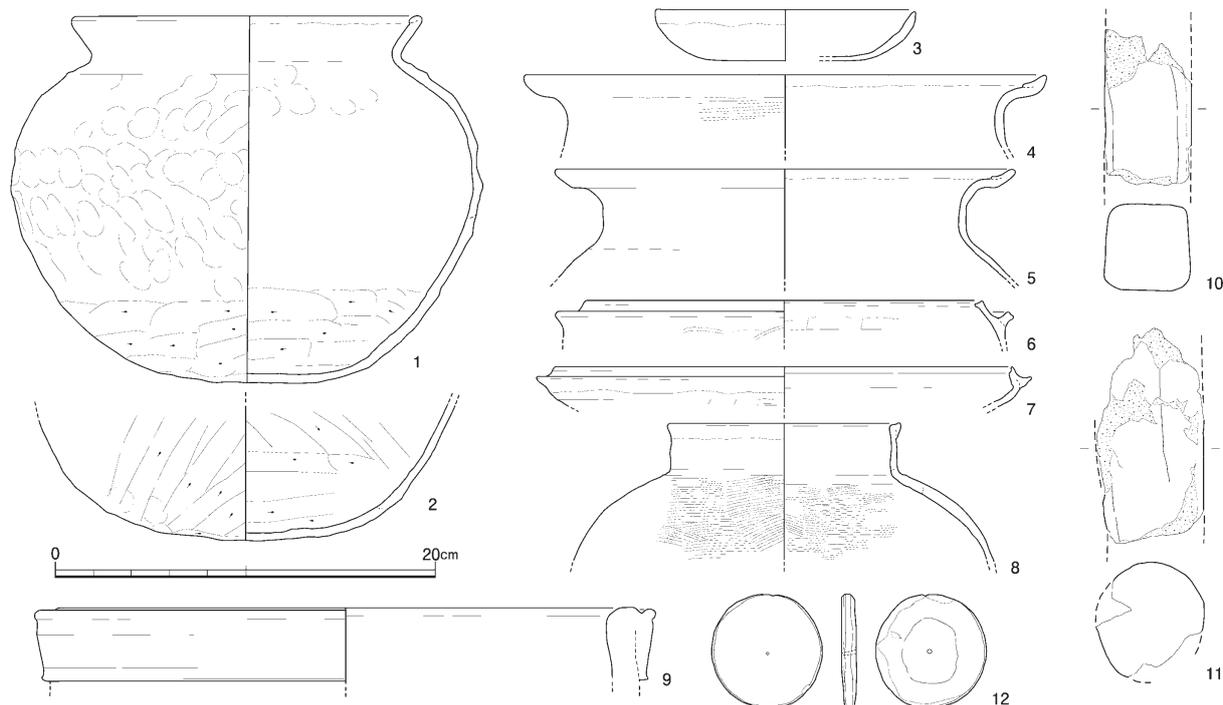
### 3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物を第Ⅶ-2図に示した。遺物には、平安時代末期から江戸初期頃のものまでが見られる。1・2は平安時代末期の土師器甕。外面に煤が付き、使用の痕跡が伺われる。3～5はSD 1から出土した鎌倉時代前期の土器類。6は室町時代と考えられる土師器羽釜で鏝の短いもの。7は江戸時代初期かと考えられる土師器焙烙で、当地付近の遺跡での出土は珍しい。10・11は棒状土製品で、土師器窯の部材として用いられるもの。12は円盤形をした土製品で、用途は不明だが、土器生産に関係する可能性も考えられる。

### 4 小結

明和町蓑村地内は古代以来の土師器生産地で、鳥墓遺跡もその一部と考えられる。鳥墓神社の東隣には、現在の土師器生産工房である「神宮土器調整所」がある(第Ⅴ-1図)。今回の土坑状遺構や、出土した棒状土製品は、平安時代末期頃の土器生産に伴うものと考えられる。

なお、調査区に近接して鳥墓神序跡(明和町指定史跡)がある。神序(かんだち、神館)は神社に近接して設けられる祭祀施設であるが、これと今回の調査区との関係は明確ではない。



第Ⅶ-2図 鳥墓遺跡出土遺物実測図(1:4)

第Ⅶ-1表 鳥墓遺跡出土遺物観察表

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	1-1	土師器	甕	a 4	黒褐粘	(口)18.4 (高)19.3	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	粗	10Y R 6/3 にぶい黄橙	"口縁1/12 体部6/12"	平安時代後期末
2	2-1	土師器	甕	a 4	黒褐粘	(底)-	外:オサエ・ナデ→ケズリ 内:板ナデ→ケズリ	粗	10YR4/4 褐	底部12/12	平安時代後期末
3	1-2	土師器	皿	a 2	S D 1 東岸	(口)13.8 (高)2.65	外:剥離 内:剥離	粗	10YR6/1 褐 灰	口縁6/12	中世前期
4	3-4	土師器	鍋	a 2	S D 1 東岸	(口)27.4	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁1/12	中世前期
5	2-4	土師器	鍋	a 2	S D 1 東岸	(口)24.2	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや粗	10YR8/2 灰白	口縁1/12	中世前期
6	3-2	土師器	羽釜	a 9	暗灰シルト	(口)20.8 (鏝)24.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/1 灰白	口縁1/12	中世後期
7	3-3	土師器	焙烙	a 8	灰色シルト	(口)26.0	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ヨコナデ	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	中世後期～近世初頭
8	2-3	土師器	茶釜	a 6	灰色シルト	(口)12.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや粗	2.5Y8/2 灰白	口縁2/12	中世後期～近世初頭
9	3-1	陶器	甕	a 4	灰褐粘	(口)32.5	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや粗	7.5YR5/4 にぶい褐	口縁2/12	常滑
10	1-3	土師質	柱状土製品	a 2	灰褐粘	(幅)4.5	外:ナデ・オサエ 断面形は方形	やや粗	2.5Y8/2 灰白	-	全体に2次被熱
11	1-4	土師質	柱状土製品	a 2	灰褐粘	(幅)5.7	外:ナデ・オサエ 断面形は方形	やや粗	10YR8/1 灰白	-	全体に2次被熱
12	2-2	土師質	円盤形土製品	a 8	灰色シルト	(径)5.7	外:ナデ 貫通する円棒状具による孔あり	密	7.5YR7/3 にぶい橙	完存	

## VIII 明和町箕村 箕村大塚遺跡(第2次)

### 1 調査経緯と調査区の状況

箕村大塚遺跡は多気郡明和町箕村字大塚に所在する。平成23年12月19日から12月21日にかけて調査を実施した。最終調査面積は52㎡であった。

調査地は町道で、長さ40m、幅1.2～1.7mである。東西方向に調査区を設置していることから、南北に延びる低丘陵に対して直交する関係にある。調査グリッドは、調査区幅の都合から東西方向のみを4m間隔で設定し、調査区西端をその起点とした。

なお、平成2年度に実施した第1次調査区(工事立会)は、今回の調査区の東側約120mの位置にある。第1次調査では明確な遺構・遺物は無かった。

### 2 層位と遺構

基本層序(第Ⅷ-1図)は、舗装に伴うアスファルト・碎石などの下に、現代と考えられる客土(第7層)がある。その下には近・現代の攪乱にあたる第8層のほか、客土及びそれに関連する第9～14層が堆積する。このうち第11・12・14層において土器の細片や炭を含んでいた。

第9～14層の下では、還元色を呈する灰色系埋土が観察された(第15層)。平面・断面の特徴から溝や野池の埋土と考えられる。第17層における遺物の特徴から、第15層は近世以降の堆積ととらえることができる。中央の丘陵鞍部付近では、現代の客土(第7層)の直下で、第19～21層が確認できた。第19・21層では、中世あるいは近世の土器片とともに炭が多く認められたことから、灰原に相当すると考えられる。

第15層の下では、第22～25層が確認できた。このうち第23～25層は中世以前の形成と推察される。

第27層は褐灰色を呈しており、炭を少量含む。土器はほとんど認められなかったが、色調・含有物から灰原の末端付近を反映している可能性もある。上層の第26層が中世に形成された可能性を持つことから、第27層の形成時期はそれ以前となり、中世または近世の灰原(第19～21層)とは別の遺構を想定す

る必要がある。

これらの堆積層の下では、当地の地山に相当する第28・29層が確認できた。地山は、明黄褐色から浅黄色を呈する極細粒砂を主体とする堆積層であり、近隣の丘陵を形成する堆積層である。地山のうちのうち上層にあたる第28層のほうに風化の作用を強く受けており、赤褐色の色調が強い。

### 3 遺構

調査の結果、中央付近で丘陵の鞍部にあたる地点を確認した。さらにその両側が落ち込むような状況をとらえることができた。西側の落ち込みは平面的な特徴・還元色を呈する埋土からSD1と名付けた。SD1は落ち込みあるいは溝だったと考えられる。中央付近の鞍部では、小規模な窯に伴う灰原ととらえうる土層が観察された。東側の落ち込みは丘陵から平野への転換を反映したものと考えられるが、ひとまずSD4と名付けた。この他、調査区西端・東端では現代攪乱が認められた。

**SD1** 調査区の東側で確認した。丘陵鞍部から幅約12mである。第7層の下では、客土の第9～14層が確認された。これらの層には1cmにも満たない土器の小片・炭を多く含むことから、窯の灰原の土を客土に利用したことがわかる。客土の土質から近隣から持ち込まれた可能性が高く、調査地の近くに窯の存在を想定できる。

その下層では灰色粘土を主体とする第15層が観察できた。この層は、溝への堆積状況を示しており、還元色を呈している。なお、第22・23・25層の上端は長期の滞水によって還元色に変化している。第22層では中世または近世、第24層で中世の遺物を含む。さらに下層では地山に到達する。

このような堆積状況と遺物から、中世から落ち込みが存在していたこと、近世・近代に水路あるいは野池として利用されたといえる。

**灰原等** 第19～21層は、丘陵の鞍部において観察できた灰原層である。第21層の形成後、間層にあたる第20層、さらにその上に第19層が形成されたと考

えられる。その広がりには東西2.5m、南北1.2m以上、厚さ35cmであった。これらは北側において厚く堆積していたことから、調査区の北側に窯が位置すると想定できる。出土物から中世あるいは近世の小規模な窯に伴う灰原と考えられる。

なお、SD1の西端付近で確認した第17層では、近世の土器が密集して堆積しており、焼成失敗品の廃棄に伴うものとみなせる。

**SD4** 丘陵鞍部に相当する場所では、第16・18・26・27層が確認された。このうち第27層は暗灰褐色系の埋土で、炭などを含む。これらの点から第27層は灰原の末端ととらえることもできる。上層の第26層は中世に形成されたと考えられることから、第27層は、それ以前ととらえることができる。(高松)

#### 4 出土遺物

遺物量は整理箱にして約2箱である。今回の調査で出土した遺物を第Ⅷ-2図に示した。平安時代末期～鎌倉時代(1～6)、室町時代(7・9・10)、戦国末期(8)、江戸時代中後期(11～32)、のほか、土製品類(33～40)がある。

11・12は土師器甕の形態をなす。とくに11は7世紀代頃の甕と極めて類似した形態であるが、板状工具によるナデを中心とした調整手法や、土師器にしては極めて硬質な焼き上がり、あるいは素地粘土の質などが、中世末期から近世初期に見られる土師器と共通する。甕形をなす19をはじめ、11～19の土器類は共通性を持っている。そのため、これらの土器は、一見すると古代(7世紀前後)のもののように見えるが、実は江戸時代中後期に製作されたものと考えられる。

近世に「復古調」の土器を製作する事例は、当遺跡にも近い外山遺跡(明和町箕村)でも観察されている<sup>(1)</sup>。なぜこのようなことが行われるのかの理由は今のところ明確にし得ないが、近世の土器生産地「有爾」において特徴的な現象として把握できることのみ指摘しておきたい。

33は掌握圧痕のある土製品で、用途不明。34～37は棒状土製品で、土器窯に伴う道具と考えられる。38は「三又状土製品」に類似するため、鑄造遺構との関連も考慮されるが、上記と同様、土器窯に伴う遺

物の可能性もある。39・40は土錘。(伊藤)

#### 5 小結

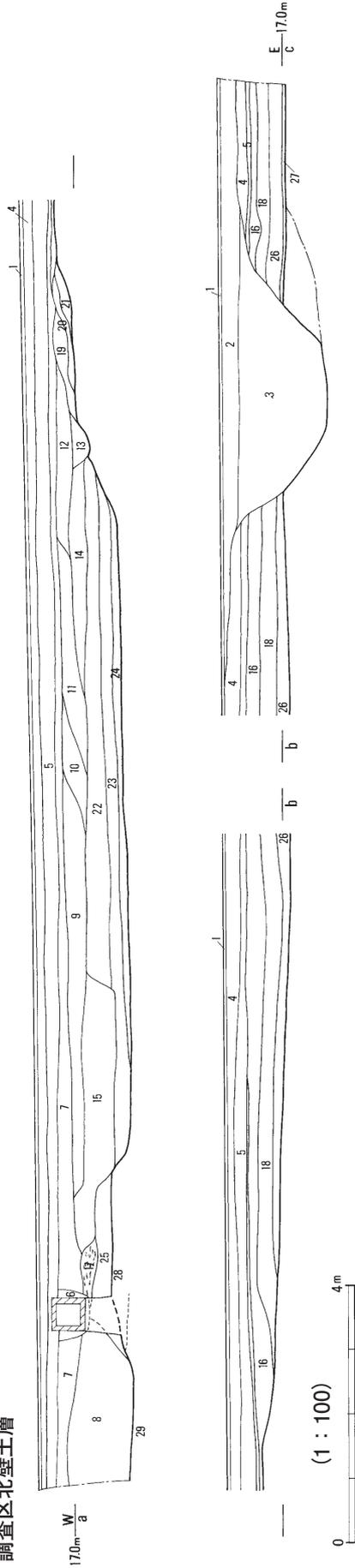
今回の調査では、丘陵鞍部で土器窯の灰原と考えられる層を確認した。その広がりから調査区北側に窯体が位置すると推察される。ただし、当地は昭和60年代に圃場整備が実施されており、調査区北側の高まりは、その際に盛り土がなされた結果だという。第19～21層の直上にも現代客土の第7層が及んでいることから、深耕や削平による影響が大きいものと予想される。したがって、窯本体については既に失われている可能性もあろう。いずれにしても、当地において、今後発掘調査を実施する場合、この点を考慮する必要があるだろう。

今回の調査で判明した灰原と、当遺跡近隣の北野遺跡や水池土器製作遺跡の存在を踏まえると、当地では古代から近世にかけて極めて継続性の高い土器生産が行われていたことが改めて判明した。当地における土器生産のあり方を反映していると評価できよう。(高松)

[註]

(1)三重県埋蔵文化財センター「外山遺跡・本郷遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 1990年)

調査区北壁土層



(1 : 100)

養村大塚遺跡土層

[アスファルト舗装に伴う層、現代掘削]

1. アスファルト
2. 5Y6/1灰 礫(灰色碎石)
3. 10YR4/4褐 粘土～シルト しまりなし 粘質あり(現代掘削)
4. 5BG7/1明青灰 礫(青色碎石)
5. 5YR5/8明赤褐 シルト(赤色碎石)
6. 5YR5/4にぶい赤褐 シルト(暗栗理土)
7. 25Y6/8明黄褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり(現代客土)
8. 25Y3/2暗褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり(近・現代掘削)
9. 75YR4/6褐 粘土～シルト しまり非常にあり 粘質あり(客土)
10. 10YR5/3にぶい黄褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり(客土)
11. 75YR4/1褐灰 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
長軸1cm以下の土師器ならび焼成不良の土器片を多く含む。  
炭も含む(客土)
12. 10YR5/3にぶい褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物少量含む(客土)

13. 5Y5/1灰 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物を含む。炭を少量含む(客土)
14. 10YR4/2灰黄褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり
15. 25Y5/1黄灰 粘土～シルト しまりあり 粘質あり
16. 75YR4/6褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり
17. 10YR5/1褐灰 粘土～シルトに75YR4/3褐色 粘土～シルトを疎状に10%含む。炭混じる しまりあり 粘質あり 近世密路を多量に密に含む
18. 75YR6/6橙 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物わずかに含む
19. 75YR4/1褐灰 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物を多く含む(灰原層)
20. 75YR4/4褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物少量含む(側層)
21. 75YR4/2灰褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物を多く含む(灰原層)

[中世または近世の層]

22. 10YR5/2灰黄褐 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物含む

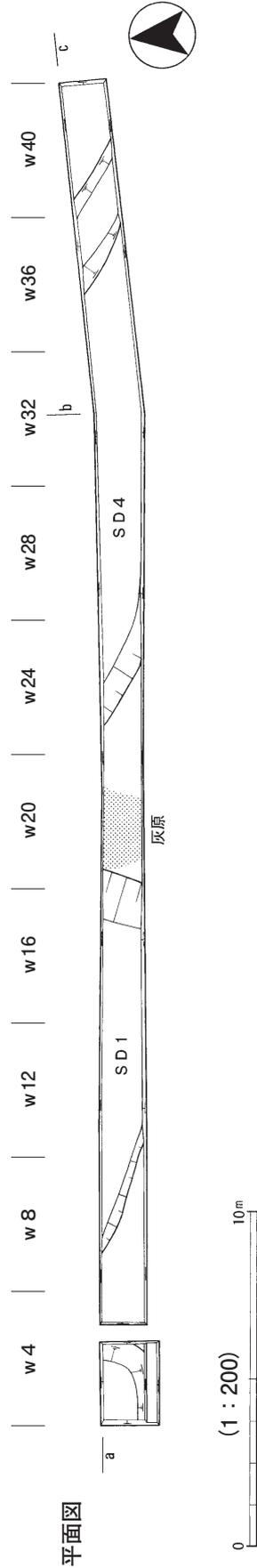
[中世以前の層]

23. 25Y6/2灰黄 粘土～シルト しまりややあり 粘質あり  
遺物含む
24. 25Y6/1黄灰 粘土～シルト しまりややあり 粘質あり  
遺物含む
25. 25Y6/2灰黄 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物含む
26. 25Y6/2灰黄 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物わずかに含む
27. 75YR5/1 褐灰 粘土～シルト しまりあり 粘質あり  
遺物なし 炭少量含む

[地山]

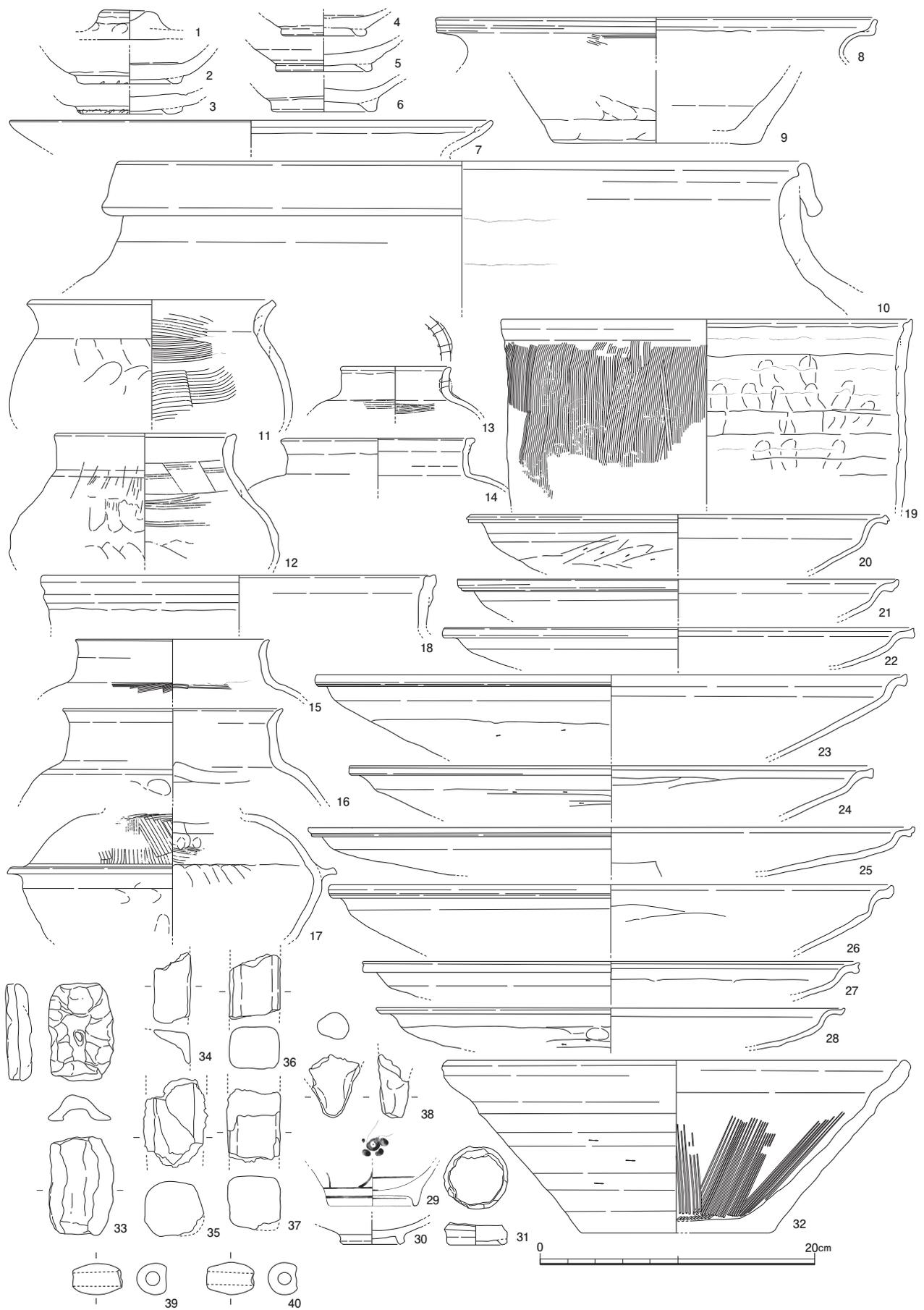
28. 10YR6/8明黄褐 シルト～極細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
29. 25Y7/4黄灰 極細粒砂～細粒砂 しまりあまりない  
粘質あまりない

平面図



(1 : 200)

第四 - 1 図 養村大塚遺跡調査区平面図および土層断面図



第八-2図 箕村大塚遺跡出土遺物実測図(1:4)

第Ⅷ-1表 箕村大塚遺跡出土遺物観察表

番号	実測番号	様・質	器種等	グリット	遺構・層名等	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	4-2	土師器	落とし蓋	w16	第12・19層	(摘)4.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	2.5Y4/1 黄灰	摘部12/12	
2	6-5	陶器	椀	w 4	SD 1 第15層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ・糊殻痕 内:ロクロナデ	やや粗	5Y7/1 灰白	高台12/12	山茶椀 渥美 内面研磨
3	4-4	陶器	椀	w16	第12・19層	(高台)7.6	外:ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ・糊殻痕 内:ロクロナデ	密	2.5Y7/1 灰白	高台6/12	山茶椀 渥美 内面研磨
4	2-8	陶器	椀	w28	SD 4 第26層	(高台)6.2	外:ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	密	2.5Y8/1 灰白	高台2/12	山茶椀 渥美
5	4-3	陶器	椀	w16	第12・19層	(高台)7.0	外:ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	密	5Y7/1 灰白	高台3/12	山茶椀 渥美 内面研磨
6	4-6	陶器	椀	w 4	第8層	(高台)7.7	外:ロクロナデ→糸切り→高台貼付ナデ 内:ロクロナデ	密	2.5Y8/2 灰白	高台12/12	山茶椀 渥美 内面研磨
7	1-3	土師器	鍋	w20	SD 4 第18層	(口)35	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/4 浅黄橙	口縁1/12未満	中世中期(鍋B、3a)
8	3-5	土師器	鍋	w16	第12・19層	(口)32.2	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁2/12	中世後期(鍋B、4e)
9	4-7	陶器	練鉢	w24	SD 4 第26層	(底)15.2	外:オサエ・ナデ 内:研磨痕	密	2.5YR5/2 灰赤 7.5YR6/4 にぶい橙	底部2/12	常滑
10	5-1	陶器	甕	w16	第12・19層	(口)50	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁1/12未満	常滑
11	7-2	土師器	甕	w 4	SD 1 第15層	(口)18	外:ナデ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6 橙	口縁3/12	焼成硬質、近世のものか?
12	8-1	土師器	壺	w 4	SD 1 第15層	(口)13.2	外:オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y5/2 暗灰黄	口縁3/12	焼成硬質、近世のものか?
13	7-4	土師器	壺	w 4	SD 1 第15層	(口)8.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	10YR4/1 褐灰	口縁1/12	口縁部に焼成前穿孔(2個 残、2個一対か?)
14	5-3	土師器	壺	w16	第19層	(口)14.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁2/12	中世後期～近世前期
15	8-3	土師器	茶釜	w 4	SD 1 第15層	(口)14.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	密	2.5Y5/1 黄灰	口縁2/12	中世後期～近世前期
16	6-4	土師器	壺	w 4	SD 1 第15層	(口)16	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y5/2 暗灰 黄	口縁1/12	
17	8-4	土師器	茶釜	w 4	SD 1 第15層	(鑄)23.8	外:ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内:ナデ・オサエ→ハケメ	密	10YR8/4 浅 黄橙	鑄3/12	中世後期～近世前期
18	5-2	土師器	壺	w16	第19層	(口)28.6	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	10YR8/3 浅黄橙	口縁1/12	中世後期～近世前期
19	4-1	土師器	甌	w 4	SD 1 第15層	(口)29.9	外:ハケメ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	5YR7/8 橙	口縁3/12	焼成硬質、近世のものか?
20	3-1	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第15層	(口)30.6	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR7/8 橙	口縁3/12	近世中後期
21	3-3	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第17層	(口)32.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	5YR6/8 橙	口縁1/12	近世中後期
22	3-2	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第17層	(口)34.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6 橙	口縁1/12	近世中後期
23	1-2	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第15層	(口)43.0	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR7/6 橙	口縁2/12	近世中後期
24	6-3	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第15層	(口)38	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁2/12	近世中後期
25	1-1	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第15層	(口)44.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密	5YR7/6 橙	口縁2/12	近世中後期
26	3-4	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第17層	(口)41.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	5YR6/6 橙	口縁1/12	近世中後期
27	6-1	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第15層	(口)36	外:ナデ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁1/12	近世中後期
28	6-2	土師器	焙烙	w 4	SD 1 第15層	(口)34	外:ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内:ナデ→ヨコナデ	密	2.5Y6/2 灰黄	口縁1/12	近世中後期
29	8-2	陶器	椀	w 4	SD 1 第15層	(高台)6.4	外:ケズリ出し高台→施釉 内:施釉(梅花文染付)	密	釉5Y8/2灰白、 素地2.5Y7/2灰黄	高台11/12	瀬戸美濃
30	7-3	陶器	皿	w 4	SD 1 第15層	(高台)4.6	外:ケズリ出し高台→施釉 内:施釉	密	釉10YR1.7/1黒、 5Y8/2灰白素地 10YR8/3浅黄橙	高台12/12	瀬戸美濃? 近世
31	2-1	陶器	天目 茶碗	w 4	SD 1 第15層	(高台)4.3	外:削りだし高台 内:施釉	密	N1.5/0 黒(釉) 2.5Y8/3 淡黄(地)	高台12/12	加工円盤 重さ33.71g
32	7-1	陶器	播鉢	w 4	SD 1 第15層	(口)34 (高)12.6	外:回転ナデ→回転ケズリ→糸切り 内:回転ナデ→播目	密	釉:7.5YR3/4褐 素地:10YR8/4 浅黄橙	口縁1/12	瀬戸美濃 口縁端部は使用による摩滅
33	4-5	土師質	不明	w 4	SD 1 第15層	(長)7.1 (幅)4.6	外:オサエ(握り痕) 内:ナデ	密	2.5Y4/1 黄灰	完存?	窯道具?
34	4-8	土師質	棒状 土製品	w28	SD 4 第18層	(残長)5.1 (幅)2.6	外:ナデ	密	2.5Y8/3 淡黄	破片	断面隅丸長方形
35	2-6	土師質	棒状 土製品	w20	SD 4 第18層	(残長)6.5 (幅)4.2	外:ナデ	密	7.5YR8/4 浅黄橙	両端欠損	断面隅丸長方形
36	2-4	土師質	棒状 土製品	w 8	SD 1 第22層	(残長)4.8 (幅)3.7	外:ナデ	密	2.5Y8/2 灰白	両端欠損	断面隅丸長方形
37	2-5	土師質	棒状 土製品	w16	第14層	(残長)5.4 (幅)3.8	外:ナデ	密	2.5Y8/2 灰白	両端欠損	断面隅丸長方形
38	2-7	土師質	三又状 土製品	w20	SD 4 第18層	(残長)4.7 (幅)2.3	外:ナデ	密	10YR8/2 灰白	脚一部	
39	2-3	土師質	土錘	w 4	SD 1 第15層	(長)3.6 (幅)2.1	外:ナデ 内:円棒状工具巻き付け痕	密	7.5YR6/4 にぶい橙	一部欠損	重さ11.57g
40	2-2	土師質	土錘	w 4	SD 1 第15層	(長)3.3 (幅)2.4	外:ナデ 内:円棒状工具巻き付け痕	密	5YR7/8 橙	一部欠損	重さ11.87g

## 区 伊勢市柏町 にしがいと 西垣外遺跡

### 1 調査の概要

**総説** 伊勢市柏町に所在する西垣外遺跡（第1次調査）は、平成23年度県営かんがい排水事業による農業用水管理設工事（宮川4工区その2地区）に伴い、調査を実施した。調査期間は平成23年12月5日～12月9日で、調査区は幅0.9m×87mを設定し、最終調査面積は78㎡である。

**協議の経過** 西垣外遺跡は、工事中の不時発見により立会を実施したものである。事業予定地は遺跡の外側で、過去に設置した宮川用水旧管部分に新管を設置するという工事であったため、当初は工事着工に問題ないものとして処理していた。しかし、同12月1日に現地を確認したところ、旧管横の未掘削部分を開削しており、弥生時代終末期の高坏片や常滑焼の口縁部を確認したため、急遽工事立会の形で調

査を実施した。なお、調査終了後に伊勢市教育委員会と協議のうえ、遺跡の範囲を今回の調査地まで拡大する手続きをとった。

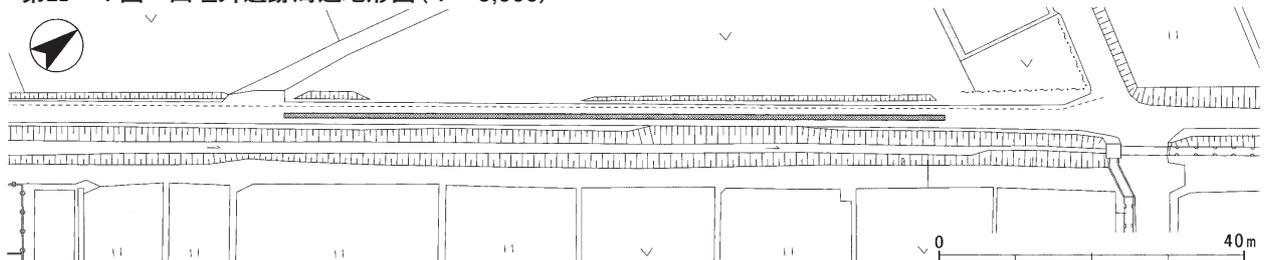
**調査の経過** 工事立会調査は伊勢農林からの労務提供を受けて実施した。道路工事業の受注者である浜口土木株式会社が、現物供与の形で作業員を手配し、現場の安全管理等を行った。

#### 【調査日誌(抄)】

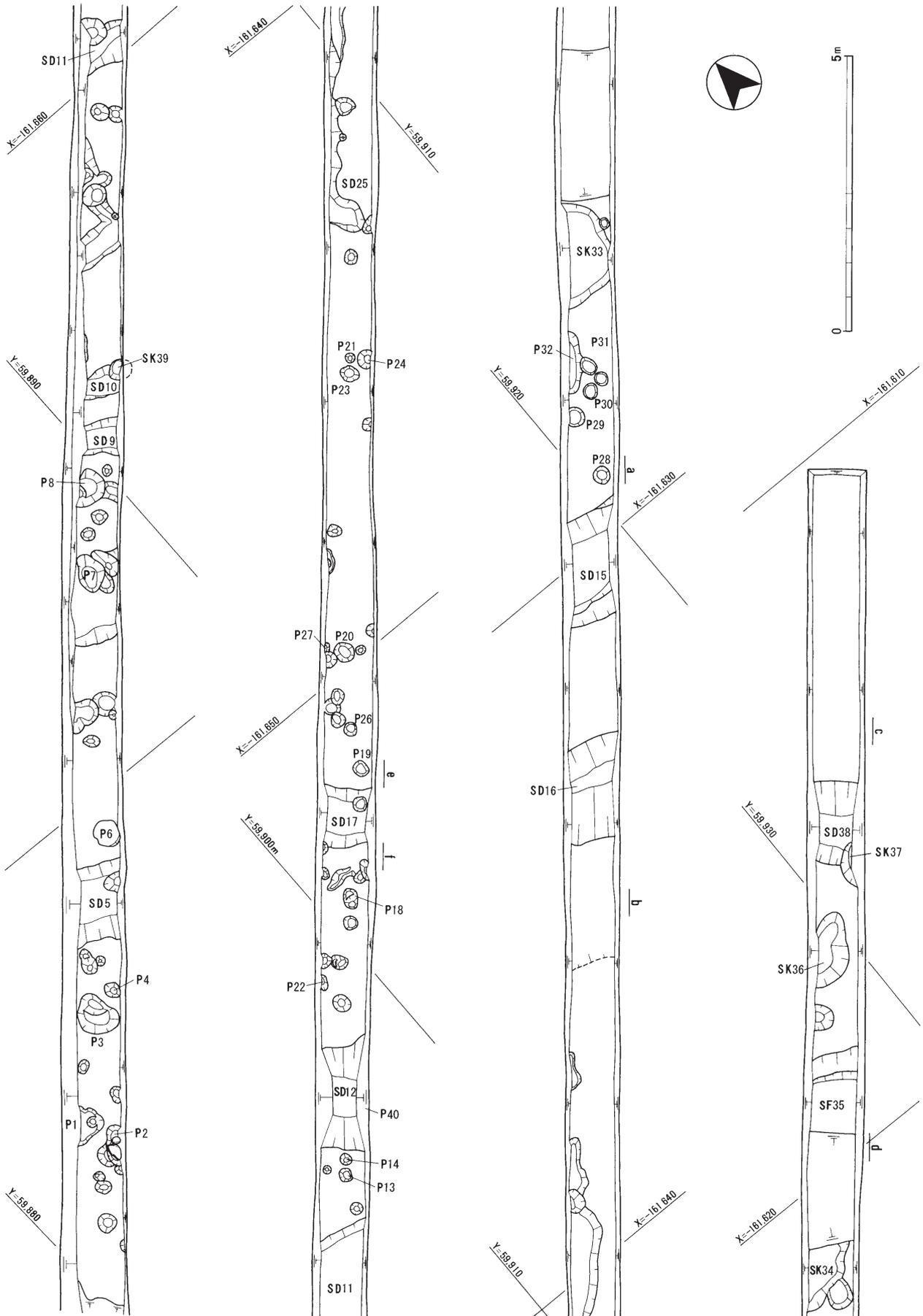
- 12月1日 状況確認、遺構・遺物を確認（伊藤）
- 12月5日 機械掘削、遺構検出、人力掘削（相場）
- 12月6日 機械掘削、人力掘削。S D12・S D11・S D15から遺物多く出土（伊藤・相場）
- 12月7日 人力掘削。S F35焼土検出（伊藤・相場）
- 12月8日 写真撮影、実測準備（萩原・高松・相場）
- 12月9日 図面作成。S K39人力掘削（伊藤・相場）



第区-1図 西垣外遺跡周辺地形図(1:5,000)



第区-2図 西垣外遺跡調査区位置図(1:1,000)



第区-3图 西垣外遺跡遺構平面図(1:100)

## 2 遺跡の立地と基本層位

**立地** 西垣外遺跡は、伊勢市柏町西垣外・東垣外・岡山・南山に所在する。<sup>(1)</sup>

柏集落の東南に位置し、遺跡西端中央部に加須夜神社が鎮座する。<sup>(2)</sup> 遺跡の現状は畑地で、今回の調査区は遺跡の東端を走る道路下にあたる。調査区の東を流れる用水路を境として北東側の水田は一段下がっていることから、調査区は集落の東端にあたると考えられる。標高は2.8mである。

**基本層位** 基本層位は、舗装・碎石・造成土の下に、黒褐色土と暗灰黄色土の包含層が2層堆積する。現地表面から60cm下で遺構面となる。

地山は、調査区南側は黄褐色土～明黄褐色シルト質土で、やや砂質である。北側に進むと黒褐色土(黒ボク)層に変化し、黒褐色土の下に灰黄褐色粘土が堆積している。遺構埋土は、基本的に黒～黒褐色土の黒ボクで、北側では遺構形成面よりやや粘質であった。(相場)

[註]

(1) 伊勢市教育委員会編『伊勢市史』(2011年)。採集遺物の時期は、旧石器時代後期～縄文時代草創期、弥生時代後期～古墳時代、平安時代後期～室町時代と断続的である。遺物の種類は、ナイフ形石器・木の葉形尖頭器などの石器類、弥生土器・須恵器・土師器・山茶碗・陶器などの土器類、鉄滓など豊富である。

(2) 明治年間の地籍図では、加須夜神社は現位置ではなく、神社地は柏集落のなかに認められる。

## 3 主な遺構

### a 概要

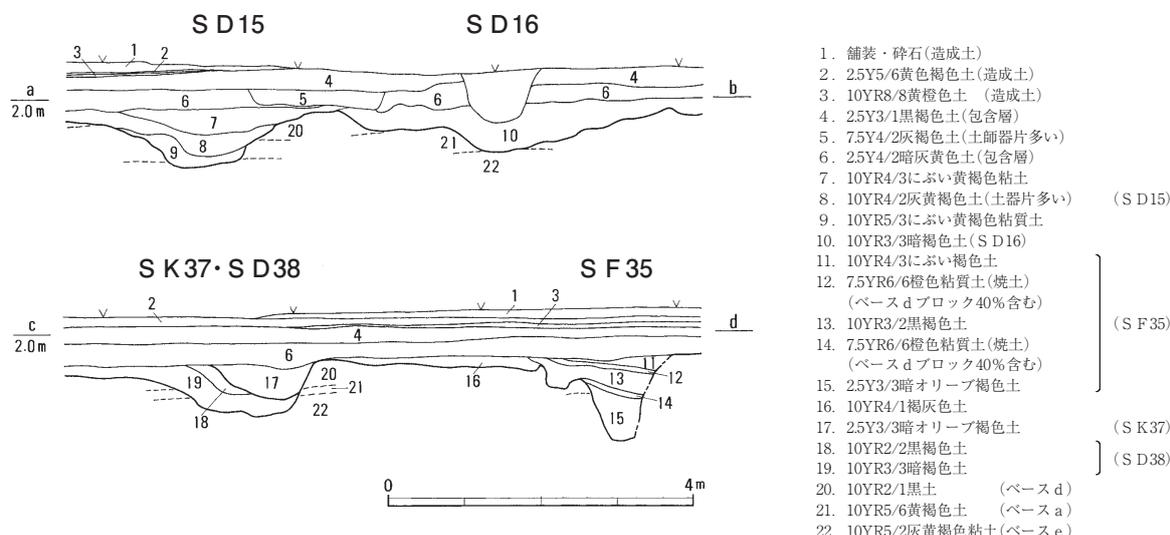
主な遺構は柱穴と溝である。中世後期が主体であるが、調査区南側では弥生時代終末期の溝を1条確認した。弥生時代終末期および中世後期の溝はいずれも調査区を横断し、南西→北東方向に流れるものと推測される。このほか、中世墓と考えられる土坑を検出した。

### b 弥生時代後期の遺構

**S D 12** (第Ⅸ-5図) 幅約1.9mで、遺構検出面から底面までの深さは約1mである。形状は逆三角形を呈し、人がひとり立てるほどの底面をもつ。下層は黄橙色砂質土の地山ブロックを多く含んでおり、遺物はほとんど認められなかった。

中層からは、ほぼ完形の手焙形土器が逆向きに出土し、上層からは高坏片などの土器が破片で出土した。溝の上面で、鎌倉時代のピットを検出した。溝の廃絶した時期は、出土した高坏などから弥生時代終末期と考えられ、その性格は環濠のような集落縁辺を巡る溝と想定される。

**S D 38** (第Ⅸ-4図) 幅約1.53m、深さ40cmの溝である。黒ボクの遺構形成面に対して埋土は黒色粘土であった。南側の斜面が、北に比べ急であることから、南側が墳丘となる方形周溝墓を想定して掘削を行ったが、対となる溝は認められなかった。遺物は少量で、時期は弥生時代の範疇におさまる。



第Ⅸ-4図 西垣外遺跡土層断面図(1:100)

### c 中世の遺構

**S D 10** 幅52cm、深さ65cmの溝である。兩岸はほぼ垂直に落ちる幅の狭い溝で、同様の形状をもつS D 9と併走している。2つの溝に時期差はほとんどみられない。出土遺物は南伊勢中世IV b期(16世紀前葉)と考えられる。中世墓と考えられるS K 39と重複している。

**S D 11** 幅2.6m、深さ44cmの東西溝である。北法面は幅2m程度のテラス状平坦面があり、南法面寄りが深くなっている。南側で多量の土師器鍋片が出土し、これらは外面に煤が付着するものが多い。土師器片に混じって鉄滓が2点出土している。出土遺物は南伊勢中世IV b期である。

**S D 15** (第Ⅸ-5図) 幅約1.9m、深さ80cmの東西溝。溝の形状は逆台形状で、南法面の方が屈曲して急角度である。埋土は黒色土(黒ボク由来)で、下層には礫を含むが規格性は無い。出土遺物は多く、南伊勢中世IV a期(15世紀後葉)が中心である。

**S D 16** (第Ⅸ-5図) 幅約1.8m、深さ約35cmの東西溝で、形状は逆台形状を呈する。S D 15と併走するが、S D 16のほうがやや浅く、南側が緩やかに傾斜する。出土遺物は少ないが、南伊勢中世IV a期頃(15世紀中葉~後葉)に相当し、時期的にもS D 15と共通する。

**S D 25** 落ち込み状の浅い溝で、東西方向に伸びている。南伊勢中世IV a期頃の遺物が出土しているが、それに混じって弥生時代の蛤刃石斧が出土した。

**S K 33** 長径約2m・深さ約30cm、緩やかな傾斜の土坑で、底は平坦面となる。南伊勢中世IV a期のほぼ完形の土師器鍋が出土した。

**S F 35** (第Ⅸ-5図) 南端が既設管で破壊されているため全体の規模は不明だが、調査区内では幅約1.5m、深さ29cmの土坑状遺構として確認した。上層部には多くの円礫を含む褐色系粘土が見られる。中層部は、黒褐色土層と黒ボクブロックを多く含む焼土層が互層に堆積する。下層部は暗オリーブ褐色土で、灰層と考えられる。南側に続く焼けた粘土が確認されたが、現代の攪乱により全体像は不明である。出土遺物は、南伊勢中世IV b期(16世紀前葉)に相当する。

**S K 39** 径約40cmの土坑である。完形の土師器鍋が

2点上向きに出土した。意図的な埋納であり、蔵骨器の可能性が考えられる。S D 10と重複しているが、調査区が狭く、遺構の前後関係は掴めなかった。また、土師器鍋が2点出土していることから2基の墓坑があったと想定されるが、これについても重複関係は不明である。土師器鍋の時期は南伊勢中世IV a期である。

**柱穴群** 調査区南端のピット2は根石を伴う柱穴で、周辺にある同規模のピットとともに、掘立柱建物の柱穴を構成するものと考えられる。時期は概ね中世後期の範疇におさまるものである。(相場)

## 4 出土遺物

### a 概要

西垣外遺跡(第1次)で出土した遺物は、コンテナケース6箱、重さ11.7kgである。そのうち、5箱が中世後期の土器であった。調査面積77㎡に対し、出土遺物は比較的多い遺跡であるといえよう。

### b 弥生時代後期の遺物

**S D 12出土遺物(1~11)** 7を除くほぼ全ての個体が上層から出土している。7は手焙形土器で、中層から逆さ向きに出土した。調査時は底部が欠損していたが接合後ほぼ完形となる。覆部外面はナデとハケメがみられる。体部外面は2枚貝を用いて条痕文を施し、突帯を貼付けたのち指でつまみ上げている。底部外面は斜め方向のケズリがみられる。煤などの付着はなく、胎土は在地のものと考えられる。

溝の廃絶時期は甕の口縁部、高坏坏部の形態から弥生時代終末期と考えられ、概ね上村編年VI様式<sup>(1)</sup>期前半に相当し、廻間I式0~1段階に併行する。<sup>(2)</sup>

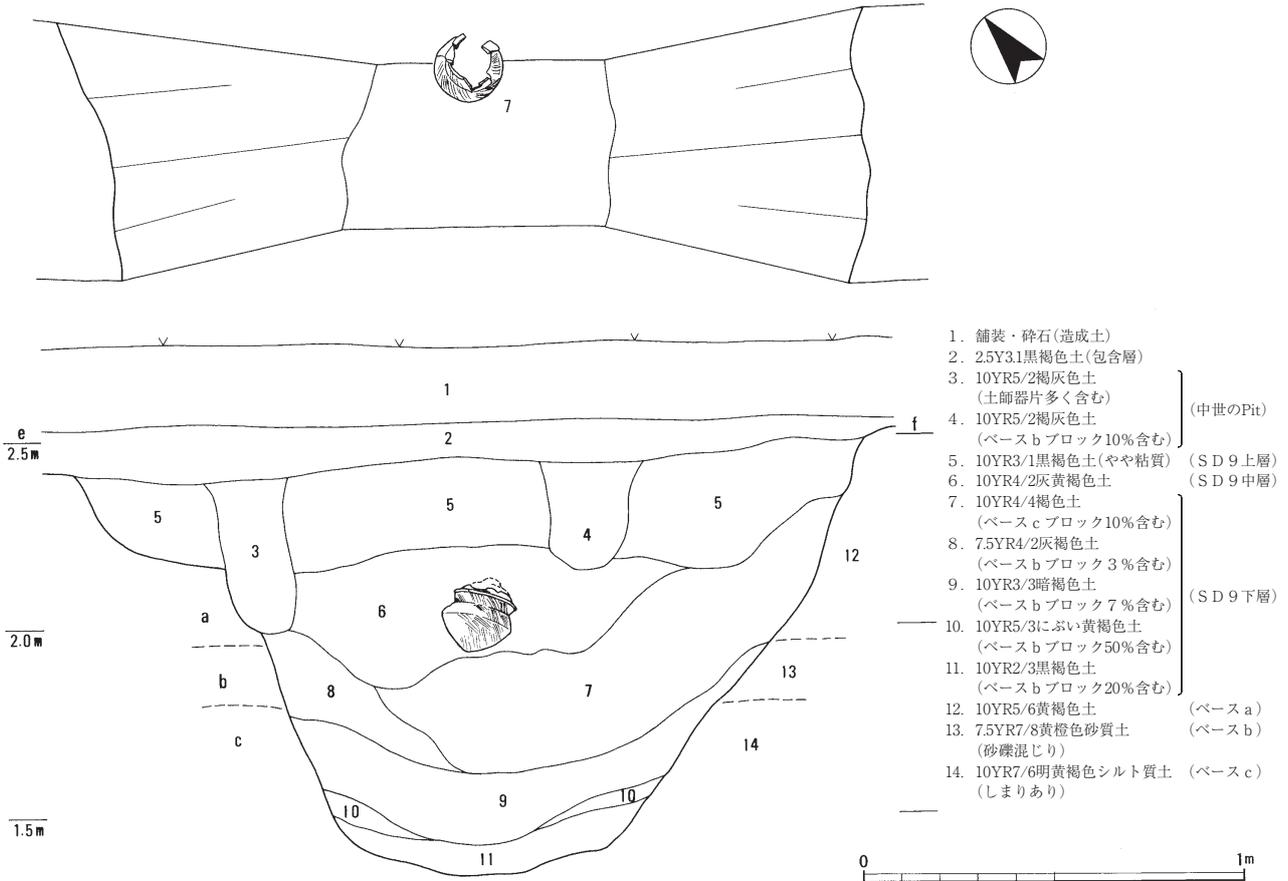
**P i t 9出土遺物(12~13)** 受口甕の口縁部。外面にハケメを施しているが、施文等は認められない。

**その他(14~19)** 中世の遺構に混じり込んだ遺物である。19はほぼ完形の両刃石斧(太型蛤刃石斧)で、刃部を研磨しているが、風化が著しく、不明である。石材は、遺跡周辺の御荷鉾帯で採取可能である緑色岩であろう。弥生時代中期以前に属するの可能性があるが、共伴資料がないため詳細は不明である。<sup>(3)</sup>

(相場)

### c 中世の遺物

西垣外遺跡から出土した中世の遺物は、おおよそ



第Ⅸ-5図 西垣外遺跡SD12平面図・断面図(1:20)

第Ⅸ-1表 西垣外遺跡 遺構一覧表

遺構名	形態	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
Pit1	柱穴	中世後期	0.8~	0.4	0.26	青磁片	
Pit2	柱穴	中世後期	0.72	0.2	0.27	土師器片	根石あり
Pit3	柱穴	中世後期	0.72	0.72	0.3	土師器片	
Pit4	柱穴	弥生後期	0.28	0.29	0.19	弥生土器(甕)	
SD5	柱穴	中世後期	0.8~	1.32	0.32	土師器(皿・鍋・羽釜)	
Pit6	柱穴	中世後期	0.5	0.5	0.34	土師器(皿・鍋)	
Pit7	柱穴	中世後期	0.7	0.4	0.18	土師器・山茶椀	
Pit8	柱穴	中世後期	0.68~	0.5	0.35	土師器(皿)	
SD9	溝	中世後期	0.8~	0.58	0.56	土師器(皿)	
SD10	溝	中世後期	0.8~	0.52	0.65	土師器(鍋・羽釜)、陶器	
SD11	溝	中世後期	0.8~	2.6	0.44	土師器(皿・鍋)・青磁、鉄滓	南で一段下がる
SD12	溝	弥生後期	0.8~	1.9	1.01	弥生土器(壺・甕・高坏・手埴り形土器)	
Pit13	柱穴	古代	2.4	2.4	0.08	土師器片	
Pit14	柱穴	中世後期	2.2	2.2	0.23	土師器片、鉄滓2点	
SD15	溝	中世後期	0.8~	1.9	0.45	土師器(皿・鍋)、陶器(常滑)	
SD16	溝	中世後期	0.8~	1.8	0.34	土師器(鍋・羽釜)、陶器(常滑)	
SD17	溝	中世後期	0.8~	1.2	0.19	土師器(皿・鍋)	
Pit18	柱穴	中世後期	0.4	2.3	0.3	土師器(鍋)	
Pit19	柱穴	中世後期	0.3	0.22	0.07	土師器(皿・鍋)	
Pit20	柱穴	中世か	0.35	0.36	0.43	土師器片	

遺構名	形態	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考
Pit21	柱穴	中世後期	0.18	0.18	0.18	土師器片	
Pit22	柱穴	中世後期	0.28	0.11	0.14	土師器(皿)	
Pit23	柱穴	弥生後期	0.3	0.28	0.31	弥生土器	
Pit24	柱穴	古墳?	0.3	0.22~	0.34	古式土師器片(瓢壺)	
SD25	溝	中世後期	0.6~	7.3~	0.11	土師器(皿・鍋)、青磁、山茶椀、蛤刃石斧	
Pit26	柱穴	中世後期	0.25	0.25	0.22	土師器片	
Pit27	柱穴	中世後期	0.32	0.2~	0.28	土師器片	
Pit28	柱穴	中世後期	0.32	0.3	0.04	土師器片	
Pit29	柱穴	中世後期	0.35	0.3~	0.4	土師器片	
Pit30	柱穴	中世後期	2.8	2.3	0.29	土師器片	
Pit31	柱穴	中世後期	3.6	2.4	0.29	土師器(鍋)	
SK32	土坑	中世後期	1.12	2.1~	0.39	土師器(皿・鍋)	
SK33	土坑	中世後期	1.94	0.8~	0.28	土師器(皿・鍋)、陶器(常滑)	
SK34	土坑	中世後期	1.1	0.7~	0.14	土師器(皿)	
SF35	焼土坑	中世後期	0.8~	1.5~	0.29	土師器(皿・鍋)、陶器(常滑)	焼土あり 南側は攪乱
SK36	土坑	中世後期	1.32	5.3~	0.27	土師器	
SK37	土坑	中世後期	0.8	0.26	0.47	土師器片	SD38上面
SD38	溝	中世後期	0.8~	1.53	0.4	弥生土器片	
SK39	中世墓	中世後期	0.38	0.4	0.34~	土師器片	
Pit40	柱穴	中世後期	0.26	0.2~	2.8	土師器・山茶椀	SD12上面

※遺構番号は、SD・SK・Pitなど、遺物の出土した遺構を全て通し番号としている。

13世紀から16世紀代のものが認められる。なかでも中世後期(15世紀後半～16世紀前半)のものが圧倒的に多い。

**Pit出土遺物(20・21)** 20は青磁碗で龍泉窯系。簡略化された鎬蓮弁文の状況から、14世紀代頃のものと考えられる。21は渥美産陶器碗(山茶碗)で12世紀後葉頃のもの。<sup>(4)</sup>

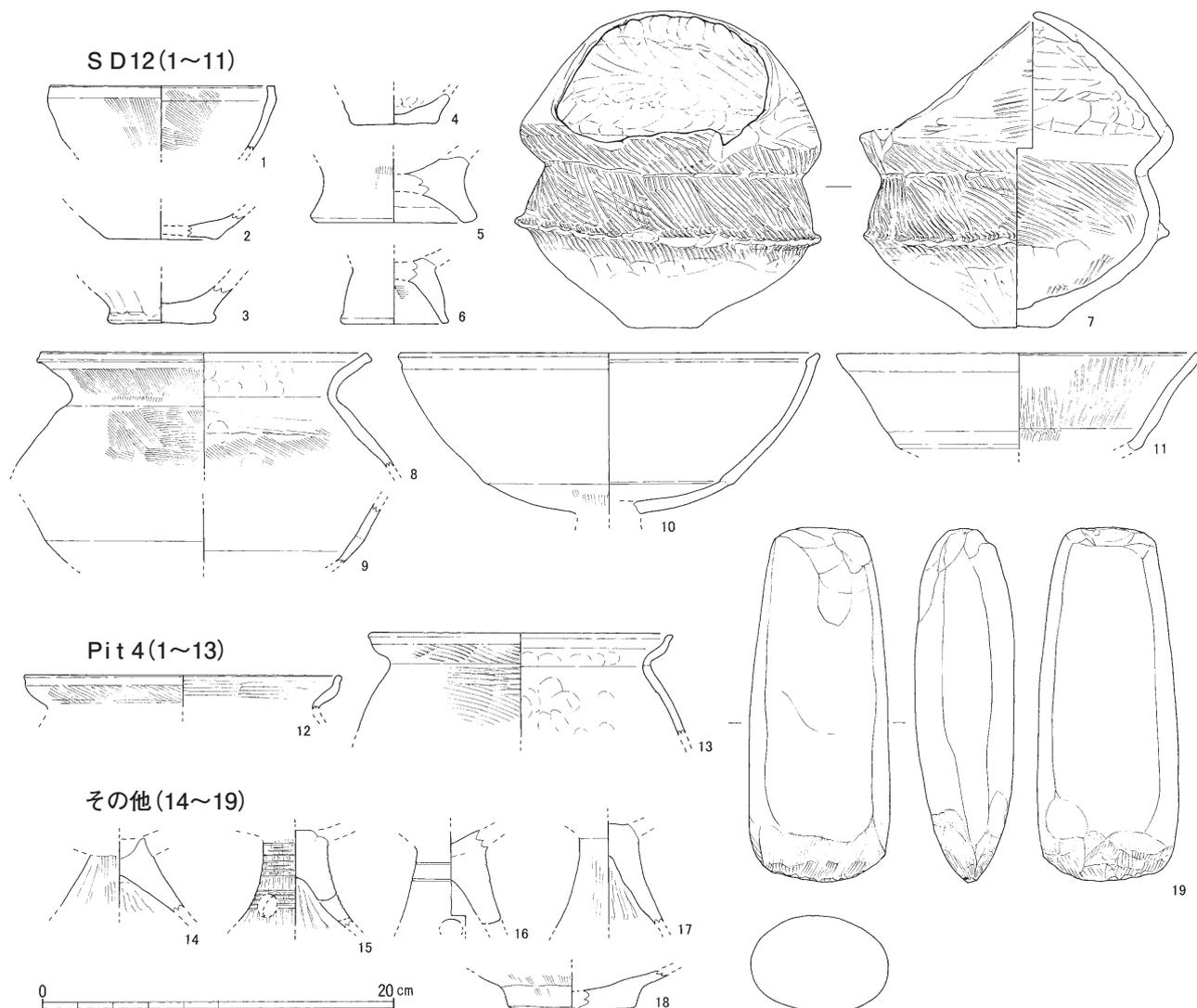
**S D 5 出土遺物(22～27)** 22は南伊勢系のB形態土師器皿。23は陶器平碗で、古瀬戸後Ⅲ期頃のものか。24～26は土師器鍋、27は土師器で姥口形の羽釜である。土師器類は、南伊勢中世Ⅳ a 期の状況を示している。<sup>(5)</sup>

**S D 10 出土遺物(28～34)** 28は南伊勢系のB形態土師器皿。29～31は土師器鍋。32は土師器茶釜蓋と考えられる。33・34は土師器羽釜で、口縁部外面

を外側に折り返すもの。これらの土師器類は、南伊勢中世Ⅳ b 期の状況を示している。

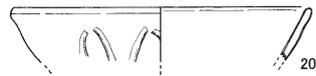
**S D 11 出土遺物(35～52)** 比較的まとまった資料である。35は渥美産陶器碗(山茶碗)で、混入である。36～52は土師器。36・37は南伊勢系B形態の皿で、37の口縁部はヨコナデを示す珍しいもの。38～50は鍋で、38～43は小形、44～50は中形のものである。51は羽釜、52は茶釜形をなす壺である。これらは総じて南伊勢中世Ⅳ b 期に相当する。

**S D 15 出土遺物(53～83)** この遺構資料も比較的まとまっている。53～56は古瀬戸。53は縁釉小皿、54は縁釉中皿、55は平碗で、いずれも古瀬戸後Ⅳ期古に相当する。56は大皿の破片。57は12世紀末頃の渥美産壺の体部片で混入である。58～64は土師器皿。58～60・62は南伊勢B形態、61・63・64はC

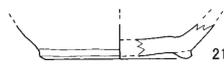


第Ⅷ区-6図 西垣外遺跡出土遺物実測図(1) (1 : 4)

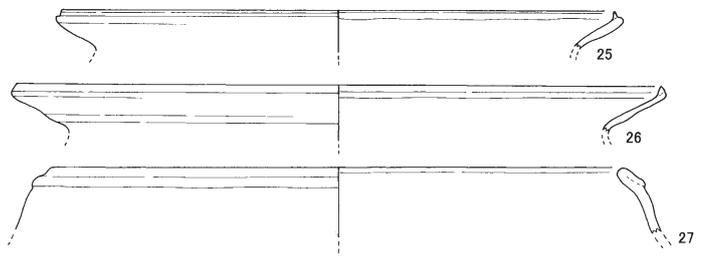
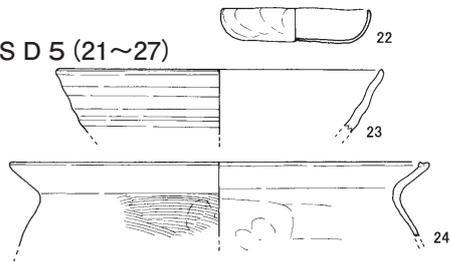
Pit 1 (20)



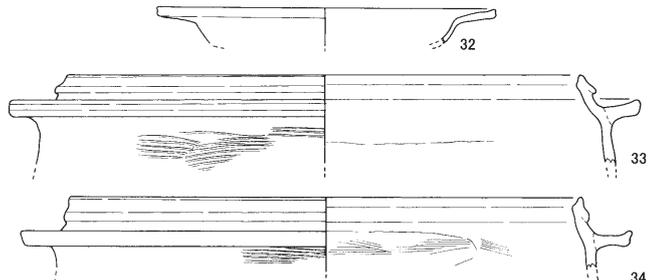
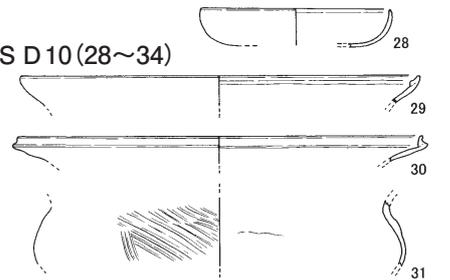
Pit 40(21)



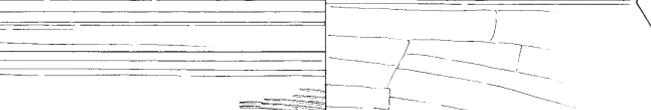
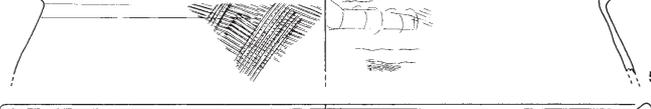
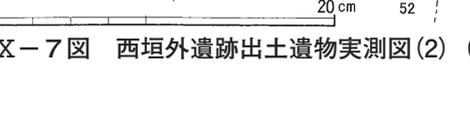
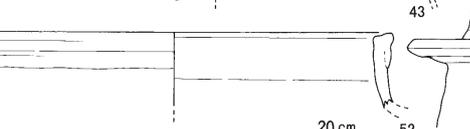
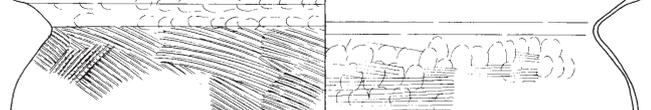
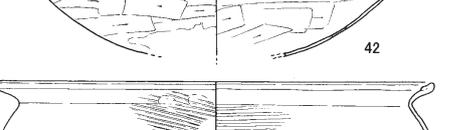
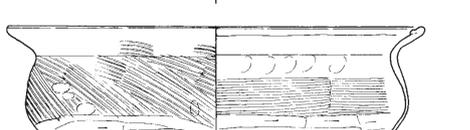
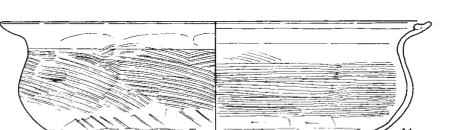
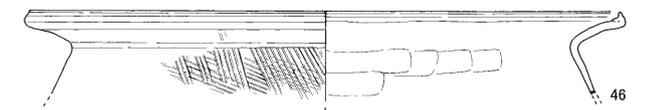
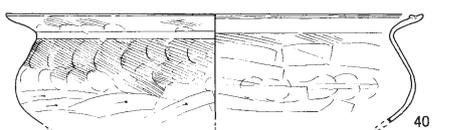
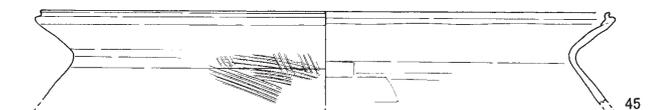
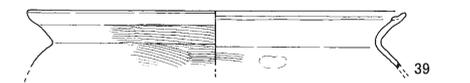
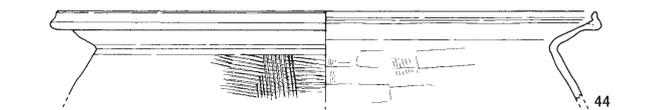
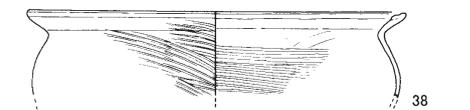
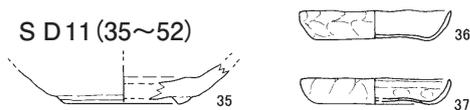
S D 5 (21~27)



S D 10 (28~34)

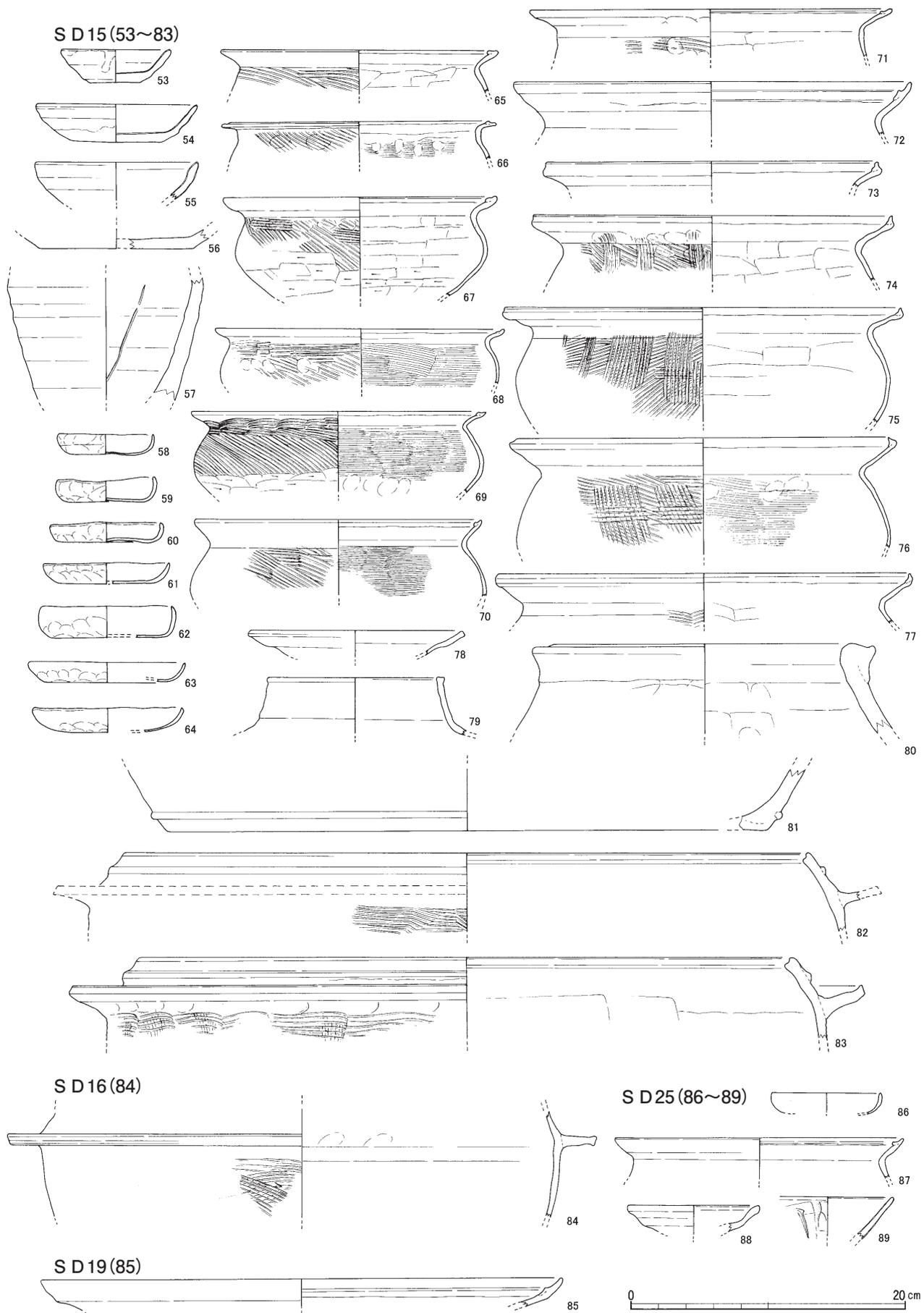


S D 11 (35~52)



0 20 cm

第区-7 西垣外遺跡出土遺物実測図(2) (1:4)



第Ⅷ-8図 西垣外遺跡出土遺物実測図(3) (1:4)

形態である。65～77は土師器鍋。65～70は小形、71から77は中形である。78は土師器茶釜蓋、79は土師器茶釜。80は陶器壺で常滑産である。81は瓦質土器火鉢。82・83は土師器羽釜。これらは総じて南伊勢中世IV a 期に相当する。

**S D 16出土遺物(84)** 土師器羽釜片である。南伊勢中世IV a 期頃のものと考えられる。

**S D 19出土遺物(85)** 土師器鍋片である。南伊勢中世III b 期のものである。

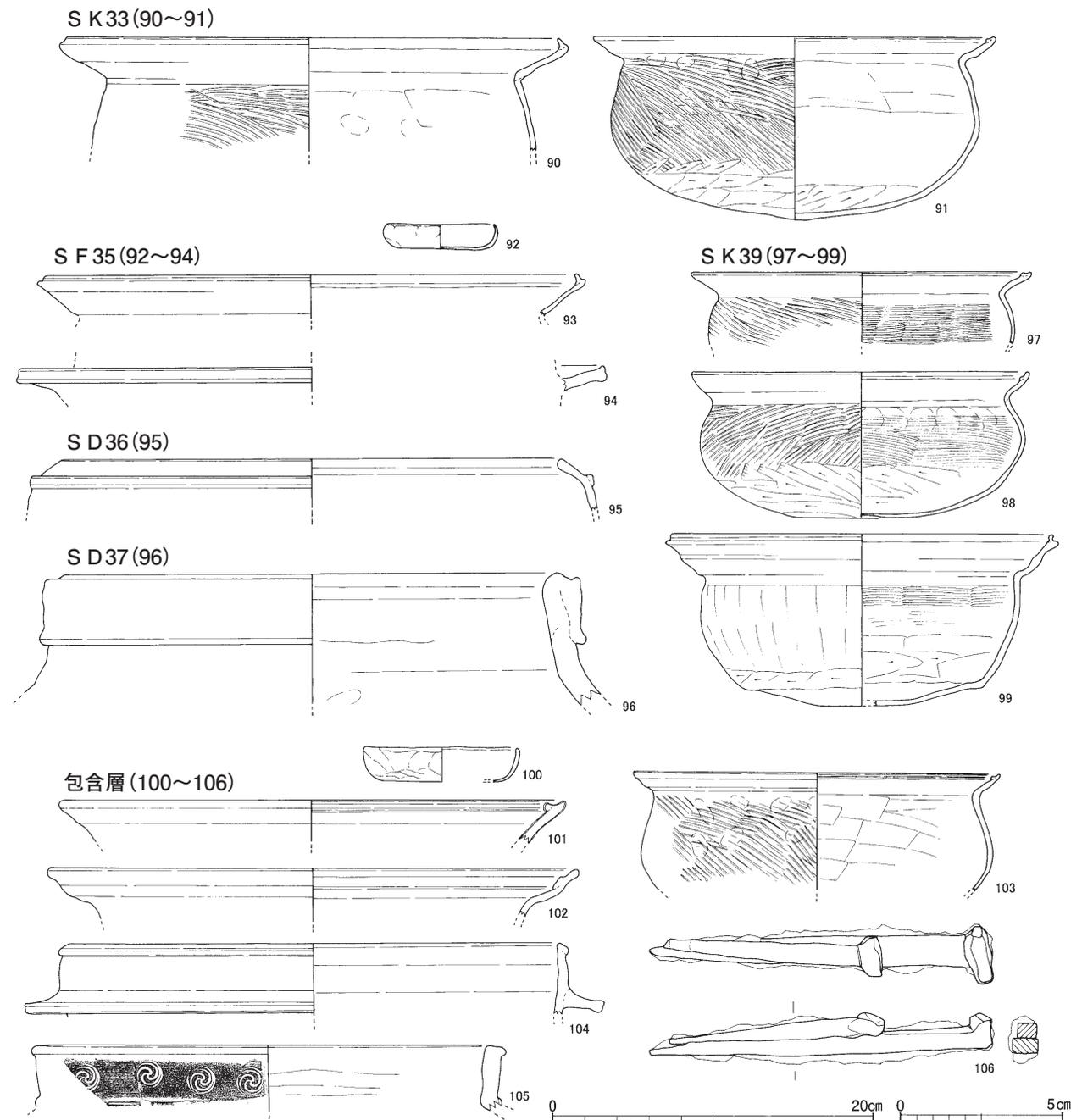
**S D 25出土遺物(86～89)** 出土遺物は少ない。86

は南伊勢系B形態皿、87は土師器鍋。88は山茶椀小皿である。89は青磁碗で混入と考えられる。これらは概ね南伊勢中世IV a 期のものと考えられる。

**S K 33出土遺物(90・91)** 土師器鍋がある。南伊勢中世IV a 期のものである。

**S F 35出土遺物(92～94)** 土師器類で、南伊勢系B形態皿(92)・鍋(93)・羽釜(94)がある。南伊勢中世IV b 期のものと考えられる。

**S D 36・37出土遺物(95・96)** S D 36からは土師器姥口羽釜(95)、S D 37からは常滑産陶器甕(96)が出



第区-9図 西垣外遺跡出土遺物実測図(4) (106は1:2、その他1:4)

第区-2表 西垣外遺跡出土遺物観察表(1)

報告	実測 番号	器種・質等	遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	02-02	弥生土器 壺	SD12 上層	(口)12.8	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ→ハケメ	やや密	橙5YR6/6	口縁部 1/12	
2	02-04	弥生土器 壺	SD12	(底)6.1	外:ナデ 内:ナデ	密	外:にぶい橙5YR6/4 内:褐灰10YR5/1	底部 2/12	
3	02-06	弥生土器 壺	SD12	(底)6.1	外:ナデ 内:ナデ	密	外:橙7.5YR7/6(黒斑あり) 内:にぶい黄橙YR7/4	底部 8/12	
4	02-07	弥生土器 壺	SD12	(底)5.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙5YR6/6	底部 10/12	底部外面に植物繊維痕がみられる
5	02-05	弥生土器 台付甕	SD12	(脚台)9.4	外:ハケメ 内:ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	脚台部 7/12	
6	02-09	弥生土器 台付甕	SD12 上層	(脚底)5.8	外:ナデ 内:ナデ→ハケメ	粗	橙7.5YR7/6	台部 1/12	
7	03-01	弥生土器 手焙形土器	SD12	(底)4.1 (高)18.0	外:ナデ→条痕文・ハケメ→ケズリ→突帯貼付 内:ハケメ→板ナデ・ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	ほぼ完形	外面調整は、覆部はハケメ、体部は2枚貝の条痕文、底部はケズリ
8	01-02	弥生土器 甕	SD12 上層	(口)19.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→オサエ・ナデ	やや粗	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 6/12	
9	01-06	弥生土器 高坏	SD12 上層	-	外:摩滅 内:摩滅	やや粗	橙5YR6/6	坏部 2/12	
10	01-01	弥生土器 高坏	SD12	(口)23.9	外:摩滅(坏部下半一部タテハケ) 内:摩滅	やや粗	明褐7.5YR5/6	口縁部 3/12	
11	01-05	弥生土器 高坏	SD12 上層	(口)20.6	外:摩滅 内:ナデ→タテミガキ	粗	橙5YR6/6	口縁部 1/12以下	
12	01-04	弥生土器 甕	Pit4	(口)18.0	外:ハケメ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや粗	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12	
13	01-03	弥生土器 甕	Pit4	(口)17.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ	粗	明褐7.5YR5/6(外面の一部5Y3/1ナブ黒)	口縁部 2/12	
14	05-04	弥生土器 高坏(脚部)	SD15	(脚柱)3.5	外:摩滅 内:シボリメ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	脚柱部のみ	全体的に摩耗して調整不明瞭
15	04-03	弥生土器 高坏(脚部)	SD15	(脚柱)3.7	外:ミガキ→飾描直線文 内:シボリメ	密	橙5YR7/6	脚柱部のみ	3方向の透孔
16	02-03	弥生土器 高坏	SK33	(脚柱)4.0	外:飾描直線文? 内:ナデ	やや密	明赤褐5YR5/6	脚柱部 上半	透孔1カ所残存
17	05-05	弥生土器 高坏(脚部)	SD5	(脚柱)3.3	外:ハケメ? 内:シボリメ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	脚柱部のみ	全体的に摩耗して調整不明瞭
18	05-02	弥生土器 (壺底部片)	SD15	(底)7.2	外:ナデ→ハケメ 内:ナデ	粗	外:黄灰2.5Y5/1 内:灰N5/	底部 5/12	
19	23-01	石製品 両刀石斧	SD25	(長)20.2 (幅)8.0 (高)5.6	刃部に線状痕あり	-		完形	重量:1.38kg 風化著しい
20	08-02	青磁 椀	Pit1	(口)15.9	外:回転ナデ→鎗蓮弁文→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰白7.5Y7/1 釉:明緑灰10GY7/1	口縁部 1/12	龍泉窯系。簡略化された鎗蓮弁の状況から14cか。
21	11-01	陶器 (山茶椀)	Pit40	(底)7.6	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ	やや密	灰黄2.5Y7/2	底部 1/12未満	渥美産 12c後葉
22	11-03	土師器 小皿	SD5	(口)7.6 (高)1.7	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	南伊勢系B形態
23	11-06	陶器 (古瀬戸) 平椀	SD5	(口)17.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	浅黄5Y7/3	口縁部 1/12未満	古瀬戸後Ⅲ期
24	11-05	土師器 鍋	SD5	(口)22.0	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:橙7.5YR6/6	口縁部 1/12未満	
25	11-04	土師器 鍋	SD5	(口)29.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	外:にぶい褐7.5YR6/3 内:橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	外面全体的に煤付着
26	12-03	土師器 鍋	SD5	(口)34.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	外面全体的に煤付着
27	12-04	土師器 羽釜	SD5	(口)30.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	南伊勢中世IVa期
28	07-05	土師器 皿	SK10	(口)10.0 (高)2.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系B形態
29	06-04	土師器 鍋	SK10	(口)20.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	明黄褐10YR7/6	口縁部 3/12	南伊勢中世IV b期
30	06-05	土師器 鍋	SK10	(口)21.4	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR4/2 内:にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着
31	07-03	土師器 鍋	SK10	-	外:ハケメ 内:ナデ・ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	体部片のみ	南伊勢中世IV b期
32	07-02	土師器 蓋	SK10	(口)17.8	外:ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	明黄褐10YR7/6	口縁部 1/12	南伊勢中世IV b期 茶釜の蓋か
33	06-03	土師器 羽釜	SK10	(口)27.0	外:ハケメ→鈔貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12以下	南伊勢中世IV b期 外面、鈔より下に煤付着
34	06-02	土師器 羽釜	SK10	(口)27.0	外:ハケメ→鈔貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	明黄褐10YR7/6	口縁部 2/12	南伊勢中世IV b期 外面、鈔より下に煤付着
35	18-03	陶器 (山茶椀)	SD11	(底)7.0	外:回転ナデ→底部糸切り・高台貼付け後ナデ 内:回転ナデ→研磨	やや密	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	渥美産 混入
36	18-01	土師器 皿	SD11	(口)8.0 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	橙7.5YR7/6	口縁部 10/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系B形態
37	18-02	土師器 皿	SD11	(口)7.8 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系B形態
38	16-02	土師器 鍋	SD11	(口)20.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 1.5/12	外面の一部に煤付着
39	14-04	土師器 鍋	SD11	(口)20.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ・オサエ→口縁部ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着
40	13-02	土師器 鍋	SD11	(口)22.0	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 6/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着
41	18-06	土師器 鍋	SD15	(口)22.8	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着

第Ⅸ-3表 西垣外遺跡出土遺物観察表(2)

報告 実測 番号	器種・質等	遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項	
42	15-01 土師器 銅	SD11	(口)22.0	外:オサエ→ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ→板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4、浅黄橙10YR8/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 体部下半に煤付着	
43	14-03 土師器 銅	SD11	(口)23.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12強	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
44	14-01 土師器 銅	SD11	(口)28.5	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ハケメ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
45	18-04 土師器 銅	SD11	(口)30.6	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期	
46	13-01 土師器 銅	SD11	(口)31.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR4/2 内:にぶい黄褐10YR5/3、 にぶい黄橙10YR6/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
47	14-02 土師器 銅	SD11	(口)33.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
48	14-01 土師器 銅	SD11	(口)34.6	外:ヨコナデ 内:オサエ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
49	15-02 土師器 銅	SD11	(口)33.2	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期	
50	15-03 土師器 銅	SD11	(口)34.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
51	13-03 土師器 羽釜	SD11	(口)34.0 (鏑)42.6	外:ハケメ→鏑貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい褐7.5YR6/3、灰褐7.5YR5/2	口縁部1/12	南伊勢中世IV b期	
52	18-05 土師器 壺	SD11	(口)22.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部1/12	南伊勢中世IV b期	
53	21-08 緑釉陶器 (古瀬戸)	小皿	SD15 (口)8.0 (高)2.4 (底)3.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ→施釉	密	にぶい黄橙10YR8/2 釉色:オリーブ黄5Y6/4	ほぼ 完形	古瀬戸後IV期古。灰釉は内面全面。	
54	21-07 緑釉陶器 (古瀬戸)	小皿	SD15 (口)11.8 (高)2.8 (底)6.5	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	灰白2.5Y7/1 釉色:オリーブ黄5Y6/3	ほぼ 完形	古瀬戸後IV期古。灰釉は内面全面・外面 上半部(ハケ塗り)。	
55	21-09 緑釉陶器 (古瀬戸)	平碗	SD15 (口)12.0	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	にぶい黄橙10YR7/2 釉色:灰オリーブ5Y6/2	口縁部2/12	古瀬戸後IV期古。灰釉は内面・外面とも に全面に施釉。	
56	21-05 緑釉陶器 (古瀬戸)	大皿	SD15 (底)11.0	外:回転ナデ→底部条切り→施釉 内:回転ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/3	底部2/12	古瀬戸後IV期古。緑釉大皿。	
57	21-06 陶器 壺	SD15	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	灰白2.5Y7/1	体部片 のみ	湿美産12c~13c初頭 内面下方から上方に鋭い工具痕あり	
58	22-08 土師器 小皿	SD15	(口)7.0 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/3	口縁部7/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系B形態	
59	22-07 土師器 小皿	SD15	(口)7.4 (高)1.4~1.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部4/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系B形態	
60	22-06 土師器 小皿	SD15	(口)8.2 (高)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部3/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系B形態	
61	22-03 土師器 小皿	SD15	(口)9.2 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系C形態	
62	22-04 土師器 小皿	SD15 下層	(口)9.5 (高)2.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部3/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系B形態	
63	22-09 土師器 小皿	SD15	(口)11.4 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系C形態	
64	22-05 土師器 小皿	SD15	(口)11.0 (高)1.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 南伊勢系C形態	
65	17-03 土師器 銅	SD15	(口)20.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
66	16-03 土師器 銅	SD15	(口)20.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→オサエ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期	
67	17-01 土師器 銅	SD15	(口)20.0	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部4/12	南伊勢中世IV b期	
68	17-02 土師器 銅	SD15	(口)21.0	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	外:灰黄褐10YR6/2 内:橙7.5YR7/6	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
69	17-04 土師器 銅	SD15	(口)21.4	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→オサエ→口縁部ヨコナデ	やや密	明黄褐10YR7/6	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
70	20-02 土師器 銅	SD15	(口)20.9	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:橙7.5YR7/6	口縁部1/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
71	19-02 土師器 銅	SD15	(口)26.4	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや粗	外:褐灰10YR4/1 内:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
72	16-04 土師器 銅	SD15	(口)29.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	口縁部1/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
73	17-05 土師器 銅	SD15	(口)24.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
74	19-01 土師器 銅	SD15	(口)26.4	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部3/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
75	19-03 土師器 銅	SD15	(口)29.2	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面全体的に煤付着	
76	20-01 土師器 銅	SD15	(口)28.2	外:ハケメ→オサエ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→オサエ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい橙7.5YR7/3 内:にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面一部に煤付着	
77	20-03 土師器 銅	SD15	(口)30.4	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:黒褐10YR3/1 内:にぶい褐7.5YR6/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期	
78	22-02 土師器 蓋	SD15 下層	(口)15.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期	
79	21-04 土師器 茶釜	SD15	(口)13.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙7.5YR7/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部2/12	南伊勢中世IV b期 外面の一部に煤付着	
80	22-01 陶器 (常滑)	大甕	SD15	(口)25.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ→オサエ・ナデ	やや粗	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部1/12	
81	21-03 瓦質土器 火鉢	SD15	(底)43.6	外:ナデ→突帯貼付 内:ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	底部 1/12以下		

第区-4表 西垣外遺跡出土遺物観察表(3)

報告	実測 番号	器種・質等	遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項	
82	21-02	土師器 羽釜	SD15	(口)49.6	外:ヨコナデ→鑄貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12以下	外面、鑄より下に煤付着	
83	21-01	土師器 羽釜	SD15	(口)47.4 (鑄)55.8	外:ヨコナデ→鑄貼付後ナデ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12以下		
84	09-03	土師器 羽釜	SD16	(鑄)38.0	外:ナデ→ハケメ→鑄貼付後ナデ 内:ナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	鑄部 1/12	南伊勢中世IV a 期	
85	20-04	土師器 鍋	SD19	(口)38.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	南伊勢中世IV b 期 外面全体的に煤付着	
86	07-06	土師器 皿	Pit22	(口)8.0	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12	南伊勢中世IV a 期 南伊勢系B 形態	
87	07-01	土師器 鍋	SD25	(口)21.0	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12	南伊勢中世IV a 期 外面全体的に煤付着	
88	07-07	陶器 (山茶碗)	皿	SD25	(口)9.6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	黄灰2.5Y6/1	口縁部 1/12	知多産
89	08-01	青磁 椀	SD25	-	外:回転ナデ→籾蓮弁文→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰黄2.5Y7/2 釉:灰白-ブ 5Y5/3	小片	混入	
90	10-02	土師器 鍋	SK33	(口)31.0	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄褐10YR5/3	口縁部 3/12強	南伊勢中世IV a 期	
91	10-01	土師器 鍋	SK33	(口)25.0 (高)11.4	外:オサエ→ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	ほぼ 完形	南伊勢中世IV a 期。外面全体的に煤付着。 底部内面に炭化物付着。	
92	11-02	土師器 小皿	SF35	(口)6.8 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 3/12	南伊勢中世IV b 期	
93	12-01	土師器 鍋	SF35	(口)33.0	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/12	南伊勢中世IV b 期	
94	12-02	土師器 羽釜	SF35	(口)36.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	鑄部 1/12強	南伊勢中世IV b 期 外面全体的に煤付着	
95	07-04	土師器 羽釜	SK36	(口)31.2	外:ヨコナデ 内:板ナデ	密	外:淡黄2.5Y8/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12以下	南伊勢中世III b 期	
96	06-01	陶器 (常滑)	甕	SK37	(口)32.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ・オサエ	密	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:橙5YR6/6	口縁部 1/12以下	
97	05-01	土師器 鍋	SD39	(口)21.2	外:ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 4/12	南伊勢中世IV a 期	
98	04-01	土師器 鍋	SK39	(口)21.0 (高)8.1	外:ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:オサエ→ハケメ→ケズリ→口縁部ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ 完形	南伊勢中世IV a 期	
99	04-02	土師器 鍋	SK39	(口)24.4 (高)10.7	外:タテ方向板ナデ→ケズリ→口縁部ヨコナデ 内:ハケメ→板ナデ→口縁部ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ 完形	南伊勢中世IV a 期。外面全体的に煤付着。 底部内面に炭化物付着。	
100	08-04	土師器 皿	包含層	(口)9.6 (高)2.1	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	浅黄2.5Y7/3	口縁部 2/12		
101	08-07	陶器 (古瀬戸)	深皿	包含層	(口)31.4	外:回転ナデ→施釉 内:回転ナデ→施釉	密	素地:灰黄2.5Y6/2 釉:灰黄2.5Y7/2	口縁部 1/12	折縁深皿
102	09-01	土師器 鍋	包含層	(口)33.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12	外面全体的に煤付着	
103	08-06	土師器 鍋	包含層	(口)22.7	外:オサエ→ハケメ→口縁部ヨコナデ 内:板ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:浅黄橙10YR8/4 内:黄橙10YR8/6	口縁部 2/12		
104	09-02	土師器 羽釜	包含層	(口)31.6	外:ヨコナデ→鑄貼付後ナデ 内:ナデ→口縁部ヨコナデ	密	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/12以下	外面全体的に煤付着	
105	08-08	瓦質土器 風炉	包含層	(口)29.4	外:ヨコナデ→ミガキ→スタンプ文 内:板ナデ?	密	黒N2/1	口縁部 2/12	口縁部外面に巴文スタンプ	
106	04-04	金属製品 釘	包含層	(全長)10.7 (全長)7.2	2 個体接着	-	-	完形	1 本目:全長10.7、厚み0.6、幅0.7 2 本目:全長7.2、厚み・幅0.5	

土した。南伊勢中世Ⅲb期頃のものだが、出土量が少ないため、遺構の時期としては示しがたい。

**S K39出土遺物**(97～99) 土師器鍋が3個体ある。97・98は小形、99は直線的な体部を呈するものである。南伊勢中世Ⅳa期頃のものである。

**包含層出土遺物**(100～106) 遺構に伴わないものや、遺構検出中出土で遺構の特定ができない遺物を便宜的に包含層出土遺物として扱う。土師器皿(100)・鍋(102・103)・羽釜(104)のほか、古瀬戸折縁深皿(101)、瓦質土器風炉(105)、鉄釘(106)がある。105の口縁部外面には巴文がスタンプされている。106の鉄釘は、2本が重なっている。(伊藤)

[註]

- (1) 上村安生「伊勢・伊賀地域」(『弥生土器の様式と編年』木耳社、2002年)
- (2) 赤塚次郎「V 考察」(『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、1990年)
- (3) 櫻井拓馬氏のご教示による。
- (4) 伊藤裕偉「南伊勢・志摩の中世土器」(『三重県史』資料編考古2、2008年)
- (5) 藤澤良祐ほか(『愛知県史』別編窯業2 中世・近世瀬戸系、2007年)

## 5 小結

### a 西垣外遺跡の変遷

**旧石器時代から縄文時代草創期** 調査区内に遺構はないが、採集資料としてナイフ形石器2点、木の葉形尖頭器1点、搔器1点、有調整剥片3点、剥片・碎片・焼石などがみついている。<sup>(1)</sup>

**弥生時代** 弥生時代終末期に廃絶したと考えられるSD12が認められ、これは集落縁辺を巡る環濠のような役割を有していたと想定される。条痕文の施された完形の手焙形土器が逆さ向きに出土した。

**古墳時代** 調査区内に遺構は認められないが、ピットから瓢壺が出土した。また、採集資料では古墳時代の台付甕がみられ、弥生時代後期から古墳時代前期まで継続して生活を営んでいたようである。

**古代** 調査区内では遺構・遺物ともに確認されなかった。採集資料として須恵器の甕、灰釉陶器片がみついている。<sup>(2)</sup>

**中世** 中世後期の遺構・遺物はともに濃密で、調査

区の南側で根石を伴う柱穴や中世墓2基を検出した。カマドあるいは鍛造・鑄造に係る施設と考えられる焼土坑は調査区北側で検出した。遺物が多量に見つかった溝は、屋敷を区画するものとみられる。採集資料には陶器類も多くみられる。<sup>(3)</sup>

### b 弥生時代後期の西垣外遺跡

**遺構と遺物** SD12は逆台形状に深く掘られた人工的な溝である。中層から最下層にかけて遺物はほとんど出土せず、上層からのみ出土しているため、掘削時期は不明である。埋没時期は、指標となるS字甕の出土が認められないものの、弥生時代終末期、概ね上村編年Ⅵ様式期前半(廻間Ⅰ式0～1段階)に併行すると考えられる。

逆さ向きに出土した完形の手焙形土器は意図的に投棄された可能性が高く、溝埋没時の祭祀行為が想定される。手焙形土器の形態は、開口部の幅が比較的狭く立ち上がりは斜め方向に延び、中島氏の分類による鉢部形態B類、接合方法の3類にあたる。<sup>(4)</sup> 体部外面に二枚貝による調整がみられる。胎土は在地のものであるが、三重県内の手焙形土器出土例<sup>(5)</sup>をみると条痕文をもつ個体は類例がなく、施文具のみに着目すると伊勢湾を介した三河以東との関わりが想定される。<sup>(6)</sup> また、近江を原産とする手焙形土器は荒いハケメを特徴としていることから、それを模倣する形で条痕を用いた可能性も考えられよう。

**当該期における宮川西岸の集落** ここでは、宮川西岸域における弥生時代後期から古墳時代初頭の集落を概観し、西垣外遺跡の位置付けを行う。<sup>(7)</sup>

弥生時代後期前半(上村編年Ⅴ-1様式期；八王子古宮式併行期)、伊勢市磯町の大藪遺跡から方形周溝墓が3基確認される。<sup>(8)</sup> 隣接する明和町域においては、金剛坂遺跡でこの時期の方形周溝墓群が確認されている。<sup>(9)</sup>

弥生時代後期後半(上村編年Ⅴ-2～5様式期、山中式併行期)の明確な遺構は認められない。ただし、上地町中楽山遺跡からは竪穴住居に伴っていたであろう高坏が出土しており、これは坏部外面に波状文をもつものである。<sup>(10)</sup> 一方、宮川東岸の伊勢市市街地に位置する倭町隠岡遺跡からは、上村編年Ⅴ-3～5様式期の竪穴住居が検出されている。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて集落が

増加する。伊勢市上地町野垣内遺跡では、上村編年Ⅵ-2～3様式期、廻間Ⅰ式3～4段階に併行する方形竪穴住居21棟、方形周溝墓4基が確認される。隣接する中楽山遺跡でも同時期の竪穴住居や方形周溝墓が確認され、マコモ遺跡・小社遺跡とともに沖積低地をのぞむ左岸段丘上の中核的な集落を形成している。<sup>(11)</sup>

また、沿岸部では東大淀町東山遺跡でS字甕B類のほか高坏・壺などが出土している。<sup>(12)</sup> 同じく沿岸部に位置する有滝町高ノ御前遺跡では包含層からS字甕B～C類、柳ヶ坪型壺や器台など古墳時代前期の遺物が出土している。<sup>(13)</sup>

このように、弥生時代後期前半から弥生時代終末期にかけては宮川西岸段丘上に、古墳時代初頭には沿岸部にまとまりをみることができる。西垣外遺跡は沿岸部に位置するが、時期は上村編年の第Ⅵ様式前半にあたることから、東山遺跡・高ノ御前遺跡よりやや古く位置付けられる。

以上のことから宮川西岸域における集落の動向を概観すると、八王子古宮式併行期に大藪遺跡、山中式併行期に野垣外遺跡で点的にみられる出土例が、廻間式併行期になると遺跡数・出土量ともに増加し、これは古墳時代初頭に集落数が増加する全国的な傾向とも合致する。弥生時代終末期の短い期間のみに機能する環濠は小規模な集落に多いとされ<sup>(14)</sup>、西垣外遺跡SD12が埋没した時期はちょうどその過渡期にあたる。今回の調査成果は、宮川流域からやや離れた位置にある当該地に、この時期小さなまとまりがあったことがうかがえる資料となろう。(相場)

### c 中世後期の西垣外遺跡

中世では、15世紀後半から16世紀前半にかけての遺構・遺物が良好に認められた。調査区が狭隘なため、集落の全体像は示し得ないが、区画溝に囲まれた複数の屋敷地と考えられる。

遺構のなかで興味深いのは、焼土坑SF35の存在である。粘土と円礫で固めたと考えられるこの遺構は、ここでの燃焼を目的とした構造物と考えられる。性格としては、カマドか、あるいは鉄滓の存在から鍛造・鑄造に係る可能性が考えられるが、明確にはできない。

遺物としては、SD11・15でまとまった出土が見

られた。特徴としては、土師器鍋や羽釜といった煮沸具が多く、土師器・陶器を含めた供膳形態は少ない。これらは、当地の土器組成を見る上で良好な資料である。(伊藤)

### d 調査のまとめと課題

今回の調査区は遺跡の東端と考えられ、集落の中心からはやや外れた位置にあたる。弥生時代後期のSD1や中世後期の溝群は集落や屋敷を区画する性格を有していると推測されることから、調査区西側には、断続的ではあるが長期間営まれた集落が展開していることが想定されよう。(相場)

[註]

- (1)伊勢市教育委員会編『伊勢市史』(2011年)
- (2)註(1)と同じ
- (3)註(1)と同じ
- (4)小竹森尚子「手焙形土器雑想」(『紀要』3滋賀県文化財保護協会、1985)／中島皆夫「手焙形土器について」(『長岡京古文化論叢』Ⅱ中山修一先生喜寿記念事業会、1992年)／高橋一夫「手焙形土器の研究」(六一書房、1998年)
- (5)岸田早苗「特殊土器」(『三重県史』考古1、2005年)
- (6)愛知県朝日遺跡からは貝殻腹線文をもつ手焙形土器が出土しており、伊勢湾沿岸においては施文具として用いられた事例が認められる。
- (7)土器の様式、時期区分は以下の文献による。なお本稿では、弥生時代後期を山中式併行期とした。弥生時代終末期とは、上村氏の第Ⅵ様式とそれをややくだる範囲、赤塚氏の廻間Ⅱ式段階までを含む。
  - ・赤塚次郎「Ⅴ考察」(『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、1990年)
  - ・上村安生「伊勢・伊賀地域」(『弥生土器の様式と編年』木耳社、2002年)
- (8)三重県教育委員会『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』(1973年)
- (9)三重県教育委員会『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1985年)
- (10)三重県教育委員会『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1973年)
- (11)三重県教育委員会『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1979年)
- (12)註(1)と同じ
- (13)三重県埋蔵文化財センター『高ノ御前遺跡(第2次)発掘調査報告』(2004年)
- (14)石井智大「伊勢湾西岸地域における弥生時代後期集落の様相」(『伊勢湾岸地域の弥生後期社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト、2011年)

## X 伊勢市有滝町 茶臼塚遺跡

### 1 調査経緯と調査区の状況

茶臼塚遺跡は伊勢市有滝町字茶臼塚に所在する。県営かんがい排水事業に伴い、平成23年12月23日から翌24年1月18日にかけて断続的に、28㎡の工事立会を実施した。

今回の調査地は、有滝町集落の中央にある「有滝農村公園」の北側にあたる。道路部分に埋設水路を設置する工事に伴って実施した。調査区は東西方向のトレンチ状で延長約37m、標高は、東端部で約1.2m、西端部で約1.6mである。

工事立会で調査したため、4mの配管長単位をグリッドとして扱ったが、配管の長さが異なる箇所についてもそのまま1グリッドとして扱った。



第X-1図 茶臼塚遺跡周辺地形図

### 2 層位と遺構

**層位** 埋設水路の掘削深度は路面下約170cm内外のため、層位はその間の状況を把握した。地表のベースとなるの黄褐色中砂および褐灰色細砂(第9・10層)で、第9層は標高の低い東側にしか見られない。これらの層のさらに下部には混礫灰色系粗砂が見られる。これらはいずれも海成土砂と考えられ、砂堆(浜堤帯)で構成されている当地の基盤をなしていると思われる。

その上に堆積する第6～8層は、橙～褐色系細砂である。この層からは、全体で約2.2kgの鉄滓が出土した。遺構埋土ないしは包含層と考えられる。上部に堆積する第4層には、炭化物とともに破碎された貝殻が比較的多く含まれていた。これらのことから、第4層付近が生活面となっていたものと考えられる。

**遺構** 調査区を縦断するかたちで旧「宮川用水」配管時の攪乱が及んでいるため、確認できた遺構は極めて乏しい。しかし、a3・4グリッド第6・8層中からは2.2kgにも及ぶ鉄滓が出土した。調査区が狭いため明確にはできないが、6・8層は全体として何らかの遺構と考えるのが適切であろう。

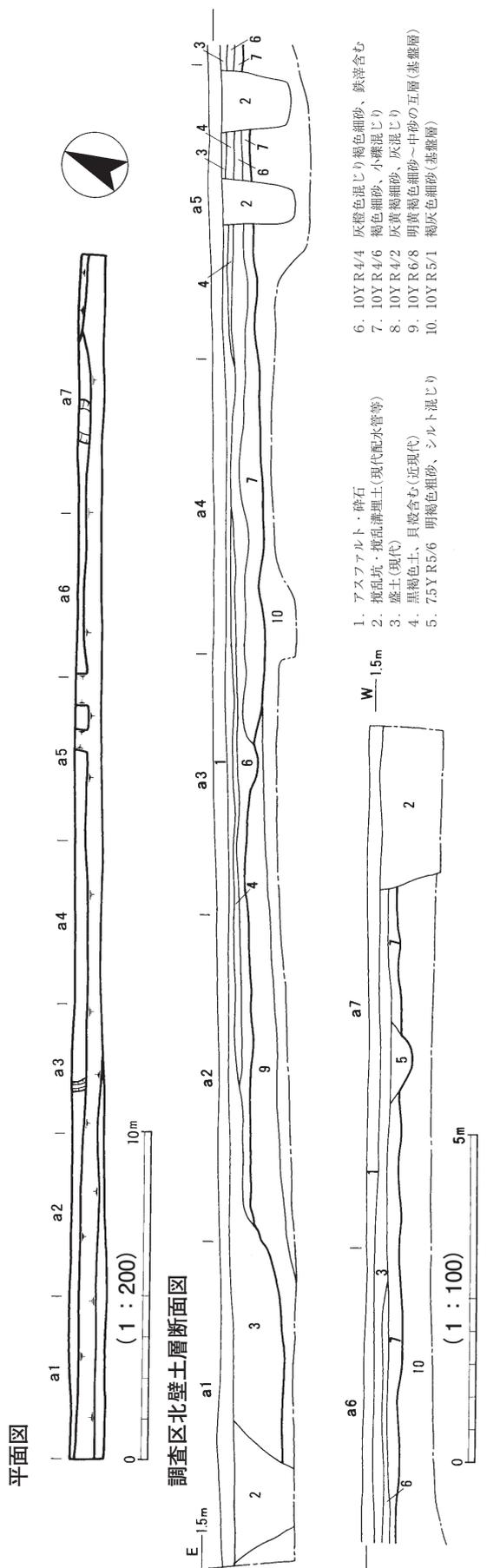
また、調査区西部では土坑状の遺構があった。埋土に特別な状況は見られない。

これらは、出土遺物の状況から見て、12世紀代から16世紀頃に及んでいると考えられよう。

### 3 出土遺物

調査区が狭隘であったことと、中央を縦断する「旧宮川用水」のため、出土遺物は極めて少ないが、鉄滓を大量に出土したことは特筆される。また、土器類は少量ながら、12世紀から16世紀にかけてのものが見られる。

1は土師器小皿で、12世紀代のもの。2は陶器壺で、肩部にヘラ描沈線がめぐる。13世紀代の常滑(知多半島)産のものである。3は土師器鍋で、13世紀中頃のものであろう。4は陶器播鉢で、瀬戸産のもの。外面には錆釉が見られ、大窯期、16世紀後葉ころの



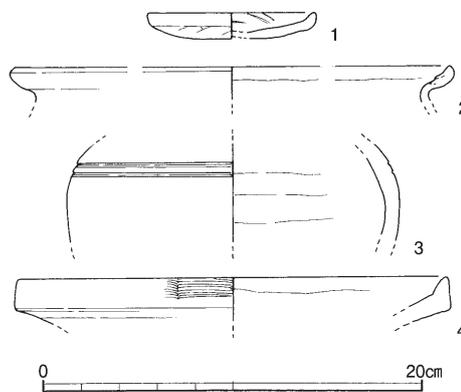
ものである。

#### 4 小結

今回の調査では、中世を中心とした鉄滓の大量出土が最も特筆される。近隣に鍛造生産を中心とした金属製品生産遺構が広がっていると推察できる。

また、今回の調査区内は旧宮川用水配管に伴う攪乱により大きく破損していたが、調査区の壁寄りでは比較的良好な土層断面を見ることができた。つまり、今回の調査地に隣接したところに、比較的残りがよい状態で遺跡が広がっていると考えられる。

中世の有滝地区は、海を利用した水運が盛んであったと考えられ、15世紀後葉には海上関も設置されている(『氏経卿引付』『三重県史』資料編中世2)。今回の調査で確認できた金属器生産についても、海上交通、具体的には船舶に用いる釘などの製造に関する可能性も考えてよいであろう。(伊藤)





工事立会調査区全景（東から）



工事立会調査区SD6（北東から）



第1次調査区全景（南東から）

写真図版Ⅲ-2

寺田遺跡  
遺構(2)



第1次調査区東半(東から)



第2次調査区(幹線)全景(東から)



第2次(幹線)調査区全景(西から)



第2次(幹線)調査区S D58 および柱穴検出状況(北西から)



第2次(支線)調査区全景(北から)



第2次(支線)調査区全景(南から)



第2次(支線)調査区柱穴群(北西から)



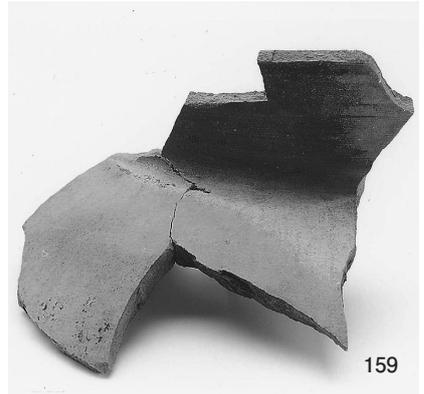
第2次(支線)調査区柱穴群(南西から)



5



53



159



15



55



160



16



57



84



162



17



118



18



125



165



26



127



34



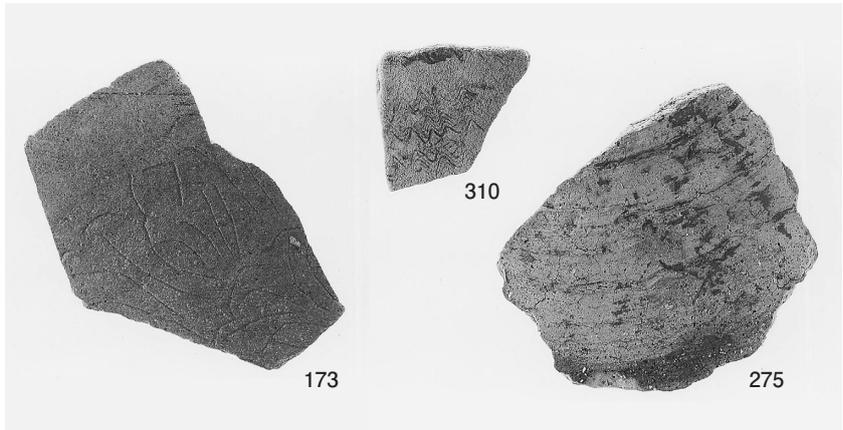
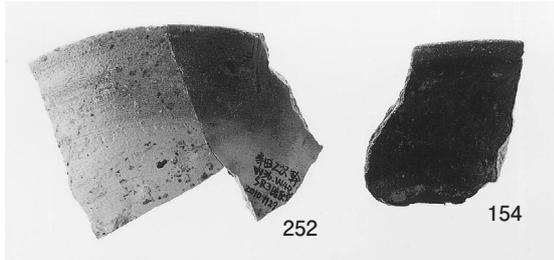
149



170

写真図版Ⅲ-6

寺田遺跡  
遺物(2)





塚田古墳群 遺構(1) 塚田1号墳・2号墳

調査区南部全景・塚田1号墳(北から)



塚田2号墳(北から)

写真図版Ⅳ-2

塚田古墳群(2)・田丸道遺跡(1)

遺構

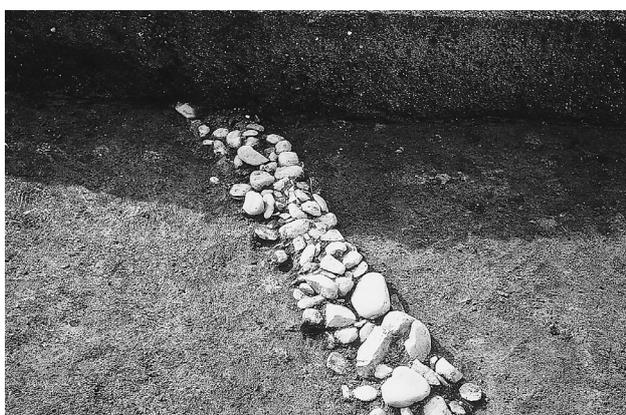
塚田古墳群・S R 15



2号墳周溝(S D 3) (東から)



2号墳周溝(S D 5) (東から)



S D 1 (西から)



S D 15 (北から)



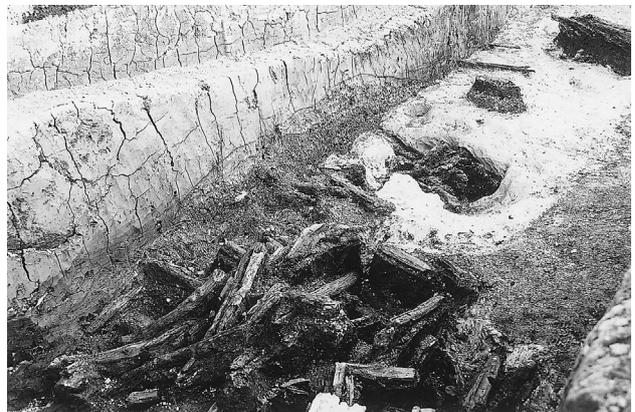
堰1上部(南東から)



堰1 筵出土状況 (南から)



堰1 上部 (南から)



堰1 と南岸テラス (北西から)



木製品出土状況



木製品出土状況

田丸道遺跡  
遺構(3)  
SR15堰1最下部



堰1最下部(南から)



板状杭検出状況(西から)



堰1最下部(北西から)



木製品出土状況(北から)



堰1・堰2・南岸テラス(北から)



堰2 (北から)



堰2 蜜柑割杭出土状況 (南から)



堰2 杭出土状況 (南から)



堰2 蜜柑割杭杭出土状況 (北から)



堰3 (北から)

写真図版Ⅳ-6

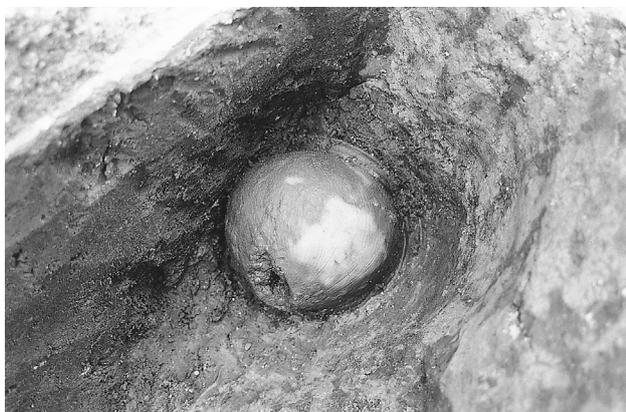
田丸道遺跡  
遺構(5)  
調査区北部



調査区北部全景 (北から)



S H40・S B46 (北から)



N152 Pit 1 (南から)



N156 S K34 (南から)



N156 Pit 1 (北から)



N176 Pit 8 (西から)



15



28



34



53



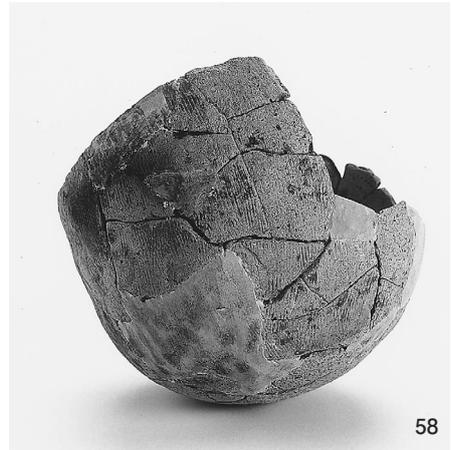
57



60



61



58



67



68



82



83



66



85



90



91



94



98



95



100

写真図版Ⅳ-8

田丸道遺跡  
遺物(2)





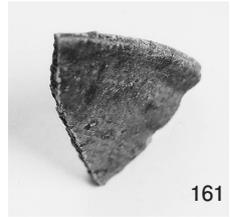
158



159



156



161



177



184



178



193



211



199



195



202



220



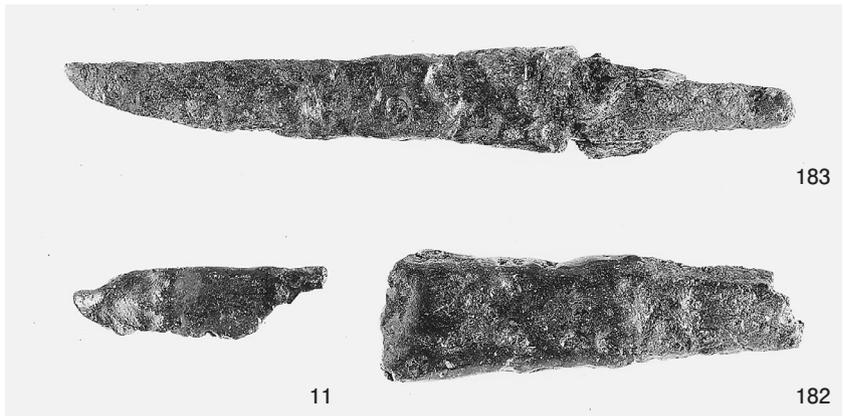
227



149



12



183



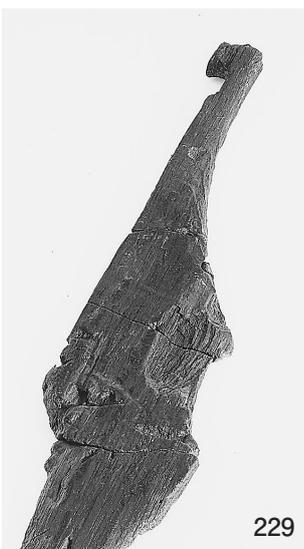
11



182

写真図版Ⅳ-10

田丸道遺跡  
遺物(4)





239



240



241



242

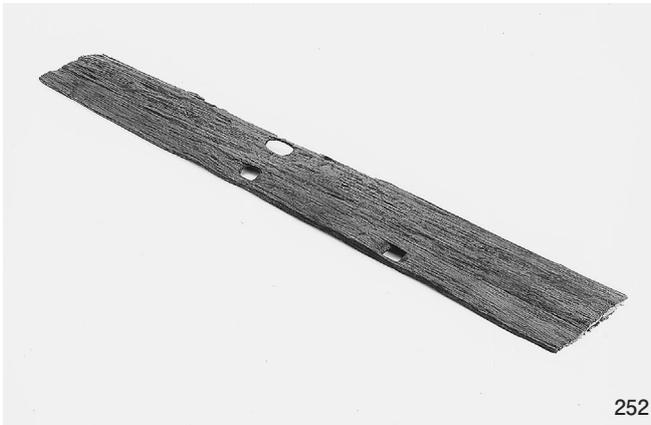
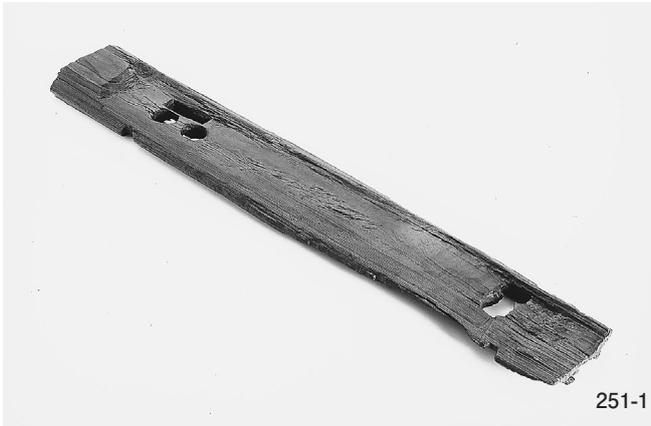
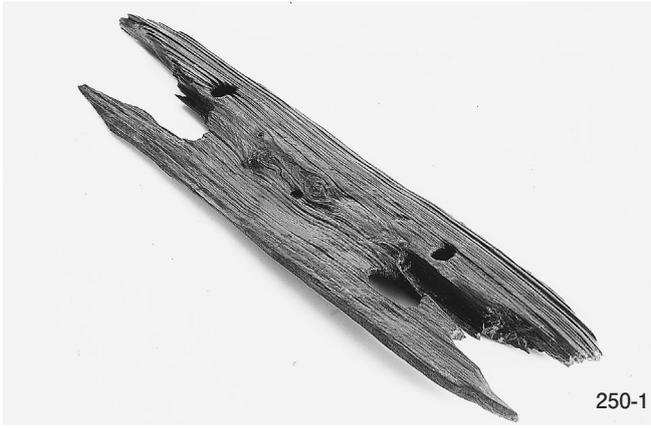


243

写真図版Ⅳ-12

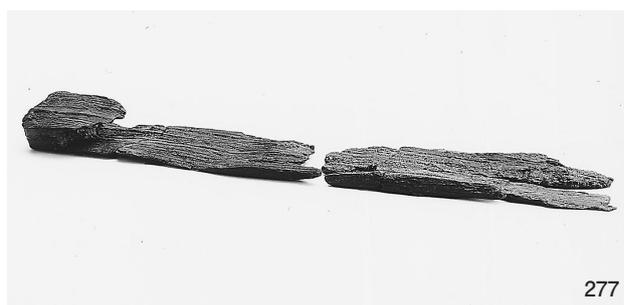
田丸道遺跡  
遺物(6)





写真図版Ⅳ-14

田丸道遺跡  
遺物(8)

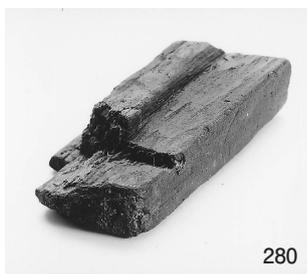




275



276



280



281



282



284



283



285



292



293



295



294



297



303



304



307

写真図版Ⅳ-16

田丸道遺跡  
遺物(10)

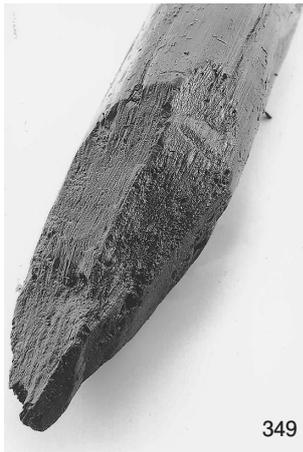




351



347



349



350



352



354



356



359



360



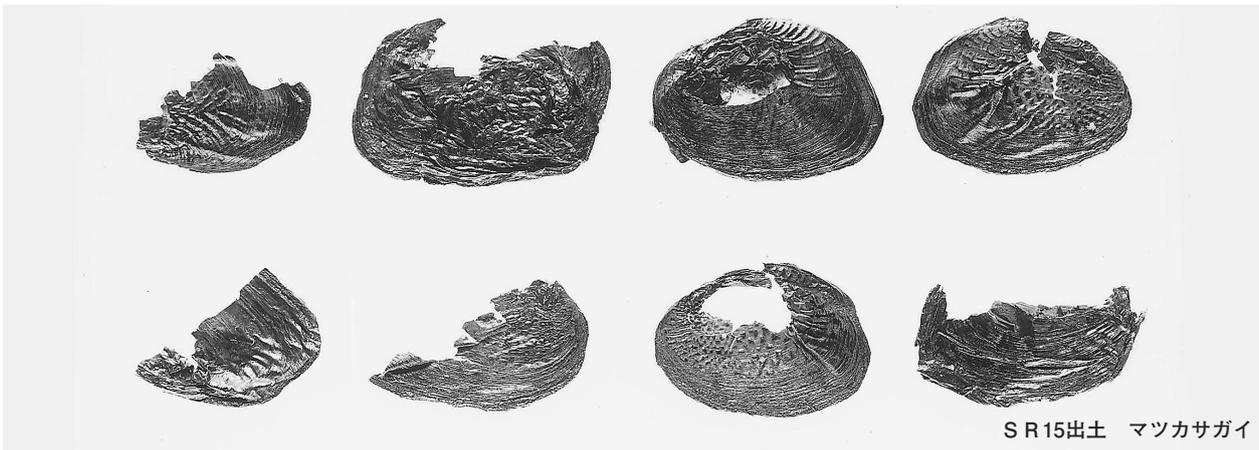
361



362



363



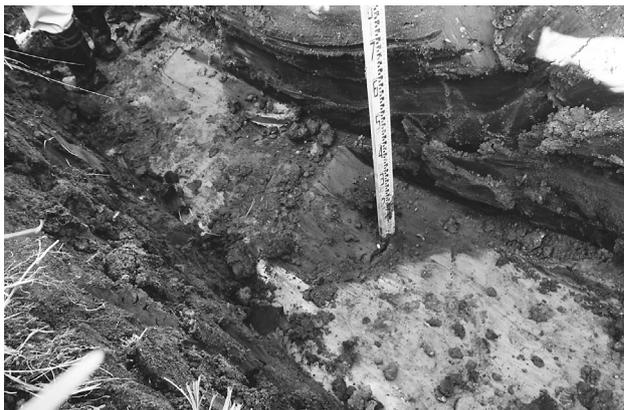
SR15出土 マツカサガイ

写真図版V-1

世古里中遺跡  
遺構



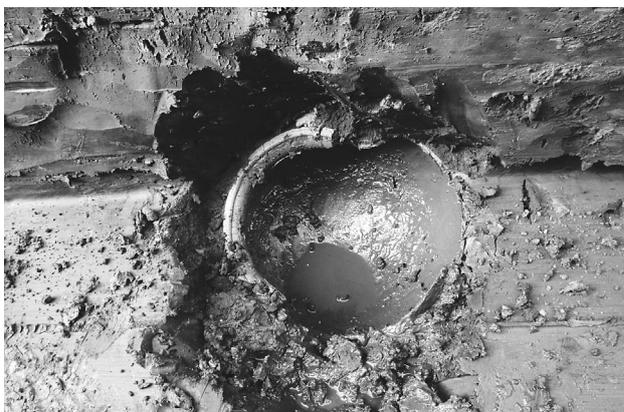
調査風景



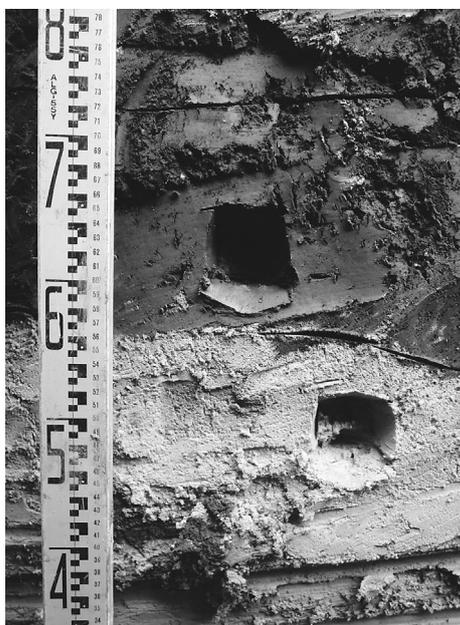
調査区西部 土坑（南から）



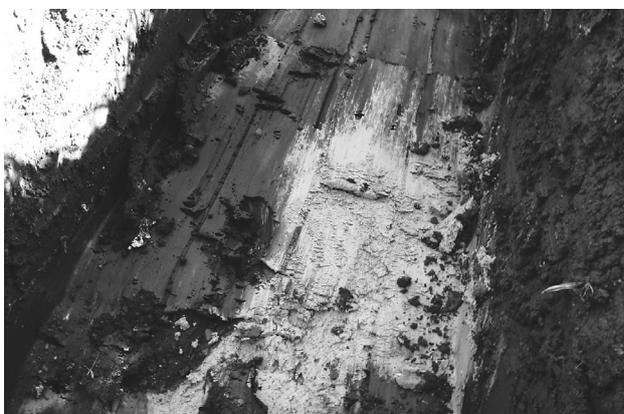
調査区西部 遺物出土状況（南西から）



調査区西部 遺物出土状況（南から）



土壌サンプル採取地点



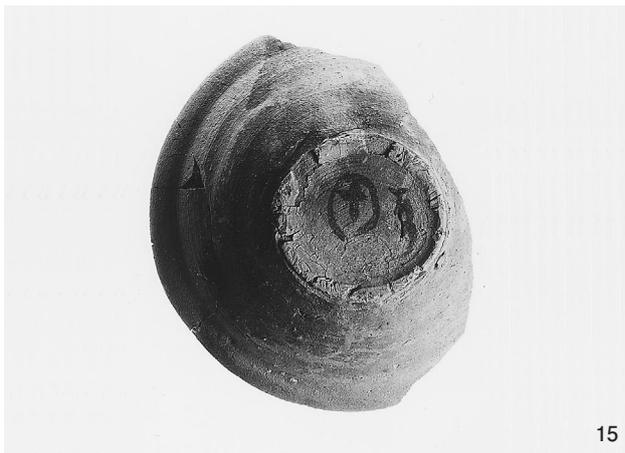
調査区中央部 土坑（西から）



調査区東部 土坑（南西から）



3



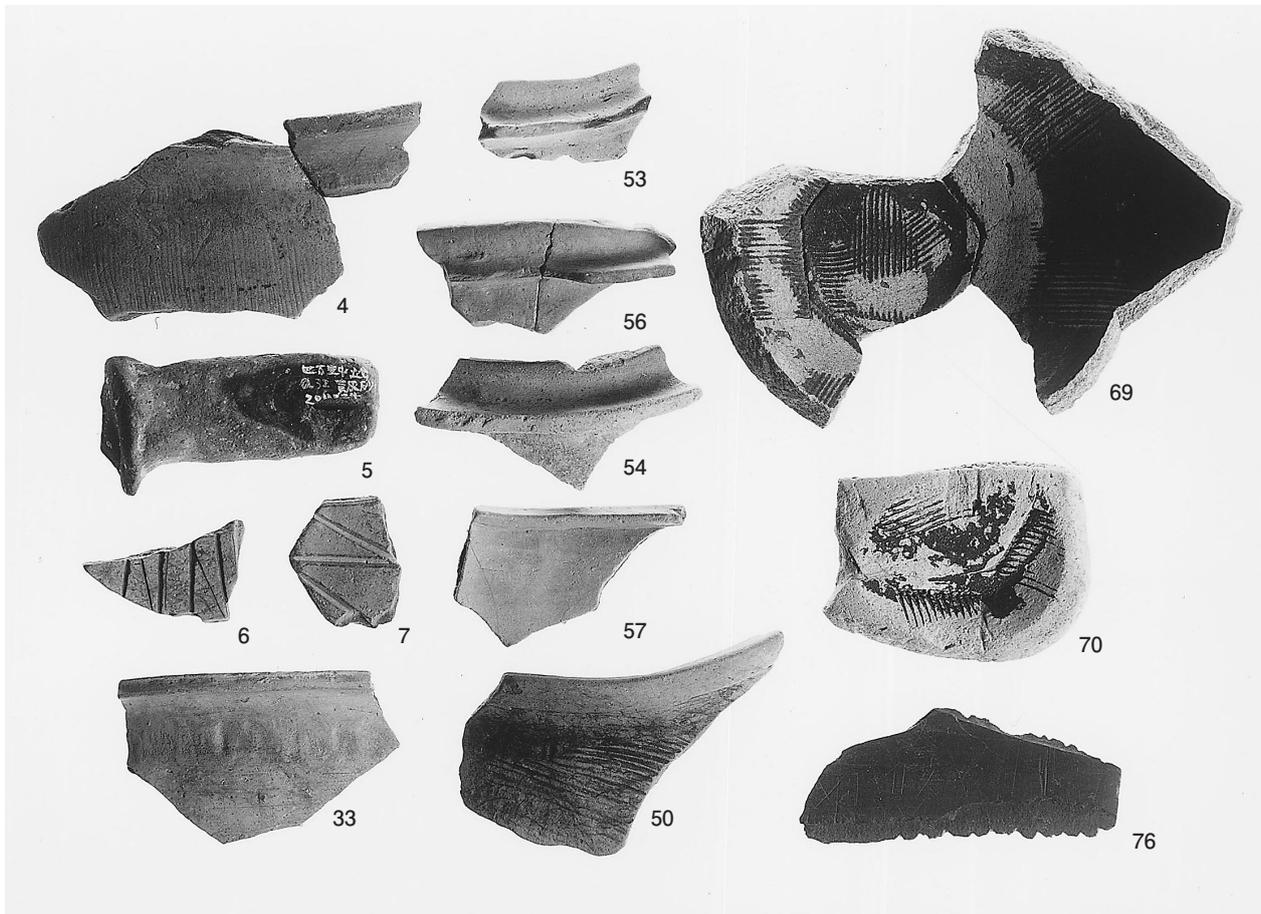
15



11



71



4

5

6

7

33

53

56

54

57

50

69

70

76

写真図版Ⅵ-1

西垣内遺跡  
遺構・遺物



調査区近景 (西から)



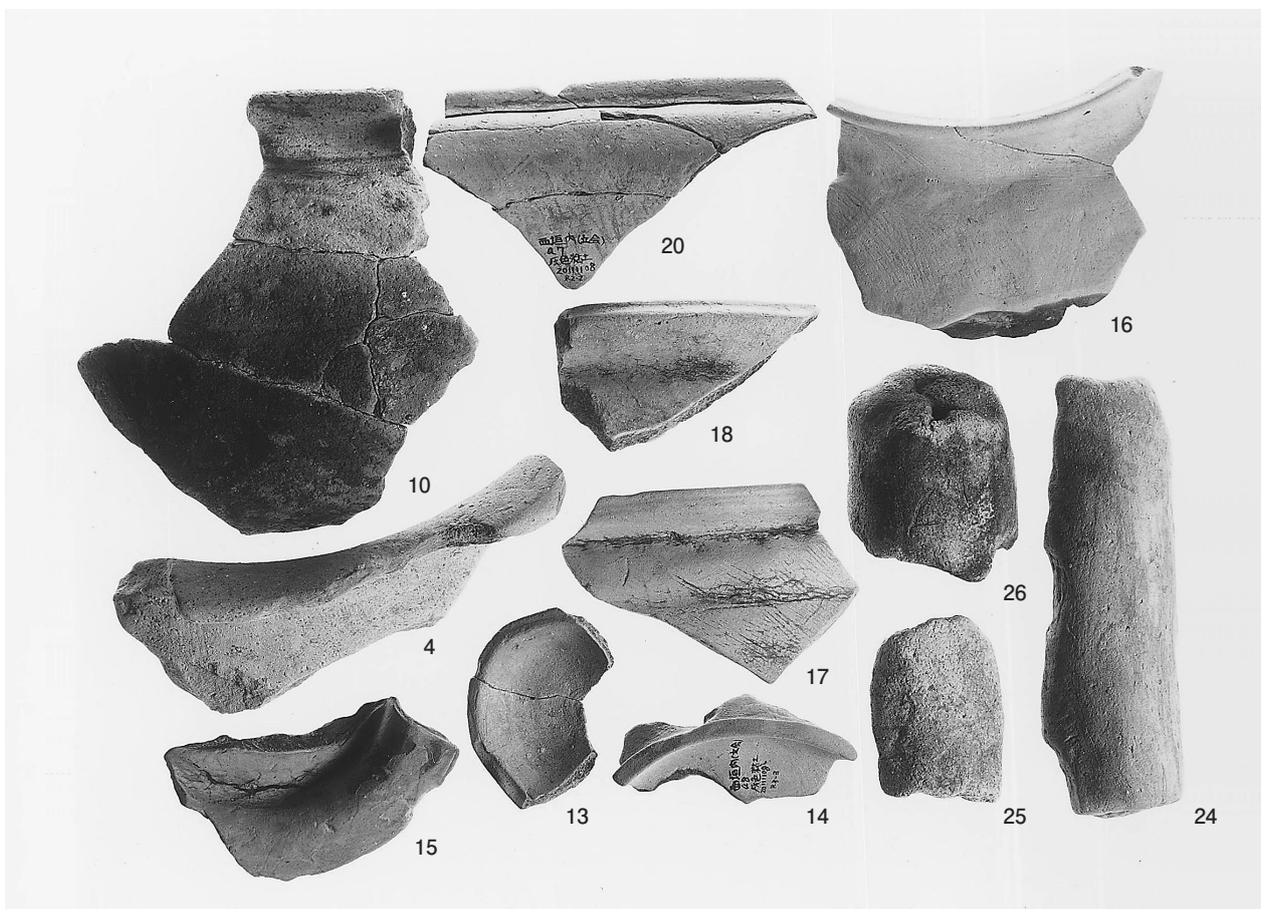
調査区中央部 土坑 (西から)



調査区中央部 土層 (南から)



調査区東部 土坑 (南西から)





調査区近景 (西から)



調査区全景 (南東から)



調査区中央部 土坑 (南東から)



調査区中央部 土層 (南から)



写真図版Ⅷ-1

箕村大塚遺跡  
遺構・遺物



調査区全景（西から）



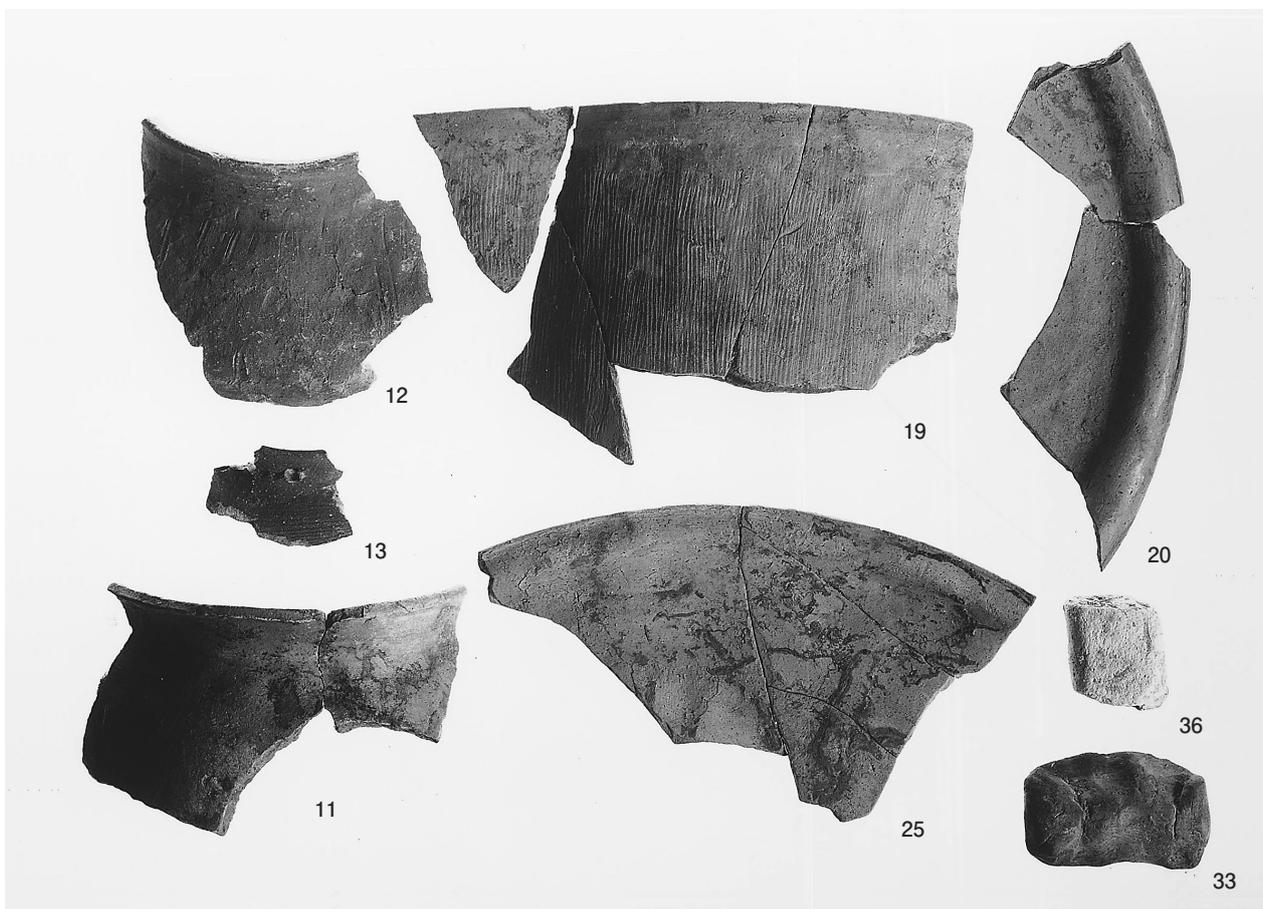
調査区全景（東から）



灰原層（第19～21層、南から）



密集して出土した遺物（第17層）





調査区全景 (南西から)



調査区全景 (北東から)



S D12手焙形土器出土状況



S D12 (南から)



S D38 (南から)

写真图版区-2

西垣外遺跡  
遺物



6



8



7



10



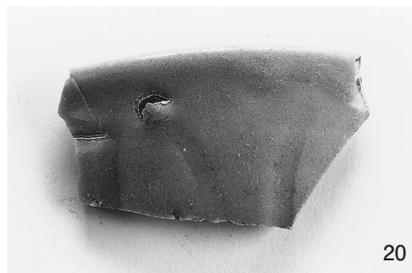
13



15



19



20



36



40



49



42



51



53



54



69



105



91



98



99



工事立会状況（西から）



調査区の状況（東から）



調査区東部（北から）



調査区中央部（北から）



調査区西部（北から）

## 報告書抄録

ふりがな	へいせい21～23ねんどけんえいのうぎょうきばんせいびじぎょうちいき(いせかんない) まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこく							
書名	平成21～23年度県営農業基盤整備事業地域(伊勢管内)埋蔵文化財発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	336							
編著者名	伊藤裕偉・相場さやか・高松雅文・星野浩行							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらだいせき 寺田遺跡	わたらいぐんたまきちやう 度会郡玉城町 佐田	24461	425	34° 29' 40～ 45"	136° 37' 55～ 59"	20091124～ 1127 20100106～ 0115 20101004～ 1217	250  130  675	平成21・22年度 経営体育成基盤 整備事業 (有田地区)
つかだ1ごうふん 塚田1号墳	わたらいぐんたまきちやう 度会郡玉城町 妙法寺	24461	7	34° 29' 44"	136° 38' 25"	20101129～ 20110210	661	平成22年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
つかだ2ごうふん 塚田2号墳	わたらいぐんたまきちやう 度会郡玉城町 妙法寺	24461	467	34° 29' 42"	136° 38' 25"	20101129～ 20110210		平成22年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
たまるみちいせき 田丸道遺跡	わたらいぐんたまきちやう 度会郡玉城町 妙法寺	24461	466	34° 29' 41～ 48"	136° 38' 24～ 25"	20101129～ 20110210		平成22年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
せこさとなかいせき 世古里中遺跡	わたらいぐんたまきちやう 度会郡玉城町 世古	24461	389	34° 30' 50"	136° 37' 25～ 34"	20111122～ 1220	146	平成23年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
にしがいといせき 西垣内遺跡	わたらいぐんたまきちやう 度会郡玉城町 世古	24461	408	34° 30' 55"	136° 37' 21"	20101108～ 1109	53	平成23年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
とつかいせき 鳥墓遺跡	たきぐんめいわちやう 多気郡明和町 蓑村	24442	639	34° 31' 6"	136° 37' 51"	20111205～ 1207	30	平成23年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)

みのむらのおつかいせき 養村大塚遺跡	たきぐんめいわちよう 多気郡明和町 みのむら 養村	24442	231	34° 31′ 13″	136° 37′ 51″	20111219～ 1221	52	平成23年度経営 体育成基盤整備 事業(有田地区)
にしがいとせき 西垣外遺跡	いせしかしわちよう 伊勢市柏町	24203	a 156	34° 32′ 28″	136° 39′ 9″	20111205～ 12099	78	平成23年度県営 かんがい排水事 業(宮川4工区)
ちやうすづかいせき 茶臼塚遺跡	いせしありたきちよう 伊勢市有滝町	24203	a 79	34° 32′ 28″	136° 41′ 50″	20111209～ 20120118	28	平成23年度県営 かんがい排水事 業(宮川4工区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺田遺跡	散布地	古墳後期 平安・鎌倉	溝・柱穴	土師器(古墳時代) 土師器・陶器(平安～中 世)	
塚田1・2号墳	古墳	古墳後期	周溝	石製紡錘車(近隣から)	
田丸道遺跡	散布地	弥生 古墳後期 平安	流路(堰)、竪穴住 居、掘立柱建物	木製品(多数)、土師器・ 須恵器・刀子・緑釉陶器	古墳後期の堰遺構 平安時代の掘立柱建物
世古里中遺跡	散布地	中世	粘土採掘坑	土師器	
西垣内遺跡	散布地	中世	粘土採掘坑	土師器	
鳥墓遺跡	散布地	中世	粘土採掘坑	土師器	
養村大塚遺跡	散布地	近世	落ち込み	土師器	
西垣外遺跡	散布地	弥生後期 中世	溝(弥生)、溝、 柱穴	手焙形土器(完形)	環濠集落か?
茶臼塚遺跡	散布地	中世	土坑	土師器・陶器	鉄製品鍛造遺構か?

要 約	<p>寺田遺跡では、古墳時代から中世後期にかけての遺構・遺物を確認し、なかでも平安時代後期の土器資料が良好である。塚田1・2号墳では、周溝の一部を確認し、近隣から古墳に関係すると考えられる石製紡錘車が出土した。田丸道遺跡では、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に確認された。なかでも、古墳時代後期の堰遺構と集落跡および流路出土の良質な木製品、平安時代後期の大型柱穴を伴う集落跡の確認は特筆できる。世古里中遺跡・西垣内遺跡・鳥墓遺跡では、中世前期・後期頃の粘土採掘坑と考えられる遺構を確認した。付近には土器生産遺構が存在すると考えられる。養村大塚遺跡では、近世中期頃の良好な土器群が出土し、近隣に当時の土器生産遺構があると考えられる。西垣外遺跡では、弥生時代後期の環濠と考えられる大溝と、中世後期の集落跡を確認した。大溝出土の手焙形土器は完形品で、注目できる。茶臼塚遺跡では、中世後期頃と考えられる鉄滓が多量に出土し、当時の鉄器生産がされていた場と考えられる。</p>
--------	---

三重県埋蔵文化財調査報告 336

平成21～23年度県営農業基盤整備事業地域(伊勢管内)  
埋蔵文化財発掘調査報告

2013(平成25)年3月

印刷文化印刷  
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター